

山岳

第三十一年
第一號

山 岳

第三十一年 第一號

山岳第三十一年第一號目次

山風、谷風、その他

冬のチャチャヌブリ

雪のホロンバイルより大興安嶺へ

樺太東北山脈

冬の濟州島漢翠山

「山の神とコダマ鼠の話」解説

山岳會の成立する迄

遭難報告

白馬岳に於ける京大生遭難報告（伊藤親一）

圖書紹介

「山岳講座（木暮理太郎）」——「山の危険と遭難の防止」（松方三郎）——Nanda Devi—E. E. Shipston. 以上黒田孝雄

藤原 咲 平

一頁

渡 邊 漸

元

京都帝大旅行部

四

同志社大學山岳部

一三

盛岡 英治 郎

一六

高橋 文太 郎

二〇

武 田 久 吉

二六

二五—二八

二九—三六

會 報

二九一四〇

昭和十年度年次大會——新理事選任報告——新評議員——月例理事會——山岳連繫救助機關案呈請書報告——第三回山岳懇談會——立大ヒマラヤ隊獻送會——新會員——退會者——會員計報——日本山岳會會則——關西支部規則——山岳投票規定

國 版

チヤチヤスブリ

織 田 明

興安嶺山中

加 藤 泰 安

伊敏河畔を往く

同

ブリアートの子供と包

同

北沖見中腹より振戸山

同志社大學山岳部

北沖見山よりアンバクダ連峯を望む

同

北沖見山より——左よりピレンガイ・川崎の山々

同

ボロト附近を巡むトナカイ橋

同

濟州島漢拏山——大口壁北側の鞍部より

今 西 壽 雄

禪 圖

氣象に關する解説圖(六面)——チャチャヌブイ概念圖——圓形天幕の圖(第一圖—第五圖)——大興安嶺概念圖——樺太略
圖——沃祭山概念圖

カ
ッ
ト

坂
本
直
行

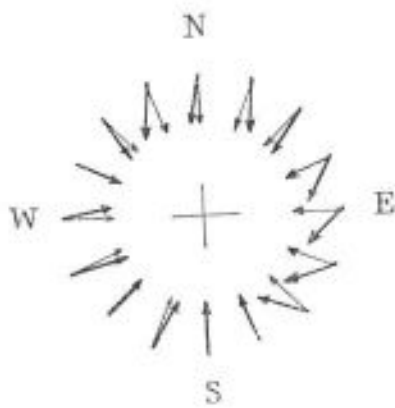
山風、谷風、その他

昭和十年十二月十二日年次大会に於ける講演速記

藤原 咲平

お話を始める前に云ひ添のやうな事をさせて置きます。此頃忙しくて十分の準備が出来ない爲、この話も甚だお聞きしい事になるかと思ひます。どうか此點御諒願つて置きます。幸つと前大正九年の五月に此山岳會で一度お話をさせて戴いた事があります。この時は「高處の氣象觀測に就て」といふ講演で、「山岳」第十四年第三號に載せてありますし、この時のノートも最近見ましたが、その後には於ける氣象學上の諸問題は、非常に数も多く、種類も多いのでありますから、このうちから、最近問題となつた山風、谷風のことを拾ひ出して、主として之について御話を進めたいと思ひます。

山頂の風は御承知の通り非常に強いものですが、それと自由大氣中の風との關係がどうであるか。この問題は昔から考へられて居ります。併し自由大氣の方の觀測が少く、それに關して餘り纏つた報告が無かつたのですが、最近多少研究も進みました。結局、山頂の風と自由大氣の中の風とはかなり迄は近いが、山頂の風には癖があります。山頂の風を以て其の儘自由大氣の風と同じと見る事は出来ない。尤も出来ると論じる人もありますが、それは程度の問題で、或程度迄は同じと見做し又は換算し得るのです。併し嚴密に云へばいけないことで、これに主として影響するのが、第一に山全體の佇まい、つまり山貌と山體との影響で、それが仲々大きい。其次には風



第一圖

ゾンブリック山頂に於ける風向偏倚。細線
は自由大氣の、太線は山頂の風向を示す

力計の据付けてある周囲の影響、此の二種類のものがあつて、其爲に一つの方向に於ては全く自由大氣の方向と同じくなるが、或る方向に於ては山頂の風向と同高度の自由大氣の方向とが四十五度位の喰違ひが出来て居ると云ふやうな結果になつて居るのであります。ゾンブリック、シエタル、オベルなどの山について調べたものがあります。是等の個々の細かい事は、日本としては縁の遠い事です。其の遠い事ですから略しますが、我國でも富士山の観測所を造つた場合に随分問題となつて、到頭最近色々の理由の外風向の問題も一つの理由となつて山頂の観測所を幾ヶ所に轉移すると云ふ迄になり、既に建築が出来た次第であります。

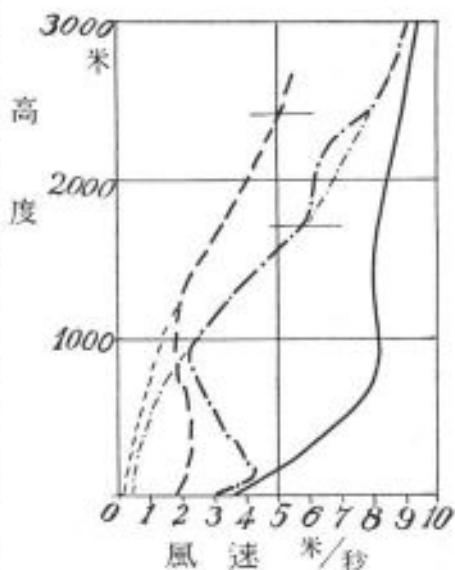
此自由大氣の風を山頂観測で知る事が出来れば非常に好都合であります。それは自由大氣の中の氣流の強さ或は風力を知ることが氣象學上天氣豫報、暴風警報上極めて重要であるからであります。例へばゾンブリックの山などで第一圖に示す様に、自由大氣の中で東風の吹く場合には山の上では是が北東風になつて、殆んど四十五度喰違つて吹くが、南西風だと、自由大氣でも南西風、山でも南西風になります。一番ひどいのは富士山で経験した例で、慥かに自由大氣では西風が吹いて居るのに結に拵へた観測所の位置では何時でも東風を観測して居る。それは百八十度といふ、とても問題にならない程の喰違ひであります。それには大分悩まされ、色々の方法で試験を行ひ、風船を飛ばして見たり、頭の上を通る雲を、

見たりしましたが、併し雲でも中々信用が出来ません。雲途が矢張り風と共に東から飛んで来る場合もあります。併し其雲より更に上の方では西が吹いて居る。で其の色々の關係の事は又後で申上げますが、詰り山の形に依つて色々の風が出来、逆の風も出来れば、扱れた風も出来るものであります。

孤立した山でなく山脈についてはどうか。大概の場合に峠は勿論、山脈の頂上附近に於いても、風が山の脊に直角になるやうに吹く傾向を持つのであります。何時でも必ず直角に吹くと云ふ譯ではないが、さう云ふ場合が非常に多いのであります。それは理論的に研究してもさう云ふふうになるので、中央氣象臺の荒川と云ふ若い人が數學的に之を取扱つて結論を出しました。先づ山の影響のない所では各方面に平等に吹く風があるとす。風の吹く回数は各方向で同じ程度である。風の強さも亦各方向同程度の強さとする。其様な場合に山の影響が加はつたならばどう變化するか。之を六々敷い理論的に計算で出したのに依ると、風の吹く回数は山の近くでは山脈と平行の方向には減じて、之と直角の方向に増す。速度も同様で直角の向きに於て強くなると云ふ結果を出しました。例へば箱根の芦の湖の西の山脈は南北に走つて居ります。山より遠い所では南西風の吹いて居る場合に、山に近づくに従つて風向が次第に山に直角に向きを変へ、山を越す時には殆んど西風になつて居る。

其反對に谷間であると、是はもう數學では勿論の事、常識でも分つてゐる様に、必ず谷に沿うて吹く譯であります。實際としては箱根の山に於いて氣象臺の田野及び北澤と云ふ者が風を観測し之を統計して居りますが、其結果は明かに右に述べた所と全く同一になると云ふ事を證明してゐるのであります。

山の上の風と下の風については是はもう想像でも分るし、皆様山にお登りになつた方は總て御経験のある事と存じますが、方向とか何とか云ふ事を構はず單に強さの點だけからのみ云ふと、山頂から少し下れば直ぐに著し



第二圖

山と自由大氣とに於ける風速と高さとの關係

實線はウィーンで自由大氣中 --- はインスブルックで山間 - - - - はネオッチで山間 横線は山頂の高さを示す

米位から毎秒八米位の強さで吹き、それから上は餘り増さず三千米でも毎秒十米足らずであります。然るにネオッチの谷間では、谷底ではウィーンの地上と同程度ですが、それから却つて減じて千米で毎秒二米に落ち、二千米の高さで丁度山頂の頂上にありますが、まだ自由大氣に及ばず、三千米に於ては孤峯になり著しく自由大氣に近付いて居ります。インスブルックの谷でも略同様です。斯う云ふやうな譯で山頂の頂上の線の所迄は、色々の故障が起きてゐますが、それから上へ行くと自由大氣に次第に近づいてゐます。

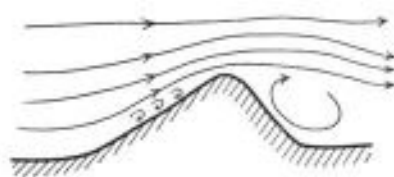
次に山の頂上の風は多くの場合に却つて自由大氣の同高の風より強くなる。一寸考へると、自由大氣の方が動き易いので風は強いだらうと考へられるのでありますが、事實に於ては自由大氣の方が強い場合も、山頂の方が強い場合も、兩方あり、其れ等の平均を取り、回数を比較すると、山頂の方が強い場合の数が多いためであり

く弱くなります。第二圖に示すもの

は外國の例であります。維納で観測氣球を飛ばして自由大氣中の風の強さを計り、それと山に沿うて計つたものと比較して見たのであります。千米、二千米、三千米迄測つてあります。維納に於ては地上では毎秒四米位の風速で弱いのでありますが、高さを増すに従ひ急に増して、五百

ます。それはどう云ふ譯かと云ふと、第三圖に示す様に、自由大気では割合に廣い空間を流れて居つた空氣が山脈に遮られて割合に狭い空間を通る爲に、流線が密集し流速が大となるのであります。

風向から云ふと、山脈附近では山谷風がある爲に方向は區々となり、寧ろ山谷風向に従ひ、晝と夜で逆になり(第四圖)。山頂附近では山脈の方向に直角に吹く傾向があり、山頂を越へて遂に高い所で始めて一般風向と合致する事になります。尤も之は山脈中の一峯の場合で、孤立した山では山頂の風は割合自由大気の風向と近



第三圖
山を越える風

くなりますが、尙完全には一致せぬのは既に第一圖で説明しました。

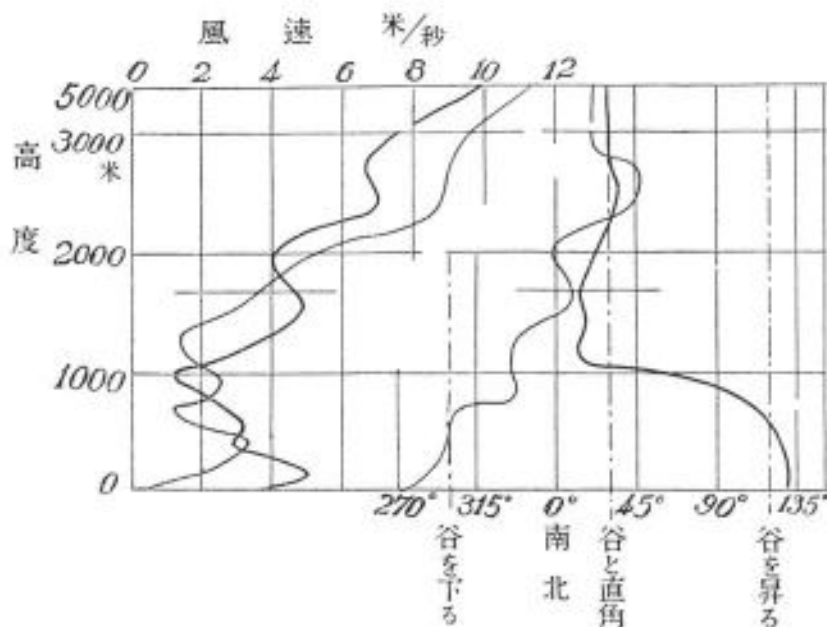
次に山風と谷風の事を尙詳しく申上げます。先づ一般の風と山風、谷風との關係で、其一般の風は、氣象要諦で傾度風と云ふことを申します。是は甲乙兩地に氣壓の差がある爲にそれに應じて相當の風が吹きます。是は自由大氣中即ち障礙物のない所で普通に吹く風でありますが、是が山に影響されて變形する。どう云ふ風に變るか、それを圖で作れば宜しうございましたが、表のまゝ此處へ持つて参りました(第一表)。観測地は矢張りインスブルックの附近即チロール地方或は又東アルプスのあの地方で非常に熱心に昔から観測されて居ります。此表も矢張りあの地方で、丁度千曲川とか阿武隈川とかの様な大きな谷であります。勿論其中に市街もあり、高地もあると云ふ谷で、山の中の峡谷ではありません。併第一表に於いて上層N風上層S風とあるのが、上層一般風向の反対な場合の一対で、又上層SEと上層NWとも反対であります。又時刻は朝の七時ののと十時ののとを比較してあります。高さは

第 一 表

	高	さ	谷と平行	谷と直角	高	さ	谷と平行	谷と直角
	上 層 S 風				上 層 N W 風			
七 時	30-25	-2.4	-2.0		30-27	7.4	0.0	
	25-20	-2.0	-1.7		27-24	5.3	-0.8	
	20-18	-0.6	0.0		24-21	4.0	-1.7	
	18-17	0.1	-0.1		21-14	3.2	-2.1	
	17-12	0.7	-0.1		14- 7	1.6	-0.7	
	12- 0	0.8	-0.8		7- 0	0.8	0.0	
十 時	30-29	-2.0	-3.8		30-27	5.5	-1.0	
	29-24	-2.2	-3.0		27-24	4.2	-1.9	
	24-22	-1.8	-2.6		24-22	2.3	-2.7	
	22-20	-1.7	-0.8		22-15	0.9	-1.9	
	20- 0	-1.7	-0.0		15-12	-0.4	-0.5	
					12-10	-1.7	0.0	
					10- 8	-2.4	0.5	
					8- 0	-1.2	0.7	
	上 層 N 風				上 層 S E 風			
七 時	30-26	2.6	3.7		30-24	-4.6	0.0	
	26-24	2.8	3.2		24-22	-2.9	0.6	
	24-21	3.1	1.9		22-19	-2.9	0.1	
	21-19	2.4	0.2		19-18	-0.8	0.5	
	19-16	3.3	-0.2		18-15	0.0	0.4	
	16-12	1.6	-0.5		15-12	0.4	-0.2	
	12-10	0.9	-0.9		12-10	1.2	-0.7	
	10- 7	0.9	-0.5		10- 9	1.3	-1.3	
	7- 0	0.0	0.4		9- 7	1.1	-0.7	
					7- 0	0.5	0.0	
十 時	30-26	3.0	3.0		30-29	-3.8	-1.5	
	26-24	3.0	2.8		29-20	-2.4	-0.7	
	24-21	2.7	1.9		20-19	-1.9	-0.1	
	21-20	2.7	0.9		19-16	-1.5	-0.3	
	20-18	2.1	0.5		16- 8	-1.4	-0.2	
	18-16	2.8	0.0		8- 7	-0.9	0.3	
	16-10	1.5	-0.4		7- 0	-1.1	0.0	
	10- 8	0.5	-0.4					
	8- 7	0.3	-0.2					
	7- 0	-0.3	0.0					

山風、谷風、その他 藤原

六



第四回

ガイルの谷の朝と日中との風向及風速の高さによる変化(1933年 5月19-21日)
細線は朝、太線は午後、左側は風速の、右側は風向の曲線、山風と谷風との高さは
約1,000米迄であることがわかる、横線は山頂の高さ。

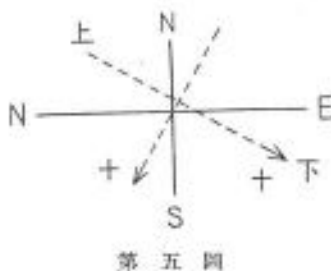
百米を単位として30とあるのは三千
米、25は二千五百米と云ふ意味であ
ります。高さの差は勝手に一定でな
く或は五百米の間隔或は二百米の間
隔と云ふ具合になつて居ります。是
れは大體風向の一定の所は煩はしい
から省き、変化の見へる前後の所を
顯はした爲であります。朝七時では
まだ谷風即谷と平行(a)の上げ風
(符號負)が發達せず、山風(符號
正)の方が寧ろある位であります。
上層Sと云ふのは山よりもずつと高
い所で、南風になつて居る場合であ
ります。其場合でも谷の底の近く即
千八百米位迄は正即山風の弱いのが
あり、それから上は負即南の分速を
持つ事になります。上層が北の場合

は底から上気山風で、上層では殊に風が強くなり毎秒三米を超へた處もあります。上層南東の時はSの時と同調、上層北西の時はNと同調であります。殊に北西は谷と大分平行である爲に、上層では毎秒七・四米となり谷に下るに従ひ次第に弱つて居ります。つまり朝まだ早い爲に山風が優勢だからであります。然るに十時になると谷風が發達し、上層南東の場合と上層南の場合はずつかり負の符號になり、上層北の場合には最下層七百米迄の層に於て谷風が現はれ、上層北西の時には谷底から千五百米迄に谷風が現はれて居ります。此様に日中になるに従ひ底の方から谷風が發達して来るのは、是れは明に谷風と云ふものが谷底が日射で熱せられる爲に起るものであることを示します。

谷に直角の向の風(b)はどうかと云ふに、御覽の通り低い谷底の方では總て風は弱くなつて居ります。是は當然の話でありまして、前に申しました荒川氏の理論からも、はたまた常識からも、谷底では風は主に谷に平行であるべきであります。併し益々高さを増すに従て益々強さを増す。尤も上層で谷と平行の風のある場合は一應増してまた減ります。即ち上層南東や北西の場合であります。上層で谷に直角の風即ち北又は南の風の場合には、三千米の附近では北の時には七時に直角の方が平行のよりも稍々強く、十時には上層南の時に直角の方が強くなつて居りますが、十時の北と七時の南は共に平行の方が上層でも強くなつて居ります。是は谷の影響が相當の高さ迄影響があり、南風のような本来直角であるべき風の時にも、平行の方が強い傾向のあるのを示して居ります。此場合谷は山頂附近で山脊と直角に走るので、風は山脊と直角に吹く傾向があると云ふのと同じです。

次の問題は山風谷風の構造の問題で、今年モルと云ふ人のやつた仕事でありまして、風船玉を飛ばしてインスブルック附近の谷に付て調べたものであります。一般に廣い大きな谷に付て日中起つて居る風は、谷底では谷風

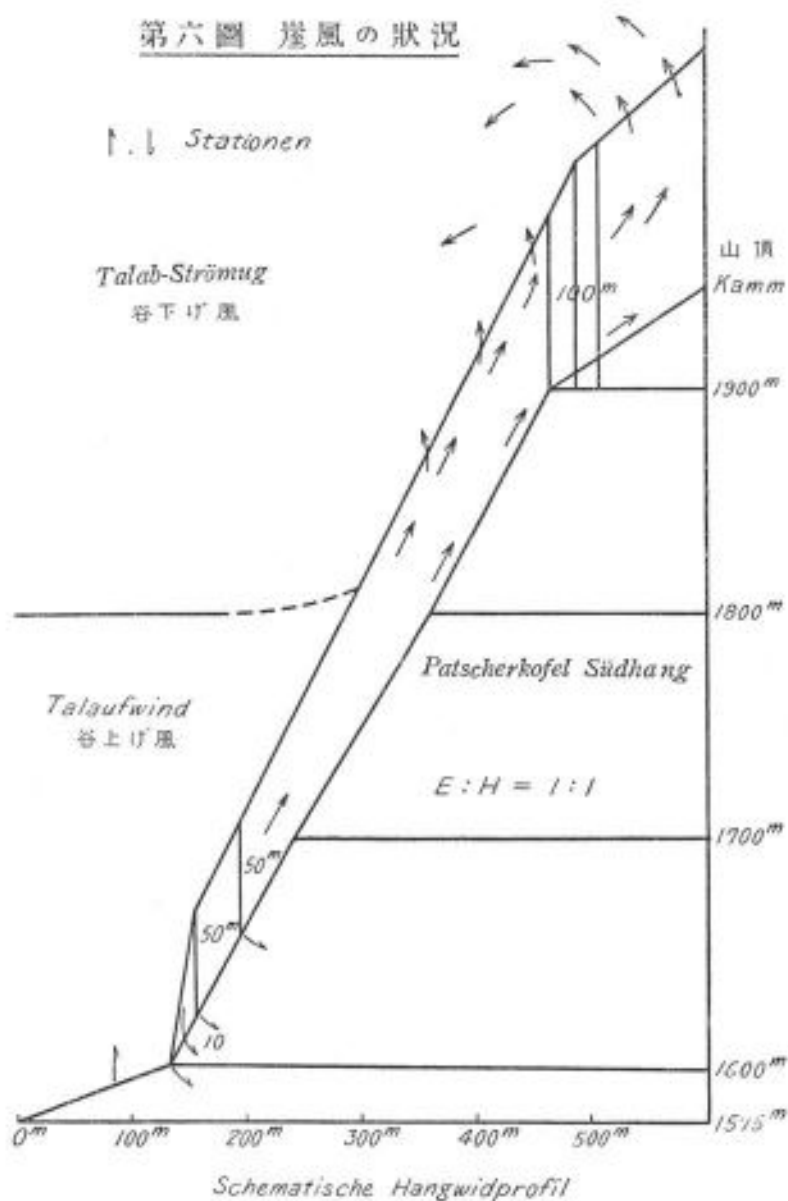
(Talaftwind) 即谷に付て上る風になつて居りますが、上の方に於ては寧ろ谷に付て下がる風となり、是は一種の対流作用と見れば宜いのであります。其対流が單純に一重に出来て居らず二重になつて居る。第六圖に示す様に山の斜面に沿ふて上るが、上部には却つて少し山を離れて下降流もある。此やうな循環系統をなして居るのであります。此斜面にくつついて上る細い川のやうな特別な氣流が出来ます。之をハングウィンド即懸風（ヒンクウィンド）と申します。圖に於て崖の頂上は千九百米を超えて居ります。崖の麓は千六百米で、此崖の根の所ではハングウィンドの厚さは十米位、それが間もなく五十米位の厚みとなりそれから次第に増して頂上では百米以上となります。是れは日射の影響を最も鋭敏に感じて起ります。此崖と云ふのは谷の本當の奥の突き當りの傾斜ばかりでなく、谷の兩側の傾斜にも勿論起るのであります。谷の向に直角に日射が強いと直に是が出来て参ります。太陽が照らすと云ふと盛んに起りますけれども、一寸日が蔭ると直に斜面が冷えて、温度が下り從て下げ風になります。所が一般の谷風は日中は大體上げ、夜中は下げ、大きく上つたり下つたりして居る。即谷に沿うて大きく起る風



第五圖

と、直ぐ山の肌に付て起つて居る風との相異であります。ほんの局部的にグライダーを飛ばしたりするやうな意味から申しますと、更にもう一層細かくなりまして、山の小さな崖を越える時にも、一般の氣流が上つて行く場合に、崖の頭の直後には小規模の下行氣流の起る事があります。此様な場合崖の頭でグライダーがひどく落されるやうな事があります。吉原飛行士が昨年霧ヶ峯でグライダーをやつて居つて此の崖風により飛んで居り、崖の頭の所で落されて地上三四尺位に近付き再び上昇氣流を捉へて上つて行きました。又峯を越せば其後は直に下降氣流

第六圖 崖風の状況



山風、谷風、その他 藤原

となり、グライダーにしても此氣流にうつかり飛込むと直ぐ落されます。出發する時にどうしても上昇氣流の旺盛なる所まで飛出さなければいけません。是も昔から知られて居りまして、例へば紙片を飛ばして見ても、枯草を取つて投げてても此状況は分ります。併し其上昇氣流の厚さは一寸分かりません。紙片を石に挟く包んで巧く投げます。巧く行くと上で石と紙と分離致し、紙だけが上つて行くと云ふ風なこともあります。此種類の氣流の中に浮雲がよく出来ず。風のお話は先づ大體此程度で止めて置きます。

次に今のやうな風の起ります機構即メカニズムを申し上げます。之れについて實は十年位前までは非常に喧しい議論がございました。是は昔し獨逸の氣象學の大家スプリング、塊他利のハン雨先生（兩方とも既に亡くなりましたが）、此兩人の間に意見の相違がありました。スプリングは一般の氣流のない場合に、山風谷風の起るの事は山地が暖められ湿度が高くなり、熱を受けて上昇氣流が加りますが、是が對流的に循環致しまして、是が所謂谷から昇つて參りますから谷風、夜になりますと矢張り是が冷えますからむきが逆になり、山から下へ行くから山風、斯う云ふ説明を致しました。山風は皆さん十分御承知の通りに、朝早い中は旅館の族なんかも凡て麓に靡いて居りまして、七時八時頃からずつと一齊に上に靡くのでありますが、今日は寫眞をつい忘れて來ましたが、巧い時期に取りますと、煙などが此山風の爲に初め麓の方へ靡いて居りまして、或高きから向を變へて、山の上の方へ行く。詰り或所まではまだハンドアップウインド即ち崖の下げ風、それを包んでタールアップウインド即ち谷の上げ風がある。併しスプリングの時代には細かい事はわからず、只山腹に日が當るから其頃から上昇氣流が段々發達して上の方が先に上げる。その區域が段々下の方へ降りて來て、おしまひには谷底から上げ出す、それで一應御尤のやうでありますが、どうも對流だけではインスブルック邊りでハン先生が計算しても勘定が合はない。

そこでハンは、恐らく谷合の空氣が全部暖められて脹む爲に、谷間に居きれなくなり谷から溢れ出して流れる、それが谷風で、夜になると収縮して蜷縮され出したやつが戻つて来るのが山風である、と説明をされました。兩方とも大家であり、どちらが正しいか良く分らなかったのですが、最近になつて自由大氣の研究が盛んになり右の様な事情が判るやうになりました。結局此處風が明らかにスプリングの言ふやうな、山腹が熱せられる爲に起る風で、其外に大きく山を越える風があり、是がハンの言ふやうな膨脹する爲の上げ風で、此方は必ず何時でも上に逆の風がある譯ではありませぬ。時刻に依つて區々であります、更に上層には却つて下げ風になつて居ると云ふ場合もありまして、此第三のものはハンのとは違い、矢張り循環をする故、スプリングの言ふのであります。此様にして結局どちらにも相當の理由があり、兩方の場合が起つて居ることが判りました。又温度の観測を致して見ますと、其の方からもさう云ふことが分るのであります。観測して見てやつと分りましたのは、夏と冬とで關係が違ひまして、當然と言へば當然であります、山頂が夏の間は自由大氣より平均の上で温度が高い。冬になりますと山頂が自由大氣より温度が低くなります。風の方は夜と晝と較べますと平地では晝強くなつて、夜弱くなるが、かなり高い山頂では夜却つて風が強くなつて、晝弱くなりますが、夏と冬との比較をして見ても、山頂と違ひあります。低い所から高い所に行くに従ひ一般に温度は下るので其下る割合を氣温低減率と申して居りますが、百米に對して普通ならば半度或は〇・七度位づゝ下ります。それが冬になりますと地面は強く冷えて自由大氣の方は左程冷えない爲に、自由大氣の上層の温度が割合として高くなりまして、山の頂上はほとんど冷えて、其爲に山頂と自由大氣とでは山頂の方が低溫となります。夏は其の反對でありまして、地面は加熱せられる爲に自由大氣に於ては割合に氣温の減率が大きく、さうして山と是と較べますと山の方の温度が高くなります。

次に一日の中で気温がどう變るか調べて見ます。山でも自由大気でも、又春夏秋冬區別して統計して見ますに大體はみな調子が同じでありますから、模様だけ申しますと、各時刻別に於て気温の最高の起つた回数を取つて見ますと、大體御承知の通り午後後に気温が最高になる回数が多くなります。又夜は大體は気温は低くなるのですが、夜半頃気温が一時昇ることがあり其爲に回数が少し多くなつて居る。また最低の起るのは拂曉前後に多くあります。是を夏と冬とで比較して見るに、大體同じことでありまして、唯夏の最高の起る回数が夏著しく多く夜半の最高の起る回数が割合として冬に多くなつて居ります。また其間の最高が最も多く起る時刻が夏は二時頃冬は一時頃になつて居ります。また気温の最低の起るのは拂曉前後が一番多いのですが、冬は夜明けが遅いものですから最低の起る時刻が後れる。夏は早くなる。それはよいとして可笑しいのは夜半に気温最高の起る回数も一つの最多にある。つまり気温の最高も最低も共に夜半に於てしばしば起るので、是は一寸可笑しいので何か勘定の間違でもないか、もし間違がないとすれば是は餘程面白い問題のやうに思ひます。以上は最近に獨逸でシ・タインハウゼスの研究したものであります。其面白い譯は気温の變化にも思ひ當る事があるからであります。

そこで先づ気温でありますが、山の気温と自由大気とはどう云ふ關係になつて居るか云ふことは從來はつきりして居りません。それで獨逸のリンデンベルグでの観測の結果を使つて上層大気の温度から上層の気温を推算して出して見ました。計算して見ますと奇體なことに、リンデンベルグの上空の自由大気に於ける気温の一日變化の曲線が山の気温の曲線と可成り似たやうなものに出て参りました。御承知の通り気温の變化には一日周期の變化と、半日周期の變化と兩方重つて居りまして、大勢に於て午前十時頃と午後十時頃に最高が現はれ午時及午後の四時頃に最低が現はれます。而して其の午前のと午後のとが對稱的でなく所に依つて優劣があります。所で

山の氣壓の一日の周期の現象は平地のと違つて居ると云ふことは分つて居りましたが、リンデンベルグの上層の氣壓變化を計算して出しますと、直下の平地のとは違い、却つて少し離れたツーグスビッツの山上の變化と同じであります。多少高い低いはありません、大體相似的になつて居ります。考へて見ますと氣温とかなんと云ふものと違ひまして、氣壓は力でありますから、是は當然山の氣壓と自由大氣の氣壓とは、千里も二千里も離れてゐたら、それは違ふ筈ですが、割合に近いリンデンベルグとアルプスの山と云ふやうな距離であります、其間に若し力が違つて居れば直ぐに弱い方が押されてしまつて、平均になるから結局自由大氣と谷の影響のない相當に抜け出して居る高い山とでは殆んど同じやうな變化を見ることが當然であつて、風や湿度などは色々山の影響を受けるが、氣壓だけは力で押される爲に山が勝手なことを言へなくて、自由大氣の氣壓に従ふものではないかと思はれます。さう致しますと自由大氣に於けると同じ氣壓變化を山は持つて居る。

所が氣壓の變化は一日週期の變化も可成り大きいが半日變化の方も分析しますと、相當に大きな振幅を持つた規則正しい變化が出て参ります。さう云ふことは昔から良く知られて居ります。所で一日週期の變化は氣温の方に一日の周期の變化があるから、當然氣壓の方も之れに誘發されて一日の變化がある。所が氣壓の半日周期はどうして起るか。氣温にはさう云ふ半日週期はないやないか。斯う云ふ疑問が今迄始終起されそれについてこち付けの大論文も澤山出て居りましたが、山の觀測を詳しく吟味するに、上層には却つて氣温にも最前スラインハウゼスの研究としてお目にかけた通り、夜半に最高が出て居る。即氣温にも半日周期のやうなものが、上層に於ては存在して居るらしいのでありまして、其邊はまだ將來の研究に待つ問題ではありますが、要するに氣壓の方は自由大氣と、山とでさう大して變りがないと云ふことが結論として申上げられると思ひます。之れは藤原と武

田の研究の結果であります。

其次には湿度の問題でありますが、土地が高くなるに随ひ、どん／＼湿度は少くなります。尤も空氣自身の量の高さに依る變化を先づ申しますと、エンゲフラウヨッホの高さが三千五百米でありまして、此位の高さから下の方にある空氣の分量と上の方にある空氣の分量即ち、大氣の最上層迄の空氣と比較致しますと、上の方が二、下の方が一位の割合になつて居ります。大氣の高さは九千或は二万五千或は三万五千と云はれて居りますが、僅か三千五百米の間に既に全量の三分の一が壓し縮められてであると云ふ譯で、高さと共に量の減る割合は相當著しいのであります。水蒸氣になりますと、其減率が更に大で二千米の高さに於て、其下方の量が一ならば上方の量も一で即半分々々になつて了ひます。即水蒸氣は高くなるに従つて非常に早く無くなるのであります。湿度が低くなると水蒸氣は御承知の通り凝結して沈んで了ひますから、餘り上の方には行き得ない。空氣は元來湿度が低くなりますと、例へば零度位な所になると、一立方米の體積中に水蒸氣は五瓦位しか含んで居らない。所が三十度位な温度になると同じ體積内に三十瓦位は含み得ると云ふやうな譯で、湿度に依つて空氣の中の水分が著しく違ふ。其影響もありまして、水蒸氣は高さと共に割合に早く減少致します。皆さんが山へ登つて、私は餘りよく知りませんが、山では特別に喉が乾くと云ふ事があるのださうですが、自然水分の蒸發が非常に殖えて來て、皮膚の表面あたりもかさ／＼になると云ふやうな事があるのださうです。所がそれでは雨や雪はどうかと申しますと、雨や雪は高さの増すに従つて著しく増して参ります。増して参りますけれども、其れに限度があります。其れ以上では高さの増すに従つて減じ遂には、雨や雪の殆んど無くなる所があります。御承知の通りシーラスの雲がある、或はシロストレータスの雲がある、極く細いふわ／＼した糸筋のやうな毛のやうな雲でありまして、是等の雲の

ある所では水蒸気は極めて少い。雨や雪と云ふものも無い、唯雲のやうなものだけである。それから上へ行くと雲も無くなつて了ふ。此高さが日本あたりで見ますと平均一萬三千米位、一萬五千米となると殆んどもう無い。歐羅巴あたりでありますとはがすつと低くなりまして平均十一千、日本に比べて二千米も下つて参りますが、兎も角其邊迄行くとすつと少くなつて了ふ。雨の方は在来は二千米、此邊の所迄は雨雪の量は増して行くが、之から上へ行くと雨雪量は矢張り減るものと考へられて居りましたけれども、最近ユングラフヨッホであの邊に降る雪の量も測定しました。此測定は仲々困難でどうしても雨量計に電気仕掛か何かを附けて温度を與へて、さうして降つた雪を溶かして中へ溜めないと、忽ち口が塞がつたりしていけない。それを防いで稍々信用ある値を得ました。所が其結果は中々二千米でも雨雪量は減らない。三千米でも減つて来る傾向は見えない。尤も之は歐米アルプスでの事ですが、此山は分厚であるから、附近の谷間から水分を供給出来る爲かも知れない。孤立した山では此高さでは減るかも知れない。ユングフラウのまだ四千百米なんと云ふ高いものが真近くにあるので、其關係で三千五百米に行つても尙雨雪量が減らないと云ふのかも知れない。で結局は減り始める所はありませうけれども、未だ其限界が良く分りませぬ。

次に此頃良く問題にして居りますのはイオンの研究、山の電気現象等、是は此前此處でお話致しました時に矢張り電撃を受けた色々の有益な経験について伺ひましたが、此頃研究されて居りますのはさう云ふ方面もありませんが、其外にイオンの数を測定致します。さう云ふことを平地でも頻にやりますが、山で餘計やり始めまして、イオンも極く質量の小さい軽いものと重いイオンとがあります。重いのは分子位で、更に重いになりますと、それが何十となくつついたやうなものがあります。軽いイオンは高さと共に増すのでありまして、(これは先達で露

峰に行つた時も申上げましたから、あの時行らした方には二重のことを申上げるやうになるかも知れませぬが、山の上に行く程数が積んで居ります。殊に山上では頂上の影響で電氣は御承知の通り斯う云ふ空中に突出した所に非常に集る。所が地面は元來負の電氣を持つて居る。それに對して大氣は何時でも正の電氣を持つて居ります。イオンにはプラスのものとマイナスのものと一杯浮んで居りますけれども、大地は負に帯電して居り頂上の尖端には餘計電氣が集りますから、餘計負になる。従つて正のイオンが益々餘計集中する傾向がある。さう云ふことは事實として観測されて居ります。所がある人はお醫者様の方ですが、頗るプラスのイオンが山頂に多いと云ふことを以て、山酔の原因であるが如き説をする人があります。所がどうもそれはさうでないらしいと云ふ説もあります。もしさうだとすれば山の形に依つて違ふ筈で、尖つた急な山程正イオンが多く従つた山程山酔が多い筈であるが、實際は尖つて居ても分厚の山でも大した違ひもなさうです。アルプスの山の肩の様に群衆の間で有つても高ささへ高い所にすれば矢張り同じやうに酔ふとか色々の抗議を言つて居る人もあつて、プラスイオンの説は今日ではまだ完全な説ではないやうであります。重いイオンは主として人間に關係し發生するものでありまして、平地に絶對に多く、山に入つて急に減つて居ります。其外塵埃の數とか、生物の廢殘物つまり有機物の消滅して粉となつたものとか、胞子とか微生物とかの數は高い所へ行くと著しく減ります。沃度の量が昔は山に入つて積えると言つて居つたけれども、今日ではニングラフロッホでは平地と違はないと云ふことになる。所があつて云ふ風に登山鐵道が出来て人が澤山行くと、あそこだけ沃度が平地と同じになつてしまふかも知れませぬ。大體さう言つたやうな研究が數々あります。尙ほ此夏霧・峰で昨年調べた霧・峯の氣候のことを申上げましたけれども、今年又観測したのを更に書き上げたのがありますが、之を精しく申上げる必要はないと思ひます。

只其中で二三面白いことを一寸申上げますが、霧ヶ峰は千五百米であります。此位の山で頭がフラットである爲に風は平地と同様に日中は風が強く、夜は弱くなる傾向が見えて居ります。孤立した山では此高さでは夜風が強くなります。又雲の出来具合に、興味ある現象があります。此山地には辻村さんの指摘された陥落地溝がありますが、此地溝に沿ふて氣流が西から東に進む。所が北風のある場合に此地溝を東から西に流れ下る氣流も出来て此兩方が泡のくるみの南の方で衝突して其所に非常な優勢な上昇氣流が出来まして、雲の柱がまるで壁を立つたやうに出来るのであります。最後に霧ヶ峰で尾崎さんにあの雲は何だと聞かれましたが、其時の武田博士が巧く寫眞に取つて下さつたので是は氷の結晶の雲が風に靡いて尾を引いて居る。即ち雷しらずであります。(第六圖) 今晩は此れで御勘辨を願ひます。

冬のチャチャヌブリ

- 一、出發まで
- 二、北海道まで
- 三、乳吞路へ
- 四、音根別川解化場
- 五、第一キャンプ
- 六、第一―第二キャンプ
- 七、第二―第三キャンプ
中央尖塔の登攀（伊藤新二）
- 八、火口原の滞在
- 九、下山
- 十、乳吞路
- 十一、歸路
- 十二、雜感
- 附記
- 國後の氣象に就て
- 裝備に就て
- 食糧に就て

渡邊 漸

渡邊 兵衛
竹内 新
伊藤 進
伊藤 新一

一、出發まで

十ヶ月前からその準備に取掛つて漸く出發の運びになつたのが昭和十年の十一月の終りであつた。東京帝國大學運動會スキー山岳部に屬して居る我々は、自分達の現在の山に對する實力と、個人及び部の財政的の餘裕と、そして又學業の限られたる餘暇とを參照して見て、チャタムブリを我等の目標と定め、そして隊員の数は十名乃至十五名の範圍とし、且つ所謂「極地法」と呼び慣はされて居る方式をその實際に當つては採らうといふ意圖の下に計畫を進め來たつた。

南千島への冬期の便船の状態を考慮して十二月上旬から年末に掛けての三週間、たとひ長くなつても精々一ヶ月間といふ期間を我々は選んだ。我々は休暇の時期及び積雪の状態からして正月を中心としてその前後に各々二週間位を採りたかつたのであるが、それを實行に移すには冬季の國後島と根室との間の海洋の状態が充分に不安であつた。

外部には呼び掛けない心算りであつたからこれに要する資金に就いても確信は抱けなかつた。それに個人負擔を大きくしてまでこれを實行に移すとすれば、この問題だけで計畫が挫折する虞れがあつた。學校當局殊に運動會に對する折衝も亦さうすら／＼とは運ばなかつた。部員一同の熱意は然し遂にかうした種々の障礙に打克つ事が出来た。そして亦夏の休みに、鹿島のカクネ里に合宿して來るべき冬に備へた。その有形乃至無形の効果に就いても此處に一寸言及して置く。九月の初めの部員會では冬の遠征の希望者は寧ろ豫定の人員より多かつたのであるが、學業の關係で次第に減じて出發直前には自分を加へて九名となつた。我々の考へでは出來得べくんば各種

の科学的観測をも併せて行ひ度かつたのであつたが、人員が減りそれに自然科学の部門を専攻して居る部員が甚だ少数となつたので、この方面への期待は最初から餘り望まれない状態となつた。

冬のチャ・チャスプリの状態に關しては適確な知識は得る事が出来なかつた。その積雪量も或ひは存外に少く、輪カンチキで終結せねばならぬのだらうかといふ事も案じられたし、或ひは意外に深いそして柔かい新雪に悩むのではなからうかと考へられた。従つて亦冬期の登路としてはどの方面から取付くのがいいのかも確信が抱けなかつた。國後島の留夜村や北海道廳に種々と照會した結果、チャ・チャスプリの西を走る音根川の一支流に潜ふて鮭の孵化場があり、冬期も管理人が居住して居る事が確められた。そして亦この孵化場を利用する事を北海道廳から許可されたので、これを根據地とするのが便宜であると考へられ、この事を前提して登山計畫が建てられた。五萬分ノ一地形圖は公刊されて居ないので、この根據地をベース・キャンプと定め、森林限界に第一の天幕地を、火口原に第二の天幕地を設ける事に凡その見當をつけた。尤もその際山の西面に登路を探るか或ひは北面に近く登路を選ぶかに就いては具體的の對策を有して居なかつた。第一の天幕地には全隊員を一度に收容する事の出来るだけの天幕の敷を用意し、そして第二の天幕地には四、五名の隊員が滞在する事が出来るやうにと考へた。然し此處に張るべき天幕を所謂ブリーク・テントにする事に決定したのはかなり出發が押し迫つてからの事であつた。

食糧は、根據地及び第一キャンプでは米食を、第二キャンプではパン食を夫々主食とする方針であつた。食糧の一部分は積雪期に入るに先立つて孵化場へとすでに輸送されて居たし、残りの一部分も我々の出發に先立つて乳岩路へと送られてあつた。

寒さに就いてもはつきりした事は分らなかったが、紗那の氣象状態から推してさう寒くないやうに感じられた。頂上附近で先づ攝氏零下二十度乃至二十五度位だらうとの見當であつたから、日本アルプス地方に於ける冬の登山と略々同じ心算りで裝備を済ます事にした。登路には技術的に見て困難な箇所はない見込みであつたらう。其の他も先づ普通通りで別段にこれといふ用意はしなかつた。

食糧器具等の運搬に人夫を用ゐる事は經費の關係上大いなる制限を蒙つて居るので、精々第一キャンプまで使へたらとの希望であつた。夫れに登山人夫としての修練を経て居ない人達をどの程度までに利用し得るかも大いに疑問であつた。轉化場までは確實に人夫の手を借りて輸送が出来る事のみが分つて居た。若し雪がなければ馬も使へるとの事であつた。

最も心配なのは便船の事であつた。我々は汽船でなければ危険であるやうに考へたので、往路は近海郵船の最終便に依る事とし、復路は金森汽船の最終便を選ぶ事にした。尤も後者は乳岩路が臨時寄港地となつて居るので、北海道廳の仲介と盡力とに依つて特に我々の爲に寄港するやうに取計つて貰つた。便船の關係に就いては帝大の運動會當局者も重大視し、これに就いて具體的な取極めがない以上我々の計畫に就いての援助を爲さうとはせず、寧ろ阻止せんとして居た。かういふ具合でその事に就いては納得が行つたものの、運動會自身が我々の計畫に對して積極的の賛成を爲すか否かは甚だ怪しい状態であつて、委員會に於いては辛うじて賛成案が通過した。そしてそれに依つて五百圓の補助が我々に保證され、やつと我々の計畫が實現される運びになつたのは十一月の半ばであつた。これは運動會の各部の我々の計畫に對する認識及び評價の程度が正當以下に低かつた爲であつて、そして亦一つには我々のさういふ方面への努力が足りなかつた事をも物語つて居るのである。自分達は運動會の同

意を得なければ、資金を充分に得る事が出来ないから計畫が従つて挫折するやうに當時は皮相的に考へて居たのであつたが、今から思ふと笑止千萬であつて、この種の計畫は少くとも學生一般の支持を得なければ決して實現されるものではなかつたのだ。

隊員は田中太郎(昭和十年文學部卒業、大學院學生)、喜多又太郎(法學部三年)、横山直介(同)、織田明(醫學部三年)、伊藤新一(經濟學部一年)、釣田正哉(文學部一年)、小松晃道(同)、渡邊兵力(農學部一年)の諸君及び自分の九名であつた。本計畫の首唱者であり、且つ終始中心となつて準備其の他に活躍した田口二郎、高木正孝の兩君が出發直前になつて、止むを得ない事情から参加不可能となつたのは大打撃であつたが、それにも増して兩君の残念さは同情に値した。

二、北海道まで

昭和十年十一月二十九日先發隊東京發

同 三十日 本隊東京發

十二月二日 札幌―錢函―ヘルツォニア・ヒュッテ

同 四日 朝果岳

同 五日 ヒュッテ―十萬坪の牧場―錢函―札幌

同 六日 午後一時四十六分根室着

十一月二十九日の夜に田中、伊藤兩君が先發し、翌三十日の夜に我々七名が上野を出發して千島へと向つた。我々が根室から乗船する筈の近海郵船の田子ノ浦丸に間に合ふ爲にはまだ數日の餘裕はあつたのであるが、何分にも一同は準備、交渉其の他で極度に疲勞して居るし、それに東京に居ても出發までは難川は決して絶えない事は

明かなので、寧ろ出發して仕舞つた方が得策と考へられたからである。車中、先發の田中君から函館よりの電報があり、歸りの汽船の東山丸は十二月二十四、五日頃乳岩路寄港との事であつた。往きの汽船が一日延ばしに遅れるので歸りの船が二十日前になるやうでは島で二週間そこ／＼しか日がないので大いに困ると思つて居た際なのでほつと一安心した。

十二月一日の朝はかなり薄寒く空はどんよりと曇つて居た。三十分ばかり列車は遅延して青森に着。着くと早々新聞記者の襲撃を受け倉皇として連絡船に乘込む。自記暗雨計とか真空管とか是非とも持ち運びに特別の注意を拂はねばならぬものがあり、それに荷物の個数が多いので乗換への時には相當の苦勞だ。

青森の河を出て船は黯澹たる灰色の雲の低く垂れた北を指して進む。甲板は伸々寒い。函館へ近づくとは何となく内地と異つた感じが強くなつて来る。田中、伊藤兩君が棧橋まで出迎へて呉れた。連絡船も延着したので汽車の發車まで時間がない。慌てふためいてフラットホームを重い荷物を兩手にひつさげて走つて行く。例に依つて新聞記者の包围を受けたがこんな時には發車まで間のないのが有難い。列車の中はとても暑くて内地の列車の比ではない。何分にも多人数なので退屈からは免かれるが、窓外の景色は兎角見逃がし勝ちである。

札幌には夜の八時近く到着した。北大の山崎教授、佐々、四井井兩助教授外山岳部の諸兄が大勢出迎へて呉れた。驛前の旅舎に荷物を置いて北大山岳部の歓迎會に臨み、忌憚のない談話を取交はして大いに愉快であつた。

翌二日は自分と横山君とは各方面への交渉及び挨拶の爲に居残り、他の者は北大山岳部員の案内でヘルヴェ・ア・ビュッテへと同つた。夜四出井、初見兩君と歓談久しうして居る間に大いに雪降り始め、雪のない札幌に何となく物足らなさを感じて居た折柄なので大いに喜んだ。

三日は我々二人も一行の後を追つてヘルヴ・チア・ヒュッテにと向つた。新雪が深くて仲々時間が掛り、小屋に着いたのは日没後だつた。一同は今日は朝里の中腹で滑つて来たといふ。然し何分にも「えき」がよくないので一同歸心が動いて居る。

四日の日はかなり晴れて居た。晝近くなつて出發し朝里岳へと向つた。頂上近くに達した頃風が強くなり相當曇つて来た。この邊りではもう一丈餘の積雪で白樺の頭が少し出て居るだけだ。雪は流石に猛烈にいい。瞬く間に降つて頂上から一時間ばかりで小屋に歸る事が出来た。東京ではまだ皆が授業を受けて居るのにと思ふと、何だか勿體ないやうな氣さへした。夜は早く寝た。

翌日は晝過ぎまでには札幌に歸着して居なければならなかつたので、早く出發して歸路に就いた。この二日間、の小さい山旅は然し自分にとつてはかなり大きな收穫を與へて呉れた。これに依つて隊員個々の目下の「調子」に對する大體の目安を得たからである。そして隊員にしてみても各々現在の自己の「調子」に就いての正しい判断が略々與へられただらうと思ふからである。

夜の九時に根室に向ふ心算であつたが、一同かなりに氣が緩んでやつとの事で汽車に間に合ふ始末だつた。

翌日の午後二時にならなければ根室に着かぬといふのだから随分退屈する。石狩から十勝へと夜を通して汽車はのろ／＼と走つて行く。夜が明けてもまだ十勝の平野の中にある。遠く東の方に雪を頂いた高い山を望み見るが、果してそれが何處やら見當さへつかない。帯廣、池田を過ぎてやがて東に轉じ釧路の國へと入ると右手には太平洋が間近かい。同じ北海道でもこの邊りにまで来ると周囲の景観が随分變つて来て、荒涼たる草原、落葉松林が続いて人家は仲々見當らない。釧路から根室までは地圖で見るとほんの直ぐのやうだが四時間近くも掛かる。

太平洋に面した海岸線は波浪に洗はれて断崖をなして居る處が多く、その露出した岩壁は薄墨がゝつた暗い色をしてその上を覆ふ枯草の明るい色に對して居る。天氣がいゝので水平線まで一望限ないのであるが、やゝ霧が掛つて居る。昨日までは別段遠くに來た氣持はなかつたが、今かうして車窓から單調な景色を眺め續けて居ると、随分内地とは遠くなつて來たなといふ感じが深い。

午後一時四十分にとう／＼根室に着いた。新聞記者の出迎へにはもう驚かなくなつてはゐたが、商業學校の生徒が整列して出迎へたのには恐れ入つた。港に近い二美喜旅館に入つたが訪問者が多くて全く落着く暇がない。それに關係各方面への挨拶にも廻らねばならず仲々忙しい。根室の町は荒涼たる氣配は充分にあるが、然し何となく明るい氣分に溢れて居る。町は停車場のある高臺から海岸の方へと斜めに横がつて居る。高臺の方には根室支廳だの、測候所だの、町役場だの、公共の建物が多く、海岸に近い方は商店街をなして居る。そして港町に特有な雜然たる雰圍氣を醸し出して居る。根室の景氣は海からの牧獲に生れて來る。そして昆布の出來高に依つて町の空氣が活潑となり或は沈滞する。今年は昆布の値が高かつた爲景氣がよいさうだ。この昆布は南千島の諸島の沿岸で採取され、支那方面へ根室から直接輸出されるのださうである。

町のはづれの牧場には馬が三々五々陽に染め出されてあちら此方と群つて居た。この牧場も一寸見た處はさう廣くもなささうだが馬で廻つても一日たつぷりは掛かるとの事であつた。根室は多でも雪が殆ど降らない、そして降つたにしても強い風にさらはれて地表には殆ど残されないとの事である。牧場の牛や馬も二月頃の姿には全く弱り果ててらしい。かうして年中放し飼ひにされては居るものの、その頃には本當にかはいさうだといふ話も聞いた。

汽車の窓から眺めた知床の山々の屏風を連ねたやうな山波に就いて語るのを忘れて居た。根室から見た冬の知床半島の夕陽を浴びたその帰る路に照り映えた白い山肌は今でも目の前に浮んで来る。國後島も水平線近く望まれるが霧が掛つて居る故か、その南端の羅臼岬がビラミッド形に低く遠くぼつかりと浮んで見えるだけだ。本當に澄み渡つた日にはチャチャスブリも見えろといふ。今日はまるで春のやうだと町の人々が語る。海は静かで白波さへ立つて居ない。そして北の方からひら／＼と前橋に掲げた旗をなびかせて小さい發動機船が港を指して近づいて来るのも手に取るやうにはつきりと見える。こんな静かな日には國後島へ渡るのは本當に何でもないうやうに思はれるのだが、何時まで日和が続くか心配になる。

町役場に安藤町長を訪ねる。國後島への山旅を企てた人々には印象の深い人だ。石油發動機船で是非とも行けといふ。種々と話を聞いて見ると、島と根室との間の交通は殆ど石油發動機船のみに依るさうだ。近海郵船に依る人は殆どないといふ。近海郵船の用子ノ浦丸は一日遅れに遅れて何時根室に着くのやら見當がつかないので、明七日夜出帆の日進丸といふ四十噸ばかりの石油發動機船に乗る事に定めた。冬期は根室町の命令航路として發動機船が月に數回づゝ國後島へと往復する位で、自分達が東京で想像して居たのとは全く異つて居た。北海道に來てからでも、函館や札幌でははつきりした事が分らなかつた。もつと早く根室に來て居たらもう今時分は國後島へ渡つて居たのにと寧ろ残念にさへ感じた。歸りの船は東山丸と定めてあるのだが、いざとなれば築港事務所の汽艇を出して貰ふ様に手筈を棄てた。十二月の終りになると根室港は結氷するので根室水道を南に抜けて花咲の不凍港を利用するさうである。一番危険なのは三、四月の解氷期で流氷に悩まされるといふ。

七日の日は朝の中に荷物を整理して築港事務所のランチで日進丸に運んで貰ふ。棧橋がないので船に直接積込

む事が出来ず、鮮の便を借りねばならぬのだが、そして荷物は一個に就き五十銭宛の鮮貨を取られるといふので大いに恐れをなして居たのだが、これで大いに助かった。

三、乳 吞 路 へ

十二月七日 午後十時日進丸にて根室出發

同 八日 午前八時半乳吞路上陸

午後遅くなつてから近海郵船の出張所の人が来て明朝田子ノ浦丸は入港の由を傳へたが、もう日進丸に荷物を積込んだ後なので謝絶した。天氣は稍々下り坂で、風はないが空には雲が多くなつて来た。相變らずさう寒くない。午後七時町の有志の見送りを受けて波止場から舢舨に乗る。日進丸とは甚だ景氣のいい名前だがかなりの老朽船だ。牢造内に石炭を運んで行く途中特に乳吞路^{チヤチャエブリ}へ立ち寄つて呉れるのださうで、その爲石炭の搭載量も半ば減らしたさうだ。船室は甚だ狭くて漸く身を横たへる事が出来る廣さしかない。炭火で暖をとるのだから夜更けてからは寒いだらう。船長が来ないので仲々出帆しない。やつと十時になつて出帆した。根室の町の灯が次第に遠く小さくなつて行く。雲足はやゝ速く月面を走る。一時間ばかりはうねりが強いと聞いて居たが左程の事はない。折重なつて寢に就いたが眠りは仲々に浅い。時々船室から外に出て様子を窺ふが國後の島影もまだ定かでない。

夜が明けたが空は薄暗く層雲が低い。雨はまだ降らないがやがて降る氣配が強い。左手には國後の島影が一八〇度以上の視野を占めて横がつて居る。船は岸から數哩の處を島に沿ふて北へ／＼と進んで行く。何しろ一時間に五、六節といふ速力なのだから乳吞路はまだ／＼遠い。島にはうね／＼とした低い山々が連つて居るが雪は餘

り多くないらしい。チャ・チャ・ヌブリは厚い雲の帳に掩はれてその裾さへも見せようとしない。夜明けと共に乳容路に着くといふ話だったが、二時間近くも遅れて居る。海は僅かに白波が立つ程度であるが、岸に近づくに従つて揺れ方が強くなつて来た。やがて乳容路の人家が間近かく望まれる頃甲板で朝食を半ば立つたまゝでとる。乳容路にも勿論棧橋はないので、舛の便を借りねばならない。狷得の舛、カッターとでも言ひ度い兩側に何挺となく櫓をしつらへたその舛が掛懸勇ましく近づいて来た。此方の船は錨を投じたので揺れ方が不自然にひどくなつて来た。舛と舷側が相接したが、兩方の船の上下動が強いので重い荷物の受け渡しは流石に手慣れたといふものの仲々時間が掛かる。村役場からは書記の服部氏が舛に便乗して出迎へて呉れた。

それから三十分以上掛かつて上陸すると島崎村長、村の長老の中村克二郎氏、森主事、小學校長、在郷軍人分會長、郵便局長等が海岸に並んで出迎へられた。それに交つて乳容路の老幼男女が物珍らしげにこの季節外れの訪問者の顔を窺ふ。海岸には倉庫のやうなバラック建ての建物が點在して居る。海岸から二、三分も行けば部落の中心十字路に出る。右に折れて數歩で伊藤旅館だ。この邊りでは道路には雪は殆どない。寒さはさう強くないのだが旅舎の二階には炭火がかん／＼とおこしてあつた。伊藤、釣田の兩君は馬六頭と共に解化場へ先發した。

船では充分に眠れなかつたので一同横になつて午睡をとる。チャ・チャが見えるといふ聲に目を覺ます。二階の窓から折重つて外を仰ぐと一瞬、その根張りのある全容が眞白く浮び出たが、それも束の間また全く雲に包まれて仕舞つた。食後中村克二郎翁の家に行き、村の有力者達と會談、人夫その他の事を取り極めた。そして青年團の人々から夏の登踏の事に就いてかなり詳しい話を聞いた。三時半頃に村の外れにある千島神社に行き神主さんのお威ひを受けた。この神主の野呂三吾氏は乳容路の名物男の一人で、チャ・チャを訪れた程の人ならば「あゝあ

の神主さんか」と微笑むに違ひない。昔段は同清店見たやう事をして居るのだから愉快だ。それに登山家の話を聞いたりして居るから、思ひも掛けぬ質問をしたりする。「エヴ・レスト山はまだ登れんのでせうか」などと追つて来る邊り仲々面白い。眞鍮の盃に御神酒を注々と飲まして呉れるのは有難かつたが、一番多く飲んだのはどうやら神主その人であつたらしい。チャチャの頂きの神様にお祈りして呉れたのだから大いに我々は安心した。神社からの歸りにはこの高臺から二〇米ばかりだら／＼と波打際の方へ降りて来て、潮風に晒された鳥居を潜つて砂浜に出てその儼然傳ひに旅舎に歸つて来た。日脚の速い北海の夕暮れは最早水平線から上を赤く染めて居て、明日の天気を思はせるやうであつた。

解化場に往復して来た伊藤、釣田の両君もやがて歸つて来た。解化場は思つたより廣いといふ事であつたし、それに馬ですつと荷物が運べたといふので萬事都合がよいと思はれた。乳谷路から二里以上はあるといふ。

四時から村の公會堂で我々の爲の歓迎の會が開かれた。四時とはいへもう日が暮れて夜なのだから別に早いわけではない。村の人達にとつては自分達の誇りとするチャチャメブリに大勢が一隊を爲してはる／＼と登りに来て呉れた事が本當に嬉しくて耐らないのだ。自分達はチャチャメブリに就いて、乳谷路に就いて誰に吹聴しようといふのではないが村の人達に取つてはチャチャが世に知られ、乳谷路が内地の人々に知られる絶好の機会が到来したといふ風にも考へられるのであらう。兎に角、わざ／＼國後まで登りに来て呉れた事に大いなる感激を感じて眞心を籠めて歡待して呉れるのだつた。島に五十年以上を過ごし、今宵頑健を誇つて居る中村克二郎氏が翁の生命とも頼む「天下の名山チャチャ岳」を明治二十七年の春に海上遙かに望見して九州の平戸から國後島へと移り來つたその経緯をぼつり／＼と語り出すのを聞いて居ると、時の経つのを全く忘れて仕舞ふ。今夜の御馳走

も吏二郎翁が自らその献立を選んだといふ。珍味佳肴とは言ひ難いであらうが、はる／＼と訪ね來つた我々旅人をねぎらふだけの真心の充分に備つたものであつた。明日は孵化場に向はねばならぬので遅くならない中にと旅舎に引上げた。

四、音根別川^{オネネベツ}孵化場

十二月九日 雪、乳呑路―音根別川孵化場

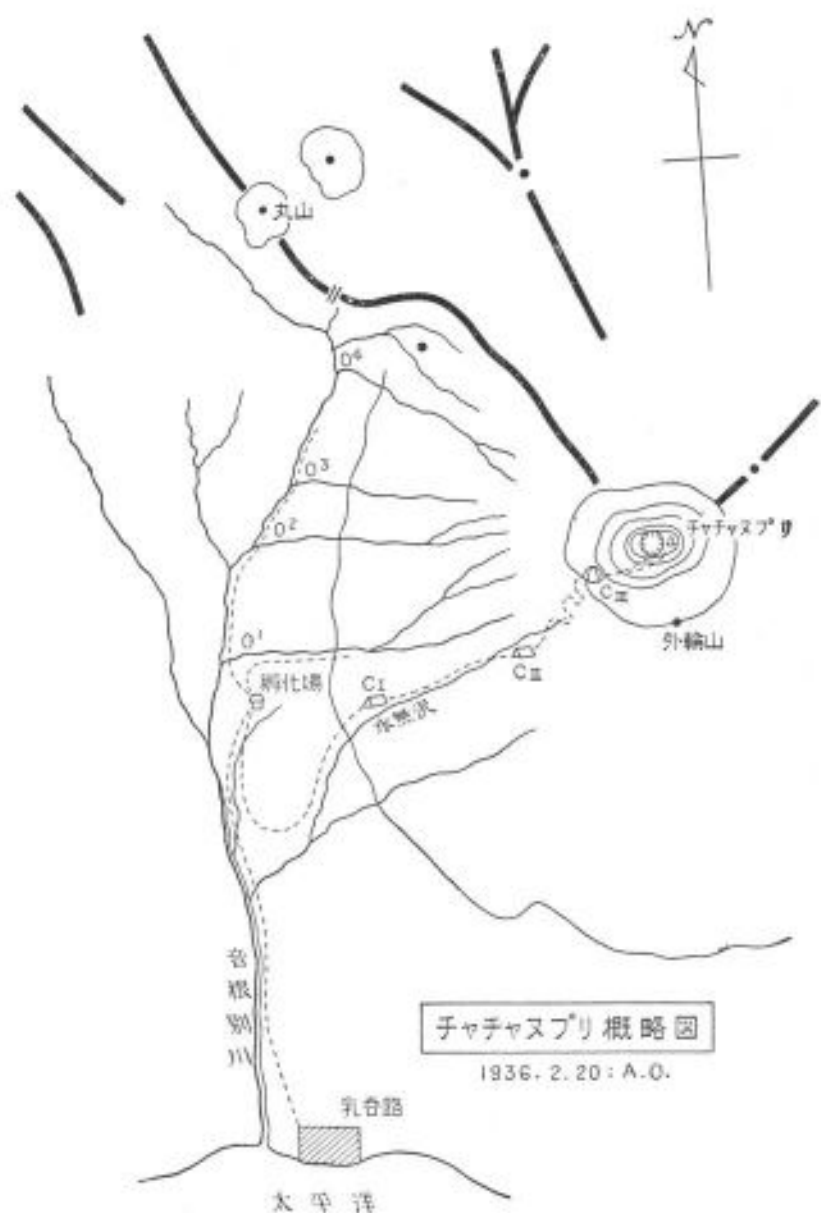
同 十日 曇、二隊に分れて音根別川本流と二つの支流との偵察

同 十一日 雪、水無澤の偵察、小倉(八、一〇)―水無澤への分れ(九、〇〇)―引返し點

(二、五〇)―小倉(五、一五)

九日はまだ暗い中からひどい風で伊藤旅館は激しく揺すぶれて居た。起きて見ると一夜の中に邊りは一面に眞白になつて居た。昨日は馬が足らなかつたので荷物が全部運び切れなかつたので今日も馬を四頭準備して貰ふ。部落から部落への交通は昔ながらの驛遞によるので、時々シャ／＼と首につけた鈴を鳴らして馬轡が過ぎて行く。旅館の前とか郵便局とかの前には馬を繋ぐ爲に杭が何本となく並んで居るのも我々には物珍らしい。

九時頃愈々我々は山旅の第一歩を吹雪の中に踏み出した。島崎村長、服部書記、高橋森林主事それに孵化場の管理人である鶴田氏等が孵化場まで同行する。部落から高臺に登り、村役場の手前から左に折れて千鳥神社の前を過ぎるまでは昨日も來た道だ。やがて村外れとなると太平洋から眞正面に吹雪が吹きつけて來て恐ろしく冷い。前に歩んだ人の踏み跡を辿つて暫らく行くと音根別川の河原へと道は續いてこれから北へ水楊の間を縫つて平坦な河床を辿つて行くのだ。河原は恐ろしく駄々廣くて吹雪のひどい時には見當がつかかねるだらう。水流も



チャチャスプリ 概略図

1936. 2. 20: A.O.

その間に幾筋にも別れて走つて居るので、本流は恐らくは自分達の歩いて居る處よりはすつと西の方を走つて居るらしい。昨日までは土が柔かつたのでその軟かい土の上に雪が積つては居るものの、始末が悪く再三足首まで泥の中に落ち込んだりして歩きにくい。村長等はゴム長靴をはいて恐ろしく早いビッチで進んで行くのでこれに追従して行くのはとても骨折れだ。然し御蔭で思つたよりも早く目的地に着く事が出来た。新化場は菅根別川の小さい支流に沿ふて建てられてあるので、本流の川筋から右手に別れて熊笹の中を通ずる小徑を十五分ばかりやゝ登り氣味に東に進つて来るのだ。事務所の棟と、新化場の方の棟とに分れて居る。此處は一寸した凹みになつて居て風富りが無い。邊りは一面の熊笹に取囲まれて居る。

事務所は入口に狭い土間があり、それに接して八疊ばかりの板の間があり、その中央に薪用のストゥーズが置かれてある。奥の方には十疊位の部屋があつて、それが我々の居間に當てられたが、この部屋はとても寒いので皆ストゥーズを圍んで板の間を離れない。村の人達はやがて別れを告げて歸つて行つた。荷物の整理が仲々大變で、とても半日では済む事でない。兎に角、此處に残して置くべきものと上へ持つて上げるものと區別する。明日は登路の偵察を行ふ事になつて居るので大體の方策に就いて一同と相談し、早く寢に就いたが寢袋の中は冷々として仲々寝つかれなかつた。

十日は天氣がよかつた。自分は田中、織田、小松の三君と共に菅根別の本流に沿つて登路を求める事とし、喜多、横山及び釣田の三君は菅根別川の支流に登路を探る事にした。渡邊及び伊藤の兩君には食糧の整備の爲に居残つて貰つた。

自分達は菅根別本流の左岸傳ひに進んだが、熊笹の中を縫ひ、或ひは河岸をへづり、或ひは河原をぼそくと

雪にぶかりながら進む、と言った調子で仲々歩かない。大體は靴のまゝで進んだが場所に依つて輪カンヂキをつけた。何分にも積雪が中途半端なのは弱つた。右岸から一支流の入る處でチャチャの全貌を遠く仰ぎ見たが、くつきりとして数條の装束放射状に走らせた山腹の上に中央尖塔が白いピラミッド形を突立てて居るのは物凄くさへ感じられた。河原で糞食を探つて、深い新雪にぶかりながら、そして倒木に悩まされながら右手に高みへと取つて行つたが、縁りは一面に茫々とした針葉樹林で果しがない。本流が兩方から斷崖に狭められて廊下狀を爲して強く東に屈曲した縁りまで追つて行つたがもう三時近く、ルルキ岳へと続く峠までは何日掛つたら達し得るやら見當がつかずに引返へした。内地の山とはまるで様子が違ふので寧ろ而喰つた。支流を探りに行つた途中は熊笹に悩まされて自分達より早く見限りをつけて引返へして來て居た。本流を隔てゝルルキ岳へ続く山波を認めたがこの方面の雪量は驚くばかりで只一面に眞白だ。朝の中は天氣がよささうだつたが、曇つたり、雪が降つたり、あんまりはつきりした天候ではなかつた。アンテナも張つたのでラジオも聞けるやうになつた。鶴田氏から貰つた鮭をバタでいためて夕食のお菜としたが、餘り大きくて食ひ切れなかつた。

十一日は全員揃つて青年團が夏の登路として採る水無澤へと向つた。若しこのルートも亦不適當ならば我々の計畫も根本的に改めなくてはならぬ。明日は人夫も上つて來る事だしと聊か焦燥を感じる。三十分ばかり往路に沿ふて引返へすとかかなり大きな支流が東から注いで居る。これが水無澤で澤の右岸に沿ふて暫らくは熊笹の中を分け、針葉樹の間を縫ふて行くと、二十分ばかりで澤が全く雪に埋まつて居る處に達するから、それからは澤通しを進むのである。この日はスキーを穿いた者もあり、輪カンヂキにした者もありと言つた調子で各自の自由に任かせた。天氣は昨日と同様、雪が降つたり、晴れたり、曇つたりといふのを繰返へして居る。寒さも強くない

し、風當りも澤の中なので感じない。

澤の中は僅かに数間しかない。澤から一步離れると無筈と倒木とで一步も進めない、それで平坦な澤をうねうねとその曲折に従つて蛇行しながら進んで行くのである。處々に倒木が澤の中へ身を横たへて居るのが邪魔な位なものでこれならば物資の輸送にも好都合だと思はれた。然し新雪が深いので輪カンデキのラッセルは仲々辛くて、直ぐに交替せざるを得ない。なるべく高い處まで進んで天幕地を求めようとしたのであるが、一方孵化場から一日の行程として餘り遠過ぎては困るので、午後の二時少し過ぎに到達した平らな地帯を天幕地と定め、附近の木枝に赤い布片をつけて目標に残し歸つて來た。傾斜も往路にも感じられない位で別段それが爲に歸りの時間の短縮は計れないのだが、充分に踏んであるので樂で、靴だけで充分に事足りた。

日がすっかり暮れてから孵化場に歸つて來たが、昨日の心細さに引換へて今日は實に明るい希望に満ちた気持ちになり得た。我々にとつて一番の悩みであつた輸送の問題も先づ見透しがついたので、皆物資の區分と再包装とに忙しかつた。自分は獨りストーヴの傍に寝こんで明日からの行動に就いての具體策を考へながら時を過して居た。喜多、横山、伊藤及び釣田の四君に第一隊の任務を託し、残りの五名は第二隊として第一隊を掩護する事に決めたのはかなり遅くなつてからの事であつた。第一隊は明日は第一キャンプを建設し且つ其處に宿泊するので孵化場に残して置くべき装備品の選分け等で尙更に忙しく夜の更くるまで起きて居た。

五、第一キャンプ

十二月十二日 雪、隊の編成をなす

第一隊 喜多、横山、伊藤、釣田。

第二隊 渡邊(漸)、田中、織田、渡邊(兵)、小松。

第一隊 野化場—CI

第二隊 野化場—CI—小倉

十三日 雪・曇

第一隊 CI—第一の湯—右股へ—左股への分れ—再び右股への分れ—CI—CI

第二隊 野化場—CI

十四日 雪、止み間やゝ多し

第一隊 CI—CI

第二隊 CI—CI—CI

十二日、今日から所謂「極地法」に従つて行動を開始する。我々は初めはチャチャヌブリの登攀以外に餘裕があればルルキ岳をも忘れたかつたので、キャンプサイトは両方へ都合のいい様に菅根別川の源流に求めようとしたのであつたが、前に述べた様な有様なのでルルキ岳の方は断念して、チャチャヌブリに全力を注ぐ事にしたのであつた。そしてチャチャヌブリは我々の現在の力を以てしてはさうしなければ登れないだらう事も確實に判つて来たのであつたから。食糧及び装備は殆ど全部をこの方面に輸送しなければならなくなつた。此處からは水無澤まで後戻りするので根據地としてのこの野化場の意義も、登路を菅根別川の本流に沿ふて求めた場合とは大分異つて来るので、第一キャンプの重要性は更に大きくなつて来た。

朝七時頃には九名の入夫が服部書記に引率されて約束の如くやつて来た。多くは乳呑路の青年團員で年齢は十八歳から二十五、六歳までである。服装は至つて簡單で、スウーターに股引き、靴下といふいでたちが多い。頭にはスキー帽を被つて居るがスキーを持つて来た者は居ない。皆「てしま」と稱する寧ろスノーシューズに近い

形をした輪轡を携へて居る。その繩具は「と」かりの皮をよちて作つてあるのでこれに足を單に突掛けて使用する。別段に背負子を用意して居るわけではないので有合せの繩で分配された荷を背負ふのであつた。

平常から登山人夫として使はれて居るのではないし、いはゞ好意的の志願者であるから、強制的に荷物を多く背負つてもらふわけには行かない。それに品物に依つて形、容積、重さ等が異なるので皆に平等にこれを配分する事は寧ろ不可能の業に近い。然しそれは兎に角として背負つた重量は一人當り先づ三、四貫見當で、寧ろ我々隊員が背負つた量の方が重いといふ結果に終つて仕舞つた。

この荷物の配分に意外の時間を費したので出發は午前九時頃になつた。第二隊は彼等と共に出發したが、第一隊は別に今日は引返へさなくともいふし、全整備を身につけて居るので後から緩つくりとついて来る。朝の中は曇つて居たがこの頃になつて雪が盛んに降つて來た。昨日偵察に行つた時皆少し厚着をし過ぎて弱つたので、今日は一般に薄着であるが、雪が降るのでまさかシャツ一枚にもなれない。第二隊は今日は「ぼつか稼業」で背負へるだけ背負つて居るので汗だくだ。然し人夫が先に立つてラッセルして行つて呉れたので助かる。スキーは澤に降りた處まで使つて、それから靴のまゝで行くのだが、昨日かなり踏むであるし、今日も人夫が踏むであるので餘り沈まない。

一時は眼界も殆ど遮るばかりにひどく雪が降るかと思ふと、はたと雪が止んで青空の一片が仰がれたりする。また暫らくすると曇つて来る。全く頼りにならぬ天氣でとう／＼我々はこれに「國後天氣」と名付けて仕舞つた。我々が昨日運んで置いた第一天幕地に到着する前に人夫はもう荷物を其處に置いたまゝどん／＼歸つて來た。天幕地に着いたのは昨日よりは早かつたが、歸りが暗くなる事を恐れて、食糧貯藏用の小さい天幕を一張り

張つたのみで歸路に就いた。第一隊はすつとスキーで通して來たのでピッチが遅く自分達はかなり下の方で行き違つた。

孵化場に歸つて見ると人夫達がストーヴの周圍を占領して居て、我々はその間に漸く割り込む仕方で、手袋や靴下を乾燥するのも仲々容易でなかつた。人夫の大部分は明日も輸送に従事するので今夜は此處に泊るので餘分の寝袋を貸してやつたりする。それでも寝具が足りないので、ストーヴにはどん／＼薪を燃して夜中暖をとらうとして居る。夜は仲々寒くて安眠を妨げられた。

十三日は人夫を六名使つて我々も第一キャンプ地に移る。この日も亦、例の「國後天氣」である。チャチャの姿の見えないのも何時もと同じである。三時頃天幕地に着いた。荷物が重いのと、途中が單調なとで天幕地に達するとやれ／＼といふ氣がしてこれから薪を集めようといふ氣には仲々なれない。

五人用の天幕と三人用の天幕とが張つてあつたが、今日は全隊員が此處に集合するのでもう一張り二人用の天幕を張つた。此處の天幕地の附近は澤の幅が比較的廣く、まだ天幕の二つ位は建てる事の出来るだけの餘裕はある。雪に埋れた下は熊笹らしくその一部分は雪面上に伸び出て居る。積雪量はよくは分らないが二尺程度であらうと思はれた。毎日々々新雪が降つて雪面は固つて居ないので、通路以外に逸れるとズ／＼と膝から上まで潜つてしまふ。雪はかなり濡つて居るらしいが、粘着しようとはせず、割合にさら／＼して居る。天幕地の兩側は比較的急傾斜を爲してもうこの邊りから谷はV字形に近くなつて來て居る。周囲には主として針葉樹が多く、潤葉樹も幾分これに混つて居る。枯木が少いので焚火は餘り充分に出来ない。

第一隊は今日はこれから上の登路を偵察に行つて午後二時半頃に歸つて來た。この澤には大きな瀧があつて夏

にはその向つて右手を搦むで登るといふ事であり、そして乳脊路から登つて来ると、瀧の上で一泊し、翌日頂上を極めて下山するといふ話なので、瀧の位置はコースの大體の見極めの爲に早く知れたのであつたが、彼等の話に依ると、瀧は此處から二十分も掛からないといふ。瀧の右手をジャックザックに登り切ると、これから傾斜が急になつて高度がどん／＼増して来るといふ。森林限界の高度にして海拔約一〇〇〇米と思はれる地點に風當りの少い窪みに軽テントを一つ張り、もう一つのは張らずに其處に置いて来たさうだつた。最初はこの地點を中繼天幕地とする筈であつたが、計畫を変更して此れを第二天幕地とし火口原のを第三天幕地とする事にした。炊事は雪を溶してから掛かるので意外に時間が掛かる。ラヂウス石油提燈を使用するのだが、不慣れの爲に仲々操作に骨が折れる。食事は大きい天幕で一緒に済まし、今後の計畫に就いて相談し、第一隊が先づ登頂する方針の許に大體の日程を定めた。即ち第一隊は明十四日に第二キャンプに、翌々十五日に火口原に第三キャンプを設ける、若しこの日が好天気ならば第三キャンプを架設するのはよして直接頂上に登つてもよろしい。順調に行けば十六日に登頂して十七日に第二キャンプに降り、こゝで待機中の第二隊と入れ代り、第二隊は第三キャンプにその後二泊して頂上を極めて下山するといふ事に定めたのだつた。人夫は全部乳脊路へと歸つて行つた。

十四日は空模様は朝から少しよい。第二キャンプから上にあげるものを選び分けて第二隊は例の「ぼつか稼業」となつて第一隊と共に出發する。

二十分ばかり今まで通りの殆ど傾斜のない處を通むと、二〇米ばかりの断崖となつて居る地點に達する。これが夏に瀧をなして居るのだ。右側をトラヴァースして登ると、眼下にチャチャの掃野の原始林が横がり骨根別の川原の向ふに海岸線が太平洋を限つて居るのが望まれる。これから澤筋は狭まつて傾斜が増して来る。然しまだ

この邊りでは灌木が全く埋れる程度にはなつて居ない。

一寸日が射したかと思えたがまた雪が降つて来た。これから一時間近く行くと澤が二つに分れて右手の方には小さな淵がある。この頃になつて雪はかなり激しく降つて来て、藁食に當てられたパンを懷へながら囁きつつまだ前途がどれ程ある事やらと肩の重荷を思ひ出す。右側に登路をとつて澤通り真直ぐに登つて行く。暫くして今度は左側の澤をとり、更に今度は右に進路をとる。傾斜は次第に増して来て、澤の左手の眞白な斜面をトラヴァースするやうになる。雪は止んでまた青空が見えて来た。樺の大木も次第に影を潜めて岳樺が點々とするやうになつて、チャチャの中腹から上の眞白な斜面が眼前に展開される。澤を右手に越えて樺松の上を渡つて僅かばかりの窪みに出ると其處に成程、天幕が一つ雪にまみれて弛んだまゝになつて居た。もう一つの軽天幕をそれと平行に、その下手に張つた。

中つと上の方まで晴れて来て火口壁近くまで仰ぎ見る事が出来た。下の方は折柄の夕日を受けて海面が赤く反射し、海岸線が黒くくつきり浮び上つて居る。丁度此處から見えるのでは乳岩路の南東にある岬が最も目をひく。そして荒島と呼ばれて居るこの岬に接した小さい島影も豆粒程にそれと認める事が出来る。

第二隊にとつては長い滞在は許されない。日没の四時までにはもう三十分しかないので邊りの景観はその儘に直ちに滑降に移つた。右山の斜滑降で膝が恐しくだるい。雪は膝以上まで没する位で猛烈な雪煙りを背後に残す。重い荷を擔ぎ上げたので皆足が疲れて居てこんないゝ雪にも思ふが儘の滑降が許されないのは残念だつた。淵の邊りではすでに薄暗く天幕地に廻りついて夕食の準備に取掛かる時分には其の間となつてしまつた。空にはちら／＼と星を仰ぐ事が出来たのは本當に久し振りのやうな気がした。

六、第一―第二キャンプ

十五日 雪

第一隊 CH―スキーデボー外輪山のコー―CH―デボーCH

第二隊 CI―CH―CI

十六日 雪 滞在、喜多、伊藤CHより往復。

十五日、今日は天気がよくて青空が見えて居る。然し我々は昨日と同じに今日も荷物の積上げで張り切った気持ちにはなれない。湖の上まで行くとは遙かにチャチャの肩の邊りを四つの黒い影が離れつ追いつきつ進んで行くのが認められた。この調子で見ると第一隊の出發も我々に劣らず遅かつたらしい。

我々第二隊にとっては目下の場合天気が大した問題ではないのだが、第一隊の爲めには今日からは是非とも晴れて居て欲しいとの企願であつた。火口壁までの斜面が今日はすつと見えて居るのが心強く感じられた。然し午後になつて我々が第二キャンプに到着する頃には今まで西の空に斥けられて居た雲塊が徐々に山を掩ひ初めて来た。天幕地に着いて暫くすると、灰色に薄くばかされた山の中腹にぼんやりと人影が二つ、三つと浮んで来た。疲れて居るのであらうか、もう直きだと思ふのに仲々に降りて来ない。三十分ばかりして喜多君を先頭にかかなりの間隔を置いて四人が滑降して来た。

喜多君の語る處に依れば火口壁までは三時間ばかり掛かるとの事、この天幕地から上へ伸び上つた浅い澤をジグザグに登つて行つてその澤の盡きる邊りで斜め左にとつて行くと雪面が堅くなり、スカフラに悩まされ初めるので此處をスキー・デボとし、真直ぐに三十分ばかり登ると火口壁に達し、それから少し下つた。火口壁の中

に火口壁に密着してフック・タック・テントを張つて来たといふ。中央尖塔は其處からは一時間位で登れさうに見えて居たが、時間がないので登らなかつたさうだ。

こんな話をして時の経つのも忘れて居る中に、最早美しい夕焼けが黒々と西の方に積上つた雲の切れ目から照り映え初めた。海の殊更に美しく見えるのもこの一時である。暗くなるのを恐れてあはてし降りに掛かる。また天氣が變つて雪が降つて来た。皆に遅れて第一キャンプに歸り着いて見ると天幕の傍にどん／＼と焚火をして居た。五人が三つの天幕に分れて泊る。夜中に空を窺ふと梢の間に星がきら／＼と輝いて明日の上天氣を思はせるやうだ。

十六日、起きて見ると昨夜とはすっかり變つて天氣が思はしくない。第一隊もこんな様子ではとても第三キャンプに登る事もあるまいと暫く様子を見る事にして出發しない。十時近くなつて稍々雪が小止みになつて薄日が洩れて来る頃、上から喜多、伊藤の二君が連絡旁々滑降して来た。第二キャンプは狭くて寒くて、風當りの少いこの第一キャンプを羨ましがる。そして仲々上に歸つて行かうとはせず何時までも我々と語り合つて居た。遅くなるからと言つて追ひ立てるやうにして彼等を第二キャンプに歸へした。後はまた吹雪が強くなつて来た。この第一第二キャンプ間は然し如何なる吹雪の日にも安全に往來出来るので實に安心だ。

久しぶりの滞在に初めてのんびりした気分になれて夜は話に身が入り仲々寝ようとはしなかつた。天幕の近くのを雪をいゝ加減に取つてそれで飯を炊いたら石油臭くて到底喰べられず、口直しにと酒を飲み出した爲でもある。やゝ酔が廻ると明日の中に一氣に頂上にまで馳せ上るやうな日調に知らず織らすになる。山へ入つて居る間の唯一のゆつたりした夜であつた。



チャチャスブリ

織田 明

七、第二―第三キャンプ

十七日 晴

第一隊 CH―スキー―ゴボ―CH

第二隊 CI―CH

十八日 吹雪 滞在

十九日 雪

第一隊 CH―中央尖塔頂―CH―CH

第二隊 滞在

十七日、今日も天氣に恵まれて第一キャンプからは、山腹が間近く望まれる。我々が天幕地を出発しやうとして不圖眼をこの山腹に向けると、スカイラインに近く斜めに四つの黒點が徐々に火口壁へと向つて動いて居た。第二キャンプを出発してからもう二時間近くなるだらうと想像された。自分達もこれに元氣を得て第二キャンプへ向けて出發した。同じ道を通るのも今日で三日目なので割合に足が疲つて午一寸過ぎには第二キャンプに到着する事が出来た。上に向つた第一隊は今日も食糧其の他の重荷に苦しみながら登つて行つたらしい。この頃にはこの天幕地から上は昨日同様すつかり雲に包まれてしまつて、ひら／＼と風に乘つて吹雪がこの繰りにも花吹雪の様に降り掛つて来た。三時頃になつてそろ／＼夕焼けし始める頃、すう／＼と雲が取れて来て山腹をすつと上まで仰ぎ見る事が出来た。そしてその白く／＼とスカイラインを展る火口壁が褐色に染め出された有様はたとへ様もなく美しかった。オホーツク海を渡つて吹き寄せる北風は猛烈に冷くて、衣服の隙間隙間から膚を刺すのであつたが我々はそれさへ氣付かずに首を上に向けた儘であつた。

やがてまた邊りは吹雪に包まれて天幕から一步も出られないやうになつた。二つの天幕はかなり馳んでそして半ば雪に埋れ掛けて居るのだが、それを張り直す事もせずに二人と三人とに別れて中に潜ぐり込んで居た。

第一隊は此の間のスキー・デボよりも少し高い處までスキーを用ゐ、それからスキーの杖に赤い布片をしぼりつけたものを適當の間隔を置いて雪面に突き立てて火口壁までの登路の標識としたといふ。アークティック・テントは十五日の日には雪面に露出した状態で張られてあつたものが、この日は半ば以上雪面下に没して居て、附近の状態が全く一變したのには一同寧ろ啞然たるものがあつたといふ。

第二キャンプに張られた天幕は元來が夏の山旅向きに作られた輕天幕なので雪が遠慮なく舞込んで來るし、兩側からは雪で押へつけられて居るので段々狭くなる一方である。吹雪は次第にひどくなつて、山の斜面を吹き下ろして來る寒風は粉雪を一杯にはらんで天幕に襲ひ掛かる。この健夜が明けて見ると、天幕の中は一面の雪で寝袋の上には二、三寸も堆高く積つて居る始末だ。風は依然として北から吹いて居るらしい。身動きも容易でないし、外に出ればそれこそ却つて雪を身體中に纏つて天幕の中に待歸へるばかりなのでちつとして乾パンを喰つたりして居る。雲頃になつて風向きが變つて東風となつたらしく雪は益々激しい。二つ並んだ下の方の天幕から上の方の天幕へと難談を交はしに行つた田中君はその儘何時になつても歸つて來られず、夜になつて漸く戻つて來る事が出來た。天幕は雪に押へられて次第次第に狭く低くなつて來た。

小松、渡邊兩君が入つて居る上の方の天幕はその内に段々と増進し初めて來た。吹雪は尙も續いて十八日の夜も更けて行つた。第三キャンプで第一隊の連中はどうして居る事であらうかと氣を揉んで見るが何とも致し方がない。あのアークティック・テントの事だから大丈夫この位の風には耐へて居ると思ふものの不安は除ききれ

ない。

十九日の夜明け近くなると上の方の天幕で「おーい掘つて呉れ、埋つてしまった」といふ情ない聲がする。田中君が「よーし、今助けに行くだ」と言つて防寒具に身を固めてシャベルを片手に出掛けて行く。外に出て見ると驚いた。上の方の天幕は全く雪に埋つてしまつて僅かにそれと判るに過ぎない。中では小松君は坐つた儘、渡邊君は横になつたまゝ、どうにも身動きが出来ずにござ／＼とやつて居る。雪の中から掘り出してその天幕はその儘に二人とも下の天幕にやつて来て五人膝を交へて埋没の状況等語り合ふ。

下の天幕とても矢張り雪に押へられて狭くなつて居るので五人が身をかぎめて座つて居るのさへとても窮屈でなれない。雪は稍々小降りとなつて中には餘り吹き込まぬやうになつた。正午頃になつて突然風が止んで無気味な沈黙が十分餘りも続いたかと思ふと、今度は北西に風が廻つた、この風自身は雪を持つて居るのではないから、雲の切れ目からは青空さへ見えるのだ。然し山の斜面に昨日一昨日と降り積つた新雪はこの風に容赦なく吹き落されて天幕に襲ひ掛かるので我々の眼界は相變らず遮られ通しなのだ。天幕地の直ぐ上手に建てられた風速計を見に行くのさへ仲々の勇氣が必要だつた。

雪の合間に上の方の天幕を建て直し、ついでに下の天幕も雪を拂つてびんと張り直した。かうも吹溜りになると知つたら最初からもつとしつかり建て、置くのだつたのに等と、初めにこれを張つた第一隊の連中に半ば責任を轉嫁してせめてもの慰みにして居る。やれ／＼と一落着きするともう日が暮れてしまつた。

午後四時半、突然に第一隊の四名が上から降りて来て我々を驚かした。話を聞いて見ると上と下とは大分天氣が異なるらしく今日の様な天氣にはきつと下から第二隊が登つて来るものと思つたさうだ。處が我々が登つて来

ないので、そして何分にも下で第一隊の安否を氣づかつて居るに違ひないと思つたので一氣に降りて来たといふ。此處では狭いから一休みして第一キャンプまで降るといふが、疲れて居るらしいし、それに頂上に登つたその話も聞き度くて一同今夜は第二キャンプに止まる事になった。

十七日に第三キャンプに上つて雪に埋れたアークティック・テントの入口を掘り出してこの中に入つた第一隊はほつとするも東の間、夜になつて再び天幕が次第に吹雪に埋つて行く事を知つた。これではならないと一同武裝して入口を塞ぎ固めた雪壁を突き破つて外に出て、入口から長い溝を真直ぐに掘り伸ばしてすつかり埋没してしまふのを免れたといふ。後になつて考へればアークティック・テントが全く埋没してしまふ事は有り得ない事なのだが、この時には皆が本當に不安だつたといふ。

アークティック・テントの中はどうだつたと聞くと、あんな工合のいいものはない、とても暖かくてこの第二キャンプとは雲泥の差だといふ。あれならばどんなひどい嵐でも大丈夫だと交るに／＼禮讃する。中でラディウス・ストーヴを燃やさうものなら暑くて／＼耐らない等とさへ極言する。兎に角、アークティック・テントには我々は多大の期待を掛けて居たのでそれが裏切られない事を知つて實に愉快であつた。

十八日は上でも一日吹雪いたさうである。翌十九日今日は午前十時頃になつて中央尖頭が見え出したので急いで出掛ける事になり、二つの頭をもたげた頂上の間から火口原に下りて居る窪みに登路を求めた。第三キャンプを張つた處は略々火口原の西端になつて居るので、東に向つて暫くは火口原の上を、處々に凸凹として、スカラ・の地帯と粉雪の地帯とが入り亂れたその上を進んで、二十分も掛からずに中央尖塔の裾に達し、此處から愈々登りに掛かり頂上近くはかなりの瘠せ尾根になつて居るので、ロープを結び大事をとつて進んだ。この中央尖塔

は火口原からは略々四〇〇米近く登え立つて居るのであつて頂上までは天幕地から一時間半位掛つたが、天氣がよければもつと早く行けるだらう。途中別に困難な箇所はなく雪の堅さもアイゼンの爪が適度に突き刺さる程度であつた。最高峯に立つて見ると二つの頂きの間はまた圓く落ち込んで居て小さい火口状になつて居て、最高峯は火口に面した側からはかなりの傾斜で屹立して居る。そしてその表面は磐岩から成つて居るのもあらうか、胎の如き波の如きうねりを見せ、これに雪が吹きつけられて砂塵菓子子のやうになつて居るのは特異な景觀であつたさうだ。

この頂上から南側に一寸降りた處では風も全くなく實にのんびりとして居て此處で悠々と晝食を済まし、登りに取つた尾根筋の北側の窪みを真直ぐに下つて三十分ばかりで天幕に降り着いたといふ。

かうした三日間のお互ひの話を交はして居る中に夜はどん／＼と更けて行つた。何分にも天幕の中が狭いのでまるで話の雑話見たいにぎつしりと折重つて身動きも出来ずに一夜を過ごした。

中央尖塔の登攀

(伊藤新一)

十九日 圓型テントの屋根を打つはげしい風の音に眼を醒す。外を見る事が出来ないのです、天氣の様子は良く判らないが、強風に吹き付けられて屋根に當る雪粒の音によれば、今日も亦吹雪であらうか、と判断される。十時頃大分明るくなつたので朝飯をすませ外に這ひ出す。入口はすつかり雪に埋もれて居たが、それでも昨夜掘つてをいた爲に出るのに大分楽で。風は依然として強いが、天氣は案外よい。丁度今晴れ上つた所であらうか、

冷へかへり、澄み切つて、素晴らしい色を湛へた紺碧の空に、中央尖塔が眞白な全身を現はして私達の前に立ちだかつてゐる。こゝからみると高差は三〇四〇米位で、頂上は二つのピークに分れて見える。右の方が最高峰である。私達は相談の結果、二つのピークの間の鞍部から火口原に下りて居る谷状の窪みに沿つて登り、尾根づたひに頂上に達することにルートを決めて、用意を整へ直ちに出かける。火口原の雪は一面にスカフラに覆はれ、靴が僅に没する程度である。火口原を横切り間もなく中央尖塔の登りにかかる。こゝから振りかへつて見る景色は素晴らしい。廣々とした火口原の向ふに、白い城壁のやうにつらなる外輪山は、一つの大きな山脈のやうだ。やがて再び何時の間にか吹雪がやつて来てたちまち私達を包んで了ひ、何も見えなくなつてしまった。時々青空が見え、展望がきくやうになるが再び吹雪が視界を閉ざしてしまふ。相も變らぬ「國後天氣」だ。登るにつれて傾斜が増して来たがせいぜい三〇―四〇度位である。雪はアイゼンに手頃な堅さなので非常に歩つて間もなく鞍部についた。此の鞍部は、丁度二つのピークの間に摺鉢のやうに落ち込んで居る火口の壁が一番低くなつた所にあたる。吹雪の時間にもよつと見えたのでよくは判らないが、火口の直徑は二―三〇〇米位であり大きいものではないと思はれる。火口壁の縁に沿つて最高點に向ふ。たゞアイゼンで歩いて行けばよい。最高點の少し手前で尾根が少し狭まり、火口側は絶壁をなして落ち込んで居るので、念の爲コープをつけて行き、十二時二十分頂上に立つた。此の頂上に立つこと、それはこの半年来常に私達の關係に盡いて来た所であつたけれども、此の時飛び立つやうな喜びは別に湧いてはこなかつた。之は最後の登攀が簡単であつたのと共に、私達は全體の一員として全體の力によつてこゝまで押し上げられたのにすぎないことを強く感じて居た爲であらう。その上之で私達の仕事がつた譯ではなかつた。本當の喜びと満足を感じたのは、第

三キャンプを撤収して最後に全員が第一キャンプに集り、之で萬事済んだ、といふ氣持が我々を包へた時であつた。

此の時、うまい工合に吹雪が晴れて来れて、乳岩路の海岸線、それから南へ羅臼岳に至る迄、すっかり見わたすことが出来た。海は極めて静かに太陽に照り輝やいて居た。私達がそこを發つた時まだ雪が積つて居なかつた海岸は今では眞白になつて居た。智恵別川は原始林に深く覆はれ、その向ふに連なる山脈の間からオホーツク海がほんの一部、その灰色の海面をのぞかせて居た。ルル牛岳の頂きは雲に閉ざされて見えず、そこから南と北東に至る間暗雲に深く閉ざされ何も見ることが出来なかつた。樺根の方の展望を私達は最も期待して居たのであつたが。

南向きの風蔭に入つて、堅パンを嚙りながら透りの景色をしばらく楽しむ。こゝは風が殆んど當らず、のんびりしてゐてとてもチャチャの天邊とは思はれない(氣温攝氏零下十五度)。少憩の後、もと来た方向に下り始める。再び吹雪となり、今までの天氣が嘘であつたかのやうに、白い渦巻は我々を閉ぢこめてしまふ。吹雪の爲、少し手間どつて二時過ぎテントに歸りつく。今日下りて了はないと何時下れるか判らないので、急いで用意をととのへ第二キャンプに向ふ。少し晴れかけて居たがスキー・デボの邊りより又もや吹雪はじめる。第二キャンプのあたりが見え、懐しい友の聲を聞いたのは四時過ぎであつた。

八、火口原の滞在

二十日 雪

第二隊 CH—CH

第一隊の伊藤、釣田 CH—乳岩路

二十一日 雪

第二隊 CH 滞在、横山、喜多 CH—CH、伊藤、釣田乳岩路—野化場

二十二日 雪

第二隊 滞在、伊藤、釣田野化場—CI—CH

二十三日 雪

第二隊 滞在、伊藤 CI—往復、他の三名 CH—引返し—CH

二十四日 雪

第二隊 滞在、頂上に向ひしも引返す。

第一隊 CH—CI—CH、伊藤、釣田—野化場、

第二隊の隊員は第一隊の人々からの話を聞いて早く第三キャンプに行き度くてならない。二十日は朝から天気が思はしくないので、暫くは出発を見合せて居たが、時々青空が見えて邊りを吹きまくる粉雪も稍々勢をそがれた様に見えるので、午近くなつて出発する事になった。第一隊の喜多、横山の兩君が案内旁々食糧の運搬の爲に行を共にする。伊藤、釣田の兩君は乳岩路に降り、第一隊の登頂と一行の無事とを報告して貰ふ事になった。

我々が登り出して暫くすると日が當つて来て、北西には真白なルル半岳とそれに連なる山波、その向ふ方には暗緑のオホーツク海と知床の山々、また眼下の茫漠たる原始林の横がりとその間を曲折する音根別の本流、またその川の流れを越えた向ひ側をずっと林が続いて頂きまで黒木に包まれた山々が雨の空を限つて居る。國後の東海岸は例に依つて太平洋の明るい色に劃せられて居る。渾の中をデグデグに登つて行くと瞬く間に第二キャンプが小さくなつて天幕の影もそれと見分け難くなる。

然しそれも東の間、北西風は益々強く、邊りは濃く雲に掩はれて何も見えなくなつた。高距にして四〇〇米ばかり登ると澤は益々淺くなつて遂にはべつたりとした斜面になつてしまつた。斜め左に、正面から吹きつける吹雪を乗せた西北風から面を背けながら進んで行くと、雪が堅くなつて偃松の面に凍りついた雪の條紋が白く光るやうになる。此のスキー・デボは第一隊のそれよりはかなり下であつた。アイゼンに突き換へるのもこの冷たい烈風の中では容易な業ではない、ともすれば身體の平衡を失ひさうだ。

これから略々眞直ぐに火口壁まで攀ち登るのであるが、雪面はスキーには適さないといふものの、偃松の上に薄い皮を張つて居るのであるから、片足に力をこめて身體をいざ引上げやうとする瞬間にござりと落込む。雪面をひよい／＼と軽く歩いて行けばいいのだが荷物が重いのでそれならぬ。雪が眉毛に口髭に凍りつく、額にも海水が張つて來た。赤旗をつけたスキー杖を次々と雪面に倒さに立て、火口壁へと約一五〇米の間、傾斜にして二十度から三十度の斜面を登つて行く。

火口壁に達する頃には風は益々猛烈で天候は益々思はしくなくなつて來た。これから右手に火口壁の内面に沿ふてトラツァース氣味に膝位まで粉雪に沈みながら下つて行くと、五分も掛からずに雪に埋れたアークティック・テントを見出す事が出來た。

もう二時半になるしそれにこんなひどい吹雪では稍々不安なので喜多、横山兩君も今宵はこのテントに過して行く事となつた。テントの雪面上に露出した部分は全體の五分の一に達しない位だ。入口は西南に面して居て此處から雪を掘下げて中に入つた。吹雪は強くなる一方で視野は一、二尺に限られてしまつた。風は丁度舷を打つ波のやうにどし／＼とテントを揺すぶり、雪は屋根を打つ雨滴のやうにバラ／＼と音をたて、は天幕の表面に

はね返る。元來が四人用に設計されたこの天幕に多人数が入つたので車座になつて夜を明かす以外に手段がなかつた。天井が高いので首を折り曲げる辛さのないだけかもしれませんが。昨夜も横になつたとは名のみ、今夜も座つたままで充分な睡眠がとれない。折角のんびりとこのフリーク・ティ・テントで寝やうとした望みも空しくなつた。

二十一日、通風孔から先づ夜が明け掛けて來た。入口の方が白み、上の方が明るくなつてとうとう朝になつたが相變らずの天気だ。然しかうして居ては食糧が缺乏する處れがあるので喜多、横山の二君は吹雪を冒かして第二キャンプへと降つて行つた。火口壁まで見送りに行つたが、スキー・デボの方から眞上に吹きあげて來る雪つぶで眼も開いて居られない。降つて行く二人には標識のスキー杖さへそれと見分け難いだらう。間もなく二人の姿は白い雪の幕の中に消えて行つた。天幕からつい二米位しか離れて居ない火口壁の内面の黒く露出した岩面も見えない位でどうにもならず、頂上に向ふ事は断念せざるを得なかつた。

天幕の中を整理し、雪を掻き出して各人の居場所を定めて坐を占めた。入口に面した方の床面が高くて斜めに中央に向つて傾いて居るので甚だ工合が悪く、人間の出入に作つて一旦中に入つた雪の塊りは外に出る事がなくその儘に溶けてしまふのだから、天幕の中は濕氣が高くてこれのみが不愉快である。天幕の内壁からばたり／＼と水滴さへ垂れる始末である。カボックでこしらへた下敷きも水をふくんでまるで海綿のやうだ。下からの寒さもこれが爲に仲々防ぎ難い。

二十二日、朝になつてもまだ吹雪は續いて居る。入口の溝は忽ちに雪で埋つてしまふのでこの雪を拂ひのけてからでなくては出られないのだから一寸外の天気を見るといふわけには行かない。風の音が餘りしないので喜び勇んで入口から雪を除いて外に出て見るが、相變らず何も見えない横ざまに雪の飛ぶ天気でないやになる。天幕の

中に横になつた儘をしてなるべく液體をとらぬ様に努めながら一日を過す。小便をするにさへ武裝物々しく外に出ねばならぬのだし、それに一人が外に出てまた中に戻つて来ると雪だらけで大騒ぎをせねばならぬ。殊に夜になつては却々に騒動なのでとう／＼ガロン入りの石油罐を用ゐて天幕の中で用を済ます事にまでなつた。

二十三日も亦同じやうな天候だ。午後になつて雪は益々激しくなつて入口の布片が中の方にはちぎれさうにふくらんで来る。そして天幕のかなり上の方までも埋れて来たらしく中は段々薄暗くなつて来た。夕方近くなつて一同武裝物々しく外に出て入口を大いに掘りひろげそしてその上に携帶天幕を張り渡して出入の自由を計つた。天幕は殆ど全く雪面下に隠れてしまつたが、この天幕を中心に小さい氣流の渦が出来らしく天幕の中心から五、六尺隔つた處に半圓形に小さい雪底が出来て、これ以上には雪は増えない。

石油が段々と減つて来たのが何よりも心細い。食糧の喰ひ延ばし策は割合に融通が利くのだが石油は一定量はどうしても必要なので食糧のやうには行かない。燈火も蠟燭を用ゐる事とし、炊事以外にはストーヴを使はぬ事にした。幸にこのアークティック・テントは保温性に富んで居て内部は攝氏零度以下には下らないから有難い。

二十四日も朝の中は例に依つて駄目だ。十一時頃になつて外に出て見ると昨日に比べて視野が廣く氣持のせいか幾分明るいやうだ。兎にも角にも頂上に向はうといふので雪の中に深く埋つたアイゼンを掘り出して靴につけ盲目者の如く東に向つて真直ぐに火口原を進んで行つた。何しろ我々が二十日にこの第三キャンプに到着して以來、時れ間といふものは全く見ないので中央尖塔が如何なる形狀を爲してどういふ風に聳え立つて居るのやら、火口原はどの位の廣さがあり、どんな風に横がつて居るのやら皆目見當がつかないのだから甚だ頼りない。

ビッケルだの豫備の天幕の支柱だのに赤い片布を細く引裂いて結はへつけ、これを目標として二〇米ばかりの

間隔を置いて雪面に突き立て、行くのだが、かういふ手頃の棒切れは持合せが餘りないので、忽ちにして不足を來たしてしまつた。さらばとて標識の間隔はこんなにまで粉雪がびつしりと積まに飛び交うて居る火口原では、これ以上に携げるわけには行かない。一〇米も離れたら前に行く人影さへ見えないし、掛け聲は風に吹き飛ばされて後の方から前の人の方向を正さうと如何に努力しても無益に終る始末である。せめて一度でも逢りの概観が眼に止まつて居たならば假令如何に視野が限られても大體の見當はつくのだが、てんでその見當がつかないのだから何とも致し方がない。

西北から東南へとスカフラが大きい條痕を走らせて二、三尺も盛り上つて居る處があるかと思ふと、忽ち脛近くまで没する新雪の吹溜りとなる。スカフラの上ならアイゼンの爪跡が残るものの、かうした砂の様な雪面では忽ちそれも消えてしまふ。恐らくは中央尖塔は雲の上に浮び出て居るのであらうか、時々粉雪の積まに走るその膜面を通して青空の一片が、そしてそれに漂ふ巻雲が天上に望まれる。雲が薄くなると南の方の空にはぼんやりと太陽の形さへ窺はれるのだ。三十分ばかり東へ東へと進んだのだがまだ、中央尖塔の裾には行きつかぬらしく、遂に登る事は断念して引き歸へした。往きには三十分も掛つたのに歸りには十分足らずで天幕の處まで戻ることが出来たのだから、我々の速し得た距離は實に知れたものである。外に出た序でに入口の溝をまた掘り掘げ一人宛雪を拂つて天幕の中に入つた。三時頃になつて雲が薄くなつて中央尖塔の眞白なコーンとそれを囲む火口原とが見る／＼間に眼前に展開されて來たが、それも五分とは續かずにも目も前の帳に掩はれてしまつた。今夜はクリスマス・イーヴなのだ、残り少なくなつた煙草等をお互ひに贈物として寒々とした天上のクリスマスを迎へた。せめても明日の天氣を楽しみに早く寝に就いた。

二十五日は然し尙更天氣はよくない。十一時頃になつて風の合間に「エホー」との呼び聲が聞えて来る。食糧の補給にと喜多、横山の兩君があがつて來たのだ。話を聞いて見ると歸りの東山丸はすでに根室に來て居てこの二、三日中には乳吝路に入港するさうだ。何時まで待つたら本當の天氣が来るか見當がつかないので、直ちに天幕を撤收して第一キャンプまで降る事になつた。

九、下山

二十五日 雪

横山、喜多
CH
CH
CH

第二隊
 $\begin{array}{c} \text{CH}_3 \\ | \\ \text{CH}_3 - \text{C} - \text{Cl} \\ | \\ \text{CH}_3 \end{array}$ 、伊藤、鈞田醇化場
 $\begin{array}{c} \text{CH}_3 \\ | \\ \text{CH}_3 - \text{C} - \text{CH}_3 \\ | \\ \text{CH}_3 \end{array}$

二十六日

渡邊(著)、伊藤乳香路へ、残り七名CI—CII—CI—内四名は孵化場へ。

各人の荷物を手早く整理し、アーキティック・テントを取拂ひに掛つたのが、周囲が堅く雪に埋つてしまつて居るので底面まで掘り出すのが仲々容易でない。支柱は湯氣でふやけてこれをばらばらにするのも一通りの骨折りでない。杭まで掘り起して居る時間がないので支へ紐は悉く切断してしまつた。二枚の布の間には氷の薄い層が出来て居るのでこれを疊んでも元通りの大きさに纏めて袋に入れる事など思ひもよらない。天幕其の他嵩高のものは下から上つて来た二君に託して午後二時頃一同下山の途に就いた。この凶雲が稍と薄れてもう見る事も出来まいと思はれた中央尖塔と火口原とを再び間近かく望見する事を得た。火口壁に達すると例に依つて一段と風が強くなり、標識にと立てて置いたスキー杖には風の方向なりに堅い半ば凍つた雪のとげとげが一面に附着して

居てリングもそれと見分け難い位になつて居る。その中の一本は風にさらはれたか姿も見えずに消え失せて居た。決して樂ではないのだが今日はこの二、三日中ではまだしもいい方なのだ。スキーにはき換へたが雪の状態は一變してウインド・クラストを形成して居るので、膝の上まで埋れるだけで一向に滑らうとしない。それに板状雪崩を發生させる危険も充分にあるので徐々にしか進み得ない。前の人の滑つたシューブルを追ればそれでも少しは樂に滑れる。異常の勢力とそして相當に長い時間を費して三時過ぎに第二キャンプに到着した。

此處には昨日野化場まで石油を取りに行つて其處に一泊し、つい今し方登つて來た伊藤、飯田の兩君が待ち設けて居た。差當り今夜必要のもの以外は全部残して一同第一キャンプまで降つて行つた。その途中は新雪が増し灌木がその姿をかなりに没してすつと滑りよくなつて居た。第一キャンプに一同が着いたのはもう日没後であつた。どん／＼と大きな焚火を燃さうとするのだが仲々思ふに任かせない、それに雪が激しく降つて來たので火の傍に居ても仲々衣類が乾かない。この天幕地の積雪量も随分と増して熊笹は全く雪面上に現はれて居ないし、天幕もかなり雪に埋れて居る。

雪は尙も降り頻るのだが、風がないので靜かに縱に降つてゐる。積さまに降る雪を見慣れた眼にはそれがかへつて妙に見えてならない。毎日々々荒れ狂ふ疾風の響きに耳慣れた我々にはかうした靜けさは寧ろ何となく物足りないものであつた。

その後の第一隊の様様に就いて聞く。二十日の日に下山した伊藤、釣田の兩君が踏み跡のないあの廣々した音根川の河原を夕間に憫まされながら乳岩路へと辿り着いたのはすつかり暗くなつてから後の事だつたさうだ。我々が山に居る間に第一キャンプまでは村の人達が度々様子を見に來たらしく、然も我々に就いては何等の消息も

得られないので村ではそろ／＼心配し出した處だつた。二人が下山して一行の無事を傳へ得た事は、村人の心労とそれに附随する種々な臆説虚傳とを一掃するに大いに役立つたわけだ。地元の人々の登山者に對する關心と信頼と、そしてそれに應へる登山者の心遣ひとがなければこの種の登山計畫は平滑に進行しないのは必定である。

一行の健在と第一隊の登頂とを關係各方面に打電した二人は翌日は豫備の食糧を取りに解化場に行き、二十二日に第二キャンプに引返して來たのだつた。二十三日には伊藤君は第一キャンプとの間を往復して食糧を第二キャンプにあげ、残りの三名は第三キャンプへの物資の補給を企てたのであつたが猛烈な吹雪に阻まれて火口壁までは達する事を得ずに空しく引返したのだつたさうだ。

二十四日には更に喜多、横山の二君は第一キャンプとの間を往復し、伊藤、釣田の兩君は石油を取りに解化場へと下つて翌二十五日に第二キャンプに我々が上から下つて來る少し前に上つて來たのは前にも述べて置いた通りである。兩君の話では二十四日に解化場に下つて途中、第一キャンプで大きい方の天幕が雪に壓しつけられ支柱が折れてつぶれて居るのを發見してこれを建て直したのでこれの通りになつて居ると、有り合せの木を伐り倒してこしらへた急造のまがりくねつた天幕の支柱を指さすのであつた。

この五日ばかり第三キャンプでも相當に辛らかつたのであるから、吹雪しの第二キャンプの惨めさは想像に餘りある。ブリーク・デック・デント自身の安全性に就いては第一隊の人々によく知つて居るから我々の行動に就いては無益な心配はしなかつただらうが、物資の補給には相當に悩んだらしかつた。兩隊の間の連絡は五日間も缺けて居たのであるが、お互ひに他の隊にかうして欲しいと希望して居た處は先づ／＼爲し果されて居たと言つて差支へない。かうした無言の連絡が各隊の間に完全になされるのでなければ「極地法」に依る登山は十分なる成

果を發揮し得ないだらうと感じられたのもこの宵の事であつた。

二十六日は自分と伊藤君とは乳岩路に直行し、船便の工合を確め、第一キャンプから乳岩路への輸送に必要な人夫を派遣出来るやうに手筈を整へ、残りは第二キャンプの撤収を今日の中に完了し、その一部は更に孵化場まで降つて貰ふ事になつた。

昨日よりは今日の方が天気がよく、山の姿は見えないが薄日の洩れる時さへある。第二キャンプへと登つて行つた連中は然しきつと上では雪に悩まされて居るに違ひない。どうせ今日の中に乳岩路まで降りればよいのだとゆつくりした故で、音根別の本流近くに掛つた頃はもう三時だつた。日が暮れない中に音根別の河原を小走り気味にスキーを滑らして行く。とうとう海が見えて来た。もう日が暮れやうとして水平線から下は青黒く、そしてそれから上は真赤に照り映えて居た。この翌日第二キャンプを撤収して此處まで来て初めて間近く海を望んだ他の連中にも同じやうな感銘が與へられたといふ。

第一キャンプから下も随分と雪が増して何だか異つた場所のやうな気がした。音根別の本流との出合で一休みした時に、河原にびつしりと生へた水楊の枯れた梢をすかして對岸の低い山々が白くそして鉛色に見えて居たのが北の國といふ印象を自分には強く残して呉れた。

千島神社の前を通つて、神々の加護に依つて與へられた我々の登頂の機会を誦し、人の顔も定かにそれと分らぬ頃乳岩路の部落に入つた。村長を初め各方面に挨拶に廻つて旅合に引取り、風呂に入つてほつと一息ついた。他の連中は第二キャンプの撤収に疲れてまだ夕食も採らないだらうにと何となく済まない様な気がする。

村役場の服部書記と打合せ、明日第一キャンプに七人、孵化場に三人の人夫を派遣する事にした。東山丸は最

初二十四日に乳岩路に入港の豫定で根室町長から村長に宛て、手配方が打電されて来たのだつたが、我々が何時下山するか見極めがつかなくつたので兎に角船は探検の方に先づ廻航して、歸路に乳岩路に寄港する事になつたのだつた。今日になつて船からは明二十七日夜入港直ちに乗船され度いといふ無電を打つて来たので、明日、第一キャンプと船化場へ行く人夫に是非とも夕方までに一同乳岩路に歸着するやうに傳へて貰ふ事とした。

冬の間の燃料とする爲め薪を集めに村の若者達はもう二日もすると出掛つてしまふさうで、十人も人夫を集める事は明日以後には不可能であらうと服部書記は語つて居た。チャチャスプリの裾を繞る果てしなき大樹林は国有林であつて、その一本と雖も濫りに伐り取る事は許されず、一々營林署員立會の許にその拂下げがなされるのでこの點は驚く程嚴重に規則が遵奉されて居るとの事である。正月の門松にする爲に小さい枝を一つ取つて來ても忽ち引張られて仕舞ふといふ話だが先づその位に威令が行わたつて居るのだ。薪にする木の拂下げも罷つてある個處からなされるのではなく、此方から一本、彼方から一本と廣い音根別の河原を飛び／＼に求められるのであるから仲々その運搬は容易でない。自分達が第一キャンプから降つて來る時にも河原に馬糞の跡があり、これから兩側に彼方此方と適當な木を採がしに行つたらしい足跡があつた。

かうして木を伐り倒しこれを馬糞で、或ひは馬の背に付けて乳岩路まで搬出し家の軒下に堆高く積上げて長い／＼冬を迎へるのだ。この薪を集める事は乳岩路の人達に取つては重要な行事の一つで、例年正月前の一週間位の期間がこれに宛てられるさうである。それであるから村人達が如何に親切であつても、この時期に登攀を試みるならば充分な助力が出来ないであらうとの事であつた。我々は丁度村の人達の手が最も空いて居る時期に登山を行つたわけでこの點では甚だ好都合であつた。

鼻の上ではぐつすりと眠れるだらうと思つたが、仲々に寒く、そして壁の隙間からはとう／＼吹雪が舞ひ込むといふ始末で容易に寝つかれない。隣室ではこの近くにある鑛山から保養に来て居る坑夫達が夜遅くまで語り合つて居た。

十、乳 吞 路

二十七日 曇

渡邊(共)、喜多、横山、CI―乳吞路

織田、田中、釣田、小松野化場―乳吞路

二十八日 休養

二十七日は曇つた天気だつた。相變らず山の姿は見えない。午後乳吞路の小學校で今度の登山に就いて話をした。尋常四年以上の生徒とそして村の有力者達とが聴衆であるから何方を中心に話を進めたものか大いに困惑した。小學校は村はづれの高臺にあつてチャチャメブリの裾野がその背後から伸び上つて居る。今日は見えないが夏から冬へ、春から秋へと日々に変り行くチャチャメブリの全容を此處から仰ぎ見ながら鳥の子供達は育てられて行くのだ。この小學校は尋常高等小學校だが生徒の数は百にも満たない。校長ともう一人若い先生とそれに裁縫の爲の女の先生との三人で授業を受持つて居るとの事。この若い方の先生は我々と同じ船で正月の休暇を故郷で迎へるべく根室に歸るのださうだ。

話を終へて四時近く旅舎に歸つて見ると第一キャンプからの一行が既に歸着して居た。昨日の第二キャンプの撤収は仲々時間が掛つたさうだ、下ではさうでもなかつたのだが、第二キャンプではかなり吹雪いて居て、細々

としたものを雪の中に取残すまいとして次から次へと片付けて行くのは容易な事ではなかったらしい。食糧だけは少くなつたといふものの、何日も何日も掛つて一同が持上げた全部を七人の背に付けての降りは重くて／＼遣り切れなかつたといふ。乳岩路を今朝早く出た七名の人夫は九時頃には第一キャンプに達したさうだ。例に依つて人夫連よりは隊員の方が重い荷を背負うて歸つて來たのだつた。

四時過ぎには解化場へ派遣した三人の人夫が歸つて來たが、この方の隊員はもうすっかり眞暗なつた六時頃になつてやつと歸着した。この連中は昨日第二キャンプの撤收後解化場へ向つたのだが、菅根別の本流に出合はない前に日が暮れてこれから解化場へまでは疲れた身體には随分と道程があるやうに感じられたさうだ。

今日は愈々荷物を取片づけに掛つて見ると、思はぬ處に思はぬものを忘れて居る始末で、何しろ天幕のやうに限られた場所を片づけるのとは違つて建物中を隅から隅まで忘れ物のない様に改めるのには全く参つたらしい。菅根別の河原を夕闇の中に追つて來る中に、新月が水楊の梢の間にきら／＼と輝いて來て重い荷物に喘ぐ一行を菅根別へそしてチャチャへの別離の思ひにと暫し誘ふのであつた。あの夕方の氣持は忘れられないなあと一同は繰返し／＼語り合つて居た。

東山丸からは又、電報が來て擇捉の方の天候が思はしくないので明日は來れないからとの事で、今夜このまま出帆にならなくてよかつたと皆、ほつと一安心する。夜は旅舎の二階で村の有志者が我々の成功を祝し、兼ねて別離の爲の心からなる宴を設けて呉れた。折角この宴を楽しみにして居られた中村克二郎翁が風邪の爲に出席されなかつた事が我々に取つては一番に物足りなかつた。歡迎會の時とは違つて一同も大いにメイトルをあげ、第三キャンプで徒々なる儘に作つた「國後節」を紹介したりした。旅舎の前を過ぎて行く驛邊の鈴の音も杜絶え

ても尙宴は閉ぢられなかつた。島の人とも明日きりでお別れかと思ふと何となく寂しくなつて何時までもかうして一緒に酒を酌交はして居たい氣持になるのだつた。

二十八日は島に来て初めての快晴に恵まれた。朝食の頃まではチャタヌブリは雲に包まれて見えなかつたが見る見る中にその全貌が露はになつて來た。堂々たる棉野の根張りを見せ、その胸には數多くの縷を放射狀に切落し、その頭はドラミッド形の中央尖塔を載き白雪に粧はれて間近かく聳え立つて居るのだ。自分達が頂を極めて來たこの山はその全き姿を我々の登山が終つたその瞬間に始めて示して呉れたのであつた。山が大きくて立派である事を知つて我々は遙々登りに來たその甲斐のあつた事を心から喜んだ。誰も陽にそれと言ひ出す者も無かつたが、我々の面には明るい微笑が後から／＼と浮び上つて來るのだつた。吹雪と闘つて苦しかつた辛らかつたその想ひ出もすでに遠い遠い過去の出來事かとさへ思はれた。隊員の全部が全く丈夫で、朝の光を浴びてこの山に而して立ち並んだ氣持は、本當に登山者の享受し得る特權以外の何物でもないといふ風に感じられた。頂上に立つた者、又頂上に立つ機會は與へられずに終つた者、兩方とも同じ氣持になつて山を見つめて居た。「我々が登つた山」かういふ風に一人一人が考へて居たに相違あるまい。自分がかういふ風に皆が暗黙の間に同じ事を考へ、一人の氣持は即ち他の一人の氣持であるといふ工合にまで皆の心が溶け合ふた、この一つの事實だけで今度の試みは充分に價值付けられるだらうと考へた。

海は靜かである。沖には白浪さへ立たない。砂の上を僅に寄せては返す磯波にかすかなる海の動きを知るばかりである。南西の方、水平線上には色丹の島影が淡く青黒く浮び上つて居る。樺提島はブトイヤ岬の背後に隠れて望むべくもない。

西南にはボントマリに突き出た留夜別岬の臺丘の上に羅臼岳が招鉢を伏せたやうに遠く望まれる。雪の量は然しさまで多くないらしい。部落の東端には低い丘の上に三角點の櫓が立つて居る。その上に立つて西北の方を眺めると正面にチャチャスプリが横がり、その左手に遠く屏風を運ねたが如く一文字に眞白く延びて居る山波が見える、右手の端の方にピラミッド形に突立つて見えるのがルル牛岳である。ルル牛岳の方は雪量は驚くばかりで一面に眞白い。登るのはさう難しくないらしいが、その裾にとり付くまでが仲々の事である。菅根別の本流は埋る時がないと聞くから河床を行くわけには行かないだらう。熊笹がすつかり埋れ、倒木も影を没した二月、三月の候となれば雪もすつかり締つて居るし割合に樂に取附けるかも知れない。村の人の話では菅根別川の西に當るセタイ川を溯つて西海岸のシベトロに出て、彼方側から登るのがいいだらうとの話であつた。

チャチャスプリも新雪に、そして熊笹や灌木に悩まされる今頃よりは二月、三月の方がすつと樂だらう。それに二月は天氣が安定して晴天の日が多いさうである。三月下旬ならば恐らくは頂上まで乳岩路から日歸りで往復が可能ではあるまいかと自分は考へて居る。

自分達が今度取つたコースは丁度此處から見ると左手のスカイラインに沿ふてであつたらしく、殆ど眞西から登つた事になる。登路としては何も我々の取つたコースが一番いいわけではないのでどの方向から登つても大した差はあるまい。南に面した方は澤が割合に深く切れこんで居て傾斜も稍々強さうである。

村の子供達の間にはスキーが盛んで、自分達が歩き廻はるとその後から何處までもついて来るし、中には誇らしげにその巧みなる滑降を我々に示す者もある。三角點のある丘などは彼等に絶好の練習場であるらしい。これに引換へて大人の間にはスキーは全く普及されて居らず、我々が物資の輸送に使つた若者の中でもスキーが出来

るのは一、二人しかなかった。

この三角點から瞰下ろすと真下に海岸に沿ふて乳岩路から鰻文磯への道が通じて居て、時々馬橋が鈴の音を立てながら過ぎて行く。さうした馬橋に積んだ荷物の中には蟹だの貝だのものもある。鱈詰のレツテルでしか見た事のないあの奇怪な北海の蟹の本物が旅館の前で取引されて居るのを見ては、あかういふものかと知る事が出来た。

海岸には細長い杵形の架臺が立ち並んで居る。これは海から採取した昆布を掛けて乾燥させる杵木であるが、もう十一月に入ると昆布は採れないで翌年の五月までは杵木ばかり空しく海岸を占めて居るのだ。島の人達には海岸は謂はゞ田畑であつて此處に生活の糧があるのだ。漁獲物は昔に比べて餘り採れないとの事であつた。以前には鮭が多かつたが今では激減した爲、音根別川の孵化場の必要も生じて來たのだ。

今日のやうないゝ天氣は濡れて凍りついた天幕や寢袋や下敷きを乾かすにはもつて來いの日である。乾し終つたものは次々と片付けて荷造りをし、何時船が來てもいゝやうに準備が整つた。

採掘の方の時化が収つたらしく東山丸は今夜午後十時に入港するとの電報が來た。天氣は午後になつてから稍と別れ氣味になつて來たので、是非とも今夜の中に乗船出來るやうに手配を乞ふ旨が付記してあつた。早速神主兼蜂屋の野呂氏に相談するとうねりが強くなつて來たから夜の乗船は危険で、明朝に延ばす方がいゝだらうといふ。島の人達の人なつこさに別れ難く感じて居る處なので一も二もなく同意してしまふ。

夕方、村長初め世話になつた各方面に禮を述べ、別れの挨拶をして廻る。通り一遍の挨拶ではどうしても済まされぬ程村の人達の親切が身に滲みて居る我々は、上つて呉れと言はれるのを到底拒む事が出来なかつた。その爲に意外に時間を費やして旅命に歸つたのは夕食には遙かに遅い時刻であつた。

食後には一同打揃つて中村克二郎翁を訪問する。爐傍に翁を圍んで歡談盡くる處を知らない。平戸の藩士に生れた翁は戊申の役ははつきりと記憶して居るといふから古いものだ。明治の半ばにこの島へ来てから毎年のやうに平戸には歸るがどうも千島の方が懐しくて歸つて来るさうだ。八十を過ぎた身體だが全く氣持は若くて話に活氣がある。それといふのも頑健なその肉體に依るものであらう。毎年内地へは二、三回往復し、この秋にも朝鮮まで行つて来たといふ。明春五月頃にはまた朝鮮へ行くから其の時東京に寄ると言つて居た。自ら刻み、自らいつた昆布で昆布茶を煎じて一同にすゝめて呉れる。病後の翁を何時までも起こして置くのはよくないと思ひながらも夜の更くるまで語り合つた。辭して外に出るともう月影は見えずどんよりと曇つた空は明日の天氣を危ぶませる。先刻ボーといふ氣笛が聞えて居たが、見れば沖合に舷燈を掲げて東山丸が碇泊して居る。

十一、歸路

二十九日 午前八時半東山丸にて出帆、五時横濱着。

三十日 午後三時發歸路につく。

二十九日は起きて見ると空模様が怪しく、海にはうねりが出て来た。六時過ぎにはもう舳へ荷物を運び初めた急いで朝食を終つて海岸へ行くと七時を過ぎて居る。波打ち際には村の人々が見送りの爲にすでに列んで居た。チャチャスプリは島に來た時と同様深い雲の帳に包まれてその姿を見せない。舳に乗つた我々の眼は何時までも何時までも海岸に立ち並んで我々を見送つて呉れる村の人々に注がれて居た。やがて徐ろに眼は沖合の東山丸へと注がれる。成程汽船は汽船だが三百噸にも足らぬ潮風に黒すんだ小さな船である。舷側にはタラップが下され

たので荷物の受け渡しは浪の高い割に圓滑に行はれた。

八時、我々が乗船と同時に根室に向つて出帆した。船室には樺太から根室へと向ふ人々が二、三十人が物憂さうに或ひはストロウを囲み、或ひは横に臥した儘身動きもせず居る。女も四、五人は交つて居る中には乳呑兒をかゝへたのも居る。女の人々は皆元気がなくて一人として起き上つて居る者が無い。この船尾の船室は殊の外に波に揺られて仲々辛い。元氣に船に乗込んだ小學校の先生は出帆してからもの十五分も立たぬ中にもう嘔吐する始末だ。我々隊員の中にも二、三氣持が悪いと言ひ出す連中が出て來たので船の前方にある厩接室で過す事にした。この部屋も狭く薄暗いので決して樂ではない。

層雲は低く垂れて往きには左に見たその同じ島影を右手に見て南へ——と船は進んで行くのだが、風向きの關係か、一時間に六、七哩しか速力が出ない。

正午頃には殊に波が高く船の動搖が最も激しかったが、一時間ばかりするとそれも次第に収つて來た。徒々なる儘にブリッヂに上つて船長と雑談を交はしながら時を過す。望遠鏡を案じて居た船長があれが根室だと指さす。水平線上に糸より細く薄黒く横たはつて居るのが根室の半島なのだ。それから左に續く水晶列島がやがて飛び飛びに浮び上つて來た。もう三時だが根室まではまだ一時間が掛かるといふから日が暮れてからでなくては入港出來まい。

昨日は根室の港内は凍つたが今日は潮流が變つてすっかり溶けてしまつたさうだ。この船は樺太では時化が續いて仲々荷役が出来なかつたといふ。また近海郵船の例の田子ノ浦丸は色丹に時化を避けて居たが樺太の西海岸でも荒天氣に悩まされ一度釧路に石炭の補給に歸つて、まだ樺太の近海に居るさうで何時になつたら歸つて來る

か分らないといふ。この船は今夜にも根室を出帆して函館に向へればいふがといふ。さうでなければ正月を船で迎へる事になるさうだ。こんな話をして居る中に根室の燈臺の灯が夕闇の中に瞬き初めた。やがて町の灯が次第に増えて来た。あれが何の邊になると略々推測されるやうになる。防波堤の間を抜けて五時入港。安藤町長及び山口助役が船まで出迎へて呉れる。築港事務所のランチに荷物と共に乗込んで上陸したのが六時だった。

旅舎に入つて新聞記者と會談の後、安藤町長の歓迎の晩餐に臨み、翌三十日は各方面に挨拶して午後三時根室發の汽車で札幌に向つた。

十二、難 威

日没の早いのは全く驚いた、まさかと思つて居るのに午後三時半にはもう暮れ初め四時過ぎには眞の闇となる。自分達が島で過した時期は冬至の前後であつた故もあらうが、それにしても何だか早過ぎると思ひよくよく考へて見たら經度から言つてかなり東に寄つて居て、東經一四六度一五分位に相當するから標準時との時差は四十五分あつていゝわけだ。緯度は約北緯四四度二〇分であるから我々の時計は經度緯度の關係を考慮の上約一時間半進ませて置いたら内地と略々同様の標準となるだらう。自分達の時刻に對する觀念は半ば無意識のものとなつて居るのであるから、さうした通念に適合する様に時計を調節した方が實際上便宜である。

天候が甚だしく不良であつた事は「國後の氣象に就いて」の部分参照されるとよく分るだらうが、快晴に恵まれたのは皮肉にも下山後的一天といふ有様で終始吹雪に悩まされた。國後島としても例年に比して今年の十二月は一體に天候が不順であつたとの事である。冬期天候の最も安定するのは二月である事は我々には寧ろ意外に

さへ感じられた。毎日々々の吹雪で新雪が深くて登降共に意外の努力と時間とを費した。我々はこの山の積雪量に就いては何等の信憑すべき情報を豫め得て居なかつたので、或ひはスキーは全然使へぬのではなからうかとさへ考へ、輪樑を使用すべき場合が多い事を豫想した。處が事實はこれに反して冬期はこの山はスキーを用ゐずして登行する事は殆ど不可能である。但し十二月の初旬から中旬に掛けては山麓ではまだ根雪となる程度の充分の積雪を見ないので、熊笹は露出し灌木も没せず、澤筋も平坦化されて居ないので寧ろ輪樑を用ゐるべき場合が少くない。我々も往路の第一キャンプまでの行程はスキーの使用に不便を感じた事が一再でなかつた。二、三月の候になつて熊笹がすっかり隠れ、且つ雪面が堅くなつて来ればスキーを自由に驅使する事も出来るし、ルートの選定にも大した拘束は受けないやうになる。

隊員の總数が九人にしか達しなかつた事は斯かる形式の下に爲された我々の登山に對しては甚だ手薄であつたと言へよう。一人の支障者が出来ても忽ち輸送能力に大きな變化を及ぼし、且隊自身の力を甚だ脆弱化するといつた工合で、幸に一同が健康に終始し得たので助かつたのであるが、餘力がない事は甚だ心細かつた。もう三人ばかりの隊員は是非とも欲しい處だつた。

隊員が食糧係とか、器具係とか、或ひは観測係とか分業的に仕事を受持つのはよいが、隊が二つも三つにも分れる場合にはその係を按配して隊を編成せねばならぬ事になつて、隊自身の登山能力といふものも第一義的に考へられなくなる場合が少くない。これは一面隊員の数の少い事にも基くのであるが、極端なる仕事の分業化は實際上寧ろ不便が多い。隊員の誰でもがどの仕事に對しても一通りはやつて行けるだけの準備があつて欲しい。それでないといふ特定の人数だけがひどく忙しく、他の人は何等それに對して爲す處がないといふ結果に終る虞れが

ある。殊に観測などといふ仕事はおいそれと出来る事ではないから、平素の小さい登山の時に修得して置くやう心掛ける事が肝要であらう。平常から手慣れて居るといふ事は観測などに限らず、他の器具の取扱ひにしても同様であつて、器具係が居なければこの天幕はどんな形をして居て、何人入れるか、またどういふ場所に張るのに適して居るか、袋の儘見ただけでは即座には分りにくいといふのでは困る。炊事道具其の他でもさうで誰でもその器具に就いての一々の癖は心得て居ないと實際には差支へが多い。

費用の關係からして専属の専門的の登山案内人を使用する事が出来なかつたが、そしてそれは我々に平素何でもないと思つて居る事が意外にも重要である事を教へて呉れたのであつたが、出来得べくんばかうした案内人を同行する事は隊の行動をより能率的なものとする點に於いて望ましい。例へば第二キャンプの選定の如き、その天幕の張り方の如き一日や二日の滞在には何方にしても大した事はないのであるが長期の滞在向つては仲々忽せに出来ないものであつて、専門の登山案内人であつたならば、雪に埋没するやうな可能性は半ば無意識的に避け得たであらうと思はれる。天幕の中を住心地よくする技術は我々は到底彼等に及ばないのである。

かうした案内人を天幕に残して置けば炊事萬端引受けて呉れるであらうから、一日に行動し得る時間も思ひ切り長くする事が出来よう。我々は日没後に天幕場に歸着してそれから炊事に取掛かるのでは甚だ不便が多くて、止むを得ず日没前にキャンプに歸着するやうに行動を切詰めねばならなかつたし、朝の出発も更もすれば遅れ勝ちであつた。

キャンプ間の通信連絡は我々の最も悩んだ處で、一番確實なのは人に依る連絡である。そしてその爲には専門的の登山案内人を用ゐるのが最も得策だと考へられる。限りある隊員を通信連絡にとられて登攀能力を殺がれる

のは著しい苦痛で、本来は隊員外の人間をこれに用ゐるのが望ましいのであるが、この爲にはある程度の荒天氣を冒かしてでも確實に連絡の任務を果し得るのでなくてはならないからどうしても案内人といふ處に落着く。

實際上斯かる案内人を内地から同伴する事は經濟上尠からぬ苦痛ではあるが、確にそれに値するだけの成果が得られるであらうから、隊員を一人減らして登山案内人を一人同行した方が得策であるとは現在の場合には適應し難くとも、海外への遠征のやうな場合には充分に考慮していい問題だと思ふ。

物資の輸送に關しても我々は充分の人手を得る事が出来なかつた。費用の關係で人夫の使用は孵化場乃至第一キャンプまで制限されて居たし、その延人員にも一定の制限があつたのだ。結局に於いて我々は延人員として二十五人の人夫と六頭の駄馬とを用ゐた事になる。人夫は常習的の登山人夫ではないといふものの精々三、四貫しか背負はないのには參つた。それで人夫を使つて居る場合にも我々の負擔量の方がすつと多いといふ奇現象を呈した。人夫として志願的に應募したのは村の青年團員及び在郷軍人分會員で、かうした好意的な人達に對しては單なる契約としての態度では接し得なかつた。初めは人夫賃として一定の額を支給する筈だつたのだが、後になつて服部書記から人夫賃は村役場、在郷軍人分會及び青年團で負擔するからとの申出に接して、半ば強制的に荷を背負つて貰つた人々に對しては益々相濟まぬ事になつたと思つた。我々はその代償として何等かの形式に於いて謝禮をしようとしたのに對し、頑として我々の望みは容れられなかつた。せめて酒でも飲んで貰はうとしたのだつたがそれさへ斥けられてしまつた。我々は村の人達の心からなる助力に對して何とも言はれぬ感謝の氣持で一杯になつたのだつた。

實際村の人達は我々に對し精神的にも實質的にもあらん限りの好意と助力とを盡して至らざる處がなかつた。

最初の中はさ程にも感じられなかったがかうした親切は日を経るに従つて益々強く身に沁みるやうになつて來て山から降りて乳谷路に歸つてからは寒ろ天氣が悪くて滞在が長かれかしと祈るのであつた。それから月日も経つた今日でも尚、島の人々に對する我々の氣持は一寸も變つて居ないのである。我々は山の中で世間の濁りに染まらない山人の純情に接する事は間々あるのであるが、本當の人間らしきといふものには今度始めて我々は觸れて來たやうな感じがする。かうした個人の主観に基く感じといふやうな事に就いては此處に冗々しく書く事を好まないであつたが、自分達だけの受けた印象とはいふもののこれをその儘に言葉に現はさすには取つて置けない様な氣がしたのであつた。

我々の小さい一遍だけの経験を以てしては今日「極地法」と呼び慣らされて居る處の登山形式に對する是非の批判は許されないであらうが、我々の経験の範圍内に於いては斯かる登山形式の適用とその運用には大いなる不便は感じられなかった。我々としては必ずしもかういふ方式を採らなければこの山が登れなかったであらうとは考へて居ないが、連日の悪天候にも拘らず何等の危惧を感じる事なしに略々豫定の計畫を遂行する事を得たのは、この方式を採用した御蔭ではあるまいかと思つて居る。

我々が九人を二隊に分ち、天幕地を三つにした事は人夫を使用しなかつた關係上殆ど手一杯の結果になつて、不時の場合に對する餘裕といふものは殆ど残されて居なかつたと言へるであらう。これは勿論以上述べて來たやうに種々の點から一日の行程といふものが極端な制限を蒙つた爲ではあるがそれにしても隊員數の不足は否まれなかつた。

慾を言へば各キャンプ各々三人乃至四人、根據地に二人といふ位の人數があつたらと思つた。この位の人數が

あれば登山人夫を使用しなくとも、充分に餘裕のある計畫が遂行出来たであらうと考へられる。我々の場合には誰もが登攀者でもあり輸送者であり、一般事務の管理者でありと言つた工合であつたが、これ以上規模を大きくした登山計畫に於いてはこの儘の送り方では尠からぬ支障を來たすに違ひない。かうなつて來れば實際の登攀に對しては全く無關係な、専心、計畫の運用にのみ没頭し切れる隊員が二人位は是非とも必要になつて來やう。斯かる形式の登山にあつては目的とする山の大小に拘らず、ある一定の人員が要るのではなからうかとさへ考へられるのであつて、ある程度以上の能力を揃へた隊員を選ばんが爲には、これと同じ水準にある登山者の数が實際に必要な人員の何倍かは手近かに得られねばならないのであるから、假令目指す山がそんなに大きくなくとも、また經濟上の難點が尠いとしても、さう易々と實行には移し難いやうに思はれる。

また他の點から考へて見ると、職業的の登山案内人をもかうした登山形式の許に訓練して更に大きな計畫に適應出来るやうにし向ける事も、そしてさうした場合に彼等を如何に使用すべきやに就いての經驗を得る事も必要な事には違ひないが我々はさうした方までは手が及ばなかつた。

國後の氣象に就いて

渡邊 兵力

私達の今度の旅を計畫するに當つて、最も氣にかゝつたのは島の天候の事だつた。冬季の千島の天候に就いて極めて漠然とした概念しか持ち合せて居なかつた自分達にとつて、此の問題が切實に自分達の當面の問題として持ち出されて來た時、如何にして正確な概念を得る事が出来るのかと言ふ事に第一の困難を感じた。と言ふのは

私達の目的地である國後島には測候所がない爲に、島の天候のデーターを得る事が出来ないからであつた。天候が登山其の物の技術的方面からして重要な因子であるばかりでなく、船に乗つて目的地に着くと言ふ事に關しても一層重要な事だつたから。實際天候の問題は、計畫の始めに於いて、計畫自身の運命を左右する程重大な事だつた。だが結局色々な話を聞いたり、各種のデーターを調べたりして、相當の知識と確信を得る事が出来た。次の問題は、幾分なりとも組織的に計畫を遂行しようと言ふ此の山行で氣象其の他の自然科学としての課題をどう取扱ふかと言ふ事だつた。準備中には是等の事に就いて皆が唯だ漠然とした考への下に、相當な結果を期待して居たのだが、いよ／＼と言ふ時になつて隊員の數も減り、費用も得られないので、結局、登山そのものに直接關係する程度を目的とする事に落着いてしまつた。そして實際に行つて來た結果は益々期待に満たないものであつた。

二

私達が冬季に於ける南千島の氣象状態を知る上に最も参考としたのは、根室と沙那の測候所のデーターだつた。そして國後島の氣象一般として、大體兩測候所の中間の状態を見てよからうと言ふ藤原博士のお話があり、その結果からして私達の計畫に相當の自信を得た。要するに南千島（千島全體と見ても良いと思ふが）に於いては十二月は天候の最も悪い時だつたが、學業の都合、又便船の都合でどうしても十二月に行くより他はなかつた。便船の都合と言ふのは、根室と國後を結ぶ船で定期のものが十二月の末で終つてしまふ事と、當時の私達の知識からして相當大きな船でなければ危険だと考へて居たからだつた。天候の方から云へば、一月に入つた方が遙に良好で、又山の條件も雪の多い方が一層有利と想像されて居たのであつたが。

千島一帯の冬季に於ける気圧配置の標準型は、所謂「西高東低」型であつて、オホーツク海上又は中部千島北東海上に低気圧があり、一方シベリヤ、バイカル地方にある高気圧が、次第に満洲南部、支那北部に廣がつてゆくもので、此の状態の時、日本一帯がそうであるが、気圧幅度の關係から北海道北東から千島にかけて、特に強い北西又は北の風が吹くのを常とする。實際我々が國後島に居た間も、北西風が強く毎日吹いて居た。風は強いけれども氣温は案外高い。十二月に根室、沙那兩測候所の結果を見ても、最低攝氏零下十度を越して居る日は数日に過ぎない。之は北海道中部より大分に暖い事を物語つて居る。此れは島である爲に海流の影響が大きい事に原因して居ると考へられる。此れに反して、温度は極めて高い。觀測所のデーターを持たないので具體的に示す事が出来ないけれど、我々が觀測した僅かの結果や、又色々の實際上の經驗からしてその事が裏書きされて居る。此の温度の高い事は此の地方の登山を云々する時に服裝、裝備の上で充分考慮に入れる必要があるのではないかと思ふ。

天氣は前にも言つた様に十二月が一番悪い。我々が國後に約三週間滞在して居る間、快晴の日は一日で、晴天が三、四日位（乳岩路附近）であつた事からも想像されるところ。

三

以上は南千島一般の天候状態であるが、次に國後島及びチャタスブリに就いて私達の経験した處を述べて見よう。

國後島は南北に長い島で中央に山脈があり、又東西兩海岸を洗ふ海流がその性質を異にするから、島内の各地方に依つて可成り氣象狀態が相違して居る事は言ふ迄もない。それで今から述べる事は、島の北海岸、チャタ

ヌブリ附近に就いてのみである事をお断りして置く。

私達の上陸した留夜別村の乳岩路と言ふ部落は、島の東海岸に在り、北西にチャ・チャ・ヌブリ並にル・半連峰がある。冬、冬の強い北西風は阻止されて比較的暖い處である。村の人々は根室より暖い時が多い、冬は北西風の時大體天氣が良く、東南風の時に天氣は悪くなると言つて居た。東南風に就いては土地の人から甚だ興味ある話を聞いた。東南風の事を土地の人々はヤマセ（山背・此れは氣象學上でも用ふる地方的な東南風の事、北海道で函館地方に見る）と言つて大變恐れて居た。それは冬季に時々北西の恒風が東南に變り、その時は猛烈なドカ雪が強い風を伴つて降る。そしてそれは大抵は長くて一晝夜で終り、今度は寒い北西の強風に激變するのださうだ。此の時は海は勿論時化け、又陸上を歩いて居る人がよくこれに遭つて大變に困難をするとの事だつた。現に島では二、三人の犠牲者があつたと云ふ話だ。此の風の吹く理由は、恐らく滿洲に出来た弱い低氣壓が日本海に入り急激に發達し、北上して北海道北部を通過し、オホーツク海に抜ける時太平洋の濕氣の多い空氣を吹きつける爲に、濕つぽいドカ雪が降るのではないかと想像される。低氣壓通過後は元の西高東低型になるから北西の寒風が吹き、湿度は急激に下ることになる。ヤマセのついでに附言して置くが、島の人々は北西風をアイと云ひ、北風をタモカゼと呼んで居る。乳岩路附近の十二月の平均温度は

平均氣温 零下二度前後

毎日最高ノ平均 一度前後

毎日最低ノ平均 零下五度前後

毎日の平均最低氣温は十一月より零度以下になる。一日平均氣温の零度以下になるのは十二月上旬より。雪の

量は十二月は未だそんなに多くない様だ。私達の上陸した日は丁度前日迄例外的に暖い快晴が続いたので海岸には雪はなく、村の道は東京郊外のぬかるみの様であつた。しかし三週間後村に下りて来た時は二、三尺の雪で、海岸の波打邊の岩は眞白に凍つて居て、海岸でスキーをする等本當に珍らしい氣分を味ふ事が出来た。然し木のない海岸線近くは雪の降る日は風を伴ふ事が多いので真冬でもさう深山は積らないらしい。

乳岩路の平均温度から推算してチャタスプリ(一八四五米)の頂上でも大體攝氏零下十五度位で二十度を越す事は少いものと想像して居たが、我々の想像は大して違つて居なかつた様だ。孵化場で -5°C 位、第一キャンプで -10°C 、第二キャンプで -13°C 、第三キャンプで -16°C 位であつた。第三キャンプで連日の猛吹雪で天幕の外に出る事が出来ず最も低温と思はれた二十三日、二十四日等に缺測があるのが残念であつた。併し -13°C 以下とはならなかつたと思ふ。併し乍ら温度は前述の通り極めて高く、孵化場で計つた結果で 80% 以上の日が多かつた。沙那の測候所の結果を見ると、 70% 豪の日は数日で他は $80-90\%$ の高湿である事からも想像される。實際この湿つばい事は我々の雪中露宿を相當不快にした。そして第二キャンプ以上では湿度はさう低いのではないが、強風と高湿との爲か、感ずる寒さは極めて大で、吹雪の時は瞬時も素手等出して居られなかつた。皮膚に着いた雪は蒸發せず、それが凍りつくので相當惱まされた。又、寫真器のフィルムターの腰が大部分故障を起した事からも湿度が高い事が判ると思ふ。此の様な多湿の時でも、矢張り毛皮の服裝が最も有效な事を知つた。温度と氣湿の相關々係と身體に感ずる冷寒との問題は今後に残された興味ある問題と思ふ。低湿でも乾燥した時は比較的凌ぎよいが多湿の場合は極めて不愉快なものであつた。白頭山の場合と我々の経験とは面白い對照をなすと思ふ。

左表に示す通り我々は極めて悪い氣象状態と闘はねばならなかつた。上陸の翌日から殆ど降雪を見ない日はな

く大體三週間のうち、前半が良好の方で、後半は連日の吹雪に悩まされた。併し乍らその結果積雪量が増してスキーの使用が可能となり、又最も懸念されて居た森林地帯の通過が容易となつた。雪質は相當細い粉雪であつた。併し森林限界（海拔約八〇〇米）以上ではウィンドクラストが出来てスキー滑走には滞り以外は餘り通したものではなかつた。

各地天候對照表（午前十時前後）

地點 日	根室	乳岩路	野地場	C I	C II	C III	沙那
9月10日	快晴	吹雪	吹雪				吹雪
11	同	曇雪	小雪				同
12	同	吹雪	雪				雪曇
13	曇	雪	小雪				雪曇
14	快晴	同	同				曇
15	同	小雪	イ雪アリ		小曇	吹雪	同
16	晴	晴	晴	晴	小曇	吹雪	同
17	快晴	雪	雪	晴	吹雪	同	同
18	同	晴	同	晴	同	雪	同
19	同	曇	同	吹雪	吹雪	吹雪	小曇
20	同	小雪	同	同	同	晴時曇	雪曇
21	晴	同	同	同	同	吹雪	同
22	快晴	同	同			同	同
23	同	雪	晴			同	小曇
24	同	晴	同			同	曇
25	同	同	小雪	晴		同	曇
26	同	曇	同	雪			雪曇
27	快晴	快晴	同	快晴			曇
28	晴	同	同	同		1日	同
雪	2日	11日	10日	6日	6日	8日	11日
曇	1日	4日					9日

冬の千島には霧はないと言はれるけれど、海上はともかく（それでも沙那邊りは降雪の時に往々ガスがかかるらしい。）山では視界が極度に狭くなる事がある。我々が第三キャンプで五日間吹雪かれた時は特に甚しく、五日

間を通じて中央尖塔を望見し得たのはほんの二、三分間であつた。その時など上空は素晴らしい青空で、山頂だけにガスがあり、吹寄いて居る様だつた。表を見ても麓の乳岩路で晴の日で山頂が吹雪の事があるのを知る事が出来る。

風は前述の通り多く北西風であつたが、九日は朝から猛烈な吹雪となつて、此の時沙那での観測に使ると最大風速は二八米に達して居る。丁度前日宗谷海峡附近にあつた低気圧が中部千島方面に発達しつゝ移動した結果と思はれる。此の低気圧は中部千島北東海上に停滞して居て十三日には勢力を失つた様であつた。それで十五日迄は比較的静穏な天気だつた。十五日にオホーツク海上に又低気圧が現はれ、次第に悪くなつていつた。十八日は非常に優勢な低気圧が北海道南東海上に現はれて、その為か猛烈な吹雪であつた。丁度第一隊は第三キャンプに第二隊は第二キャンプに滞在して居たが、一日で天幕は完全に埋没し、小型の第二キャンプが實に悲惨な日に遭つたのも丁度此の日であつた。雪質も比較的湿潤で、風速は毎秒約二〇米前後を示して居た。その低気圧はその後北上して北千島附近に二十四日頃迄で停止して居た様である。我々が二十日に第三キャンプに入つてから二十五日迄は連日山頂附近は吹雪で、八尺に近いアークティック・テントを越す積雪量であつた。雪は決して縦に降らず、常に横なぐりに吹きつけて居て埋没した天幕からの出入は極めて困難で、一日僅に一、二度大變な除雪作業の上でやつと外に出られる程度であつた。

以上今度の度々の経験した結果から十二月に於けるチャタネブタの氣象の概略を述べた。要するに我々の登つた時期は氣象的に云つて登山には最も不適な時で、又不幸にして今年は特に悪い様であつた。(沙那測候所の報告にも今年は例年になく悪天候であつたとある。)

最後に一言附け加へて置き度いのは此の程度の山行に使用する氣象観測器具は出来るだけその使用目的に（例へば携帶、運搬、取扱ひの簡單なる事等）適應する様に改良なり改作なりをしたものを持つて行く可きである事を痛感した事だつた。我々は普通の観測用のものをそのまゝ持つて行つたので運搬に又取扱ひに多大の不便を感じた。

裝備について

竹　　内　　進

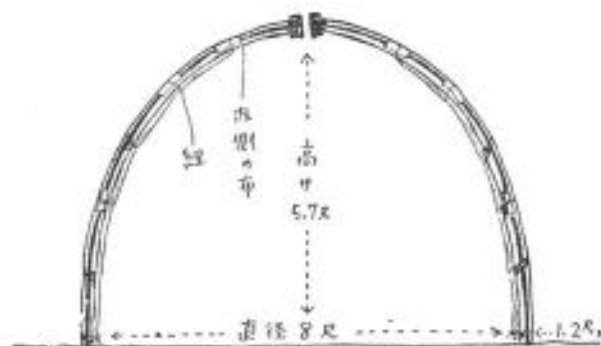
今回の旅行に於ける裝備に就いては先づ我々は從來使用してきた物で間に合はせて行かうと云ふ方針をとつた事實豫算も許さなかつたし、又國後附近の氣象について種々調べた結果、氣温も大して低く無く、降雪量もそれほど大いとは考へられ無かつたので此の方針に不安を感じる様な事は無かつた。唯天候が悪いといふ點が登攀の可能性に一抹の不安を投げ懸けてゐただけであつた。然し事實は豫期に反し國後特有の氣象「ヤマセ」に遭遇し、温度の大きいドカ雪に降り込められ、テントの問題でやゝ失敗をしたのである。（此の「ヤマセ」は全然我々が知らなかつた天氣で遂に覺をとつた譯である。）然し失敗は此のテントの問題以外には殆ど無く、割合巧いといつたと考へてゐる。

次に今度新しく経験した裝備品について二、三記して置かうと思ふ。

一、圓型テント

此は京大の白頭山遠征の時使用された物を参考とし我々で又いろ／＼考へて縫紉で作らせたものである。その構造と大きさは大體附圖の通りで我々は五人用の天幕のつもりで造つたのであつたが、五人で寝るのがかなり

窮窟で、それ以上は到底樂には寝られないと思つた。然し壁のまはりに九人が並んで坐ることは出来た。半徑が



第一圖

四尺なのに高さは中で立てる位に即ち五尺七寸としたので、此の天幕は半球形と云ふよりは寧ろ中央アフリカのマサ族の造る泥小舎の様な櫛弾型の趣を呈してゐる。直径と高さとは此の様な割合であることは、強い風に對して耐へうるであらうかと我々を心配さしたのであるが一四〇〇米餘の大口原の一端で張つた時には、深い雪に埋められてこんな恰好である事が反つて雪に押し狭められたり痛めつけられたりすることから救つて呉れた。難波を極めた出入口のことの外は、雪に埋もれてゐる點では何の心配もなく天幕は極めて丈夫であり安定してゐた。形も壊れず、まはりの幾らか凍つた雪の壁は大變良好な背のもたれとなり、樂な姿勢で居ることが出来た。(第一圖)

骨(フレーム)



切り口

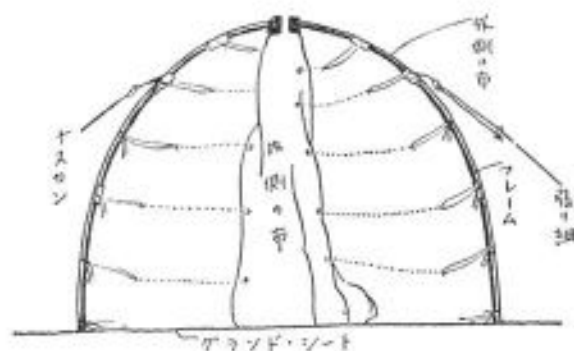


第二圖

天幕の骨組みは八本とし、それらは天幕の頂點で軸に穿たれた孔に差込まれる。各骨は三枚張りの竹製で三本轡ぎにした。此の竹は天幕をしまふ時にはひどい湯氣のために張り合せの糊がはがれて弱いへな／＼したものになつてゐた。(第二圖)

此の仕掛けのフレームでは心もとないので、強い風に耐へうる様に、十一本の綱が張れる様にしたのである。

頂點の軸に三個、八つの稜の丁度肩の邊りに夫々ナスカンを附けた。綱の一端を一尺餘りの杭の中央に結びつけて置き、杭を堅く踏んだ雪の中へ深く固定してから、綱は此のナスカンを通して引きしめる。この張り綱は天幕を極めて丈夫なものとした。杭は京大の使用した角様な長い木の棒の真中に綱を結びつけたものを使用した。それからグラウンドシートは幅一尺二寸のツバ型に外方に出てゐて、八角形の各角々にも亦杭を打ちこむ様になつてゐる。ツバ型の布は側の雪など載せ風のはらむのを防ぐ布である。杭をこの様に打つと、天幕は宛かも雪の上に釘付けにされ、縛りつけられたかの様である。雪に埋れる迄の二日間



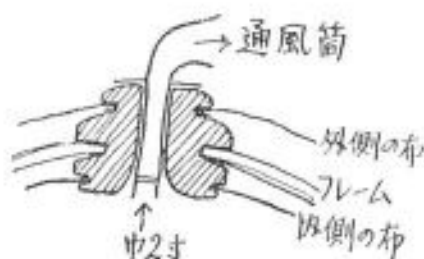
第三圖

のかんりの風にも十分耐へてゐたが、天幕をとりかたづける時になつて見ると上記二つの耐風の仕掛けは大層厄介な代物だつた。すべての綱は先づ切断して了つたが例のツバ型はみ出し布の爲には、深く堅い雪を掘り掘げねばならなかつた。

天幕は二重の布から成つて居る。外側は緑色の風を通さない布、グラウンドシートは此の布に縫ひつけてある。この布の内側で各稜に當るところに紐を附け、フレイムを縛りつける。内側の布は白金布半防水、之はハトメを通して輪になつた紐を次々にくぐらせてゆくやり方で、フレイムに張り付けてゆく。この爲には輪型の紐に細い草き紐をつけて之を内側の布のハトメに豫め通して置き、抜けない様に先端には金輪を結んだ。併し内側の布を張るために紐を用ひるのは餘り感心しないと思ふ。

内側の布は別に置き、スナップの如きもので簡単に止めるだけでいいと思ふ。此の天幕は架設作業少々簡単ではなく、張るだけに一時間近くを要した。(第三圖)

出入口は高さ三尺、三重になつてゐる。内側の布は、幅二尺五寸の矮形のカーテン式、兩側をスナップで留め、開いてゐる時は上へまくり上げて置く。外側の布は五寸の高さの圍布の上に、逆丁字形に切つた。閉めるのは三重にかさねて輪型の紐をくぐらせてゆく仕方である。更に此の外側に、やや上からかぶり布をつける。(第五圖)之だけで十分風は防ぎ得ると思ふ。併し今度の場合は出口は完全に雪の下なので、出入りの度毎に天幕の中は



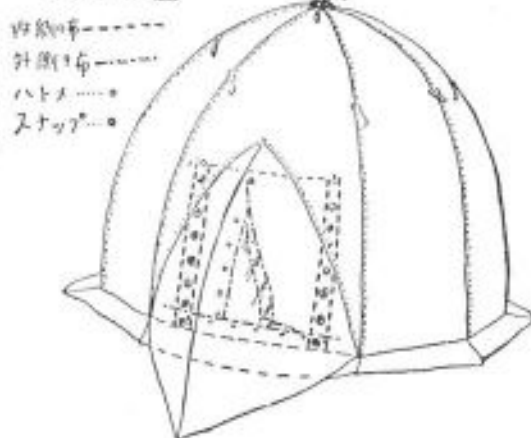
第四圖

雪まみれとなつた。此の様な状態では圍布とかぶり布とでは雪を防ぐことは出来なない、反つて逆効果をもつに至る。寧ろかなりの大きさの天幕であれば、かぶり布を發端させて、一種の玄関を形造り入口をはつきり二つに分けて天幕内に雪の

入るのを防ぐやり方が完全なものであらうと思はれる。

通氣筒。ブリヤ製の通氣筒を天幕の頂點に設置した。之は

入口。圖



第五圖

外から差込みその向きは内側から廻すのである。通風の調節の爲には別に開閉瓣を設けず適當に内部からタオルを押し込んで栓とした。恒風の時には此の様式の通気筒では開けば直ちに汚れた空気を逃すことが出来たが、風向きが少し變ると雪がつまつてしまつたり、又筒と木軸との間が凍りついて動かなくなつたり、融けた水滴がボタ／＼と垂れて來たりした。此の種の通気筒はかなりの熱を奪はれるとしても大して寒さを感じることなしに換氣しうるので必要なものだと思つた。たゞ上記の如き缺陷を補ふ爲の工夫が更に要すると思はれるのである。筒の大きさはもつと小さくて十分だと考へる。(第四回)

窓なし、セルロイド縫ひ込みの窓を附けるつもりで、さて場所を何處にしやうかと色々考へた揚句、窓をあけなくなつてしまつたのだが、何と云つても窓は必要で、出入りの不自由な天幕の中で外の見えない事は大変苦痛であつた。

カタチルメモーターの測定によつても此の天幕は可なりの保湿度を有する様であつた。併し、融けた雪、炊事の度の水蒸気などのために天幕の内面はしつとりと濡り、半防水の金布の内張りはぐつちりと濡れて、屢々つらゝとなつたりボタ／＼と水滴が垂れることさへあつた。

雪、風、寒さに耐へるものとして此の様式の天幕は優れたものと思ふが、次の諸點は更に改良と工夫とを要するであらう。

フレームを破損し難く且つ軽くする爲に材料、形を考へること。

入口の改良、通気筒の恰好、窓、緑色の布地は中が少し暗すぎる等。

此の天幕は總重量三貫五百、外側の布三二碼五分、内側の布三〇碼五分、グラウンドシート九碼五分を要した

ことを最後に書きそへて置く。

二、カボック敷物

此れは二尺、四尺の大きさのものを一人一個の割で割當てた。保温の點は非常に優秀ではあつたが外側の防水地が不完全な爲かカボック自体、吸湿性が強い爲か、敷物の内部に水が溜り、不愉快な點が無いではなかつた。國後の如き湿度の高い處で使用するには、重量の點も餘り變らないコルク木のもので良いのでは無いだろうか。

三、寝袋

豫備として絹綿入りのものを持つて行つたが結局殆ど使ふ機會もなく残念であつた。

四、燈火

テント内の燈火は普通使つてゐる蠟燭使用のランタンの他に、マントル付ガソリンランプを使用した。此れは光度も強く今度の裝備の中快適なもの一つであつた。携行用電燈はナショナル型のものとヘッドライトを使用した。此れは電池と電球が離れてゐてコードで連絡されてゐるものであるが、電池の極とコードの接觸が悪く歩行中絶えず明滅したりして殆ど用を爲さなかつた。然し此の接觸の部分の改良したら有用であらう。

五、通信用具

今度の行に於ける如き登攀形式では當然各キャンプ間（殊に根據地との）の通信連絡といふ問題が生じてくる。いろ／＼考へたけれど元々専門知識の無い我々には無電通信は到底不可能である。結局大して信頼は置け無かつたが、試験的に花火を使用してゐる事にした。結果はやはり無駄ではあつたが、第三キャンプでつけた花火の光が偶然乳岩路の村人に見出されたのはせめてもの慰めとはなつた。一度音による信號即ち爆竹の類とか、手動サ

イレシとかを使つて見たいと思つてゐる。然し雪や氷だけでは複雑な通信は到底望めないから、その點やはり短波長より他に無いであらう。此の他に指導機として赤い旗を使用した。

六、個人裝備

此れは裝備全般に對する方針に従ひ、各人從來積雪期の登山で使用してゐた物を主として使つた。グレシフル式防風衣、毛皮の上衣はさして必要とも考へ無かつた爲各人の選擇に任せた。唯毛皮のオーバーシューズと此の代用に使ふ防水地のものとは共同裝備として作つた。代用の防水地のは下のキャンプ等で相當役立つ。毛皮のものは優秀であつたが詰らない事ではあるけれど氣付いた點は底に海豹皮を張つた爲、丁度その毛並が爪先から踵の方向を向いてゐてテント外の斜面を歩く時、下り斜面で滑りやすく（事實皆屢々轉倒をしてゐる）苦勞をした事である。何か他の毛皮かそれとも毛並が此れと逆に向く様につける工夫をすればいいと思ふ。

その他天氣豫報を聞いたり娛樂用として持つて行つたラヂオの他に氣象觀測器具を一通り携帯した。

以上で今度の裝備について特に氣付いた事、經驗した事を大體述べたのであるが此の裝備の輸送に對するバックパッキングは行李、フトン袋、木箱等を使用し、大體豫定された行動表により各キャンプ毎に直ぐ運搬し配置できる様に分けて包装し、各包毎に記號をうつて解り易くした。

裝備表

A、共同裝備

一、テント

冬のチヤチヤスブリ 渡邊

丸型テント

屋根型テント(六人用)

屋根型輕量テント

四人用

三人用

ウェルトザツケ

二、寝具

羽根入寝袋(各個人員用)

絹綿入寝袋(預備)

カボック敷物

三、料理道具

オプテイクムス石油炭爐

コフヘル

鍋

一升五合用

一升用

五合用

薬 罐

飯 盒

其他杓子、タリシ、石鹼等

四、灯火及燃料

ガソリンランブ

ヘッドライト

預備電池及電球

ランターン

蠟 燭

石 油

其他、アルコール、メタ、マツチ等

五、特殊用具及び雜品

鋸

鉋

斧

シャベル

ジュラルミン製

軍隊用

スキー修理具

鋤、釘、針金用具及び麻縄

裁縫道具

靴油、ワセリン、補綴靴紐

アルミス

八

一個

十一個

五個

十ガロン

三個

三個

三個

六個

四個

二個

一組

一式

十一個

懐 爐

十個

風力計

懐 爐 灰

百個

タリノメーター

通信用花火

磁 石

指導標用赤旗

ブリズム双眼鏡

ラジオ受信機(真空管五球)

八、藥品類及び十六ミリ攝影機

六、登山用具

B、個人裝備

ザイル

三本

防風衣

スキー及びスキー杖(増備)

一組

手袋(毛皮及び毛絨)

スキー鎌具(増備)

十二個

スキー、杖、シール

ワカンソク

十一個

靴

オリーブオイル

十一個

ビッケル、アイゼン

毛皮製

十一個

スキー帽

防水地製

四十個

眼 鏡

ハンマー、ハーケン、カラビナー

ルマタケツク

七、氣象観測器具

毛絨製マスク

携帯用寒暖計

靴下、ゲートル

最高最低寒暖計

携帯電燈

自記氣壓計

観測帳

携帯用晴雨計

食 器

温度計

冬のチマチマエブリ 渡邊

食糧に就いて

伊藤新一

食糧に就いては、遠征自體の規模から、又その他の條件からして特に新しい試みもなし得ず、従つて之迄に我國で行はれた遠征に於ける経験に新たに付け加ふ可きものはあまり持つて居ない。従來の内地に於ける登山食糧の種目の上に若干の新しいもの——乾燥食料類等——を加へ、それを遠征形式の登山に適應するやうに編成したのにすぎない。それ故特に取りたてて書くこともないが、食糧編成の大要及び若干の種目、其の他二、三の點について簡単に述べたいと思ふ。

我々の豫定は驛化場を根據地とし、第二キャンプ迄設けることになつて居たから、食糧も先づ驛化場、第一キャンプ及び第二キャンプの三種に大別した。(併し實際は、第三キャンプ迄設けられたので、第一キャンプ用を第一、第二キャンプに、第二キャンプ用を第三キャンプに充てた)。驛化場に於ける食糧は小屋もあり、水もあるので、内地の山小屋生活の食糧と全く同様で、則に特記すべき點はない。朝晩は米食とし、晝はパン食とした。第一キャンプは朝晩は原則として米食、晝はパン食とした。副食物は、雪をとかさなければ水が得られないことを豫想して——事實水は出て居なかつた——成る可く調理に簡單な物を撰んだ。朝は、乾燥味噌と乾燥野菜(後述)による味噌汁と佃煮類、晩は乾燥野菜と肉類(コンビーフ、ベーコン、又は鮭鱈)によるスープ。之等は材料を其の儘湯になげこみ十分盛り炊けばよいので、手数もかゝらず雪中露營の食糧として極めて好適であつた。晝食について云へば、主食は黒パン、カラーチ、ミルクパンの外に肉入パン(後述)を主食とし副食物としてはバター、チーズのほか乾燥肉等も用ゐる少量の菓子類もこれに附加へられた。晝食の辨當については何時も頭を悩ますので

あるが、今度は之について隊員よりあまり不平を聞かなかった。之は肉入パンが案外効果的であつたのと鹽味の黒パン、肉入パンと甘味のカラーチ、ミルクパンとを適當に取合せて用ゐたためである。

第二キャンプ（實際は第三キャンプ）は火口原に設けられる事となつて居て、物資の運搬が困難であり、キャンプの生活自體も辛い事が豫想されたので手のかゝる米は全然廢して全部パン食にした。キャンプに於いては炊事はすべて石油ストーヴによつて居たから、石油の缺乏した場合には米食では如何にも出来ない。副食物は朝晩はスープ（乾燥野菜とベーコン、ハム）其の他は第一キャンプの糞食に準じて居るが、肉類も比較的豊富にした。次に食糧中の二、三のものに就いて述べて見度い。

乾燥野菜 之は白頭山の遠征に就いても登山食糧として極めて秀れて居ることが立證されたが、我々も之を第一キャンプ以上に於いて使用してみた結果、長期の山旅では不可欠のものと思はれた。従来、冬季の登山に在つては殊に野菜類の缺乏に悩まれたものであつたが、今度は乾燥野菜の爲、そんな感じを全然持たずに済んだ。我々が使つたのは、低温乾燥でその種類はほうれん草、小松菜、白菜、人蔘、じやがいもであつて、之を混ぜて七〇—七五グラムづつを一つの袋に入れ、全部で六証餘り持つて行つた。豫定では一袋を二人の一食分として置いたが、實際には僅に四、五人分はあつた。スープにするならば十人分位は出来た。重量は生野菜の十分の一以下であり、煮えるのも生野菜よりずつと早い。ほうれん草、小松菜、白菜は殆ど元と同様になるが、馬鈴薯、人蔘は稍々これに劣る。更に持久の點、調理の簡單である點、生野菜に比し問題にならぬほど優れて居た。

乾燥味噌 普通の所謂携帯味噌は中に入つてゐる實の爲、一種のくさみを持つて居て常用すれば鼻につくので實はなしにして、五人分づゝ（一人分三〇グラム）乾燥にして持つて行つたが味は極めて良く生味噌と全然變ら

なかつた。

乾燥肉、大和煮の味のついた肉を乾燥せしめたもので、軽食で味もかなりよく、好適な食糧といふ事が出来よう。乾燥食糧としては、大體以上の如きもので、結果はいづれも大變良好であつた。その他、肉入パンは従來の軍隊用の堅韌麩に乾燥肉の細く切つたのを混入したもので大變美味しく、又喰べやすいので非常に好評であつた。鹽味を帯びて居るので、甘味のミルクパンのやうに飽きが來ることがなかつた。黒パンは、ジャーマンペーカリー製であつたが、固いのでやゝ喰べにくひ嫌ひがあつたが、少量で足りる點、比較的長きに亘つても變質せぬ點、飽きない點などすぐれて居た。

次に參考の爲一人一日分の食糧消費量の比較的標準的な實例を擧げてみる。

辨化場（十二月十日の例、全隊員一人當平均）

朝。米（約一・三合）、白魚佃煮（三〇—三五瓦）、味噌汁。

晝。ミルクパン（二枚）、肉入パン（二枚）、カレーチ（半斤）、バター（五分）、チーズ（五分）、ジャム（約四

餅）、水砂糖（約三〇匁）、ココロレート（若干）。

晩。米（一・七合）、コンビーフ・キャベツ（コンビーフ片、キャベツ若干）、鹽、醬油、紅菜。

第二キャンプ（十二月十六日の例、第一隊一人當平均）

朝。米（一・二合）、乾燥味噌（二〇瓦）、乾燥（長袋約一〇瓦）、佃煮（三〇—三五瓦）、焼豚（若干）。

晝。黒パン（半斤）、肉入パン（二枚）、ミルクパン（二枚）、バター（五分）、チーズ（五分）、ジャム（五分）、乾肉（二〇匁）。

ソーセージ（一本）、水砂糖（二〇匁）、あめ（若干）。

晩。（十二月十五日）。米（一・二合）、スープ（ペーコン約一五瓦）、乾菜（一五瓦）、焼豚（若干）。

右は何れも約七―八時間動いた日で丁度適量である。併し糞食はもしアルバイトがもつと長びけば、少し不足を訴へたかもしれない。右の實例は標準的なもので大體全般を察知出来ると思ふ。

第三キャンプ（十二月十八日、第一隊一人平均）

朝。黒パン（ $\frac{1}{2}$ 斤）、オリーブ（若干）、ベースト（ $\frac{1}{2}$ 斤）、スープ（マギー牛乳、乾菜一五瓦、ハム一〇瓦強、チーズ（若

干）、バター（ $\frac{1}{2}$ ポンド）、ココア。

晝。ミルクパン（四枚）、バター（ $\frac{1}{2}$ ポンド）。

晩。ナン。

之は滞在の日の標準型であつて、「喰ひ延し」の場合でもつと少い事もあつた。

尙、砂糖一日一人當の消費量は、全行程を通じて約一〇〇瓦であつた。豫定は第二キャンプ二〇〇瓦、解化場、第一キャンプを一五〇瓦としたが、實際の消費量が豫定より著しく少いのは、第一キャンプ以上、特に第二、第三キャンプに於いて燃料の節約等のため紅茶等を飲むのを極度に少くしたこと、輸送等の關係より砂糖は缺乏したれば補充する事にして節約して済めたこと等によるのであつて、矢張り一五〇瓦位は必要なのではないかと思はれる。

最後に食料の輸送及び包装について一言したい。包装は山に於いて食糧を圓滑に使用するに一考を要する問題だと思ふ。我々は始め一日を單位とし、即ち、一隊一日に消費する食糧一切を一つの袋に包装する方法を取りたいと考へて居た。此の方法は包装するのが非常に面倒で手数がかるけれども、實地に當り一つの袋を開けば立ち所に一隊に取つて必要な食料がそろふわけで、あれこれの袋から必要なものを捜し出す必要もなく、大變便利

であるからである。我々は此の包装の方法を昨年春の南アルプス縦走及び夏のカクネ合宿に於いて用ゐてみたがその結果は甚だ良好であつた。併し今度の遠征に於いては、食糧の發送は數度に互つて爲されたので解化場で再包装しなければならなくなつたので、種類別に包装する方法をとつた。袋の色によつてキャンプ別に區別し、各キャンプに於ける食糧は、主食は主食、副食物は副食物、といふ工合に種類別に包装して袋に番號を打ち、ノートとの對照によつて内容が判るやうにした。使用されるものなるべく同じ各隊員が食糧の状態を知り食糧係無しに食糧を自主的に處理出来るやうにしたいと考へて、食糧の各キャンプへの配置状態及び使用方法を表示した表を作成し之を各隊員に配布し之によつて當番を交替に決めて食糧の管理に當らしめようとした。然し之は解化場のごとく充分食糧の整頓されてゐる所では工合よく行つたが、第一キャンプ以上に於いては不成功に終り、實際は食糧係が専ら事に當らざるを得なかつた。要するに意圖することは實現出来なかつたが、登攀隊員でない専任の食糧係が設けられて居ない場合には努力を均等化する意味に於いて此の事は一應考へられても良いのではないかと思はれる。

○食糧リスト（品目及び總量。一六〇日人分）

（一）主 食

米五斗三升。黒パン三六斤。カラーチ三一斤。ミルタパン三三〇枚。肉入パン六四〇枚。オートツ四條。乾うどん六把。

（二）副食物ノ一

海苔九。是はうまい三把。ごま鹽三把。つくだに類一五〇瓦入一九箱。燒海苔二箱。わかめ二把。ゆば二把。乾瓢三把。鉄三把。水豆腐三袋。しひたけ一袋。

（三）副食物ノ二

ロシビーク 一〇罐。鮭罐六。乾肉五五袋（一袋二〇匁）。ハム四五〇瓦。ソーセージ二〇本。ベーコン一八四〇瓦。サーデ
イン六罐。焼豚六〇〇匁。鶏丸焼三〇羽。トマトジュース二罐。

(四) パン副食物

バター一四・五ポンド。チーズ九ポンド。ジャム二六罐。ペースト一六罐。

(五) 野菜類

生野菜（キャベツ、玉ねぎ、ジャガイモ）、乾燥野菜約六〇〇（瓦）漬物。

(六) 調味料

鹽三瓶。胡椒三瓶。味の素三瓶。ケチャップ三瓶。乾燥醤油一〇瓶。醤油六合。料理用バター二・五ポンド。花ガツラ二袋。
カレー大。小一罐。ハヤシの素小三ケ。マギー二〇ケ。固形味噌一〇本。乾燥味噌五罐。軍隊用携帯味噌二〇袋。

(七) 飲料、嗜好品及び砂糖

紅茶一・二五ポンド。チューブ入りコーヒー五本。ココア一・二五ポンド。ミルク大六小五罐。日本茶一斤。酒類（ジン一升。
ウイスキー一升。ウオッカ一本。ラム一本。ブランデー一本。理研ウイスキー角瓶一本。永砂糖一三〇〇匁。乾果（アップル
コクト、プルーン）一六〇〇瓦。レーズス二箱。チョコレート二〇枚。レモン一〇ケ。駄菓子一三〇〇匁。砂糖餅五枚。砂糖
二五斤。

雪のホロンバイルより大興安嶺へ

京都帝大旅行部

- 一、根鉢地海拉爾へ
- 二、津郭羅津部落へ
- 三、サンドル部落へ
- 四、大興安嶺
- 五、歸路

隊員

經濟學部學生	隊長	加藤 泰安
經濟學部學生	會計	岩橋清次郎
理學部學生	交渉	兒島勘次
醫學部學生	衛生	水川求禮雄
理學部學生	食糧	郡場正之
理學部學生	器具	吉井良三
工學部學生	記録	磯村克次

信州美和登山案内人組合 竹澤藤太郎

地圖

百萬分ノ一

滿洲國

五十萬分ノ一（滿洲五十萬分一圖）

海拉爾、サッパ、博克圖、札賚特

一、根據地海拉爾へ

十二月十四日（昭和十年）先發隊（加藤、見島）大阪發、途中新京にて各關係方面に挨拶、諸般の打合せをなし、十八

日、海拉爾着、關係諸方面と交渉打合せをなし、二十三日新京に歸る。

二十五日 本隊京都發、二十七日先發隊と新京にて合隊、二十八日各關係方面に挨拶をなし新京發。

三十日 海拉爾着。

三十一日 滞在打合せと出發準備。

一月一日（昭和十一年）滞在、準備完了。

先發隊が十二月十四日に出發してから十一日間といふもの、それは丸で天地動亂といった慌しさであつた。電報が塞波と航空郵便を乗り越えてやつて来るし、こちらからも飛んでゆく。それでゐて目指す北の國は何だか涯が知れない。併し發つ一兩日前にやつとのこと約一ヶ月分に近い食糧品と裝備品が整へられ、次々と白頭山に用ひたと同じビール箱にボックスングされ、皆んな附添うて驛迄積込まれてみると、俄にさつぱりと好い氣持になつた。十二月二十五日の夜九時二十四分、松井總長、木原部長を始め御世話になつた諸先生、諸先輩や岳友達の顔が歡送の聲と共に揺り動いた。汽車が靜かに滑り出すと、長いブラットフォームに待伏せでもしてゐた様に汽車

について小走り乍ら先輩が現れて激励の言葉が叫ばれた時は思はず涙が出て喉が詰まった。そんな有難い嬉しさの中に没れることは滅多とないものだらう。汽車が大坂を過ぎると荷物棚からそろ／＼色々と饅頭のうまいものが卸されて仲々ねられない。

起きてみるともう下関に近い。雲の気などひとつもない乾上った山野の景色が曉の外に見えた。下関では先きに送った荷物を連絡船に積込む等の面倒はない、釜山迄行つてゐる筈である。それでも各自ルックの他に一つづつ位の持ち物があつた、節約、節約でルックをみんな驛前の食堂に持ちこんだら大いにいやがられた。それも一同尋常な恰好をしてゐないのだから仕方がない。朝食を攝つて賑かな通りを端まで歩いて直き又驛へ舞戻つた。名残りの煙草を買ひ求めたりして船に乗り込む。どんよりと陰つた寒い空であつた。船中では皆んな手分けして各方面へ禮状を書く。冬の日脚は殊更に短い。チカ／＼と荷の灯が光つて海面に映る頃、釜山の港に入つた。始め京都驛で依頼した荷物はこゝで停つてゐることになつてゐる。急行「ひかり」への乗換時間は餘り餘裕がない。こゝで荷物が一列車でも積み重ねられたらことである。船から降りると早速二手に別れて一つは携行したルックサックその他を逸早く列車に積み込むボーターを急ぎ立て、坐席を占領した。今一つは驛手の判らない長いフォームで驛長さんを探すのに一苦勞する。やつとのことで助役さんにお目にかゝれた。それから自分達の安東までの切符を見せて衷情を訴へた。助役さんの好意には我々は大いに感激した。早速自分達も山と積み重ねた荷物を手傳はんばかりにして積みこんで貰ふことになつた。總計五十六個、一一四〇疋の荷物がやつとわれ／＼と同車出来たといふ歡びは腹のすいた夕食を齎して食堂車まで持ち越した。それから驛で買求めた京城の風景寫真や鼓生の繪葉書を第二信として故郷に送つたりした。斯くして夜の朝鮮を南から北へ汽車が走つた。

二十七日、正午前鴨綠江をゴトンゴトンと渡ると安東へ着く。街並や歩く人々の姿が一變して滿洲色に染りかへられる。こゝでも停車時間が三十分よりない。それに豫想してゐたものとバスはとう／＼呉れなかつたので悲觀したその上に、厳しい税關検査で全部荷物をフォームへ降ろさねばならないし、中味を開けられたりして愚圖々々してゐると元通りに積みこめないと驚かされる。しかし配屬將校の藤堂先生から預いて置いた名刺が大變役に立つた。興安嶺などへ何をしにゆくのですかと到るところで問はれたのは弱つて了ふ。滿洲國內へ入ると不規則な土造や石造の家屋が次々と現れて来る。やがて右手に當つて内地では見られぬ岩山が長い脈となつて見えて来る。安奉線では蓋し見ものゝ山である。連山關への道で龍岡山嶺の餘波を乗り切ると遼河を抱く平野へと汽車がすゝむ。白い雲を被つたそれら緩捷の山々を車窓から眺めて寫真でみた興安山中にゐる思ひがされた。夕刻奉天驛につく。滿鐵のカメラ班の参加は中止となつたこと、その他の事を鐵路總局の方が話しに來られた。自分の列車にはオリンピックへゆく水上選手が乗つてゐて態々フォームへ降りて見に行つたりする。段々新京へ近づいて来る。先發隊へ新京着の時刻とか、打合せの電報をうつたり、急いでそのまゝ持つて來たアスベストスを靴底に合はして切つたり、仲々忙しくなつて来る。九時半いよいよ暢氣な汽車旅行が終つて新京へ着く。先發の隊員、それに思ひがけず細野先輩が迎へに來て呉れてゐる。荷物は一時驛預けとして直ぐさま旅舎に向ふ。ちゝかむ鼻を索くして白い呼吸をブー／＼吐き乍ら珍らしい馬車の中にゆられて勢ひよく街の中に吸はれて行つた。

二十八日、一同關東軍司令部を訪問する。林參謀に親しく御目にかゝつて種々と注意を受け、更に兵用地誌班の方からホロンバイル地方、興安山中の地誌を承る。別室で軍用の防寒外套、帽子、フエルト長靴を夫々借用する。スキー靴は此の日からルックサックの奥深くへ隠されて仕舞ひ、新調のオーバーシューズとスキーをはく日ま

で隠居することゝなつた。夜、細野先輩の歡送宴に招かれ、十一時にはいよいよ新京を出發する。

豫定通りに二十九日朝早くに哈爾濱へ着いた。新京迄来ると、あれも忘れた、之も失念したといふのが續出した。夜行列車の中で全隊員が舉つて落着けたので大分遅く迄からの買物などの打合せをした。朝になるとその疲れも忘れて朝食を済まし、すぐさま夫々勝手のおからない買物に出かけた。哈爾濱からは同じ滿洲國鐵でも線がかはつて乗換へになるので又荷物の積換へに一苦勞をする。二等車の交渉も満員の様子だし今しがた買ったばかりのマップの包みやたはし等をゴク／＼と食堂車へ持ちこんで待機してゐたら、新聞の紙片や紐片が汚くて迷惑だから何處かへ持つて行つて呉れと苦情を持ちこまれる。それでもアイブムソウリー、アイブムソウリーといつてすましてゐる。が矢張り乗心地が一變して國際列車の感じが一入増して来る。それに列車、といふよりも機關車が急に大陸性を帯びて來て實に悠長極まる。どちらを向いても雪の曠野の真中に小さい驛がボンとある。少しましな驛になると鐵道省式の建物と違つて清酒な感じのバラ色の木柵などが雪除けをしたファームの外側に見える。給水塔が裸になつた樹の枝の後ろに高く見えたりする。露西亞ももちつと暖かゝつたらどんなにのどかな所となるだらうと思つたりする。昂々溪へはもう夜に入つてから着いた。食堂車が故障を起して品不足なので、構内の賣店を探し當てゝパン、ソーセージ、ゆで卵等しこたま買ひこむ。入國以來始めてウエツカをなめてみる。札蘭屯はも一つ夜更けになつてつく。嫩江の沃野から離れていよいよ大興安嶺山脈へ向ふのである。博克圖へ着いたのは七時。データを見ると北滿の中では博克圖に至つて始めて年平均氣温が零度以下の範圍の中になる。標高も六九〇米といはれてゐる。先づ北嶺では最高地點である。こゝから軌道はループして興安驛になる。そして興安嶺の頂點を突き抜けたことになる。窓の二重硝子が内側同士で陰つて了つてゐるので眺望は頗る

不透明である。話好きな露西亞人でも乗つて居ればいいものゝ、之では何を以てか旅情を慰めんやである。之では冬のさ中のシベリヤ横断の旅もさぞ苦しいことだらう。唯自分達は少しは暖い土地に生れた他國者だけに來る前に讀んだチェーホフのシベリヤの旅等は一寸遠い昔の夢の様に思はれた。唯もう少し陽氣の向いてから落葉松などの若緑の新芽が吹き出すところそこらをゆつくりほつきたいものである。それで時折機關車が云ふことをきかなくなつて雪の野中に黒い圓帽の腰を降ろした時などは之を嫌ひとばかり線路の上に降り立つてみる。一寸見られない氷塵が大氣一面に浮遊してゐる。その爲ではないが、太陽の廻りには綺麗な光りの環が出来て少し壯觀である。こゝでは併し太陽は決して温いものとして眼に映らない。光だけが發せられて熱は凍りついて仕舞つてゐる様である。その午後零時二十分になつて今か今かと待たけた海拉爾驛についた。豫定よりは随分遅れてゐる。冬ではこんな延着は珍らしくなくまだよい方ださうである。元々北鐵の機關車が上等でないのですと、詳しく説明して呉れた人があつた。

海拉爾站長の葛畑さんには今度はほんとうに大變厄介になつた。厄介のかけ始めとして荷物は全部驛へ預けられ、大分乗り馴れた馬車を呼んで行列をつくつて西三道街の旅舎へ向つた。轍から僅かに立つ砂埃を眺めて之が有名な、夏になると埃と蠅の都と化するのかと幅の廣い道路を見廻した。海拉爾は地高にして六〇〇米、南樟太の豐原と同緯度である。一萬五千といはれる市の人口の中、邦人は僅か一千餘だといふことである。之で日滿兩國の兵隊さんが通りにも見えなかつたら仲々うす氣味の悪い『外國の街』である。ホテルに着いて早速、騎兵集團司令部を訪ねて藤原參謀にお目にかゝる。それから中山閣下邸及び寺田中佐邸へ挨拶に赴く。汽車の中が少々乾燥しすぎてゐたためか、氣候馴化の不充分の爲か少し風邪氣味のものが一、二出る。

三十一日、手分けして一部は特務機關、警察署、領事館等に挨拶にゆく。それから碎氷運搬用の麻袋とか簡單なストーブや燭突等の買物にゆく。一部は驛へ荷物の整理にゆく。午後笠井中將閣下に挨拶の爲訪問、夜閣下の御招宴に全隊員出席して大いに北進日本に感激を催した。當夜、寺田中佐の御世話による蒙古少年隊の二人が旅舎へやつて來て泊る。これからの通譯（土人及人夫に對する）兼道案内として隊員一同と顔合せをする。二人とも若いからほんとに『少年』の様な氣がする。一人は須田明と云つてオロート人、今一人は千田良郎といつてブリート人である。千田はブリートだから露語の會話が出来る。漢語は二人とも勿論のことだが日本名もちゃんとついてゐるし日本語も仲々うまい。

明くれば昭和十一年一月一日、どうあつても年内に出發といふ豫定、といふよりもこちらの腹が、連絡通信上の心配（傳書場は猛禽がゐて駄目だといふ）とか、馬糞十五泰計三十頭の馬糧供給の心配とか、白温泉路に沿ふてはこの嚴冬に蒙古包等がこちらの註文通りに駐在して呉れてゐない）それに空々漠々として行方定めぬ白温泉路も、夏ならば『うちも行きましたよ、われも行きましたよ』と満蒙、露人でも暮らしのいい方の人達は家族を連れ一家を擧げて、この蒙古の秘泉であり、衆泉である温泉を、憧れ求めて行くといふ。それら湯治客、避暑客達の爲と毎日温泉通ひの乗合自動車が出るといふ。例のことはない阿蘇登山の遊覽バスみたいであるが、それも冬故に聊か話が異つて来る。即ちハンダガヤ路の全然人跡稀なること等の爲に難關に行詰つた形であつた。併し中止は考へられない事であつた。愈々今日一日中に準備を完了し明日を以て出發と決められた。荷並には流石日滿兩國旗がハタ／＼と翻つて正月氣分を出してゐる。今日も手分けして一部は領事館訪問、一部は驛で最後のパッキングのやり直しをする。之で器具、食糧共に日程に照應して組直しを完了したわけである。それから騎兵

集團司令部に集められた露人の棧は一先づ中止となつた。白溫泉^{ハクオンセン}行きをどうしても承知しないのであつた。勇氣とか無謀とかのないからであつて惜しいことであつた。この代りに滿人の馬橋が整へられることになつた。夜笠井、中山兩閣下及寺田中佐邸へ年賀を兼ねいよ／＼出發の挨拶に参上した。當時ではその夜が思ひ出の海拉爾の町の最後の夜であつた。

二、渾郭羅津部落へ

一月二日 晴、海拉爾を二頭立馬橋十五路、隊員八名、人夫十五名、蒙古少年隊二名、計二十五名にて出發、南屯を経て伊敏川^{イミンカハ}畔の露營地着。(行程約一四キロ)

三日 晴後小雪、ホルシニウ丘三角點の西側を通過、伊敏川の露營地着。(行程約一五キロ)

四日 晴、伊敏川沿ひにタフカラガルスン部落着、包に分宿す。(行程約二三キロ半)

五日 晴後曇、小雪、伊敏川沿ひにオロト人の固定家室まで。(行程約一七キロ半)

六日 曇小雪、ボクト部落着。(行程約七キロ半)

七日 晴、滞在二名偵察へ。

八日 晴、ハンゴルジンへの途中の露人小屋へ。(行程約一九キロ半)

九日 曇小雪、十一時十分ハンゴルジン海校公司着。(行程約七キロ)

一月二日、出發の日に相應しく晴々として夜が明けて行つた。我々の最初の計畫は一路白溫泉^{ハクオンセン}に約十日の日程を以て向ひ、次にこゝを根據地として編成換へをし、哈爾哈河を溯行、北に向つて大興安嶺山脈中の最高峯に登頂、之が約二週間、登頂後は温泉から、今は七道溝まで來てゐる洗索鐵道を利用して新京へ歸還の豫定であつた。白溫泉までの呼倫貝爾高原の旬日に互る「旅」はよく比較的餘裕のある各種の觀測と馴化の機會と試験を先づ與へるだらう。登頂を第一義としてはそれが所期の目的に對して最も可能性のあるルートであつた。幾重とも知れ

ぬ緩坡を繰返へす波状丘陵地の果てに我々は景色の開けた白温泉の眺めを夢想した。心は皆緊張してゐる何だか遠い茫漠とした感じが後に残る。それでも身仕度を整へて外に出る。馬糧の燕麥や秣を積んだ二頭立の然かも全部新調の馬糧が十五臺すうりと旅舎の前に勢揃ひしてゐる。裝備品、食糧品も全部積荷された。それから第一橋に加藤、兒島、第二には蒙古少年隊の二人、第三には郭場、水川、第四には吉井、磯村、第十五には岩橋、竹澤といふ風に部署についた。第五から十四までの十臺は荷橋といふ編成である。先頭の橋は地圖を掲げ、第三、第四の橋の隊員は、氣象の観測や記録をしながら旅舎の前から馬の脚を利用して歩測した。前日のテストで七十五歩を以て一〇〇米と勘定された。何しろ使用地圖は五十萬分一、等高曲線は一〇〇米の代物しかないのだからこの歩測係は磁石を配みつゝ少し必死の覚悟であつた。後に夜行軍する様になつた時などは、眞白くなつたまっつけの奥で目をぼちくりやりながら、月明と脚音で以てカンでやりおぼすのは相當悲慘であつた。一々書きつけるだけでも歩數計を持つて行つて居たら少しは樂をしたらう。

用意萬端は終り愈々出發となつたのは九時であつた。満人人夫十五名、蒙古少年隊二名と我々隊員八名だから合計二十五名、橋がのろ／＼と歩いてゆくと半丁位の行列になる。朝霧の薄れの中を陽を受けつゝ南進する。

我々が今度途中から豫定變更をして終始ルートにとつた伊敏河（*イミン*）^{（イミン）}ゴル又はゴロは蒙古語の河の意）は、大興安嶺最高峰地域にその河源を發し、北流して海拉爾市街の東側に出て、それから海拉爾河に合してアルグン河となり、黒龍江、烏蘇里江となつて遠くオホーツク海に出るものである。

興安嶺山脈は北は、黒龍江のシルカ河とアルグン河の合流點右岸附近にその端を發し、延長一五〇〇軒、大體滿蒙兩域の境界を劃して南は遠く陰山山脈に連つてゐる。標高二〇五〇米をその最高峰（但し滿洲國外）とし大

體は一〇〇〇米から一六〇〇米の概して高峻の山嶺に乏しい一種の褶曲山脈である。それが北東に分派して小興安嶺、東南部の長白山脈及び遼河と松花江を分つ高地の四軸を以て滿洲國地域での著名な地質構造線をなしてゐるものである。小興安嶺が一般に一〇〇〇米級以下であるのに對して大興安嶺(Great Khingan Mts)は前述の如くであるが、幅は二〇〇軒にも達し東側は急斜、西側は緩斜移行して呼倫貝爾高原となつてゐる。地形上は老期の所謂準平原と稱せられるべきものである。雨量は少ない方であつて全般的に云ふと森林の發達も見るべきものがないとされてゐる。

話は大分外れたが權隊も市々として街を離れて行つた。うしろを振りかへつてみると街の上にはベチカから吐き出される煙がかういふ寒い國では宛も暖い棲家を人生の慰安所を象徵するものゝ様に空を覆ひてゐた。十一時には南屯の部落へ着いた。南屯といふのは、甘珠爾廟へゆく道の西屯に對するもので東倫旗公署の所在地である。小さい喇嘛寺も建つてゐる。オロト人の家屋へ入つて行つて、暖い茶を招かれて一休みする。いつもこんなときは少年隊の二人が日滿の兩國の國旗をかざして家に近よつてゆく。それに顔みしりのせぬ蒙古犬などいふ猛犬がワンワン吠え立てるばかりでなく猛襲せんばかりに近よつて来るので少々戦々兢々である。さつき海拉爾の街外れの辻で買った十錢で六つもある温饅頭も暫く立つ間にそこらに轉がつてゐる馬糞の様にカチカチに凍てついて了つたので犬に投げつけてやつたら一寸身をかはして何喰はぬ顔をする。凍てつくと臭ひがしないんだらう。馬糞を燃料にしてちつとも變でないのだから。

暫く休んでこゝで愈々、自動車で無々見送りに来てくれた興安ホテルのお女將さんにお別れのさよならをする。もう眞白の雪野原である。緯度の關係(海拉爾は北緯四九度十四分)で眞午になつても太陽は午後三時頃の様な

位置にゐる。こゝでは三時半にもなれば日没が迫つて、遠い山の端は赤い夕陽で紫紺色に染つて来る。第一日の行程はついに一四・八軒と記録されて、伊敏河畔に場所を定めて橋が一行横隊に並べられた。我々の丸型天幕は河を渡つて對岸に張られた。河の水は主流に見當をつけない裡は減多に得られるものでない。水が溢れ出て便利な井戸になる等はさう簡單でない。それでも海拉爾で買ひ求めた碎氷用の何貫もある金テコは早速間に合つた。川中島にはかはやなぎがあちこちに茂つてゐる。全然樹木はないから用意して來た白樺の薪が出された。第一日目だから炊事が大變手間どつた。天幕内で夕食の笑ひ聲のきこえたのは七時であつた。人夫達はそのまま橋と一緒に左岸に止つた。自分達のめしを食ふ前に大分離れた部落まで馬に水を飲ませに引張つて行つた。陽が落ちると流石に冷たさが増して来る。微風程度でも大分こたえる。あしぶみしながら沙かねばならないといふ奇現象を呈する。それでも天幕内はガソリンランプがかうかうと照つて人いきれとオプティムス等で大變暖い。天幕も一昨年のに手を入れて頂點にヴェンチレーターを施してある。それでも朝起きてみて内側に澤山の霜が結ばれてゐるのには閉口した。天幕内でも上部と下部では十度も氣温が違つて下の方は零下何度かであつたが、寒さを覺えてねられないといふことは誰も訴へなかつた。これは天幕のおかげと羽根のシェラーフザックと今一つ大きいものはカボッタのマトレスのおかげであつた。此日の最低零下三十四度であつた。十時半に就寝する。

一月三日、朝五時に起きて人夫衆を起しにゆくと馬が逃げましたと申告しに來たのがある。彼らは橋の握棒で轡を掴み、上から厚手の防水布の大きいのを被せて天幕を作るのであるが内部はちゃんと排雪してゴロ寝してゐる。馬は橋に繋いだまゝである。のん氣な蒙古馬も夜だけはおとなしい。ボカンと立つてねてゐるのだらう。朝の橋の勢揃ひまでのゴッタ返へしの最中に手綱が一寸外れてのんきな馬はのんきな親方から逃げた振りをする。

追ひかけると益々圖にのつて行方をくらましたのだらう。二匹とも逃げたのだから槍が一臺どうしても来くわけには行かない。まあ大喝一聲を喰はして馬に乘らして探しに出さすと明るくなつて一匹は連戻して来た。もう一匹は今度は少年隊の一人を監視につけて出来るだけ快々的に探して来いと命じた。槍二臺を残して本隊は先に出發と決める。天幕を疊んで荷の積込みをやつてゐる頃附近の部落のオロトか何かの村童が珍らしさうに我々の舉止動作を見に来た。隊員の誰かはテルモスに入れた紅茶の残りをコップに入れてやるとうまさうにのむ。それでも會話が皆目出来ないのだから暫になつて騒ぐ様な聲を出して手真似の効果を添へやうとする。漸く九時五十分になつて出發といふことになつた。今朝は特別に逃馬事件などあつたからだとおもつたが出發のおくれるのは毎日同じ調子であつた。

天氣は少し薄曇りの様になつて、小雪が時々やつて来た。十一時にはハルホシ。山の三角點の西側を通過した。樹を離れた感じが沁々と身に迫つて来る。それに斯ういふ一物と雖も妨げるものゝない廣野の彷徨が山とは全く對蹠的な海洋、といふより大洋を想起せしめた。それはどういふわけだか判らない。景感といふ様なものが作用したのかも知れない。その中に朝探しに行つてゐた二臺の様が漸く本隊に追ひついた。見ると馬は澄ましたもので知らぬ顔をして走つて来る。何處に居たときけば、南屯の近くまで逃げてゐましたといふ。皆な呆れて了ふ。今日もやがて伊賀河畔の手頃の場所に來て行進をやめた。時に三時十五分である。昨日より少し多く一五・三軒進んだ。最低氣溫零下三十六度に降つた。データを調べてみると海拉爾附近の地域は山中に入つた時より却つて寒さを示した。それにカラッと青味を見せた快晴の日よりも陰つた日の方がチカチカと冷たさを覺えた。昨夜過り暴露する。

一月四日、暮營二日目の夜が明けやうとする頃、炭の瓦斯中毒のものが人夫の天幕の中から出た。人夫衆と一緒にねてゐた蒙古少年隊の二人さへフラフラと這ひ出て来た。年の若い千田の方はしきりに唸つて雪の上に寝たがらうとする。こんなに堪へられなくなる迄よく知らん顔をしてねてゐられたものだ。少々呼んで起きうとしても容易なことでは出て来ない。仕舞ひには天幕を引きおろして叩き出した。殆ど大部分が唸り聲と泣き聲を擧げてゐる。醫療班が早速オフナール等持つて来てしつかりしろと一人づつ肩をたいてやる。人夫には白頭山の時の様に番號をつけたりしなかつたので始めはこつちの方が大變狼狽したけれどこの中毒事件で大部分のどうもうな顔の區別もついた。案外早く回復したので今日は九時二十分に出発することが出来た。今朝の最低はついに零下四十度迄下つた。橈道は今まですつと白濁泉道であつたが途中から伊敏河の西岸に出てゐる。交通の多い白濁泉道は止むを得ず放棄して伊敏河上流に迷ふこととする。河谷を蛇行して橈を飛ばすのも氣持がよい。午後四時クフホラガルスン部落につく。ブリアート人ばかりである。今日初めて蒙古包の實地見学で泊めて貰ふこととなる。今日は一躍スピードを出したので二三・五軒をすんだことになる。大家族の様に皆寄つたら十一名もあつた。お祖父さんとか若い嫁とか、力のありさうな青年とか子供までが我々を珍らしがる。自分達が夕食を済まして残つた米の飯を提供すると非常にうまさうに食つた。彼らも肉の素だきの様なものを御馳走してくれた。その次に我々の方からデザートとしてマングリシオレンジの罐詰を出して禮をかへした。主婦が空罐をくれといふ。朝煮を入れた箱のリボンも女の兒の手に渡つた。斯うして彼らと自分等との間に蒙古少年の通譯を通じて素朴な挨拶が交はされたのである。人数が多いので二人づつ位分宿する。

一月五日、五時起床、六時には零下四十八度に下る。一夜の中に包の人々と非常に親しくなつて家族總出で記

念撮影をしたり子供を追かけて撮つたりする。九時十分出發。天気はひるから少し陰る。始めの様に無人の境ではなくて包は到るところに點在する。今日始めて四國程出して馬糞として糞を分譲して貰つたし馬糞は次々と當てが出来て心配もなくなつた。それも併し當分である。明日は海拉爾から馬糞積載自動車が来るだらうかと心配である。馬糞旅行も目だけ出してゐるので、たまに遠いところに馬糞や馬糞の山がみえ、包の綱りが陽に當つてうすく見えると嬉しい休息が待つてゐる様に行程が暫く停められる。そして仲々味のある茶を御馳走になる。一日の中の一、二回のこの時が外套も帽子も何もかも脱いで馬糞を焚くスト、ブにあたつて駄馬の打寛いだ時である。今日二回休憩した包は何れもオロートである。之は露人達がカルマック族と呼んでゐるものである。蒙古西南部、ズンガリア、ロシア南部、ヴァルガ地方、ドン河、西藏方面に分布し、五十萬程あるといはれる。それは戦亂と移住とによつて永い年月の間に分散したのである。男女共に騎馬を好み、男達は相撲をやつたりする。ブリアートは之に對してトランス、バイカル方面に分布する。二十一萬位である。蘇聯の一聯邦を形成するブリアートモンゴル共和国が即ちそれであつて、壓制に堪へかねたものは内蒙へ移住して來てゐるのである。併しシベリア地方のツングースとかヤクト等と混血した形迹があるとも言はれてゐる。女は服を清潔に着飾るといふのには不思議はないが、王公の妻女の包の毡子などの派手な色模様にも反映してゐる。ブリアートは蒙古人中最も進歩してゐると云はれるが、オロートも往昔は其だ強盛を極めた。その他、成吉斯汗を出したといはれるカルカ（之は東部蒙古地方に分布し二十五萬程ある）と並んで蒙古人中大きな種族である。

今日は須田少年との幼友達だといふオロートの家に泊るべく先を急いだ。行程一七・八軒、四時半その友達の固定家屋に着く。こゝでも肉の素だきの御馳走になつてあごがいたくなつた。途中、伊敏河谷の東岸の岩肌を出

した山ふもとに喇嘛僧が岩小屋に籠つて修行してゐるといふので觀に行つた。燕の巢がある。此の穴は何百年も前からあるのだとか煙草は絶対に吸はないのだとかいつてゐた。今日は東岸の山が近くよつて、露出したりしてゐるので地質班が大いに活躍した。

一月六日、朝から曇氣味である。もう二里も行けば須田少年の伯父さんの家があるといふし、一方海拉爾からの自動車^{自動車}を待つ日でもあるし、朝九時四十分出發して午後一時二十分にボクト部落に着いた。途中露西亞人の固定家屋によつて暫く休ませて貰つた。可愛い女の子が母親とゐたので皆葉食用の板チョコや堅パン等出してサーヴィスをした。併し恥かしがつてまともに寫眞を撮らせなかつた。此處で馬秣を分けて貰つた。ボクトの須田の伯父さんの家では大變珍客を迎へたといふので自由に便ふやう自分達に奥の一望を貸し與へられた。海拉爾出發以後五日振りでゆつくり寛いだ氣持に歸つた。トラックは到頭來なかつたので之からのコースや方針の打合せをし明日偵察することになった。夜は蒙古の酒や例の肉などをふるまはれ、こちらも食糧係が全力を挙げて賄係をつとめた。その裡に段々酔がまはつて自分達は習ひ覺えの例の、アメリカ、チャメリカ……といふ戀歌を放歌高吟した。それは此の場合蒙古の唄として自分達の旅情を大いに慰めたかぶらせたものである。それから君が代を千田、須田の二人の少年が歌つて日本に敬意を表さうといふ。君が代合唱の後今度は滿洲國歌の合唱に移つた。最後に日本、モンゴル。モンゴル、日本。といつて固い握手を交はした。斯くして日蒙交歓の夜は更けた。最低零下四十二度、行程七・五軒である。

一月七日、快晴。朝十時半、加藤隊長、須田少年の二人は騎馬で偵察に向つた。兒島一那場の地質班は金槌をもつて、西方の山に採集にゆく。蒙古馬にのつて一同乗馬の練習、直ぐに上達する。加藤隊長等午後三時半歸つ

て来る。伊敏上流に沿つて點々包のあることを窺め又それが唯一つの橋道である爲、白渾泉道（ハクシュン）に変更に決定し、トラックが未だに來ない爲、海拉爾及び各方面にコース變更の事情と日程を書いて明日海拉爾へ飛脚を以て遠達を依頼する事にした。此處でモンドウサイ、バイナ（今日は）、セルグデン（有難う）、ザザ（さよなら）、とかオッソ（水）、モッソ（氷）、シヤラカ（橋）、ノホイ（犬）、ノホイバリ（犬を捕へよ）、モリ（馬）等といふ蒙古語を覺えた。

一月八日、今日も昨日に引續いての好晴である。コース變更の爲、白渾泉に待機してゐて呉れる包を使用する事が出来ぬので須田少年の伯父さんに頼んで近所から中古の蒙古包を借りて貰ふ。それを槌一臺に積み、重ねて馬秣も不足の分を買求めた。自分達の出發と同時に騎馬の飛脚は、海拉爾、新京、王爺廟、京都各方面への通信をもつて二日間の豫定で海拉爾へ向つた。

一方、馬糧積載のトラック隊は途中から橋跡のない白渾泉街道へ向つて無益に我々を探し廻り、徒勞に終つたので海拉爾へ歸還した由である。我々のあとを追つて来るそのトラック隊と遇へなかつたばかりに馬糧の供給を受け得なかつたのは別として之によつて唯一の後方連絡とする機会を失つて仕舞つたのである。我々がトラック隊の遅きを訝つて當方から進んで豫定變更の事情及び一同健在をしたゝめた通信連絡の飛脚を走らした時はもうおそかつた。その時は既に海拉爾から内地へと遭難の虚報が新聞、ラヂオを通じて傳へられたのであつた。それは確かに誤報事件ではなくて虚報事件であつた。自分達が出した海拉爾から新年お芽出度うの繪葉書が内地に着く時分に遭難？といふニュースが出る様な悲喜劇を起してゐたのである。事態を更に悪化したのは、ボクト部落を八日に發した騎馬の連絡通信が既に當時海拉爾を發してゐた捜索自動車隊と途中であひ、その通信文はそのま

ま自動車隊の手に渡された爲、海拉爾への連絡が餘計に遅延した事であつた。右の事情を夢だに知る由もない我々は、八日準備が少しおくれて十時十五分、モルグダハン・ザッザを繰返し手を振りながら伊敏河谷を溯つたのである。此の日も途中オロト包に二回程休息して午後五時半露人の固定家屋に着いた。行程一八・七軒である。滿蒙に居住する露人といつても大體土耳其系、猶太系、スラブ系統等に分けられる。自分達の泊めて貰つた家の人達は土耳其系であつた。多くは無国籍であつた。夜は露西亞のお正月を迎へる頃なので大いに歡待された。

一月九日、朝からどんより曇つてゐた。久し振りに時々小雪に覆はれた。北滿では一般に降雪は九月末から翌年五月十日頃までをその期間としてゐる。冬期は殊に乾いた氣候である爲に降雪日数は二十日乃至四十日程度であり積雪も一〇センチ至二〇センチとされてゐる。三〇センチ以上はどうしても山間にのみしかみられないし又猛吹雪等は殆ど起らないと云つてよい。

午前九時二十分出發、二時間にして渾郭羅津^{ホンゴロジン}の部落へ着く。こゝは伊敏河の本流とその支流たる渾郭羅津河との合流點で海拉爾を去る約二百里の地點である。そして海敏探木公司といふ露人經營の材木會社の事務所があつて我々はそこで厄介になつた。渾郭羅津から道は愈々山中へ入るので此の日は休養と決定。午後薄陽が照り出したのでスキーを取り出して裏山に行くもの駱駝を乗りまはすもの散在してゐる露人家屋を個別訪問してお正月のお祝を招ばれてゆくもの、長い靴下を手袋代りにした假裝の男達が踊り廻つたりして仲々賑かであつた。その中四時頃になつて自動車、トラック隊が三臺續いてやつて來た。軍、領事館、警察署及び興安北省公署警務課の人々で我々の遭難救助の決死隊としてやつて來られたのであつた。我々は事の経緯を訊いて大いに驚いた次第で、兵隊さん達は早速ハイラルに無電を以て聯絡をとられた。こゝで我々はボクトから發した通信文の包を全部そのま

き受取つたのであつた。それから同時に當局の人々の是非とも早急海拉爾へ歸還せらるべしといふ傳言を受取つたのであつた。再び豫定變更の相談がなされた。後方との通信連絡の不備が斯くも不首尾な結果を惹き起したのには誠に遺憾に堪へなかつたけれど我々の平落でもあつた。一方我々は單なる悪性ジャ・ナリストの虚報を以て、此の遠征の目的たる最高峯登頂を全然放棄して直ちに歸途に着くことも考へることは出来なかつた。我々はそこで幸ひ伊敏河に沿ふ材木會社の小屋及び橋道を利用して所期の目的を達し白温泉行きは全然之を中止して登頂後は急ぎハイラルへ歸還すること尙又豫定の時間に遅れない様、即ち地圖と對照してみても十八日迄前進、十八日迄に登頂が不可能の場合はそのまゝ断念して引きかへすことを決定、改めて各方面へ通知することにし明日の海拉爾へ歸還する自動車に託することゝなつた。

我々はそこで自動車隊の人々と夕食を共にし併せてその勞を謝したのであつた。斯くして就床したのは十二時を過ぎてゐた。最低氣温零下三十七度。

三、サンドル部落へ

一月十日 晴、カンゴルジン嶺、露人バラツクへ（行程約四一キロ半）

十一日 曇、小雪、モンギン山の峠を通過、サドル海嶺公司小屋へ（行程約一八キロ）

十二日 晴、サドル湖を渡り

十三日 曇、サドル川を下りサドル木河に出で峠を三つ越してサンドル着。（行程約二六キロ八）

一月十日、晴に恵まれた更生の第一日。午前八時昨日の自動車の方々が出發された。出發間際となつた九時半搜索機が俄に北から飛んで來た。第一回の飛行機の搜索は矢張り白温泉方面へ行つた由である。藤原參謀からの

通信筒が落された。我々は数呼の中に之を迎へた。低空飛行約二十分位で海拉爾へ機首が向けられた。先の自動車隊と通信を受はして来られたらしい。我々も十時にはいよいよ出發する。出發に際して先に借用した包が無用になり又、食糧品の軽減から馬糧三臺が通信を兼ねて海拉爾へ歸へされた。十五人の人夫の中一番弱さうなのが三名選抜された。あとから考へると此時、ヘバリニーヤと皆ながら愛稱された人夫が選に洩れたことはかへすがへすも輸送係としての失策であつた。小一時間もゆくと左手に當つてソロン人の家屋があつた。索倫人は性質勇敢で清朝初めより軍務に従つて驍勇を天下に馳せたといはれる。矢張りツングース族の分派であつて、呼倫貝爾地方のものは常に遊牧の民として生活してゐる。此處で一度伊敏河谷から離れて一つの峠にかゝる。ボクト部落までは山の見え易いところ等に設けられる道標の他には、かはやなぎの他大して樹木がなかつたのが段々現れて來た。この第一の峠には早くも亭々と伸びた白樺の疎林や獨立樹が見られ始めた。樹木はともきれいであつた。轉て同じ名の渾郭羅津河の河谷に出て暫くステップを走る。それから再び伊敏河の本流に出る。左手は塔爾斯興安嶺附近から派生した連山の脈であつた。午後四時半頃河畔の森林中に達呼爾（或はダウリ）人の小屋が見られた。それから途中で俄倫春にあつた。オロチンは黒龍江の上、中流それから更に興安嶺山中に棲んでゐて狩獵を生業としてゐる。射撃の名手であつて、山の中では注意せねばならぬといはれたがそんな心配もなかつた。今日泊るべきバツクにはまだ遠い峠の真中で日はとつぷり暮れかゝつた。五分間の休憩にも大變な寒さを感じた。けれども恰度十六夜の月が東に出て、陽は西に没する頃の壯觀は再び味はれなかつた。此の廣い伊敏河を西側に沈めた泰地は歸途によつてつく／＼眺められた。夜行軍は八時四十五分迄続いた。ヘバリニーヤの積が途中で動かなくなつたりして大變遅れた。疲れた體をバツクに入れてみると天井といはず板張の壁といはず油



興安嶺山中

加藤 泰安



伊敏河畔を往く

加藤 泰安



ブリアートの子供と包

加藤 泰安

蟲がぞろ／＼と行列を作つて這つてゐた。苦力が多勢居るので床の上になれるのが窮屈であつた。それに二、三尺も土地より高いので薪をどし／＼焚きつけるとストーヴが近かすぎて汗をびつしよりかいて了つた。真冬の興安山中で裸になつてねながら汗をかいだのもこの一夜だけであつた。又その代り南京蟲の襲撃に遇つて一夜をまんじりともせずにバリ／＼かきどほしたのも此處が最初にして最後であつた。大變よい洗禮を受けた。最低零下三十二度。

一月十一日、再び陰る。小屋が汚いに拘らず宿の主は丁寧な親切であつた。九時四十分出發、暫く河の中を走る。昨日の行程は四一・五軒、今日のヤドル小屋までは一八軒である。結局ホンゴルデン、仲繼バラ、ク間が全行程中最大距離であつた。馬車のスピードも先づ一〇里以下といふことになる。約五軒もゆくと塔爾斯河と伊敏河の合に出る。塔爾斯河を流れれば塔爾斯興安嶺に到り山脈の東側なる韓兒河に出る徑が通じてゐる。河谷は猛烈に幅が廣くて草原である。山容が漸く複雑さを加へて来る。塔爾斯河も途中で更に南に流る支流に道をとる。ここがヤドル小屋を仲繼小屋との唯一の峠であつた。スンギン山（一三三八米）を西にみる峠を通過したのは四時半、天氣が悪くて月がかくれてゐる。暗闇の中を漸く峠を降り切つて五時半ヤドル小屋についた。

ヤドルはこの海敏公司の先づ前邊根據地的の意味を持つところ、こゝを中心として伊敏の各支谷に夫々小舎が建設されて、興安嶺の樹海を作るダフリア落葉松その他が伐り出されて行くのである。

我々はドヤ／＼と到着した。小舎のロシア人たちの好奇に満ちた眼が我々を圍む。ベーチカの温度は快く我々を包み、そしてウ・トカの廻ると共に和かに皆寛いで行つた。フツ気がつくと、自分達の周圍には、異邦の人々が日焼した頬をほてらせ乍ら愉快げに談笑して居る。その素朴な然し質實的な態度と、我々に耳なれぬロシア

語、それらは自分達にトーカー映畫を見て居るかの如き感じを與へた。

一月十二日、この日を休養と定める。一同夫々思ひ／＼に一日を過す。午後ハイラルの藤原少佐よりの連絡員来る。同氏始め軍部關係の方々に御心配をかけた事に一層恐縮すると共に、御配慮に對して一同感激して了つた。

一月十三日、いよいよ最後の行進をする。午前八時ヤドル出發、ヤドル川に沿つて一度本流に出てそれから大凡河と並行に進む、流石に廣い興安嶺もこの邊りからボツ／＼森林を處々に交へて、馬橋の上からの景色の移り行きの觀察に忙がしい。斜面も段々急になつて来て、ともすれば馬槍から後ろ向けに投げ出される。午後一時五十五分、伐木運搬の爲めの中繼小屋につく。白樺の疎林の中に在つてリンカーンの傳記に出て来る小屋のやうだ。「處女地」を思はせる。

ストロウに浸まつて、お茶を貰ひ、ミルクパンをかちつてすぐ出發する。棧路は興安嶺の支脈を三つ乗り越して付けられてある。第一の峠を越し、第二の峠を過ぎた。第三の峠の登りで夕陽が紫色の空に映えたまゝ暮れて了つた。全くの闇、白樺もやうやく密林になつて居る。そして人夫の叱咤する聲、のゝしり合ふ聲が四邊に響いて来る。漸く時を登り切ると谷をへだた同向側にサンドルの小舎の燈が見えた。下り斜面ではあつたが暗夜のために棧は一旦散に飛ばせない。小屋につくまでの一時間が實に長かつた。

四、最高峯へ

一月十四日 曇、二隊に分れ、一隊は橋にて伊敏河本流より、一隊はスノーにて尾根筋より並路を登る。

十五日 晴、前隊、架設隊、檢査隊に分れサンドルより行程七キロの箇所をBCを作る。

十六日 晴、尾根の両側をスキーにて市東に進む、ACの建設にかゝる。見島、水川、吉井、
磯村、郡場BCに歸る。(行程八キロ)

十七日 晴、見島、岩橋、水川、竹澤ACを出發、午後零時五分尾根に達し、三時、一七五〇米の峰に達す(最高
峰まで四キロ)それより引返し、九時十五分ACに歸着。BCの一行は午後二時ACに着。

十八日 晴、加藤、郡場、吉井の組最高峰に向ひ、前日のコースにより、午後三時十五分頂上(一八三五米)に
達し、午前零時半ACに着。水川、見島、磯村はACよりBCへ、見島、磯村はサンドルへ下る。

十九日 晴、見島、磯村、人夫、馬を伴ひサンドル麓、ACに着。ACの一行はBCに下り、BCを撤収してサンドルに
歸着。

一月十四日、曇つては居たが薄日の射す氣持良い日であつた。このサンドル小屋で、旅行を終り、之からはい
よいよ登山に移るのである。第一日は先づ偵察する事とし、加藤、郡場、吉井、少年隊二名は橇で伊敏河谷上
の可否を確かめ、岩橋、見島、水川、竹澤は尾根筋よりするアタック・ルートを偵察に出た。橇隊は午後五時二十
分、スキー隊は三時半に夫々サンドルに歸來したが、その偵察所見を綜合すると、初めより大いに有望視して一
同期待して居た伊敏本流の水上进行する事は俄然駄目になつて了つた。それはこの地方に來ると何處か——地
熱の爲であるのか——流れに沿つて非常に豊富な湧水が在つて、之が零度以上であるために、氣温は毎日零下數
十度を示して居るに不拘、河上の水は非常に薄いもので、馬が踏み貫く事は勿論、スキーをはいた人間にさへ氷
がピリピリ破れる始末で、到底遠征道として用ひ得ない。同時に又河沿ひに伊敏のフラッド・プレイン上を行く
事も、荒雪の上に丁寧に橇道を造らねばならぬ事から、一日の行程が極度に制限され、之をとる事は到底時日が
許さないので止むなく尾根筋にルートをとる事を餘儀なくされて了つた。

然も偵察によれば積雪は粉雪が二尺以上、全體グダグダ広い地形は密林に覆はれて居て殆んど展望を許さず、小

合より最高峰までの地面上的距離四〇キロ、その中途には未測量のブランクの地帯が氣味悪く残してあるのが、隊員一同の頭に氣味悪くノシかゝつて來た。夜は遅くまで談合した。前途の見極めは全然つかなくつた。

一月十五日、サンドルの小舎から南方、密林の間を一キロ餘りは伐木のための林道がついて居るので兎に角之をトレースする事とし、午前九時先づ偵察隊（兒島、郡場）がトップを切つて出發、大凡一時間後れて架設隊（加藤、水川、竹澤）及び輸送隊（岩橋、吉井、磯村、少年隊二名）は必需品の仕分けで大騒ぎしてから出發する。用ひられる處まではと云ふので縁に荷物を積んで先發隊の後を追ふ。道は小高い丘の上を通過して續いて居たが、此處は全く樹林が伐られて、遠くならかに起伏する伊敏の源流から、更に對岸の烏特温土^{ウツテン}の山々が初めて我々の視界に入つて來た。路は再び森林中に入りてやがて伐木小屋が一つ林中にボツンと出て來て此處で無くなつて了つて居る。尙も強引に極を森の中に進めて行つたが、午前十一時遂に能率が悪くなつたので之からは人夫の脊と馬脊による事とした。滿人々夫達は生れて始めて雪の中を歩くので中々涉らなかつたし、馬脊の荷物は或はズリ落ち、或は樹の枝に引掛つて、輸送は可なり苦勞した。然し遂に先發偵察隊等の應援で荷物が全部揃つたのは午後六時に近い頃であつた。

ベースキャンプは伊敏の支流に面する少し打ち開けた斜面に造られた。四邊一帶にはダフリア落葉松が疏林状に點在してその何れも美しい樹氷をつけて居る。大坂の西岡で作つて貰つた大きな吊下げ式の天幕が張られ、荷物が整理せられてから、人夫のうち炊事と薪切りに使用するもの四名以外を、皆馬と共にサンドルに返して了つた。但し襪は引上げの時を考へてそのまゝにして置いた。やがて夕間の迫り來り、山は全體紫色に煙つて來た。人夫達のたく火が赤々と樹幹に映え、白頭山傳來のガソリン・ランプが輝いて、天幕の中の人影が黒く布地に投影

された。夕食の仕度が出来て、持参のレバー・ペーコンがグッと空き腹にこたえて来た頃、今日までと異つて隊員ばかりの水入らずのキャンプに皆急に親しい和やかな氣持になつた。

然し乍ら、既に一月も半ばとなり、時日は刻々に迫つて居る。今日の行進はサンドルより東南南へ七キロ程であつたが、尾根が大きく迂迴して居る關係上、最高峯へは未だ三五キロはタツブリ在ると思はねばならない。之からどうするかが先づ問題とされる。そして最後の断案として次の如く、加藤隊長より通達された。

第一隊 兒島(リーダー) 岩橋 水川 竹澤

第二隊 加藤(リーダー) 郡場 吉井 磯村

〔豫定〕 明十六日第二隊は出来得る限り前進してACを架設して、BCに歸る。第一隊は之を根據地として更に前方の偵察を行ふ。

十七日。第一隊は第一回の突撃隊として登頂を目指す。第二隊はACに進んでサポートに當る。

十八日。第二隊は前日のルートを探つて再び登頂し、第二隊はBCへ下つて引上げの手筈を整へる。然して若し第二回の突撃を以てして奇頂上に達し得ざる時は止むを得ざる事としてそのまゝ撤収する事。

この夜は特別に星が美しかつた。樹梢を越してきらめく星が、大陸のなだらかな斜面と廣い樹海の奥中にボツリと光つて居るのであらう。吾等の天幕を覆ひ包んで静かな、然し力強い自信を我々に與へた。我々は唯自分の胸をしつかり抱いて、グレンフェルの氣心地を楽しみつつ遙かにこの樹海の彼方の事、遠いこの興安嶺よりも更に聳えた山々のこと、そして故國の事などを語り合つた。落葉松の薪はボン／＼燃え、温かい天幕の内部で興安嶺との出會の第一夜を快く眠りについた。

一月十六日、一同期せずして早く起きた。今日は眞青の空の色だ。昨日の到着が遅かつたのでAC架設の材料を整理するのに意外に時間食つて出發が後れた。BCから東へ眼の前の尾根に先づ取り付いたがそれも平らな大きな尾根で大體地圖上の大興安嶺の主脈の走行と一致しては居るものゝ、この餘りにもスケールの廣い大陸の事だから誰も然りと斷定する事は出来ない。然も不相變の落葉松に視界を缺いて氣ばかりは焦る。然し荷物は重いしガサも少しあるし、行程ばかりは遅々として進まない。正午過ぎに一寸した山火事の跡に出た。見ると正面に一本谷が入り込んで、その向ふ側に之は又恐ろしく雄大な殆ど直線に近いスカイラインを持つた尾根らしいものが樹海で眞黒になつて横はつて居る。然しその谷にしろ、尾根にしろ、殆ど水平に見えて居るので東へ延びて居るのか西へ延びて居るのか視る人の氣持一つでどうにでも考へられて来る。要するに今我々の居る尾根が大興安嶺の主脈であればよし、若しさうで無ければ再び伊敏の河谷に下つて了ふのだ。

其處で我々は先づパンを喰つて腹をこしらへてそれから兎に角この尾根の本體の判明する處まで、もう少し前進して見やうと云ふ事になつた。事實それはもう少し前進すればよかつた。——休止點からものゝ二、三町と行かないうちに、行く手の右側に當つて小高い丘を見付けてその方に進んで行つた。

其處には雄大な眺望があつた。我々は此處で始めて伊敏の源流を一目に見渡す事が出来た。今や正に我々は興安嶺の主脈の上に在る事を知つた。之に並行する更に大きい尾根は一つも無かつた。見る目途かにただ廣い伊敏の川が山波の中を遠く浸蝕して居るのが見える。そしてその彼方に在る可き我々の最高峯は、之は亦見る目遠けき彼方に模範として霞んで居る。寫眞機を取り出したり等して一同顔を見合せ「遠いなあ」と云はぬばかり、だが十五分餘り休んでから再び尾根通しに南進を続ける。午後三時、急に一寸したコブに來た。丁度良いヤン

ブ地もある。それ！と云ふのでいよ／＼此處をACと定めた。地圖を按ずるにこのコブが一六〇〇米の標高點であるらしい。さうだとすると最高峯までは六里餘りである。ではガン張れば行けさうではないか、と云ふ事になつて皆だん／＼調子づいて來た。白頭山のCHに用ひたボーラー・テントを山かげに架設する。テント架設も手なれて來て今では二十分位で出来るやうになつた。この天幕については準備に當つて西堀先輩の示唆によつて天井に換氣の穴を明け更に耐風性を増すために引き綱を星形に張るやうに加したのであつたが、この平穩無風の天候に於いては後者のテストは全然出来ずに了つた。

かくして居るうちに兒島・永川は前夜の偵察に出て行つた。三十分餘りで架設も完了したので、第二隊の四名は偵察の歸りを待たず、エホーを叫んでBCへの歸途を急いだ。さても空身になつた快さにバン／＼號ばしはしたけれど、BCに着くや否や夕暮になつて了つた。BCでは人夫と少年隊の千田、須田がシンボリ歸來を待つて居た。矢張りこんな處で被褥だけにされると心細く感じたのであらうか。それでも一昨年來の問題——天幕火事は未だ解決せられず、無數の穴が火の子から出來たが、それらが皆丁寧に修繕されてあつた。夕食してストーブに當つて見ると、半数に人員が減つた事と何だかガラシとして居て頼りない。明日の第一突撃隊は成功するだらうか。希望と期待を抱いてシューラフゼックにもぐり込んだ。

一月十七日 ACでは午前八時、第一突撃隊が張り切つて出發して居た。どうでも今日中にたとひ頂上までは行かないにしても、登頂の目鼻だけは附けて置かねばならないので、尾根通しを東向きに猛烈なスピードでラッセルして行つた。約一時間、一六〇〇のスロープを下り切つてコルに立つ。尾根はこゝから南に方向を變へて行けども盡きぬ大樹海の中を太陽を目指して進んで行く、午後十時半に尾根が弓形に西へ弧を描いて居る一端の尾

根に取りついた。之で大體の位置の見當は附いた譯であるが更に行進を續ける。尾根は一度急に低くなつて、ここで伊敏と哈爾哈とのコルに出た。

この時の風速一〇米餘り、空は珍らしくも少し吹雪き模様である。俄然行く手の右に當つて樹皮をけづり取つた跡に、景色美しい日本語で『高原調査隊』と書いてあるのを発見する。昨秋來たと露人の云つて居た軍部の調査隊の書いて行つたものであらう。吾々はこの先達に敬意を表して、このコルを高原乗越と名付けた。尙も突撃——今度は一七五〇の峯への登り坂だ。倒木が多くなつて来る。早朝來の奮闘でラッセルもやうやく苦しくなつて來た。とうとうこの坂を登りつめた。時に午後三時。磁石と地圖で計ればそれは正しく一七五〇米の峯である。圖上で見れば最高峯は之から四キロ餘りの行程だが事實眺望は前のその中間にある脊にさへぎられて望むべくも無い。時は過ぎる。哈爾哈の深い谷間からはもう夕影が動いて來た。早々にして引き返す事にする。急いだが道は遠く、體も大分消耗して居て仲々尾根が長く感じられる。日はとくに暮れて了つて、電燈は電池が水つて灯がつかぬ。充分にと思つて持つて來た食糧もやうやく不足を告げて來た。

之より先、BCからACについた第二隊は、早速支援の意味で吉井、磯村、郡場に食糧、飲料を持たせてシブールを傳つて迎へに行つた。然し行けども／＼人の影跡はなく、享々たる大樹の幹を縫つて唯シブールが紐のやうに先へ先へと延びて居る。日も暮れた。突撃隊の安否が氣遣はれて來た。午後七時先づ兒島が暗黒の中から顔を現はした。どうしたと云ふ。疲れたと云ふ。二三言葉を交したまゝで、前と後ろに別れた。もうすぐだらうと云ふので再び前進をつづける。それから半時間あまり後終に第一隊の主力に出遇ふ事が出來た。少憩して持参の食料を開き、デルモスを廻す。引き返してACに一同が歸りついたのは九時半に近かつた。加藤隊長と先についた兒

鳥とが心配し乍ら作つて呉れてあつた米の飯が胃の腑に収まると、やつと元氣を取りもどして今日の苦闘、前路の様相などが語り交された。夜は丸テントの中で久しぶりに八人が語りづめになつて、それでも良く眠つた。

一月十八日、起床午前五時、第一突撃隊は前日の悪闘にも不拘、今日の最後の攻撃隊のために朝食も取らずにテルモスやパンの用意を助けて呉れた。昨日の攻撃で、既にラッセルは免れて居るとは云ふものの、果して一七五〇から向ふに如何なる地形が存在するや計り難くて、當然歸來の後れる事を見越し、空腹と疲勞に備へて充分の食料を準備する。八時全員がテントの前に圓陣を作つて最高峯登頂のためにエホー三唱、歡呼に送られて行進を始める。前日の支援によつて大體の調子は判つて居るので、断然ビッチを上げて前進し、一六〇〇のホルには十時、高原乗越には十一時に到着した。この日も又比較的天候悪く、この邊りでは南から北へ、哈爾哈の谷から吹き上げる烈風が小雪を伴つて横なぐりに吹きつけて来る。歸途でこの邊りが夜にでもなればこの風ではシ。プーは完全に無くなるだらうと云ふので四邊の地形を丁寧にしながら行く。急ビッチとノンストップに近い行進であつたが、一七五〇の頭に着いたのは十二時四十分。昨日の第一突撃隊との所要時間の差は二時間四十五分に過ぎない。ラッセル、密林、倒木等の條件を考慮して昨日の奮闘、掩護を思つて先づ感謝して、この上は是が非でも最高峯を極めなければと決意する。天候は依然悪く、密林と倒木は依然行く手を阻むが何れも單に時間の問題に過ぎない。頂上直下のスロープをホルに向つて滑り降りる。尾根は依然密林であるので、丁度薄雲を透して見える太陽を目標にして左に右にボサを避けつゝ進んで行く。一七五〇より大凡二キロの地點で再び一つコブを越えた。一寸した山火事の跡が在る。見れば我々の前方に全體を黒々と落葉松に覆はれた我々が目指す最高峯が、斜陽を受けて輝いて居る。その距離は目測約二キロ、それと云ふので前進を続けた。この邊りでは興安嶺も哈爾哈

の斜面になつて了つたので山容は今までのノッペリした平らかさを失つて、谷は深く山稜も顯著になつて來た。

どうでも日本の中級山岳を歩いて居るやうな氣持になる。午後二時半三人は最高峯の直下に立つた。山容は完全に一つの獨立峯を形成して居て、北の方、即ち我々の登路には三段のテラス狀に低下して居りその各段の間の傾斜は大凡三十五度である。獨立峯で矢張り始終強風に曝されて居るのであらうか、八〇度の積雪面にも各處に帶狀の吹き溜りが出来て居るし、折柄二〇米秒餘の風速が密林の梢をゴ―と通り過ぎる。テラス間の斜面は可なりカンカンにクラストして居たが、それでもスキーを脱ぐ必要もないので、森の木の間を幾度もジグザグをきつて登つて行つた。頂上は廣い臺地になつて密生した落葉松には、幹も枝も一面に樹氷が喰つ附いて居る。折しも吹きつづける風が梢を揺がし、絶え間なく全山は響いて居る。加藤はこの感じを蕭條と云つたが、全く當を得て居る。時に午後三時、三人は默然と雪の上に腰を下ろしてテルモスをすゝり、パンを嚼つた。さきに地圖を按じてこの最高峯を語り合つて居た時に、我々は森林限界を抜きんで銚子立つ白銀の稜線を想像して居たのであつた。だから今この深い樹海に埋れた最高峯の山容を見た時に我々はいさゝか度外れの感じが無いでは無かつた。そして事實若し我々がホロンバイルの曠野からそのまゝこの最高峯に送られたとしたら、恐らく我々は拍子ぬけがした事であらう。然し乍らサンドルの小屋を出發して以來、我々は恐らく無意識的に山としての興安嶺の良さについて獲得して居たのであらうか。この曇々と樹林に覆はれた山容を眺めた時に、何の不思議も感じる事はなかつた。反つて若しこの頂上が北アルプスの峯々のやうな稜角の附随したものであつたならば、恐らく我々には不調和に感じられた事であらう。實に興安嶺の山としての良さと云ふものは大きい地形と、その上に横がる樹木に飾られた美しい樹海との持つ限らない抱擁力にあるのであらう。三時半に頂上を辭して歸路につく。AC

までの距離幾何、やうやく夕暮の色は四邊に立ちこめて来た。最後に最高峰を望み得る地點に達した時には雲の隙からもれて輝く落日の光に峯は黄金色に光つて見えた。三人は一度後ろを振り返つて最後の別れを告げると、一目散に足根を越して行つた。一七五〇の頭では既に午後四時になつた。最早ゆつくり出来ぬ。天幕に待つ者のためにも一刻も惜しんで急がねばならない。高原乗越まで一散に滑り降りたが遂にこゝで薄暮になつた。往路と同様不相變強風が南から吹き上げて来る。すつかり暮れて了ふ前に一度哈爾哈の谷が美しい濃紫色に煙つた。夜ともなれば冷気が加はる。今日も電池は凍つて居て用を濟さない。ランタンの灯を頼みに、ともすれば吹き消される風の中に前方を見すかしてシューブルを求め乍ら歸つて行つた。森林地帯に入つたのは七時過ぎだつたらうか。やがてACに残つて居た岩橋が掩護のために迎へに出て来て呉れるのに出遇つた。心霊しの紅茶に今日の成功を語り合つて互に勵まし合ひ乍ら尙も歩む。一六〇〇米のホルまでの尾根が實に長かつた。ランタンを幾度か吹き消され更に連日來の登行に速度も鈍り、夜の更けると共に寒氣も益々加はつて四人共眉毛から鬚から、さては顔を包む毛皮にまで呼吸が皆眞白に凍りついた。流石に夜の興安嶺はヒシ／＼と迫るやうな淋しさを以て我々を包んだ。百鬼夜行とも云ふ可き形相の我々四人の一周も、この大森林の中では餘りに小さく感じられた。やつとの思ひで一六〇〇米の登りを越してACに歸りつく。キャンプでは藤太郎が唯一人心配して、火をどん／＼たいて温かいスープを作つて待つて居て呉れた。時は午前零時半、前後十六時間半の登行であつた。汗がグレンフェルの内部で凝結して肌着がビシ／＼になつて居る。そんなのを火に當てたり、飯を作つて食つたりして居るうち段々と落ついて来た。初めて我々の登行の完成の後の強い悦びが襲つて来た。此行を計畫し始めてから五ヶ月、京都驛頭を各先生や諸先輩に送られて出發して以來約二十日間、遂に我々はこの目的を完了したのだ。夜は更け

身體は疲労の極に近かつたが精神だけは未だ緊張して居て仲々睡くならなかつた。そしてシ・ラーフザ・クにもぐり込むと、濡れたシャツが氣持悪かつたし、兩脚の筋肉がしばしば硬直した。この日他の三名の隊員はBC及びサンドルに下つて明日の撤収の準備に忙しかつた。

一月十九日 ACは九時過ぎまで寝坊をして居た。日が高いので驚いて撤収の用意をする。昨日の疲れで今日は殆んど消耗し切つて居るが、然しどうしても今日撤収してはなければ兩二日の努力が無意味になつて了ふ。天幕以下夫々分擔してル・クに入れたが自力では立ち上れない。十時過ぎ出發する。就中岩橋、吉井は後れて了つて、撤収係から應援に来て呉れた磯村及び水川に助けられて、午後三時やつとBCに降りついた。BCにはもう人夫や馬が来て我々の歸りを待つて居る。記念撮影もそこ／＼に要領の良い兒島の指揮で人夫はまた／＼間にキャンプをたゝんで荷物を馬脊につけて出發した。一同は改めて登頂を祝つてエホーを三唱してから夕暮の色濃い伊敏源流の量に別れを告げて馬や人夫にふみ荒されたシ・ブルーをたどつてサンドルまで滑つて行つた。夜は再びウ・ツカが廻る。露人たちも我々の成功を祝つて呉れた。我々も又根據地として種々便宜を與へて呉れた事に對して改めて深く感謝した。深更まで期せずして交歓が続けられる。

五、歸 路

一月二十日 晴、サンドルよりヤドルへ。

二十一日 曇小雪、中継小屋へ。

二十二日 曇、ホンドルまで。

二十三日 晴、トラックにて出發、ボクト、南屯を経て海拉爾に歸還。

二十四日 各方面に挨拶の上、荷物整理。

二十五日 海拉爾發新京にて挨拶の上二十八日大連着。

二月一日 神戶歸還。

一月二十日 晴、微風、最低零下三十四度。

いよいよ歸途につく事になった。少年隊の二人は「コ／＼して居る。人夫達も歸れると云ふので大悦びだ。誰か小聲で

『興安嶺よいやさらば……』

と歌つて居た。小屋のロシア人たちも名残りを惜しんで何時までも手を振つて見送つて呉れる。革命前には伯爵の家だつたと云ふ大工をしてゐる若い男が淋しげな顔をして立つて居るのが何時までも印象に残つて居る。最後に御別れの意味なのであらうか空砲を四、五發打つて呉れた。久しく休養させてあつたので馬も元氣が出たやうだ。スピードもうんと早くなつて来る時より二割方早くヤドルの小舎に到着する。此處でも歡迎して呉れた。隊員一同の怪しげなロシア語の知識が今日も又一寸増加した。

一月二十一日、九時十五分出發、昨日は中途からスンギン山に登つて行く豫定を立てたが小雪がちらついて来たので大事をとつて中止する。歸り途は何故か速くなつて今日も四時間餘り早くスッ飛ぶ。小舎に着いたのは午後三時十五分、丁度折好くオロチンが十数名来て居た。オホシカの角を持つて賣りに来たのだつた。見るからにガッシリした體つきをして居る。腰にブチ込んで居る短剣を加藤がしきりに欲しがつた。猪の肉を賣つて呉れと申出ではねつけられる。寫眞班がしきりに活躍するが一寸もいやな顔はしないでニコニコして居る。夜は俄

然南京嶺の襲撃に遇つて大窮り、平気で居るのは大阪で鍛へた吉井と朝鮮育ちの水川兩人。

一月二十二日、午前九時十五分中繼小舎を出發、豫てこの小舎にもう一日滞在して附近の地質を調査したいと云ふ兒島の案もあつたが、昨夜の南京嶺に軟化してしひ、加ふるに自動車便が在るやも知れんと云ふので否決されて了つた。今日で完全に興安嶺から去つて了ふのだと思つて又充分に周囲の山々を見なほしてゐる。午後四時十五分、再び道難誤報の思ひ出の地、ホンゴルデンに到着した。丁度都合良く明朝ハイラルに歸るトラックがあると云ふのでそれを利用する事にして今宵はいよ／＼最後の泊りになつた。我々は主人の露人達を招待して共に乾盃し、人夫連中は高粱酒で一杯やつて居る。

一月二十三日、朝起きがけに荷物を整理してトラックに積む。人夫達は空機で先に出發させた。我々はあるだけの防寒をして午前十時トラックの上に乗る。自動車は雪の曠野の上を快速度で突進した。然し我々は馬鹿に寒かつた。この日は日中の温度零下八度と云ふ今まで一日もない格別の温かい日であつたのに不拘、我々にとつてはこの日の車上が一番苦しく、又凍傷の危険を痛感したのであつて、常にこんな状態で進ずる軍の人々の苦勞と危険とに對して深く感ずる處があつた。途中で人夫達を追ひ越して行く。我々は車の上からワァッと喚聲を上げる。彼等も亦手を舉げて名残り惜しげに我等の方を見送つて居る。不意に狩り出されてこの曠野の中へ連れて来られ、今まで歩いた事もない積雪期の山を言語不通の人々に引張り廻された彼等ではあつたが、ベースキャンプの出来た頃からは、互に意志も疏通して来て、彼等は我々に信頼するやうになり、我々も又或程度まで彼等に親しみを感じ夫々の個性や彼等全般に通有の樂天的な無爲性についても認識し得るやうになつた。そして人夫についてのパウアーの有名な豪語と思ひ合はせて、その真意に近いものを體得し得たかの様に感じないでもなかつた。

トラクタを途中ボクトに止め此處で再び往路の時の人々と遇ひ、約一時間休憩の後雨屯をへて午後五時十分、紅赤な夕陽の地平線に沈んで行く頃ハイラルの町に入つた。

翌日の夕方、兒島と都場は先發してチチハルに向ひ、本隊はその翌日（二十五日）午後二時半ハイラル驛を出發した。驛頭では蒙古少年隊の千田、須田が疾走して行く吾等の汽車を何時までも見送つて居て呉れた。

附記 氣象報告

內蒙古、ホロンバイル平原地方及び大興安嶺の地域の一般的條件に就いて内地と大いに異なる點としては大陸性である事、緯度が北によつて居る事が挙げられる。

以下各項目に分けて述べる。

一、日 光

北極星を仰いで見る程緯度が北によつて居るため日出は遅く日没は早い、一月中大體日出は午前八時、日没は午後四時過ぎ、日射時間は約八時間で一日の行動時間は大いに制限せられた。但し海明の間が可成長く全く暗くなるのは午後五時半頃であつた。

日光の量は測定は行はなかつたが、可成多量であると考へられた。空中には氷塵アイスダストが充満して浮遊し、日光を受けて光つて見える。

特に珍しかったのは幻日環で太陽の左右に太陽を中心とせる内外二重の虹があり上方に太陽を中心とせぬ太陽に對し凸なる二重の虹があり、此の六つの虹と太陽を通る水平線、又は鉛直線との交點は明るく輝き尾を引いて居る。幻日環は普通積雲層により生ずるものであるが此の地方では氷塵により生ずるらしい。

天候は快晴の日が多く、快晴十五日に對し薄曇七日であつた。

二、氣 溫

別表の通り、表中旅行中の最低氣溫とあるは最低溫度寒暖計を外氣中に曝して測定せる値で、正しくは寒暖計の誤差として〇・八度を引かなければならぬものである。

大體に於て日中は氣溫の高い日で零下二十六・七度、低い日で零下三十五・六度、夜に入ると零下四十度近くになり、最低は四日の午前八時で零下四十八・七度であつた。

日中の溫度は曇天で氣壓の低い時は高く、晴天で氣壓の高い時は低い事が認められた。
之等の氣溫は所謂三寒四溫で約十日位の週期を以つて變化するのが明瞭に認められる。

此の地方にも所謂氣溫の逆轉なる現象があり高層の方が低層より氣溫が高いとの事であるが、山に入つてからは平原より氣溫は一般に高かつた。

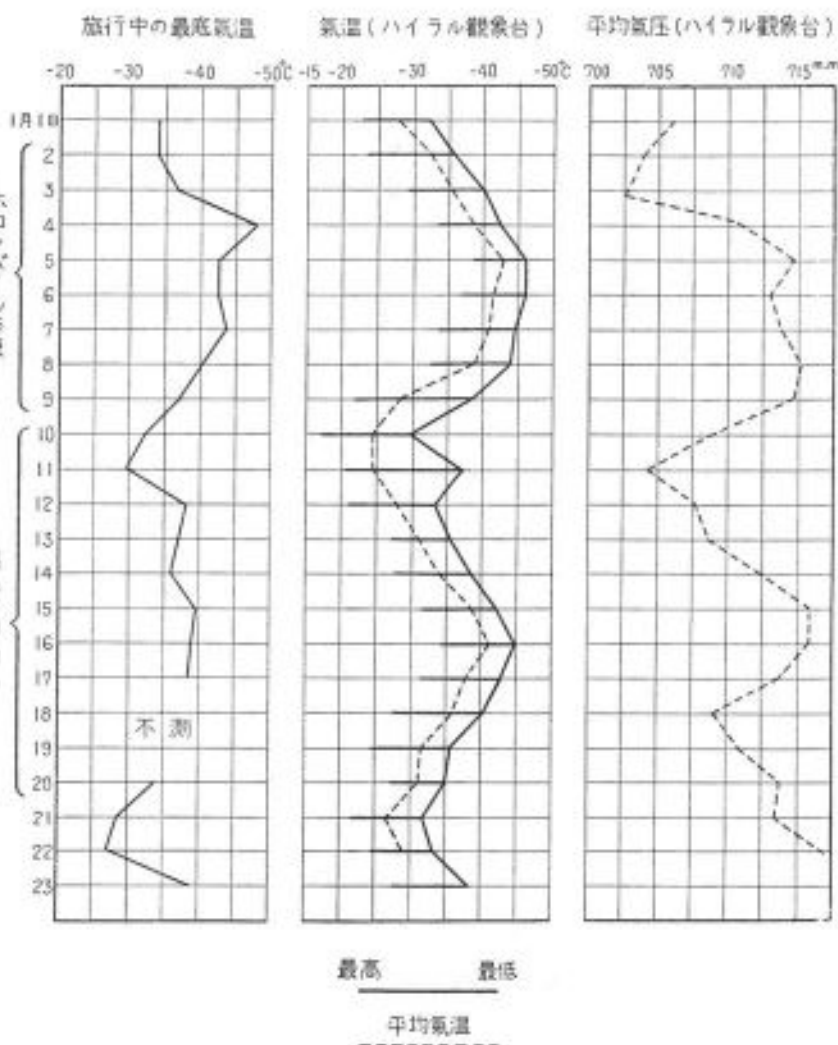
三、氣壓、濕度、風、雪

氣壓は別表の通り、氣溫の表と明瞭なる一致を示して居る。

雪のホロンバイルより大興安嶺へ 京大旅行部

ホロンバイル平原

興安嶺山中



温度は零下三十度の温度での水の蒸気圧は問題にならぬ程小さいものであるが、ハイラル観象臺の測定によると殆んど毎日百パーセントに近い値を示して居る。

風 殆んど毎日無風状態でハイラルの観象臺の統計によると一月の平均風速は毎秒一・一米であつた。もつとも山稜には多少の風があつた。

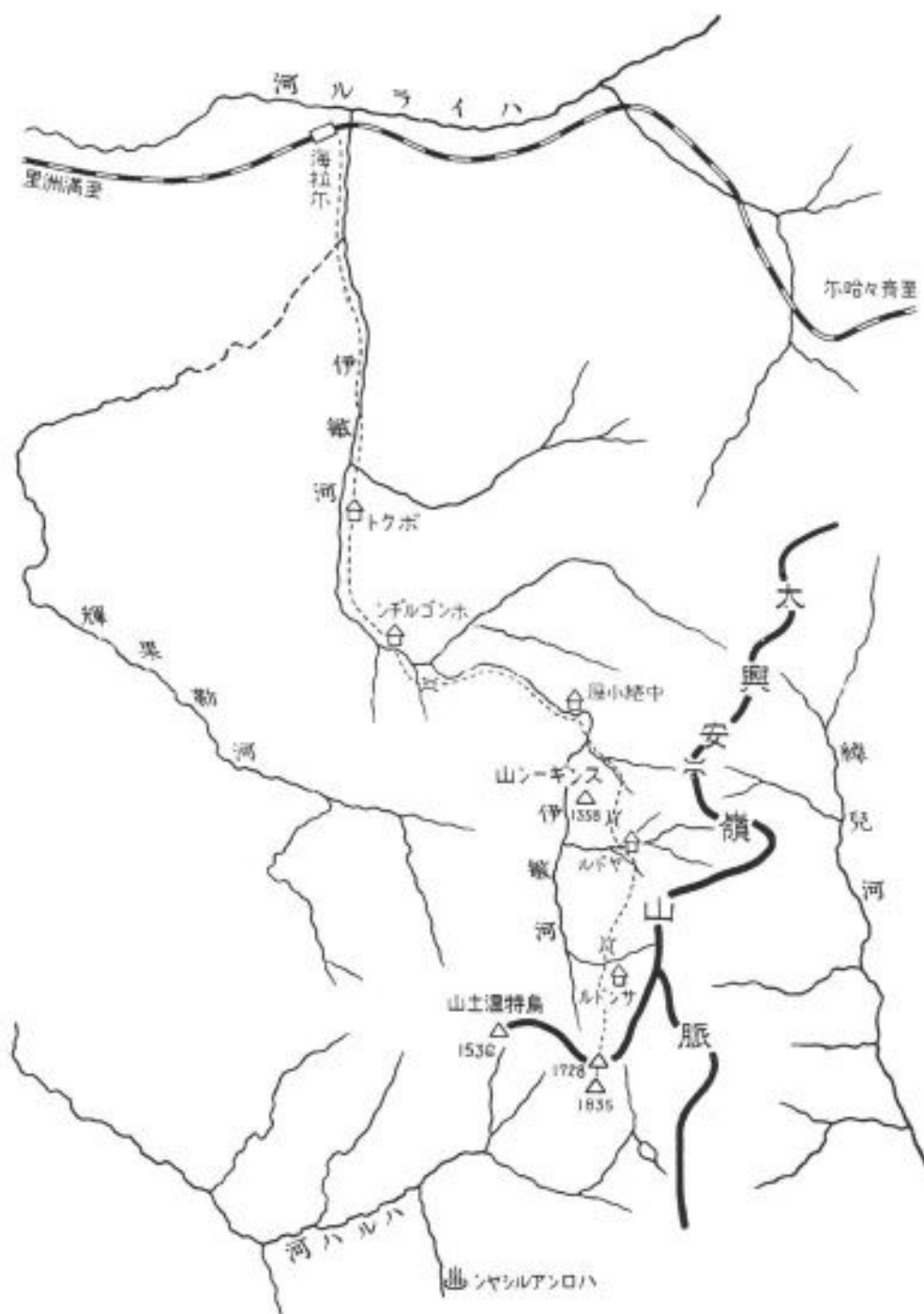
雪 旅行中降雪日数は四日で極く僅かの粉雪が降り、時には氷塵との區別のつかぬ程度の事もあつた。積雪量はホロンバイル平原で三〇センチ、興安嶺山中で六〇センチ程度である。尙、平年ハイラルに於ける初雪は十月五日、終雪は五月六日である。

四、寒氣に就いて

底冷えの問題に就いては今回の旅行中に於ても氣壓低く曇天の日も氣温は高いにも拘らずぐくぐくと寒く晴天の日の氣温の低い時の寒さとは全く異つた感である。此の理由に就いては普通温度の關係が云はれるが零下二十度三十度の水の蒸気圧は極小のもので殆んど問題にならぬ、しかも温度は前述の如く殆んど毎日百パーセントに近いのである。要するに底冷えの原因は昨年の白頭山の報告にあると同じく、温度度による空氣の傳導度の差以外の原因に依るものと思はれる。

次に日中に於ける零下三十度、四十度の寒さは如何なる程度のものか、具體的の例によつて示さう。

頭は、毛皮帽子を用ひたのであるが尙露出して居る頬額は縮覺に近い寒さを感じ、毛糸首巻又はラシヤ布を以つて眼から下を包む事により完全に寒氣を防ぎ得た。



手に毛革手袋を用ひ寒さを感じない。

足はフェルトの長靴と毛革靴下二枚を以つてしたが楕の上に静止して居ると浸み込む様な冷たさを感じる、十分程歩くと全く暖くなるが冷たいのを我慢して居ると凍傷の前兆である無感覚の状態を來す。

スキー行進中はスキー靴の上に毛皮のオーバースーースをはいたが行進中も静止中もフェルトの長靴と同様の保温度であつた。行進中は毛皮の上着なしでも充分暖く手も毛革の手袋を要しない位であるが立止まるとすぐに寒氣を覺えた。

x

x

x

當地方の氣象の文獻は大變貧しく詳しいデータを得るには左のものがある。

北滿洲氣象報告(昭和八年) 滿鐵ハルビン事務所發行

バルガの經濟概観 滿鐵發行

時憲書(曆) 滿洲國中央氣象臺發行

この地方の氣象觀測はハイラル、免渡河、滿洲里の三ヶ所で一九〇九年より觀象臺を設けてやつて居り、其の他ハロンアルシヤン、ハンダガヤ、甘珠兒廟等に小規模の觀測所がある。

樺太東北山脈

同志社大學 山岳部

- 一、樺太へ
- 二、出 發
- 三、敷 香
- 四、フンドラ地帯へ
- 五、山にかゝる
- 六、振戸山
- 七、北沖見山と川崎山
- 八、山を下る
- 九、敷香を發つて歸途に
- 十、旅を終へて

一、樺 太 へ

我が山岳部の樺太への計畫は決して我々の創案でなく、先輩が既に計畫した所のもので、それがたゞ都合悪く取止めになつて居たものである。

我々にとつては樺太ならば決して無謀な余てではなく可能な様に思はれた。そして何時も荒された所ばかりでは満足が出来ない、未だ曾て山靴で荒されない原始の影を宿した未知なものが知りたい。そして次第に多くの経

驗を得、理想へ到達せんが爲にその一里塚として、昨秋愈々此の樺太行の決心をしたのであつた。

我々が日本領土内でも冬冬の休暇にやれるエクスペディション風な旅行といふ點からしても、零下四十数度の寒氣とを経験するといふ點からしても樺太は最も適して居た。我々は一生懸命に仕事をした。遠征をやるのは登山といふことより仕事の大切なことは今度つくづく判つたことであるが、全然不馴れた我等には最初は全くまづい仕事ぶり、従つて、最初は幾分不安な氣持もあつたが、互に勵まし合ひ仕事に馴れて来るに従ひ其の確實性を増し、他方種々の研究によつて、之を我々が主にやつて来た登山形式とは異つた統制ある團體としての旅行に自信を得て來、第二段の準備に取掛つた。

かくて部員協力の結果基金に關しても相當の額を擧げる見通しがつき、メムバーも入江のみは就職に關する問題の爲めに参加が確定しなかつたが、他の七名は全部確定し、茲に全力を擧げて食料、裝備、器具等の準備に取掛つた。他方樺太事情の研究も続けられ山岳界に於いて樺太事情殊にその山地に明るい北海道帝國大學地質學教室佐々保雄氏にも色々御たづねし、大體山地の概略だけは頭に描く事が出来た。

だが我々を最も悩ました事は、京都に於いて地形を知るべき地圖が得られない事であつた。上京して關係官廳筋を訪れて見たが得る所は少かつた。拓務省の樺太廳出張所をも訪ねたが其處で得たものは色刷りの觀光圖の様なものであつた。

我々はこの遠征に二つの目的地を持つて居た。それは我々は其後の事情發展によりそれに適應した處置を採らねばならなかつた。

一、それは数寄より初間川流域の京都帝大演習林を根據地とし、数寄岳附近を北名好川に出で名好町に出づる

横断コース。

二、は東北山脈を目ざして（振戸岳、神威岳方面）氣屯嶺から氣屯川を下り幌内川の支流を遡つて行くコースと、多摩加湖を横切り、留久王川を遡り池田の官行事務所に出でそれより取り着くコース。

我々は先輩とも協議の上、一を第一案として準備を進めて専ら其の研究をして居たのだつたが、第二案よりも多くの費用を要し、殊に悪天候に見舞はれれば莫大な費用になるかも知れず、其の上名好からは歸途船によらねばならないが、それにしても一月二月は凍結の恐れがあるので色々考へた結果、遂に之を放棄して第二案に決定した。第二案については我々は以前より少しの事を知つて居た。即ち此の方面の奥地は土人が狩獵に入る外は餘り人が入らないと言ふ事（勿論京大のバーチ及び佐々保雄氏は夏に入つて居られるが）、と神威岳は樺太の山の特徴たる枯木や倒木の荒廢たるものでなく、岩の壁を有し、低いながらも美しい形をそなへて居る事、池田の方面及び東海岸遠内方面は近年官行事業が進み、食料の供給等にも萬事都合が良いと言ふ事と、輸送に關しても馬糞大橋を使へるから樂であらうと言ふ事であつた。

かくて第二案決定後は餘り日數も無いので、充分なる研究が出来なかつた爲め、我々の冬山で得た知識と比較的氣温湿度の似た白頭山で京都帝大の使用した食料のリストとにより、我々に必要なものを考へて早速之等を買入れた。食料の問題で我々が之迄悩んで居た重量の問題に關しては樺太に於いては餘り心配が無かつた。何故なら我等は樺太ではベースキャンプの比較的直ぐ近くまで橋で運ぶ事が出来ると言ふ事を確信して居たからである。

裝備に關しては成る可く之迄使つて居たものを使用する様にして、先輩及び部員中より借りたもので間に合し、

テント三ツ（吊下グ大一、カマボコ型二）と防水（風）ズボン、オーバー・シューズ、及び毛糸で作った帽子等を作つただけであつた。そして出来れば樺太の山脈を四季中歩いて居る土人特有の装備を借りて研究をして見やうと思つて居た。實際我々は今度の旅行に於いてそれ等を充分研究する事が出来た。

かくする一方、依頼状、報告書を樺太廳及び敷香支廳、或ひは南新開以北の道々の役場及び新聞社、調候所等にも送つて行程の同滑をはかつた。かくして豫科試験終了後三日を経て、十二月二十日先聲團も我々の熱意を認めてくれ、入江の参加も確定し、此處に隊員八名は先輩及び部員の支持によつて結成式を舉げる事が出来た。編成を左に記す。

隊長 入江保太

三崎 篤 西本榮一 和田 保 黒川陽三

山谷定二 舟越哲夫 來田義夫

留守司令 廣見 正

二、出 發

我々は出来るだけの準備をすました。樺太よりの詳しい事情を知り、又依頼打合せ等の爲に、入江、黒川の二名が先發隊として十二月二十一日午前十時四十五分の青森行で出發した。それと共に石炭箱、菰包み、行李等十七個の荷物も送つた。

札幌に立寄つた前記二名は北大の地質學教室に佐々氏を御訪ねし、東北山脈に就いて色々教示を受けた。そし

て神威岳及び振戸山へ入るには池田の官行事務所を利用するのが最上の方法である事を知った。

それから彼等は豊原に到着したが、翌日は日曜で樺太廳が休みの爲め郊外春日高原へ麻織の植田氏の案内で遊びに行つた。所が皆リーススキーで軽るさうに滑つて居るが、こちらは普通の重いスキーでそれに今年に入つて始めてだつたものだから小さくなつて滑つて居た所が、「ワックスの研究と足ならしに同大部員一寸一滑り」と翌日の新聞に写真まで出されて騒いだ。

十二月二十六日は樺太廳へ行つて内務、警察、林務の各部へ挨拶をし、一方本隊は未だ出来上らなかつた裝備品を集めたり、何か忘れ物が無いかと考へ思ひ出せば皆で相談して之を附け足したりした。

どんよりと曇つた二十四日本隊は多数の見送りを受けて出發した。寢臺車にユックリと落着いた六人は、之迄の複雑な仕事を顧みて今こそホットした。ほんとに目まぐるしい二ヶ月であつた。ルックサクハツとスキー、ピッケル各八ツ、他に五個の小さな荷物(藥箱、測量器等)を手荷物(寢臺車)の定重量の超過を恐れて、厄介であつたが車内へ持込み迷惑とは知りながら横の方へ積んで居たが、車掌が同情して良い場所を作つてくれて非常に有難かつた。丁度クリスマススイーズに當るので、食堂車へ出掛けアルコールで祝はうと云ふ氣は皆あつたのだが、それは後の話でさすがに云ひ出すものはなかつた。青森へ一時間の延着で雪のちらつく中を連絡船に乗り込んだ。港内は静かであつたが突堤を出た瞬間から船はうねりに乗り始め大きくゆれ出した。だが函館へ着く時分から空は晴れ出し、駒ヶ岳の高原地帯を汽車がうね／＼と走る頃は雪がきら／＼と輝き、體はほこ／＼と暖かくついうと／＼と寝てしまつた。稚内よりの連絡船は二日に一度の出帆なので人が込むのでは無いかと心配したが、ゆつくりとして居て船員もすつと親切だし海も大して荒れず氣持が良かった。

大泊に着き梓太に第一歩を踏んで直ちに豊原に向つた。豊原驛では應酬関係の方々、記者團の出現へを受け、道々先發隊の其の後の結果を聞きながら本廳農林部林業課の歡迎宴に出た。此處には社會教育官森川氏も來られ、諸氏より色々と激勵の言葉を戴き、林業課技師の服部成夫氏が山の地理や事情に詳しいので色々御たづねし、又敷香支廳の林業課の方へも打合せをして戴き、其の上本廳の山の好きな方々には山岳地帯の簡単な地圖を書いて戴いたり御世話になつた。豊原の街ではかんかんになつた雪の上をスキーをはいたのや、スケートをはいた子供が一緒に遊んで居た。梓太では大抵はレーススキーをはいてスピードを主に遊んで居る様だが、此の頃では大分山へ出かける様になつたらしい。

其の夜は驛前の花屋ホテルで一泊し、翌日二十七日朝早く、豊原から一日一回の南新開行の直通の汽車に乗つた。客車毎に小さな圓いストープが取り付けてあつて、時々車掌が石炭を入りに来る。主に低い丘陵の間を縫ふ様に走る。一面の雪でまつ白な丘に由火事に焼け残つた枯木がボツボツと立つて居るだけで何の變化もない。そして人里離れた奥にも原始林の姿を何處にも見出し得ない。有名な梓太富士とやらも別に變つたものでなく、それから少し又退屈な時が過ぎて、突阻山が正面に見える。梓太には珍らしくツンと突つ立つて居るがそれも正面に廻ればのんびんだらりの一本の尾根だ。

そして驛に着く度に長い間汽車は休む。何と言つても貨車もくつつけて居るのだから随分手間取る。梓太の雪の特徴である所の何處から降つて来るのか解らない様な粉雪。堅くふみ固められてつる／＼したその雪をキツ／＼とふむ音。その音の外は静まり返つた構内に時々哀れな聲で「ニーバイン・エバイン」と呼ぶ賣子の聲が聞えるだけ。陽は照つて居ても何となく寒むさうな聲だが、十銭出して大きなロシアパンを紙につくんでもらつて

手に採るとホッコリと暖かくやはらかい。そしてあつさとした甘さがあつて何より美味であつた。ロシア娘の賣つて居る所があつたが隊員の或る者が寫眞を取ると「寫眞取りに來たんぢないわよッ」と大きな聲でどなられて驚いて居た。アメリカ人のぢいさんも賣つてたが、母國語は何も知らないと同乗客が言つて居た。丁度北海道から何處かの大學の教授らしい一茶國人が乗つて居たが、彼が話しかけても唯一寸笑つただけで遠い異國で同國人と會つても特別の感じも起らなかつたらしい。

この遅い汽車に十二時間（と言つても決して嫌な感じではない）乗つて六時過ぎ南新開の小さな驛に着いた。此處が日本最北の驛である。此處で荷物をトラクタにたのんで直ちに大きなバスで敷香に向ふ。バスに保溫装置がやつてあるので、だん／＼暖かくなつて來たが、その設備の爲にエンジンが焼けてくさくつて仕様が無い。けれどもやはり少し疲れて居たのか何時の間にか寝てしまつたものもある。

二時間位過ぎてふと氣づくに左側の彼方にずーと列んで灯が見える。隣りの人に聞けば王子製紙の人絹工場だと教えてくれた。我々は樺太の端にこんな大きな工場があるのかと驚いたが、やがて自動車が行へ入つて二度がつくりした。我々が調べた敷香の町は決してこんな大きなものでは無かつた。調べた書物は決して古くは無いのだが。山形屋に着けば記者團が出迎へてくれ、色々と打合せをしたが其の日に話した事が翌日の新聞に堂々と大きな活字で載つて居た。勿論大變な好意を持つて書かれて居たのだが。

三、敷 香

翌二十八日には敷香時報社の栗坂君と共に全員乗つて樺太敷香支應を訪れ、支應長や山の好きな方々に又は土

人教育に直接関係のある方々にも面會して御話を承り、別室でドミトリ・ウイノクロフ氏と會つた。彼は堂々たる體魄をしてむつとりとして居るが、氣が乗れば大聲を張り上げ目をきら／＼として、自分達が四季中馴鹿を連れて飛越つて居る山の様子を話し、ツンドラ地帯の輸送には馴鹿の最適である事を説き、コースも眞直ぐ彼の牧場より振戸山を目ざす事をすゝめた。だが最初我々は留久玉上流の池田方面より山地へ入るべく用意をして居たし、支那の方々にも其の方が良いと主張されたので、先づ此の方面に最も詳しい敷香林務署をたづねる事にして三崎、山谷、黒川の三人が出向いた。署長にも快よく會つて戴き、池田方面よりするのが最良の方法なる事を説かれ、人夫も既に都合して居るとの事だつた。之は豊原本郷の服部氏がたのんで下さつたものである。

我々は當然に池田を根據地として入ると思はれたのだが、我々の装備は既に先般及び我々にとつて試験すみのものばかりだ。だから我々はそれ等を犠牲にして全行程を土人のみと歩き、成るべく彼等の装備品を使用し、馴鹿の輸送力も研究しやうと考へ出し、支那諸兄の反對を押して切つてウイノクロフ氏と約束し、林務署の御世話になつた人夫も斷り、コースも振戸山へ眞直ぐ進みそれから池田方面へ下つて来る事にした。(馴鹿を輸送に當て、池田の方面に根據地を置けば其の食料が不足で長期滞在が困難なのだ。)午後入江、西本、和田は王子製紙のバルブ工場を訪れ萬一の場合を御願ひした。

支那を辭した我々は街を見物しながら山形屋旅館へ歸つたのだが、道路は井然として、町も新興の町らしく、少々バラツキじみた家が主の様だつたが、それでも廣い通りに人通りも繁しく、殊に年末の事とて活氣を呈して居た。實際こんな日本の端にしかも夏季の船便と、南新間の鐵道の終點から十幾里も離れた此の敷香との間に敷香運輸會社のバス、及びトラックの自動車便しかないこの砂の町が(敷香はツンドラ地帯の端で砂地である爲め、

従つて農作物も少い。こんなに繁華なのには皆驚いた。旅館に歸つて來ると、二官部長から激勵の電報が届いて居た。

夜十時頃トラックで荷物が届いたので、一應調べ、途中必要なもの及びコース變更の爲め必要で無くなつたものを出して、ウィノクロフ氏へあづける荷物を整理した。床についてからも植民地らしく、何時までも何處でやつてるのかガッ／＼と古びた蓄音機が喚いて居た。

翌二十九日は前日とは打つて變つてどんよりと曇つた空に、時々風が通りの砂を吹き上げて居た。我々はアンバタダの最高峰ピリンガイと神威岳の二つを目ざし、振戸山へ登つた後は一時分れ神威岳の南方の定められた地點で落合ふ事にし荷物も大體その様にした。

十時頃に釧路時報社の栗坂、久保田の兩記者が來て、幌内川の三角洲オタスの杜へ案内してくれた。もう幌内川はすっかり凍りついて、子供や前掛姿の小僧達がスケートでピカピカに光つた氷の上を走つて居た。そして河口の方には二三十頭一緒にくっついた犬橋が炭の様なものをつけて走つて居るのが見えて居た。しかし河の真中に行くに従つて色が色々と變るので何だか氣持が悪かつた。河を渡つて土人部落に着くと、一斉に犬が吠え出した。そして外で遊んで居た子供達も皆逃げる様に小屋の中へ隠れてしまつて、何だかいきなり門戸をとざされて排斥された様な氣持になつたが、決してそんな氣持でなくて恥かしがつてるのだと聞かされて安心した。

彼等土人の大部分は遊牧、狩漁等に從事して移住して居たが、近年には次第に定住する様になり、文化の向上と共に子供の教育の必要も知り、衛生思想も普及し、家屋も改造して居るが、この二、三年間、土人人口は減少して居る。土人の生活、家屋の様式及び其の分布統計等參考文獻は澤山あるが、比較的古いものを近年になつて

集めたものが多いため、近年はそれ等とは随分異なる様である。

先づオクスの杜を入ると直ぐにバラック建の四方に小さな窓を持ったそして木の皮で作った屋根の上から丁字形の煙突が見えて居り、アザラシの皮を二つ三つ家の横つペラに張つて、其の下には犬が四五匹、胡散臭そうにこちらを見て居ると言つた様な家が散在して居るのを見出す。そして又所々には大きな結木が深山立木と立木の間に横木をこさへて之にもたせかけてある。が土人部落へ来て先づ感付くのは、一種特有のム。とする何とも言へない臭ひだ。或る家の中へ寫眞をとりに入つたが、くさくてゆつくりと様子等調べる事も出来ずにバネリとやつて出て来たが、それでも婦人が刺繍をして居て其の横のストープには火がちよろ／＼と燃え、壁には新聞紙や色々の紙がはつてあり、目覚まし時計が置いてあつたのが目についた。あの臭い香の元を聞いたが記者の栗坂君はあれはあんな臭ひが家や體にくつついてるんだと答へたが、魚のくさつた様なのをぐ／＼と煮て居た所を見ると成程と思つた。

土人教育所へ行く途中、フト一軒の家をのぞくと、前と同じ様な構造の家でストープの横で一人の男が「ストー」と言つてスキーと同じ様なものだが幅が二倍半から三倍位あつてすつと短く、アザラシ、又は馴鹿の毛皮を全體にニカワで張り付け、ビンド。ングとなるものも馴鹿の細い皮で出来て居て後ろ向に其の上に乗り其のヒモの中へ足を入れてから正面を向くと言つたものであるが、之を一生懸命作つて居た。

土人教育所には土人の作工物等が棚の上に列んで居て、机の上にフレップの鉢植が置いてあつた。此處でも土人の書いた簡単な地図を見せてもらつたり、彼等が賣買婚をなし、父より年長を大父、父より年下はたとへ叔父でも兄と呼び一族は仲が良いとか、應より幌内川の漁獲量を與へられて特別の保護を與へられて居る事とか、死

人のあつた時には其の死體の横で一族を上げて泣き、後で酒を飲むとか、變死人の場合は泣かないとか。さう言つた色々の面白おかしい話を聞き、主人の作つたストーの註文をして、それから白樺の林の間を河に沿つてウィノクロフ氏の家へ行つた。

道々同じ様に吾々は犬に吠えられたが、こちらの方は前の様式とは異つて、道路を挟んで一列に並び、丸太を積み重ねて其の間には苔とか、泥の様なものがつめてあつた。此處では前にこりて、家の中へは入らなかつたが、こゝらは前の様に臭くは無いさうであつた。前者はギリヤーク(ニクブン)、後者はオロコが主に住んで居るらしい。途中地上一米位の高さに櫓をくんで中に熊の子を入れて居た家があつた。此處でも大きなアザラシの毛皮を軒に乾して居る家もあつた。やがて白樺林の中に不似合な家が見える。やはり丸太を積み重ねた様ではあるが、窓も白くペンキ塗りで大きく、屋根も一見スレートの様に見える。やはり二棟になつて居り、少し離れて倉庫がある。これがウィノクロフ氏の家だ。其の時馴鹿が横の木につないであるのが目についた。實物を見るのは之が始めてなので最初は少し恐れをなしたが、直ぐおとなしいと言ふ事を知り、熊の先を一寸叩いて見たりして相手になつて居た。ウィノクロフ氏は支廳ではロシア語を話し、通譯及び牧場管理人として梅宮氏を雇つて居るが彼の家へ行くと、さあ、みーなーさんどうぞお上り下さい」と、一寸聞きにくい日本語で話す、最初はおかしかつたが次第に慣れて來た。

彼は大きな牧場三つを持ち馴鹿八百頭を持つて物品の輸送及び狩獵で以て生活して居るらしかつたが、青年時代はロシアの宗教大學を卒業し、僧正に従つて諸國を歩いて居たが、ヤクーツ(蒙古族の一種らしい)の疲弊をなげき政治方面に活動し、家庭が地主の所から勢力を張つて居た。所がソヴェート革命となるに及び、新政權

からに生まれ、追はれて石油鑛の技師等をやつて居たが、遂に見付けられ捕へられて一時は生命さへもあやふく
なつた。幸ひ司令官が學校友達だったので、わざと逃げられる様に仕向けられ、妻の待つ山道へ逃れ、アレキサン
ドルフスカヤのあたりで多聞中將の了解を得て、梅宮氏や妻子及び今度も行を共にしたテレンティと言ふオロ
コ人等七八名を連れて東北山脈に沿つて日本領へ逃れ、数々の三角洲オタスの社に居住する事を許されたのださ
うだ。だから彼は博識で毎日の新聞は梅宮氏に讀まし日本の政治問題、經濟問題にも深い関心を持ち、極力フ
シズムを支持する。彼は言ふ「今や歐洲、亞細亞共に多難な時である。そして歐洲諸國は亞細亞に侵入しよう
とする。それは何故か。亞細亞には大寶庫がある。これをみす／＼歐洲にとられてたまものか。日本は天皇を上
に大亞細亞帝國を建設し、しかして歐洲を従へて世界に君臨しなければならぬ。それには日本はシベリアに第一
に目を付けなければならぬ。だから若き諸君等よ、シベリアに關心を持つて彼處にも出掛けなければならぬ。」
と。

食堂に入ると正面には天皇、皇后兩陛下の御寫眞を掲げ、壁一面の世界大地圖、横側にはマリアの像や自分が
東京で有力者と會見した時の寫眞等を配置良くかざり、テーブルには小さな花がかざられ、眞白なテーブルクロ
ースも氣持良く布かれて居た。彼は我々に自家製のロシアパン、馴鹿のバターフレップのジャム、ビスケット、
ウエファース、チコレート等を出してもてなしてくれた。そして東北山脈の地圖を書いて説明してくれ、話が
はづんだ時に、彼自身の同行を頼んだ所、皆さんがさう言つてくれるならと快よく引き受けてくれた。其の上馴
鹿も必要以上に貸してくれる事になり、我々は安心して引上げた。

暖い空から急に外へ出るとひやりとして氣持が良かつたが、何處かへ丁度炭を運んでつた樵が歸つて來たので



それに乗せてもらつて河を横切り旅館へ歸り着いた。夕食後入江、山谷の兩名は人夫を世話してもらつた林務省の石川久一氏宅へ斷りの挨拶に出向いた。丁度彼等が歸つて来た時分から風がヒューッとうなり出したので、心配して外をのぞくと前の四ツ辻の街燈の邊りに大粒の雪が白く亂舞して居た。

四、ツンドラ地帯へ

昨夜雪が舞つて居た窓には、一夜明けるとキラ／＼と太陽が當つて居る。氣づかつて居た天氣がからりと晴れ我々の前途を祝願して居る様だ。

幌内川の氷の上に雪が積つて風にあふられる毎に其處此處で小さな渦を巻いて居る、きら／＼と照る陽の反射がまぶしい。ウィノクロフ氏の家へ着けばもう荷作りは大部分終り、ルックサックとスリーピング・バッグで作つた氣持の良ささうな客席が我々を待つて居た。角の立派にそろつたのや、片一方折れたのや、丸つきり角が無く切り口から血を少し出して居る馴鹿等がおとなしく二匹づゝ並んで居る。五十頭の馴鹿をつれて旅に出るのだと思ふと嬉しくなる。土人達の習慣として出發前には先づ一ぱいの紅茶を飲んで喉を取りそして出かける。我々もそれに従つて食堂に入り前祝ひをした。今日はウィノクロフ氏もやはり昔からあばれまわつた狩場に出掛けて行くのが嬉しいのか大變元氣だ、そして何かと注意をしてティレンティ、グレゴリイ等のオロコ人に指圖をして居る。

十一時半準備萬端整ひ愈々出發、我々は橋の上は寒いと言ふので皆毛皮のコートを着て二人宛一つの橋に乗る。馴鹿は走る。仲々面白い。空は良く晴れて居るし大して寒くはない。時々グッググと氣持の良い音を立て

て横は走る。見れば先頭はメックと言ふ中年の土人が馴鹿に乗つて鞭を當てゝ居る。我等は何とも言へない氣持になつて歌なんか歌ひ出す。やがて横は小さな森林の間を抜け、又所々ボツン／＼と枯木が立つて居る外形の變化も無い平坦なツンドラ地帯を走る。ズー／＼と向ふに丘陵の様な山がかすんで居る。然し左方（西方）は中央山脈が雪におほはれ、一寸内地の山を思はせる様に速なり、彼方の雲に接するあたりぼんやりと紫色に美しい。

地圖無く、又之と言つた目じるし無き此のあたりでは唯大體の方向を知るのみで、二列に連ねた五十頭の馴鹿にそれ／＼身を委ねて時々他の一人に話しかけるだけであつた。やがて小さな堤の様な所へ登ると、川だ、振戸川の支流だが時々馴鹿が滑る。之を横切つて少し行くと又小さな川が現れた。未だ一時を少し過ぎたばかりだが、何だか日の光りが弱々しい様な氣がし出す。此の川沿ひに白木の新しい小屋があつた、木槎の小屋ださうだが細い煙が上つて居た。やがて細長く連なつた林を横切つて又少し進むと、ボロドと言ふ川へ来る、之を越してその上流に彼等が時々泊るこんもりとした林がある、此處を今日の泊り場と決める。

直ちに馴鹿を放す。すると彼等はのそり／＼と鼻の先で雪をかき分けながら草をさがして食つて居る、そしてあちらこちらと別れて行く。隊員一同故しても良いのかと心配したが明日集めると聞いて安心はしたものの、何か物足らぬ氣持であつた。土人達は眞直ぐに伸びたエゾ松、トド松を二三度鋏を入れて見事倒し、横なぐりに枝をはらふ。其の間我等は雪をふみ固めはられた枝を敷く、我々は貧しい經濟の中から大型のテントを新調したのだが、之等は敷香に置き専ら土人の裝備によつたので、靴もスカーをはく時の用意に持つては來たが土人から買つたケリと言つて、底はアザラシの毛皮で作られ、踵からは上は馴鹿の毛皮で作つた長靴の様なものを使用した。そしてその内にも一つ馴鹿のやはらかい毛皮で作つた靴下位の長さのものを使用して又特に此の兩者の間に乾燥

した草を入れるのであるが、良く乾かしておけば非常に暖かである。彼等の使用するテントは樺太の様な真直ぐに伸びた木のある所では質に便利である、我等のテントは吊り下げだが彼等のはテントの内部へ木を入れ、之でテントを吊り上げる、唯之だけだから非常に速い。張つた型は小屋型だが吊上げる横木は先端をV字型に切つた木を真直ぐに二本立てその上に置かれる、そしてやはり横へひつづるのである。布地は薄い地で中でストーブをたくと、端の方の何時も引つ張る所とか、良くすれる所等から雪が落ちて来る所もあった。

扱てテントを張るのが終るとストーブを入れる。之は長さ五十程位の幅二十五程位高さ二十程の横に長い箱型である。之を四本の打込んだ枕の上にちよんと器用に置き、之にへの字の倒さにした様な煙突をくつつければそれで一夜の暖房装置が出来上がる。テントの布地と煙突との接合箇所には日の丸の旗の赤い所をくりぬいた様なブリヤ板をこさへ、それをテントの内部に作られた、これも日の丸の型をした袋に入れて其中へ煙突を通す、煙突が横へ出て居るので風があつても火の粉でテントをこがす心配も無かつた。

かくする内に川の氷を割つて水は汲まれ、鍋で大きな木を削し之で薪が作られる。此處へ着いた時は何時の間にかうすら寒くなり、日も傾いたので（勿論正午でもずつと横からばかり照つて居るのだが）何時頃かしらと時計を見ると未だ二時半であつた。今度の旅行では我々は三時半にはテント場に到着して居なければならなかつた、四時にはもはや薄暗くなり温度が次第に下降を始める、我々はかうした長い旅に決して無理は出来ない。

テントの外では大きな焚火が燃えて、飯盒の蓋のすき間からブツ／＼と泡が出て居る。内部はストーブが真赤に焼けて其の上では暖い汁が甘さうな香をたてゐる。

土人のかうした仕事ぶりには馴れきつた敏捷さがあり、黙々として自分の受持をあつさりと片付ける、ウイノ

クロフ氏は偉大な體を動かして實に良く働き彼の命令には土人は絶対服従する。

彼等は自分達のも合して、二つのテントを建設すると何時の間にか飯をすまして居る。彼等は紅茶さへ沸かせばパンなら何とでも出来る、彼等のパンは一度焼いたパンを再び焼き直し、固くして之に豚の油等をつけて食べる。勿論他の肉類も食べるのだが、飯を食ふ場合でも油と鹽で食つてゐる事もあつた。我々はベースキャンプで其の時のアドヴァンスにより食料のベックをする積りでゐたので、(同様のものを一緒にした)ノートに記した箱の番號により、色々の箱を開けなければならなかつた。

八時夕食を終へて外に出れば星がキラ／＼と冷く光り、鈴をつけた一番賢い親分馴鹿がテントの横でチリンチリンと鈴を鳴らして雪をかき分けて居た。寒いので寒暖計をのぞくと零下二十五度を指して居た。

三十一日

何だかしん／＼と寒く寝て居る様だが悪い事だけは頭にある。あつちでござ／＼こつちでござ／＼遂に三時半には皆起き出してストーブに薪をくべ始めた。「おい寒いぢやないか、何度位だらう」そこで西本の觀測係が調べると零下三十三度だ。内地の露營では未だ経験しなかつた寒さだ、ウイノクロフ氏のテントでも起きてゐるのか話し聲が聞える。昨夜汲んでおいた水を沸かして汁をこさへたり飯をたく。

五時半には朝食をすまし出發の用意をして居たが薄暗がりでは仕方がない、やがて少し明るくなると土人達は馴鹿をさがしに出掛けた、外へ出ると鼻の穴がピク／＼と引張る。夜明けの景色が良いので寫眞機を出して來て息をこらしてシューターを切らうとしたがこいつが動かない、ストーブで暖めて寫した。

前から書物で知つて居た通り空氣が乾燥して居る様な氣がして實際轡の紐を締める手もいたくつてにぶり勝たつた。やがてグレゴリー、ティレンティ、メック等が馴鹿を連れて來たが、これをつなぐのを見て居ると廣いものだから逃げる。我々も土人達があせて居るのを見てるのは面白かつたが、そんな事として居れず「シー」と追つてやつと皆捕へ又轡を速ねて進んだ。

轡に乗つて居ても昨日とは違つて寒い。更に我々をこまらしたのは昨日以上に變化の無い事だ。相變らず左方には中央山脈が速なつて居るがそれも又變化がなく、轡の上でむつりして居るのがたまらなくなつて來た。そして足の先が無性に冷い。遂に意を決して轡から降りて之について走る。もぐるのは足首位で苦しくないが、毛皮等を着込んでるので體が軽く動かない。仕方なく又轡に乗る。轡に乗ると足の股や先が冷くなる。昨日喜んだ轡も今日は皆嫌氣がさして來た。

やがて前面に細長く横に林が見え出した。之中へ入つて行くと川に出る、馴鹿がツルリと滑るので可哀そうだが面白かつた。此の邊りから一帯ウィノクロフ氏が馴鹿の牧場にするだけに、ツンドラの草も大きいのがガムシ・ラに走る。馴鹿の振動が大きく時々ドン、ドン、ドンと来る。それで今日は荷物が時々轡から落ちさうになるので土人を呼んで直さす。途中枯木林で一休みをする、轡から降りて歩かうとするが何だか足がしびれた様で歩きにくい、餘りの寒さに皆で相撲をとる。毛皮を着るので自由がきかず二人共一緒にころぶ（零下十二度）。又轡に乗つて黙々と走る馴鹿は鼻の先を白くして仕方が無いと言つた様な顔をして走つて居る。北へ北へと進む事、更に三時間、もはや日の影もほんの申し譯の縁で次第に寒さも身にこたえる、ほんとに轡には倦きて來た時、前から順番に傳言が來た「牧場はあの林の中だ」遂に來たんだ、やれやれと喜んだ。

林の手前で西へ、林に沿つて進みトクソ川に沿つて林の中へ入る。と其處に棚が見える、棚は其處に露營して居る番人によつてはすされ我々一行は中へ入つた。其處には四つのテントが張られ、横には櫓を組んで其の上に色々な道具を藏つて馴鹿に壊されない様にして居た。

テントは我々が旅行中毎日使用して居るのと同様のものだが、半定住のせいで下に敷いてある木の枝もうんと多く、隙間もきれいに防ぎ、石炭箱の机が置いてあつたり、マリヤの像がブラ下つて居たり、仲々面白い感じであつた。此處にはティレンティの祖母やグレゴリーの妹が居たが彼等同志、話して居るのを聞いて居ると、丁度映画で聞くエスキモーの話し聲の何處かにひつかゝつた様な可愛いゝかすかな聲音であつた。

しばらく暖を採つて荷物の整理にかゝつた。愈々明日から馴鹿に乗つて行くのだから櫓のトランスポートとは變つたバックをしなければならぬ。大體の組分けをすまして夕食の仕度をして居ると、ティレンティが馴鹿のカンカンに凍つた股の肉を食べてくれと言つて持つて來た、聞けば今、首にナイフをつきさして殺したのだと言ふ。早速ナイフで切らうとしたがとても刃が立たぬ、仕方なくマスカリでけづり、バターでいためて食べ初めた。すると又ウ・スキーを持つて來て飲めと言ふ。これちやどちらがお客さまか解らないが、我等は寒國の旅行にも不拘一切アルコールを持参しなかつたので思はぬもてなしに有り難く飲んだ。彼等はウ・スキーと言つてたが、どうもエチール・アルコールの様な氣がした。馴鹿の肉を臭いと言ふ人があるが、我々はあまりにも空腹だつたせいか、翌日の雑煮にした時でさへも別に變つた臭氣を感じなかつた。夜が次第にふけるに随つて、次第に寒氣が増して來たが、薪も豊富にある事とてどん／＼とストーブをたき、ほろよひ機嫌で昭和十年最後の夜を色々と語り合ひ時の過ぐるのも知らなかつた。

都では除夜の事とてにぎやかな事だらうが、我々は何時まで話して居る譯にも行かず、荷物の打合せをして牧場掘置きの特に大きな毛皮の上に横になつたのだが、しばらくして用便に立つて行つた来田がくすくす笑ひながらテントへ歸つて来た。彼の話によれば先づおもむろに、その用意をしていざ只今よりと言ふ時に、何處からともなくがさ／＼と二三頭の角を生やした馴鹿がやつて来て彼をかこみ、彼が今將にしやうとする小便を待つて居る。これでは如何ともする事が出来ず、しばし中止してテントの横にあつたスキー杖を持つて来て、再び排泄作用を始め、其の間中之を振り廻し、馴鹿の攻撃を防いだと言ふ事だつた。大體牛でもさうだが草食動物は牧場では鹽分が不足な所から、之の需要がはげしく、だから馴鹿も人間の小便中にふくまれた鹽分を求めて寄つて来るのである。勿論昨日今日と、小便でアイスクリームの様になつた雪を馴鹿がたべて居るのを見て驚いたのだが大便にまで彼等の攻撃が迫つて来るとは我々誰も想像もしなかつた。

一月一日

前夜ボロド川露營の睡眠不足の爲め、夜中少し寒く思つたのみであつたが、それでも夜明け前に起き出した。今日は昭和十一年の元日だ。食料の變化を考へて京都から持つて来た餅と、馴鹿の肉で雑煮を作り、形ばかりの御祝ひをした。愈々今日から我々はほんとに馴鹿自身の厄介になるのである。前夜大體整理をしておいた荷物を二十頭分に分配する爲にテントの外に出た。そして我々が驚き喜んだ事は、寒暖計が昨夜の最低温度零下四十八度を指して居た事だ。我々は昨夜は寒さを大して感じなかつた。もつとも温度の影響もあつた事だらうが、それよりもテントが半固定の爲め非常に我々にとつて快適であつた。

陽は牧場の木の間を通してかすかながらも暖い光を投げて居たが、荷物を縄でしばるのにはやはり手が冷く、しつかりと力も入らなかつた。やつと十一時に一切の荷作りを終へて、四方拜をしやうと丁度都合の良い枯木を見つけて、それに日の丸の旗を結びつけ、君が代に續いてウイノクロフ氏のヤクーツの歌も牧場に響いた。テレンティ、グレゴリーや、ウイノクロフ氏の子供も元氣良く君が代を歌つて居た。其後で皆そろつて寫眞をとつたのであるがナードルのオートコムバーは普通十二秒でシャッターが切れる所を二十秒以上の時間を要し、シャッターも目盛の時間通りに切れずに長びき失敗して了つた(零下二十五度)。しかし同じ寫眞機でほぼ同時刻テントより持出して直ぐ寫したものは少しの變調も認められなかつた。昨日ボロド川の撮影に於いてレバーが少し變ではあつたが、此日はそれはなかつた。我々の持参のカメラは皆金屬製レンズシャッターであるから、フォーカルプレン・シャッターに關しては言へないが、小型(6x9cm)カメラの方が中型(6x9cm)カメラより調子が良かった様に思はれる。だが小型カメラも早朝に於いては迴轉部分の油氣やグリースが凝固して迴轉が困難で、手袋を使用しては到底操縦不可能な場合も度々あつた。

さて正午頃、牧場の人達に見送られ、始めて乗る馴鹿の鞍の不安定さにひや／＼しながらも、やつとスキー杖で何とかごまかして出發した。此處でメッタは牧場に残りナッタが一行に加はつた。前日横切つた林に沿つて行く中にそれも次第に遠のいて、唯所々に馴鹿が四、五匹づつかたまつて二十八頭の同類が苦役にあえいで居る有様をぼんやりと見て居る様であつた。我等一行中の馴鹿には色々と優劣があり、速く走れるのや、重い荷に耐えられるのや、良くこちらの命令に従ふのや、かと思ふと乗手を馬鹿にして走つて居ながら急に止つて鞍の上にはほとんど乗つて居る我等を振り落すのや、全く種々雑多で馴れる迄は一行の列が時々切れる事も度々あつた。初

めの中は緊張して足を鞍より少し前に出ししつかりと鞍をしめて居たが、次第に足がくたびれて来るのと、気分がだれて来るのとで時々落ちる者がある。

牧場のテント場より北東へと取つて来た我々は始めて、彼方の森林地帯の上部に見える邦領の山の鞍部に當る所にロシアの山を見出した。そして次には神威岳も見えて来た。ウィノクロフ氏は神威岳の前面の山の下を指してあの通りに秋田木材會社の事務所があると教へてくれた。前面の山々がやつと我々の退屈から喜ばしてくれたのであつたが、やはり我等の足の下は變化の無いツンドラ帯であつた。午後三時半やつと牧場の端に着いた。こんな遠い端にまでやはり馴鹿が四、五匹、屯して居た。

我々もつと行程を進めたかつたのであるが森林帯が此の邊りで切れるので、仕方なくこの標に連なる森の中で露營する事にした。次の森林帯までは未だ大分あるらしく、到底日のある中には行けさうもない。我々の行程中「もつと進みたいのだが……止むを得ず此處で露營をしよう」と言ふ事は殆んど毎日の様に繰返された。月の出は大抵九時頃だったので暗い中での作業は馬鹿に時間をとるし、朝早く寒さの爲めに起き出すので、早く寝なければならぬ。だからどうしても明るい中に露營の仕度に取り掛らなければならなかつた。此處でも我々は川の氷を割つて水を得る事が出来た。一體に川の両側に沿つて森林があつた様である。だから我々はツンドラの旅行にも氷と燃料は割合容易に得る事が出来た。

我々はヤ・ラパン式な前進となつた以上は食料の中でも比較的重いものから平らげる爲め、之迄には罐詰類を多く食した。之等は全部凍り、罐を切つてからストーブの上に置いて、一々暖めなければならなかつた。その上我々は野菜食と言ふ事を非常に重く考へたので野菜を罐詰と、生のまゝと、そして乾燥品との三種類を持参し、

肉類の罐詰類はほんの少ししか持つて行かなかつた。だから我々の罐詰類とは主に野菜の事になる。なるべくなら生の冷たいまゝで食べたかつたのだが、それも出来ず、ストーブの上で温めた生ぬるいものを食つて何んだか物足りない感じだつた。だから之をこまかす爲にマコネーズを使つたが最初は良かつたのだが、次の使用の時には分解した様で變な感じだつた。生のまゝの野菜と言つても主にキャベツであつたが、之も我々が内地の山行で度々経験する様にベリ／＼に凍つたが一度温めれば同じ様に食べる事が出来た。

二日

翌二日も非常に良い天氣で、林の隙間から綿雲が空に浮いて居るのが見えて居た。例の通り土人達は馴鹿を連れて來たのだが、我々はどうしても荷物を馴鹿にくつつけるのを手傳ふ事は出来ない。鞍は我々には殆んど同じ様に見えるのだが、之が馴鹿によつて決つて居るのだ。併し四人であまり忙しさに仕事をして居るものだから氣の毒になつて、荷物を乗つけて居ると「駄目ーよ」と叱られるので手をつくねて貧乏ゆすりしながら焚火にあたつて居るより仕方が無かつた。

今日も又出發は十一時半、林を出て又昨日と同様廣く開けた雪の上をボツリ／＼と進む、と我々は正面に見えて居た小山を右に巻いて小さなブッシェの生へて居る林に入つて行つた。此處ではブッシェを後方ヘビーンとはねたり引つかけられたりするので、皆馴鹿を降りて之を引つづける、前に荷物を積んだ馴鹿が少くので雪が濡らず歩き良いんだが、之までずつと馴鹿の背中で聞いて居た足がだるくなつて來る。

ほんの小さな川を横切つて、我々は其處に樺太廳の伐材測量の起點を記した樺杭を見出した。それからは次第

に林も原始の姿を現し、大きな倒木や、殆んど倒れかゝつて居るが、それでも最後のふんばりでどうやら生きのびて居る落葉松等を或ひは乗り越し、或ひははふ様にすりぬけて進んだ、今日一日はこんなりした林の中を通つたので目の湿かさも知らず、二時頃の温度零下三十度を指して居た。此の森林地帯は振戸山、見晴山の裾にあたり、やがて雪も溶け、我々が汗ばむ頃にはきれいな水が流れるであらう小さな川があつた。

三時半頃一寸した平地を見つけて、此處で露營の仕度にとりかゝつた。我々は荷物をつける事は出来ないが之を取りはづす事は出来た。だから荷物を取りはづすのも、露營の準備も、全員手分けして出来るから非常に早く出来る。併し之が朝の出発前の仕事となると、とても我々には出来ない。否、土人の装備例へばデント、ストーブ、毛皮等に關しては、毎朝うまく荷造りが出来るのだが、生物の馴應を集めて之に荷物をくつつけるのが出来ない。我々がたとへ馴應の足跡をたどつて三、四十分の後之を見つけたとしても、我々にはカウボーイの様な輪投げの藝當は出来ない。だから我々は朝出発前に於いて、既に一日のアルバイトの時間より多くの時間を浪費する。

此處で始めて乾物類の入つて居る石炭箱を開けて乾燥野菜の料理を始めた。料理と言つても煮るだけだが、結果は豫期に反してそれが普通の野菜らしきものにもどるのに大變な時間を要し、殊にほうれん草等には全く参つた。併し食料の變化の上に於ては大いに効果があり、今後長い旅には良いものだと思つた。又瓶詰、罐詰等にしても比較的良い汁即ちのり詰、福神漬等には少しの凍結状態もなかつたのは大變手間がはぶけて結構であつた。露營地の周りは大きく茂つた木が高々と伸び、これこそ原始の姿だらうと思はれた。馴應の好きなあのとろろこんぶの様な苔がそれらの木々にくつついて長く垂れ下り、馴應にとつては食物の寶庫へ来た様であつたらう。

五、山にかゝる

三日

三日は始めての曇天で、湿度も昨日一昨日の様に寒く感じなかつたせいか一時間以上遅れて四時半頃目を覺した。何だか何時もより暖かい様な気がするので、用に立つたついでに寒暖計をのぞくと零下二十五度だ。これは少し變だと思つて温度計を見れば九十五パーセント、氣壓七四四ミリを示して居る。何んだかこんな事は始めてなので少々氣にして居たのだが、降つて來さうも無し、又今日は山嶺の林の中ばかりなので出發する事にして例の通り残り少くなつた薪をストーブに入れて燃して居たが土人達が馴鹿を捜しに行つた歸りが遅い。どうしたのか知らと心配して居ると、ティレンティがしよんぼりとして歸つて來た。「どうしたのか」と聞くと自分の馴鹿が一匹居ないと言ふ。そして荷造りをしながらも何んだか悲しさうな様子だ。僕等は非常に可哀さうに思つたがどうも仕様が無く十一時頃出發した。昨日と同じ様に否それ以上に木は益々生ひ茂り、倒木に悩まされ、加ふるに上つたり下つたりの馴鹿に乗つて居ると非常に六ヶ敷いテクニクを要するので、所々馴鹿を下りて歩いたり、平地の様な所へ來れば又乗つたりして居た、そしてぼんやりと背に乗つて居ると、ティレンティのしよげた顔を思ひ出した。彼にして見れば何物にも代へ難い財産だ、それも小さい時ウィノクロフ氏に連れられて遠くロシアより赤軍の目を逃れて、山越へで数番までやつて來て、やつと今働き盛りになつて其の仕事ぶりに對して、ウィノクロフ氏からもちつたのや、母親馴鹿を生捕りにして其の腹を割つて引き出し、一生懸命に育てたりして、今やつと十五六頭になつたと言つて居たが、彼の身になつて見れば色々考へるのも無理もない等としんみりして

居ると、木の枝に頭をゴツンとやられ上からさら／＼の雪が落ちて来てびつくりした事もあった。

正午を過ぎる頃から雪がちらつき始めた。そして少し平になつた所へ出て、其處で比較的廣く空を見る事が出来た。黒くどんよりとした雲が可なり速く走つて居る。然し我等は山と林に囲まれて風があるとは思へず、非常に暖か何だか手袋をはめて居るのがいやになり、日暮れまでずつとはめずに居た。そして小川の左岸上より右岸に渡る少し手前まで来た時に川を横きつて大きな木が倒れて居たが、其の上に小さな竹の、貂のわながこさへてあつた。やがて傾斜が少し急になつたと思つて居ると、もう見晴山にとつて居る。次第に急傾斜になつて行く所をジャクジャクに登つて行くのだが、馴鹿の背に乗つた荷物が通れるだけの廣さを作らなければならぬので大變手間がかかる。先に鉋を持つて道を作つて居るグレゴリーは眞赤な顔をしてそれを振つて居る。後から馴鹿を引つばつてついで行く我々も、體中がむし／＼するので毛皮のコートもぬいでしまつた。四十分位で其の尾根を登り切りそれに沿つてしばらく登つて行く中に、あたりは最早や薄暗くなり、雪も大粒なのが降つて來たので、未だも少し上の方へ行く積りだったがあきらめて、露營地を捜す中、丁度風にはうまくさへざられた凹地を見付けたので、早速露營の用意をする（高度六〇〇米）。次第に風が強くなりあたりは眞暗になつたので鞍や荷物の紐をぼどくの紐に手間が要る。やつとさら／＼の粉雪を溶かして飯をたき、汁を作つて食ひ終つた頃は風も相當強く、唯一寸つきさしたまゝのテントの支柱がゆれ、テントがハタ／＼と夜中なつて居た。我々の使つた土人のテントは高くして布地も薄く、其の上入口も唯紐で結び合せる程度なので、尾根の上の露營には實の所少々心配した。

九時頃寝る前寒暖計を見ると、温度はぐつと上つて零下十五度を指して居たので、あきらめて寝につく。

四日

久しぶりにぐつぐつと睡った四日の朝は雪は小降りであつたが、やはり風は相當強く吹いて居た。此の調子では尙ほ二、三日は降り続くかも知れない。さうなれば深い雪の中の馴鹿の運搬が氣遣はれるので入江、西本、和田及びティレンティの四人が尾根の偵察をかねて見晴山へ登つて行つた。そして残りの者は荷物をうんと少く整理をして、これからの行進にそなへた。偵察に出て行つた者等はスキーをつけず、ケリ（土人靴）をはいて尾根の風に吹かれながら見晴山へと登る。歸途深いガスに會ひ、それを待つ間焚火をして少し時間をとられたが、それでも正午少し前に歸つて來た。その結果尾根筋は風が強く當り、馴鹿がへばるだらうと言ふ事になつて、今我々が露營して居る場所より少し登つた所から横に見晴山をトラヴァースして、見晴山の鞍部に出る事に決めた。

外は相變らず雪混りの風が吹いて居る。籠城して居る我々はだん／＼と退屈になつて來た。煙草を水にぬらした者や、禁煙を心に固く誓つたのだが夜の徒然に再び煙草を手にし出した者達の爲に、いきほひ大事な煙草に對する需要が盛んになつたので、皆心配になつて調べた所、後二、三日分しか無く、俄に儉約をし出し、其處此處に捨てられてぐねりとまがりかけた喉ひ通りまで捜し出して竹のパイプに名前を御丁寧に刻り、それで大事さうに喫ふと言つた様なみじめな事をやり出した。

風の嫌ひな馴鹿は自分達の好物の食料を捨てゝも下の谷間へ下りて行つた。土人達は「下の方には食料が無いが」と心配さうにして居た。彼等は實に馴鹿を可愛がる。我々にとつては落されたり止つて動かなかつたり、散々手古摺らされてるので大して可愛いとも思はないが、それでも馴鹿に乗つて、軍道へ出た最後の日愈々グレゴリーとティレンティが連れて歸る時には散々悩まされた馴鹿ではあつたが、別れるとなると何んだか淋しい様

な気がしてもぐり／＼と尻を振つて歩いて行く様をじつと見て居た。

其の夜零下十度から更に上つて零下五度にまで登り気温も始めて六九八ミリと言つた状態になつた。そしてウイノクロフ氏もこんな大粒の雪は稀太では珍しいと言つてたが益々降つて来る。

五日

五日、テントの外には思つた程でも無かつたが大分積つて居る、夜中にはしばらく止んで居たので又降り出して来た。ティレンティ、グレゴリー、チツクの三人は二日も其のまゝにして置くと何處に行くか解らないと言つて、馴鹿を捜しに下へ下りて行つた。我々も晝過ぎには良い加減退屈して居る所へ、ウイノクロフ親分も、乾分が居ないので、淋しいのかお茶の會(ヤ)の招待にやつて来た。豚の油、チョコレート、固パン等色々なものでなしに、腹がふくれた時「日本の國民は」から始つて彼の亞細亞主義の話した、彼は最初から之を開かせようと思つて居たのかも知れない。仲々面白く、良い事を言ふと思つて感心して居たが、月蝕は東亞の盟主日本の國にとつて不吉な事がある前兆だ等と迷信の様な事を言ひ出すので、何處まで信じて良いのやら解らなくなつた。

夕暮少し前に全部連れて三人が歸つて来た。そして又今日ほつておけば下の方へ下りて行くので今日は全部一緒にくくつて置く様にウイノクロフ氏に頼んだ。

六、振　　戸　　山

六　　日

翌六日はそのお蔭で始めて七時半に出発する事が出来た。風も尾根の上は相當にあり、どんよりと曇つて居たが、我々は一昨日の偵察に澤傳ひに鞍部へ行ける自信があつたので、新雪が一米半位あつたが馴鹿を助けながらトラヴースにかゝる。地形により少し急にジクザクを切れば荷物を背負つた先頭の馴鹿は動けない。だから初め二頭をラッセル用として荷物なしで引つばつてラッセルをさす、土人はストーをはいて居るので大してぐりもせず、こんな新粉雪には良いなあと思つた。

途中幅五挺位の龜裂が最後の登りの急斜面に出て居た。登り切つて此處見晴山と振戸山の鞍部を露营地と定めテントを建て、直ちに全隊員とグレゴリーの九人はスキーをつけて振戸山へ向けて出発(十一時)。上部へ行くに随つて雪が少く偃松と小石になり、スキーを岩蔭に置いて進んだが、一つ手前のビイクの東側及び其の鞍部は深い偃松で、其の上雪も相當深く全く苦勞した。が千米近くから小石になり、雪も大部分飛んで居たので樂に歩けた。グレゴリーはこの上までストーをはいて着て居たがストーは谷側へ出して歩いて居た。幅がスキーの三倍位あるので斜面は之をつけたまゝではとても歩けない。頂上へ着いたのが十二時五十分、見るとも一つ東側に同じ位の頂が見えるので、名前は解らないが登る。後でウィノクロフ氏や樺太廳の方々にもたづねたが振戸山(樺太廳の方では近年分體山と呼ぶ)といふだけで、別に名は無いとの事であつた。

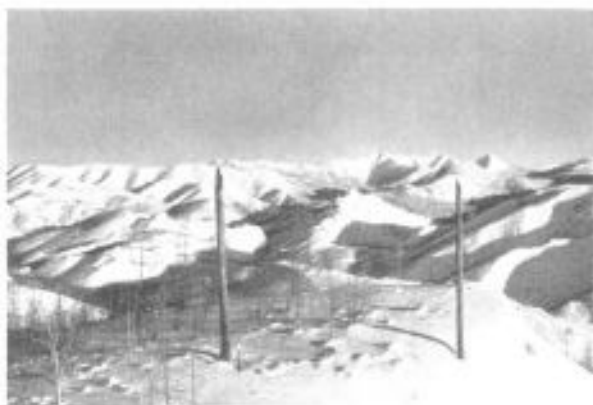
二時頃下り始め、スキーデボからは細いリッジをストーと競争で下る。グレゴリーの奴アルペン・ストー術と言ふのか仲々うまい、直滑降は何と云つてもスキーだが、深い新雪に時々もぐる時に来るバランスの不安定さはストーはあまり感じないらしい。我々が膝の上までもぐつてゐるのに、グレゴリーは知らぬ顔して横を素通りする。だが廻轉はあの幅では何一つ出来ない。チ・コ／＼と歩いて廻つて居る間に我等はストー、結局勝つた。が苦し



北沖見中腹より振戸山



北沖見山よりアンバクダ連峯を望む



北沖見山よりー左よりゼレンガイ・川崎の山々



ボロト附近を進むトナカイ様

かつた。あれも尾根の上で雪が少なかったから良かったのだが、木の多い澤傳ひ、殊に樺太の山ではやはりストーは良いものだ。

七日

現に翌七日どんよりと曇つた空に相變らず、樺太に居ると思はれない様な暖い熊の澤をスキーで下つた時に下の小川へ出るまでの急斜面へ降りて行くのは大變速かつたが、それからゆるい斜面を下つて行く時には雪が深く、代る／＼ウッセルをして我々は進んだが、遂にストーに追ひ抜かれ、何處々と幾らあせつても駄目だつた。

前夜我々は相談の結果二日間の止むを得ざる鎮城の爲に、最初敷香支廳及び警察署、新聞社關係に發表したコース即ち、振戸山より神威岳を経て池田の官行事務所へ到り、別に振戸山へ到着すれば直ちに土人の一人を池田へ報告の爲め直行さすと言ふプランが實行できなくなり、此の雪では池田の方へは出難いと言ふウィノクロフ氏の言葉もあり、兎に角我々の現状を知らさなければならぬので手紙を書き、之をグレゴリーに持たせて、早朝、ムイカ川鮭鱒孵化場に駐在する巡査派出所へ二日分のパンと福神漬少量、チョコレートを持たせてやつた。彼は六時頃元氣よく出て行つた。そして其の夜は小さな岩の蔭に火をたいて一夜を明かし翌日正午前に派出所へ着き返事をもらつて、今度は我々と出會すためにムイカ川を進行した。そして彼は其の間寒さにも屈せず一生懸命に歩いたと言つて居た。實に土人の中で彼位黙々として命令通りに良く働いた者は無かつた。時には幼稚な冗談も言つたが少しの嫌味もなく、家には妹と二人暮らしだとしんみり言つてたがさう言へば、一見淋しそうな顔付であつた。

熊ノ澤を下る途中ガスの時間に昨日登つた振戸山が木の間から見えて居た。北側から見た所も内地にもよくあ

る圓形の雪山の様だつたが冬初めて登つたのだと思ふと、山で色々な形の山に出會すが唯良いなあと思つて見るだけの氣持とは何だか違つた氣持が湧いて來た。あの邊りではあゝだつた等と昨日の短い時間ではあつたが、樺太へ來て、行く所皆知らない所ばかりで、自分達が通つて來た所とか、懐しい所等見る事が出来なかつたのに始めて振り返る事が出来た今だ。カメラの舟越に頼んで懐しい振戸山を寫してもらつたがガスがやつて來て駄目だつた。

平坦な林になつてしばらく又白樺がチ。イ／＼見え出した。林に入る前に小屋が見える、何だか普通の小屋とは違ふので、聞けば朝鮮の出稼ぎ人が貂を捕りに來て使ふ小屋だと言つて居た、成る程さう言へば朝鮮式の丸太小屋であつた。こちら側にも時々應の測量標柱が立つて居るのが見受けられた。

我々は明日にそなへてウィノクロフ氏とも相談の結果今日中に長太郎岩の下まで行く積りだつたが日が暮れたので仕方なく長太郎山より流れる小川とアンバクダ川の出會ひの八百米位上で露營する事にした。

アンバクダと言ふのは土人語で魔の山と言つて、北沖見山の尾根続きの河岸と、川崎山の附近に化物の頭のような奇岩がある所からかう言ふ風に言つたものらしい。そして昔から此の地方へ狩に來て、アンバクダに足をふみ入れたもので歸つたものがない等と大した傳説も附加されて居る。

七、北沖見山と川崎山

八日

八日、久しぶりにすつきりと晴れた。愈々出發、國境北沖見班も川崎山班も共にスキーで、ディレンティはスト

ーを著けて川に沿つて下る。百米程行くとバク／＼と鳥の立つ音がした。ティレンティは早速銃を出してねらふ。ズドン、見事一羽射落した。にも不拘少し離れて未だ一羽知らぬ顔して嘴を枝にすりつけて居る。あまりの容気さに皆おかしくなつてくす／＼と笑ひ出した。ズドン又一羽。すると又誰かが「ティレンティあすこにも居るぞ」と指す方を見れば、居る居る。又前の様な事を繰返して一羽は落したが他の一羽は一度落ちて居ながら又飛び出して林の中へ消えてしまつた。

少しばかり下つて澤を登る。殆んど全部の木が焼けてしまつて裸山だ。最初の小山に出ると南方は振戸、西方は中央山脈、北方はロシア領の山もきれいに見える。歸りのスキーの話に興じながら長太郎山に着く、此の長太郎と言ふのは土人だがとてもやんちゃな奴で、露領で密獵をやつて居たが見付けられ、遂にアレキサンドルフスクの刑務所へほりこまれ赤を少し吹きこまれて歸つて來たり、他人の妻君を好きになつたり、一寸變つた奴ださうだ。然し何故此の山を長太郎と言ふのかは知らない。

九時半頃長太郎山の平な所に着いて川崎山班の入江、和田、ティレンティと別れ、三崎、西本、舟越、黒川、山谷、來田の北沖見班は其處の平を左へとり、長太郎山をトラヴァースして澤に出る。仲々大きな澤で下る時には雪の下に隠れた倒木の爲に横に流され、又は其の下へスキーの先をつゝ込んだり、登る時にも之をよければならぬ随分苦勞させられた。

こんな澤を二つ越してアンパタダの支流の小さなデルタの様な部分へ来る。此處で小さなパンを食つて、元氣をつけ、北沖見の向つて右より三番目の小澤より四番目の大澤にとり着く。尾根はせまくて所々に木があり登りにくかつたので澤を渡んだのだが、先頭に立つてラッセルをして居ると時々バツン、と言つて龜裂が生じる。時

には十平方メートルから十五平方メートルに及ぶ事もある。そして我々は残り高度にして百米位の所に來た時、西本が先頭を歩んで居たのだが、何か一種變に體に響く様な音がしたと同時に雪崩だと皆一齊に叫んだ。そして逃げ出さうとしてあわてたのであらう。其の場で轉げてる者がある。瞬間我々目がけて落ちて來つゝあつたが次第に運力にもより我々の居た場所より上百米位の所より下後方へ落ちさうであつたが遂に止つてしまつた。時間は十二時二十分、其の時の温度零下十度、斜面、北西西、傾斜、落口四十度位で下るに隨つてゆるく三十度位になる。幅最初二十米位で最も廣い所で三十米位又次第に起伏により狭められたが積雪一米半位で全層雪崩であつた。其の中には枯木も四、五本あつたが之を倒す程でもなかつた。

頂上へ着いたのが一時十五分、露頭の山に野生の馴鹿が何か歩いたのだらう。足跡が一條尾根筋について居るのが見えるし、入江、和田達が登つて居る川崎山も、三角形に美しく照りはえ、アンパクタと言はれる奇岩も見える。成程變な恰好をしてゐる。丁度粘土細工の様だ。中央山脈が薄紫に霞んやりと浮んで居る。頂上でパンを食つてスキーの滑降に胸をときめかしながら下る。

皆面白く下つて居たが途中來田がブッシュにスキーの先を引つけて、きれいに折つてしまつた。其處で自分のスキーと代へ、片足スキーに少しづつ制動をきかすつもりだが、つい先をつゝこんで轉ぶ、其の度に來田が後を振返つて氣の毒さうに見て居る。直ちに黒川、舟越の二人に先へ歸つて暖い紅茶とパン及びスキーの代りを持つて來る様頼んで山谷、來田の三人でゆつくりと下る。例の倒木の多い澤の邊りで日が暮れた。然し有難い事にはまん圓い月が川崎山の方から出て銀世界をくつきりと照してくれた。そして風も無い。

長太郎の岩の邊りに人影がする「やあ」入江と和田が歸つて來た所だ、我々は來る時歸りのスキーの面白さを

想像して胸ときめかして登つて来たこのスロープもアザラシをつけた僅滑るみじめさ、川崎山の頂は先に歸つて行つた。丁度最初の小山に着いた時下から黒川がスキー、パン等を持って来てくれた。其處で少し休んで折れたスキーをルックに着けてもと来たシ・プールの跡をテントまで一氣に飛ばした。テントでは皆がにこ／＼顔でお茶を沸かし、飯をたいて待つて居てくれた。

一方川崎山は長太郎山の平地より雨へとつて、なだらかな起伏をたどつて行くと、森林限界の上下になる。此の森林の中を行く時は寒さを感じた。一番最初の森林を抜けた所が、偶然にもヒマラヤのマカールと同名のマカール山の頂である。入江、和田の二人は夜お茶を飲んで居る時に「マカール初登攀」等と冗談まじりにさわいで居た。すると北沖見班も「日本最北の山より見たロシアは……」等と負けて居なかつた。

このマカールの頂は平坦な所だが東と北の山腹にアンバクダの名を起した怪奇な岩が列んで居る、これより再び森林帯に入り之を抜ける頃より尾根筋はウインド・クラストした所や粉雪の所と度々變るので、スキーを擔いだ事もあつた。川崎山の頂上附近は堅くクラストして居たがなだらかで、所々に小さなガンコウランのぞいて居た。一時四十分に頂上に着いたが、もうかたむきかけた陽に氣づき二時歸途に着く、往路はストリーに威力を發揮させたが、歸路は尾根筋をさけ粉雪の上を飛ばして、ストリーをばくティレンティを見返した。

朝のシ・プールのたどつて長太郎の平地近く来た時に山鳥を見つけて銃を構へたが、何だか人の氣はひがするので止したら、丁度山鳥が居た方向から北沖見班が出て来て、三人一様にびつくり、胸をなで下した。

夜は久しぶりにありついた新鮮な鳥肉のバク焼に舌鼓を打ち、食後も思ふ山を無事にやつた喜びに、何となく話もはずみ、今日一日の出来事等を話し合ひ、久しぶりに十時前までも起きて居た。然し六人の煙草を喫ふ隊員

はグレゴリーに頼んで譲ってもらつた二箱のバットで、明日と、明後日グレゴリーに會ふまで辛抱しなければならぬので、話はしながらも何となく手のやり場に困り梅の枝等をつい口に持つて行つてその異様な味にびっくりして唾をはいた事もあつた。

八、山を下る

九日

九日もきれいに晴れ渡り、ちよい／＼ちぎれ雲が飛んで居たが温度はぐつと下つて零下三十三度を指して居た。荷物のバックをする手の先がしびれる様であつたが、出發前のお茶に温まり、十二時五十分愈々歸途に着く。次第にまばらになる林を過ぎて少し行くと、我々の眞上の枝に、大きな鳥がついぞ見なれぬ奴等が澤山來たぞとばかり、あの大き過ぎる様な目を餘計に開いてたまげた様に首をかしげて見下ろして居た。丁度先頭を歩いて居たチッタの奴、平常ぼんやりしてる割に狩獵に生きる種族だけあり驚く程の敏速さを以て銃を出したが相憎と彈丸が荷物の底深く入つて居たので、どうにも仕方がなくいまいさうに見て居たが、「ほーい」と大きな聲を出して飛ばしてしまつた。

やがてアンバクダの渚を下りきり、アンバクダ川と呼ばれる川に出で之に沿つて行く中、四時を少し過ぎたので露營の仕度をする。丁度火事で枯れた木が澤山あつたのでどん／＼火をたいた。夜は煙草も無くそろ／＼退屈し出した我々は餘りもどりが遅い爲め癢にさわつて寝ておいた乾燥ほうれん草をちり紙でまいて之を喫ひ出したが、ちり紙だけが先に燃えてうまくゆかなかつた。さて定つた食料に倦いた我々の話はいきほひたべものゝ話

になり、あすこのビフテキがうまいとか、あすこの支那料理がどうだとか、ズケが食べたい、テッカが食ひたい等とそんな事ばかり話合つてた。

十日

翌十日は零下四十四度に下り寒さの爲め早く起き出し林を出でムアンバクダ川の氷上を下る。雪が多いので大した事もないがそれでも馴鹿は時々滑る。其度に乘つて居る我々はひやりとする。丁度二時頃に兎の足跡位しかないきれいな雪の上にストーの幅の広いショブルが林の中へ入つて居るのを見つけた。グレゴリーが歸つて来たのだ、行違ひになつたのだ。皆で大聲で呼ぶそして直ぐ後で耳をすます。高低の一つに溶け込んだ音が林に響いて彼方へ消えて行くと「ホーッ」と返つて来た。「あッ居るぞッ」。林の中からこそくやつて来た。早速頼んで置いた煙草を受取つて一本喫ふ。そして巡査の返事には、早速準備萬端整へて待つて居る旨が書かれてあつた。そして我々は夜はうとくとまどろむだけで三日間がんばつて報告の任務を全うしてくれたグレゴリーの勞をねぎらつた。彼は少しの變つた態度も見せず唯「イヤ」と言つたのみでさつさと又先頭に立つてラッセルをやつた。其の夜ムイカ川本流との出會ひにテントを張つた。ウィノクロフ氏は明日テッカを連れて牧場へ歸るので、料金の相談をした。そして我々の事情を良く考へてくれて、自分は報酬は敵かないし、馴鹿も一日二十頭分の計算で結構と言つてくれた。そして非常に氣持の良い旅行であつた、どうか敦香へ歸つたら一日遊びに来てくれ、晝飯でも一緒に食べませうと。

實に彼は我々の爲には終始體面的に盡してくれた。

十一日

翌日別れの握手をした一行は一は牧場へ、一はムイカ解化場（土人は此處をダオシカと呼ぶ）へと出發した。だが此の日馴鹿が餘りに遠くへ行つて居たので、出發が遅れて二時であつた。朝早くから二時までの長い間カメラの舟越は寫眞をとりに出て行つたが、一時間程経て膝から下をすぶぬれにして歸つて來た。丁度和田が舟越があまり遅いのはまつて居るのぢやないかなあと笑ひながら話して居た時、テントヘムーと入つて來たので皆腹をかゝへて笑つた。それからしばらく外へ出て行つた西本が木鼠が居ると叫んだので皆出て見ると枝から枝へたくみに飛び廻つて居る。ウィノクロフ氏が早速銃を持つて來たが、其の間に森の中へ逃げさうなので我々がさわいで川の方へ追ひやる。所が其の弾丸は熊や馴鹿を弾つに使ふ大きな奴だ。「之しか無い」と言ひながらズン／＼と飛んで居る木鼠をねらつたと思つた時ズドン、今まで元氣良く飛んで居た木鼠がいきなり動かなくなつて枝に引つ懸つて居る。それから其の大きな木を根本から鋸で切り、之を倒して木鼠を見ると、腹の真中に大きな穴があいて臓物が半分飛んでしまつてゐる。かねてウィノクロフ氏の狩に秀でゝ居る事は聞いて居たが、まさかこんなに上手だとは思ひもよらなかつた。

愈々廣くなつた川を下つてやがて川から離れ丘陵の様になつた山の裾を大きくトラヴァースして、ツンドラ地帯に入る。此頃より日は全く暮れ、先頭に行くグレゴリーはランタインの光りを頼りに歩いて居る。幸に大して寒くも無かつたがそれでも暗い所を行くのは淋しい。

あたりは暗く近くに森があつてもほんの薄ぼんやりとししか見えないのに、其の上何の目標もない廣々とした野原の様な所を、土人は良く解るのか知らと心配にさへなり出す。やがて六時頃になると、朝の六時頃に飯を食つ

たきりで、馴鹿に乗つては居るものゝ、さすがに腹がへつて土人達は殊にすーつと歩きづめだ、盛んに腹がへつたと繰返す。それで飯を食ふ事にしたのだが、食料の残りも直ちに食べられるものは、トマトジャースとサーディンと、携帯口糧だけだ。之を少しづつ分けた。之で元氣を出して月の出を持つ爲に焚火をしてしばらく休む。もう遅いし今日は此處に泊らうかと言ふ案も出たが、解化場の方で心配するだらうからと七時過ぎ再び馴鹿に乗つて出發する。夜が更けるに随つてやはり寒さは募り、足の先等はたまらなく冷く、頭からこんもりとかぶつたジャージに息が凍つてとても氣持が悪い。

馴鹿にくつつけた荷物が落ちた時の用心に一番後から行くと、ティレンティの足が遅いのか、次第に先の連中と離れ、四本が乗つて居た親分馴鹿の鈴の音も全然聞えなくなつて來た。だのにツンドラ帯は未だ続く、つくづく倦きて「何處まで続くツンドラぞ」等とやけに大聲で歌ひたくなつて來た。あたりは暗く、前の足跡等とても解らないが、馴鹿はチャンと知つて居て決して足跡をふみ誤らない。

かすかに顔を見せた月も何處へ行つたのかさっぱり解らない。横に細長く延びた林の中へ入つて行くとムイカ川に出た。そして其處の氷の上に積んだ雪に二時頃遊びに來たが遅いから歸るが、解化場の住民全部待つて居ると書かれてあつた。之に元氣をとりもどした我々は、暫くで暖まつた様な氣がした。久々で人里に出る嬉しさ。その川を渡つて行くと小さな小屋があつて、夏は此處で仕事をすらしい其處らは道らしきものがあり、しばらくすると薪が束にして澤山置いてあつた。と其の林を通りぬけると「あつ、人家だ」あちらこちらの家の窓に明るく電氣が輝いて居る。そして不意の闖入者達に向つて犬が盛んに吠え出す。

先づ一行は逕査派出所に落着く。ストーブはあか／＼と燃えて暖い、そして今日電話を修繕してよく聞くと、

敷香では皆を非常に心配して居る事や、氣屯まで既に敷香運輸の事務及び記者等が詰めかけて、我々一行の到着を待つて居る事を聞かされ驚いた。土人達は巡査や我々が勸めたにも不拘、始めて我々にさからひ、明朝八時に来る事を約して、今來たばかりの林の中へチントを張りに出て行つた。やはり彼等にとつては民家には居にくいのだらう。別に反感を持つて居る譯では無いのだが。

着いたのが十時半だつたから、一時間位居たらうか色々とお話を聞いたり、氣屯の方へ電話で連絡をとつてもらつたりして、我々は二つに別れ、四名は此處に居残り、他の四名は解化場の方へ行つた。此の派出所に泊つた連中は、國境警備の話の聞いたりしたが最後に北滿の國境警備隊の慰問品を此の日露國境まで取りに来るが、こちらへは未だ曾て持つて来てくれた事が無い。どうかこちらへも慰問品をたのむと聞かされ、一同成程と引受けた。解化場に泊めてもらつた者達も、鯉鱒の色々な習性や人工解化等について話しを聞き、久しぶりの風呂に一時に睡さを誘われ、暖いふとんの上に夢を結ぶ。

十二日

愈々最後の日、どんよりと曇つた空を氣遣つて居る中早くも珍らしく大粒の雪が降つて來た。土人は八時にやつて來たが我々の方がかへつてぐつすりと寝過ぎあわてゝ出發の用意をする。色々世話になつた此處の人達と記念の寫眞をとると、解化場を見せてもらひ、馴鹿に度々落されて愛憎をつかした和田、山谷はスキーで他の者は又馴鹿で林の中にきれいにつけられた道を軍道へと急ぐ。所々鹿關係の人も否樺太全住民が極力防止に務めて居るにも不拘、山火にやられた大木がみじめな姿を残して居る。

雪が相變らず降つて居るので寒さは感じないが、じつとりとして気分が悪い。處々に山火防止の爲に煙煙所が作つてある外、細い電線が二條何處でも道に沿つて、右になり、左になりして續いて居る。途中巡査が一人迎へに来てくれて軍道までもう直ぐだと元氣をつけてくれた。大きくカーブした林を出ると彼方に煙が上つて居る。そして進むに従つて焚火をかこんで二十人位の人が固つて居るのが見える。子供も居る、犬も居る、それらが雪を通して次第にはつきり大きくなつて遂に軍道へ出た。其處には東朝豐原特派員の林氏が出て居る。直ちに馴鹿の荷物を整理してバスに移し、ティレンティ、グレゴリーや馴鹿に別れバスに乗つて國境へと出掛ける。二十分位で半田澤の警部派出所へ着く、此處で先に敷番時報社へ連絡の爲め、スキーで飛ばした和田と警部及び我等護衛の巡査も乗り込み、林氏は東朝へ電報を打つために下りる。

それから國境までバスは原始林の間の軍道をエンヂンを唸らせながら走るのだが、雪の中へもぐる爲め、仲々進まない、少し急な斜面へ来ればスコップで雪を除けなければならなかつた。

北緯五十度の雪の國境へ着くと、直ちに巡査は付け廻をして我々を守つてくれる、彼方道の横に立つ望樓からは何時も、こちらを望遠鏡で見ると言ふので一歩も越境出来ない。實を言へば我々は旅券無しで一歩だけでもロシアへ行きたかつたのだが。

薄暗くなる頃再び半田澤へ歸つて来ると其處の驛邊で派出所主働の歓迎會が開かれ、久しぶりのアルコールに我等すつかり上機嫌になつたが、雪が積らない中にと別れを告げて出發し途中幌見峠でバスがスリッパしかけたが之も雖無く氣屯に着く。雪が益々強く降つて来たので運輸會社の人達も止した方が良くと言ふので氣屯に泊る。仲々大きな町で夏にでもなれば非常ににぎはふとの事であつた。

十三日

翌日十時半頃小止みになった雪の中を又バスにゆられる。途中驛選の近くはそれでも時々人が通り、學校歸りの小學生が自動車に敬禮する。彼等は雪の日、バスで運んでもらふので何時でも敬禮をするのだと聞かされた。保惠の手前でバスが雪の中へもぐり、其の上スコップを置いて来たのでどうしても動かず、其の中にチェインも切れ、全く固つたが附近の木を持つて来て道を作り、二時間程の後やつと走り出す事が出来た。そしてやうやく日もとつぷりと暮れて、バルブ工場のズラリと列んだ社宅の灯がきら／＼と輝く頃敷香の町へ入つて行つた。山形屋へ着けば新聞社の人達が代る代るやつて来てお祝ひを言つてくれたが、最も驚いた事はラヂオでも新聞でも我々が行方不明になつて居た事で、學校關係や、知人、先輩、友人、父兄等の心配さうな顔が次々に浮んで来た。旅館山形屋の方でも特に色々ともてなしてくれ、翌十四日は朝から敷香支廳へお禮に行き勘定をすます爲め風の強く吹いて居る中を幌内川を渡つてウィノクロフ氏の家へ行く。彼は今朝歸つて来たと言つたがもうきちんと背廣を着込んで我々をもてなしてくれた。そして馴鹿の舌の冷凍したのを、何だか色々な馴鹿料理を御馳走になり、ビール、ブドー酒、ウスキー、日本酒等のチャムボンに紅潮した頬を冷い風になぶらせながら、オタスの杜から歸つて来た。そして入江、三崎は警察署、林務課、敷香時報社、秋田木材出張所等の挨拶廻りをし、其の間他の者は荷物を整理した。

九、敷香を發つて歸途に

四時半新聞社の人の迎へが来たので役場樓上の座談會に出席し、終つてからは體育協會、新聞社共同主催の晩

餐會に出る。會半ばにして度々問ひ合して居た南新聞豊原間の汽車通過見込みの報に接し、直ちに時報社の方に機を都合してもらひ、色々世話になつた栗坂君や助役に別れを告げ、午後十一時數香の明るい町を後に暗い道を馬車で急いだ。轡の中には湯たんぽが入つて居てぽかぽかと温かい雪が顔にかゝつて来る。馬は平地へ来ればシャンコ／＼と鈴をならしながら走るが、少し深い所へ入ると、ググググと音をたて、轡は雪にめり込みそしてかたむき、時としては横にこける。馬は知らぬ顔をして歩くので駆者が歩きながら之を又もとに直す、そしてよつ中駆者はチョッチョッと舌で馬を勵ましながら體を傾けてバランスをとつて居る様であつた。我等はコートをかぶり、ぐつすり入つた箱の上から太い綱で結ばれてるので體を動かすのも容易でなかつた。だが内路へ三時頃着いた時綱をほどいてもらつて温いうどんに暖を探る。駆者はあつい奴を一本つけてもらつてうまさうに何か煮込んだものを食べて居た。

それからは疲れが出て來たのか疲れて居たが覺めると、雪の中にかすむ村が見える峠の上で、今から下りにかゝると言ふ所であつた。何と言ふ名の村か解らない淋しい村だ。だが此處なら未だ良い、國境近くの村を考へれば都會と言つても良い位だ。時々同じ様な恰好をした家があつと後へ消えて行く、ぐつすり入つた橋よりウーンと延びて、後から続く轡を見れば、馬は白い息をはきながら走つて居るが、轡から出て居る頭布をかぶつた頭は動かうともしない。未だ良く寝て居るらしい。

それから幾つかの淋しい村や、こんな所には珍しい町をぬけて賑やかに始めた町へ入つて行つた。お客さんこれが南新聞ですよ」と駆者が知らしてくれした。ふと見る山の横には數香まで延長すると言ふ鐵道の施設工事をやつて居た。十時半頃驛夫の知らせで特に二等客に乗せてもらふ。今まで轡に乗つて居た感じから較べると貴

族の乗物の様な気がする。それから十時間ばかり、このゆつくりと走る汽車にゆられて午後九時半豊原に延着す。豊原では林務課長や記者の出迎へを受け直ぐ驛前の花屋ホテルに入り、自分は課長と林氏の案内で學務課長宅へ挨拶に行つたのであるが途中林氏の宅では、榻の上二尺位の所から家人に呼びかけねばならなかつた。豊原の夜はすつかり雪に埋まり、外燈が下の方で輝いて居て珍らしく思つた。歸つて來ると二三の新聞社からネガを頼まれたが一應断つた。

翌十六日豊原を六時三十分出發、大泊より思ひ出深い別れを告げて大した荒れもなく稚内に着く。

北海道の汽車の窓より移り行く景色に目をやる。來る時よりうんと増した積雪、良い景色だつたが随分永く感じた汽車の中だつた。

青森を後にして翌日雪深い北陸道を走つて居た。殆んど汽車の高さ位の積雪の所もあつた。相變らずべつとりとした大粒の雪が降つて居る。富山の手前で車掌が二時間の延着に、既に富山からは急行が出たので、次の普通で歸つてくれと傳へに來る。仕方が無い。富山から又電報の打ち直しをしなければならぬ。いつも乗り馴れた富山からの夜行に乗る。ぐつすりとした疲れた我々は翌朝京都近くで目をさます、六時過ぎプラットフォームに立つたが、知人の顔一人も無し、しよんぼりとして各々家へ歸つた。之は列車が又々延着した爲で、迎へに來た人達に三度も無駄足を運ばせて何とも申し譯が無かつた。

十、旅を終へて

凡ゆる點から見て無理な旅もどうやら無事で終へる事が出来た。そして其處に無責任ではあるが、今どうしてものはつきり言ひ盡せない、或る何か物足らぬと言ふ感じが無いでも無い。だが自分の慾望を述べれば限り無く、今度の様な特殊な旅に於いて隊員相互間の統制と言ふ、重要な事でありながら、周囲の事情か、自分達の幼稚さからか、今まであまり感じなかつた問題を現實に感じただけでも大きな收穫だつたと思ふ。そして又大きな仕事の蔭には勢力なる後援がなければならぬと言つた様な事も知つては居た。だがそれは當然の事として知つて居たに過ぎなかつたのだが、今度實際に知り得て、現實に経験し得て、自分のものとする事が出来た。

そして冬の樺太の旅に於いて、裝備に關しては樺太に適應して作られた土人の裝備に悪い筈は無く、ケリは輪カンを滑ける場合等軽く暖く、特に良いと思ふがアイゼンをつける事が出来ないのが難點だ。ストープも持運びには便利だし、横に細長い爲めに一度に多種のものを煮る事が出来るが、テントはもう少し高さを低くし入口を改良すれば良いと思ふ。そして我々の経験した四十八度迄ならば之迄の普通の衣類でしのげる自信を得た。そして此の低湿は最も寒い時期に於いてさへさう度々あるものではない。(解化場調べ)

食料については成る可く汁の少ないもの、これは當り前の事だが、魚肉及び他の肉類にしても、其のまゝ外にはり出して置けば完全なる冷凍肉にする事が出来、石炭箱にでもほりこめば良い。又罐詰、瓶詰等は汁を全部捨てゝしまへば良い。ウィノクロフ氏は米の飯は體が冷えると言つて居たが、十日にもなるとやはり、米の飯が食べたい。胚芽米は洗はずに食べられて良いと思ふ、だが餅も良いものだつた。割れて焼きにくいが始頃から切つて

置けば良い。味噌、酒の粕は凍つて始末に悪く、それよりも鹽からい鹽昆布を持つてつて之で汁を作れば一舉兩得。ソーセイジも凍つてもどすのに困り、マヨネーズは分解した。他は樺太故に變つた事は無し。

カメラに關しても油氣を取り去れば良かったと思ふ。そして小型の方は撮影後は同じとしても撮影前だけでもロールフィルムなれば包装完全だし、始修體につけて居て寒さの爲めにシャッターに及ぼす被害が少いと思ふ。撮影後の包装に關しては過度豫防のみ心掛ければ良いと思ふ。カメラに關して深い知識も無いので細密な事は書けないが、カメラの舟越は、極寒時又は吹雪の中での記録寫眞の撮影には固定焦點の玩具の様なカメラが一番良いと言つて居た。次に簡単に溫濕度氣壓を記さう。先づ我々は非常にルーズな測定をしたため、参考になる様な事も無いと思ふが記録を記す。

最後に未知を求めて心の赴くまゝに振舞つたに拘らず最後まで忠實に行を共にしてくれたドミトリ・ウィノクロフ氏と其の一家及びグレゴリー、ティレンティ、チャク等に幸あらん事を祈つて筆を置く。

	大文字 小文字	溫度 氣壓	° m.m.	前 夜 最 低	溫 度 C°		
					A.M. 7	P.M. 4	P.M. 9
1935.12.							
30		80 746	95 746			-21°	-25°
31	97 746	32 756	84 749	-32°	-30°	-25°	-30°
1936.1.1	95 747	95 747	95 748	-48°	-32°	-22°	-25°
2	92 748	95 748	100 749	-35°	-30°	-25°	-32°
3	95 744	100 704	100 705	-35°	-25°	-15°	-11°
4	100 704	100 699	100 704	-15°	-12°	-10°	-15°
5	100 696	100 694	99 698	-16°	- 5°	- 9°	-10°
6	100 709	98 704	91 761	-15°	-10°	- 8°	-15°
7	86 782	87 726	84 724	-20°	-18°	-20°	-24°
8	83 724	79 720	76 721	-30°	-18°	-28°	-30°
9	74 721	78 728	80 732	-33°	-32°	-25°	-33°
10	70 733	72 733	80 740	-40°	-38°	-25°	-40°
11	72 742						

冬の濟州島漢拏山

關西學生聯盟隊報告

盛岡英治郎

まへがき

一、濟州島へ

二、計畫變更

三、鍊頂小屋へ

四、登頂

五、撤収

六、携帶品その他

まへがき

昭和十年十二月から翌十一年一月にかけて濟州島漢拏山の冬期登山が京城帝大山岳部の現役、先輩及び學外者三名よりなる京城隊と關西學生山岳聯盟の現役及び先輩よりなる關西隊との合同隊によつて企てられ曲りなりにも所期の目的を達成するを得た。

この様な合同隊成立の動機は昨夏當時同志社大學の入江君と私が朝鮮の山歩きを了へて京城に立ちよつたとき

に端を發しつつに合同隊にまで進展したのである。

今度の我々の隊員編成は一つの學校山岳部といふやうな單一な單位ではなく、所謂寄せ集めのパーティーであるからマネジャーの役を自ら買つて出た私としては何よりも先づパーティーの精神的統合について深く考へさせられたのである。いまでも夏期にはアニュアル・キャンプが剣や鎌高で行はれてはゐたものの、合同隊を出した経験のない我々には今回の企ては——小さいものではあつたが——種々な意味からして尊い試練であつた。とに角「學聯隊」なる名稱を用ひる以上、惡くすると加盟校相互間に不愉快な氣分を醸成するやも測り難いのでこの點については隊長とともに随分氣をもむだ事柄であつた。

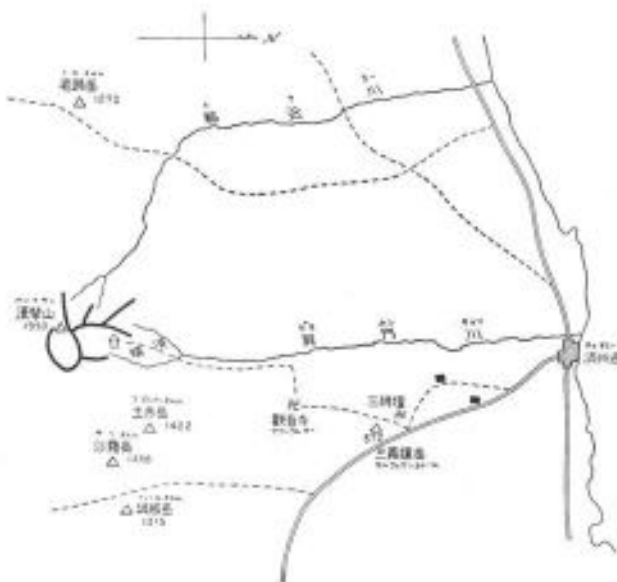
いよ／＼十二月二十五日大阪を出發することに決定した時は遠征隊結成當時十人であつたメンバーがいろ／＼の事情で六人に減つてゐた。これは始めての混成パーティーとして看過するを許されることであらうかと思はれる。

次に島の概略についてのべてみよう。

この島は北緯三十三度で福岡縣あたりであり氣候温暖とされてはゐるが冬は相當に寒い。漢拏山により南北兩面にあきらかに分けられてゐる島はその南北兩面では溫度差が相當激しいだらう。この島は暖流により洗はれてゐるが寒流の手がこの島附近までのびてゐるからその影響は少しは受けてゐることだらう。また海洋氣流と大陸氣流とが丁度この附近で入り交るし、それにグレン・ツーク（風道）に當つてゐるので積雪量は年により非常な差があるといふことなので我々は無雪、積雪兩用の準備を整へて出かけたが今年は蟻頂小屋附近で二メートル近くの積雪量であつた。尙冬は西北の季節風が特にけしいやうだ。

島は火山島で全島漢拏山からなつてゐると云つてもよい。その面積は約百二十万平方里、人口二十餘萬でそのうち内地人は約一千人位である。島としては相當大きい方で、

漢拏山北部概念圖 濟州海峽



人口もなか／＼稠密である。漢拏山の中腹以下には大小無數の側火山が散在し、その数は無慮三百餘と稱せられてゐるから農耕に適する平地といふものは極めて僅少である。従つてこの稠密な人口を支へるには耕地があまりにも少いので、その打開策として島からの内地渡航者は年々遂増する一方で昨今ではその数も非常に多数に上り、至るところで所謂朝鮮人問題を引き起してゐる次第である。

漢拏山は一九五〇米の標高であるから南部朝鮮に於ける最高峰であるが、登山の対象として視られだしたのはせい／＼一昨年ごろからで、それ以前にも植物學者や地質學者は割合ひ早くから多く入りこんでゐたものらしい。古い地圖には漢拏山がマウント・オークランド (Mt. Auckland) となつてをり、またこの島が

クエルパート・アイランド (Quelpart I.) と呼ばれてゐるのから見ても歐米人の博物學者がかなり以前にはいつたのでなからうかとも考へられる。地理學者のラウテンザー・ハ氏等も古い方らしい。

何せ山登り等に興味のない島の住民達のことであるから、夏牛でも追つてくる以外には滅多に登る人もなく、積雪期に於ける處女峰として今日まで残つてゐたものである。

濟州島は歴史的にも面白い島で元寇が博多へ来る前にこゝを襲つたと云はれてゐる。

島の南に西歸浦に漢拏山頂には雪馬の國がある云々なる傳説があるが、こゝでも山頂をば神衆視してゐたらしい。雪馬はスキーのやうなものを意味し、會つて實在したものでなく、また現存するものでもなく、想像の世界にあるものである。

この島は行政區劃の上から云へば全羅南道に屬してゐるものではあるが、この土地の風俗習慣は朝鮮本土よりはだいぶん内地に近いものゝ如くである。たゞ長く滞在しなかつた私達はまだそれを確めるまでに至らなかつた。とにかく濟州島は地質學、植物學的に面白いばかりでなく、人文學的にまた歴史的にも非常に面白い島であり、あのエキゾチックな雰圍氣にしたるだけでも行く價值はあるだらう。

隊 員

京都帝大先輩 隊長 宮崎 武夫

浪速高校先輩 盛岡英治郎

關西大學生 吉田孝雄

浪速高校學生 今西壽雄

京都藥專學生 高橋清一

關西大學學生 小川房雄

日 程

二十八日 宮崎隊長以下全員、尼ッ崎汽船神代丸にて大阪出帆

二十九日 航海

三十日 午前九・三〇下關入港、午後六・三〇出帆

三十一日 午前一一・〇〇釜山入港

一月一日 停泊

二日 午後二・〇〇釜山出帆

三日 午後五・〇〇木浦入港一〇・〇〇出帆

四日 曇 午前七・三〇濟州山地入港、午後五・三〇自動車にて出發、觀音寺にて宿泊

五日 曇 蟻頂小屋へ全員前進及び物資輸送、一部隊員觀音寺へ引き返す

六日 晴 本隊は搜索登頂、一部隊員は觀音寺にて連絡に従事

七日 曇 全員下山

八日 午前一一・五〇濟州山地出帆、午後九・三〇木浦入港

九日 正午木浦驛發、大田驛にて乗換へ「のぞみ」にて釜山へ

十日 大阪着

十四日 遠征隊解散式を行ふ。

一、濟州島へ

参加隊員の通半数が日数に餘裕がないので島での計畫は時間的にかなりきりつめたものだだったが尙この上に経費の點でもかなり窮乏な制限が加はり、島への往復も大阪から船便によらざるを得なくなつた。十一月中旬ごろの計畫では十二月二十一日先發隊、二十五日本隊出發と豫定されてゐたがこれは隊員減少の結果先發隊の必要がなくなり全隊員揃つて二十五日出發と決定した。たゞ便船の都合で二十八日大阪出發になつてしまつた。

十二月二十八日 正午すぎ全員一同日本山岳會關西支部ルームに集合し私と今西は荷物をトラックに積み大阪港第三突堤へ先行し、荷物を神代丸につみこんだ。午後四時の出帆が荷役の都合で六時となつた。貨物船だけに何だかあつけない船出だ。船が神戸港に着いた時に宮崎隊長宛に同氏宅より急電があり、とに角一應下船歸宅することゝなつた。残された我々の胸中にうかんだ一抹の淋しさはどうしようもなかつた。

十二月二十九日 朝から曇つてゐて海は静かだ。瀬戸内海には霞がかゝりあちこちの島がボートと望見出来る。急ぐ要のない貨物船はガタリガタリとゆるいエンヂンの音を響かせながら八潮といふ時速で大島小島を縫ふて行く。木浦まで四日間の豫定といふがこの調子ではとてもと思はれる。

三十日 正午前下關入港、上陸して直ちに宮崎隊長と打合せた。午後返電がはいつたが「都合悪し行けぬ」といふ残念なものだつた。夕方下關出帆、夕食後皆で相談して結局上座隊員の私が隊長の任を取ることゝなつた。

三十一日 千噸たらずの船なので夜中勤務はげしく大分弱つた。午前十一時釜山入港、荷役の關係で元日はここに停泊し二日出帆、木浦へは三日といふことなので朝鮮汽船本社へ行き木浦濟州島間の便船を聞いたがこれも

元日は休航（奇數日出帆）といふ返答だったので鐵路木浦へといふ希望もなくなり遂に大阪では豫期もしなかつた釜山で元日を迎へることになった。

元來私達の最初の計畫は京城隊が北方からのルートを取り、我々は南方から登り一月一日に白鹿潭の京城隊C、IIで兩隊一緒になつた上登頂するといふのであつた。そして若し一隊が何かの都合で遅れた場合、他の隊は單獨で一日に登頂を敢行するといふ申合せであつたのだが、重ね／＼の行違ひで此の當初の計畫は美事に失敗に歸した。

一月一日 元旦を船中で迎へた。

二日 午後二時になりやつと出帆、海は荒模様。

三日 私は釜山で咽喉を痛めたのか風邪氣味で氣分が勝れない。船は朝鮮の瀬戸内海ともいふべき多島海に入る。風強く船體は相當ゆれてゐる。眼につく島々は白く薄化粧をしてゐる。午後五時木浦入港、早速濟州島行の便船にのりかへ十時木浦出帆、船中で京城隊の消息を聞くことが出来た。

二、計畫變更

四日 曇 午前七時半濟州山地入港、漢解山は中腹まで雪におほはれてゐる。山頂は雲におほはれて見えぬが相當大きい山容である。山腹にとびかふ雲と光線不足のため我々の寫眞技術では撮影しようもないが、船窓から見た感じは『山岳』第三十年第二號七六頁の國版ベールンベルグのそれに似たものと云つてよからう。波は高く防波堤をこして白いしぶきをあげてゐる。天候のせいもあらうが何だか陰慘な感じのする港である。舳で上

陸、産業課出張所（森林署にあたる）の田中所長さんが出迎へて下さつた。挨拶がすむや否や聞かされたのは、城大山番部の前川君の遭難報である。一同打ち驚いたがとに角といふので石松旅館に落着き、こゝで京城隊の服部君に會ひ遭難の概略を聞き一同協議をこらした。當地濟州から自動車で西歸浦へまはり同地から樺島樺野小屋を経由して登頂するといふ當初の豫定を捨て、京城隊員搜索の應援に向ふことに決定し、折柄連絡のため下山した京城隊々長泉靖一君にも面會し色々と搜索上の打合せをする。島廳・警察署・産業出張所の主立つた方々も旅館に見えた。救援のため同行の巡查部長一名、巡查三名及び産業出張所の石川氏らとともに自動車で出發、一時間たらずで三神壇につく。夕暮から晴れた空には星がチカ／＼と輝いてゐる。側火山の幾つかの雪路の兩側に巨大な饅頭型につゝ立つてゐる、そしてそのクラストした斜面に月光が青白く輝いてゐる。吹いてくる漢卒風しは頬にあたつて冷たい。そろ／＼汗ばんだ頃寺の入口にあるオボのところへ来た。やがて山門をくぐり七時観音寺着。七時半ごろ上から一人連絡に下つて来た。九時すぎには濟州から歩かせたポーター達も到着した。

三、蟻頂小屋へ

五日 曇のち雪 早朝より濟州との連絡しきり。観音寺には三名の巡查が連絡のために残ることになる。京城隊二名、關西隊五名、巡查部長、石川氏及び朝鮮人夫九名の多人数。泉君と私の二人は午前八・三〇先發、森林帯の下限に沿つて四十分程トラヴァースして夏路を登り始める。積雪量が少ないしそれに石路なのでスキーは使用出来ない。この森林帯から受ける感じは立山の材木坂のそれに似たものであり、登るにつれて積雪量も多くなる。正午すぎ森林帯を抜け蟻頂に出てスキーをはく。こゝは頓陀。原にたとへたいところ、所々蒙古風の墓があ

る以外は一面の快いスロープ、而も傾斜は滑降に適度なもの。二時すぎ蟻頂小屋へ着く。小屋には捜索中の人夫達五人が休憩してゐたがこの人々は昔、元から渡来した蒙古人の末裔と傳へられ、現在は非常に少人数になつてゐるが山中に火田民の生活をしてゐる山の民族、犬の毛皮をまとひ同じ帽子をかぶつて随分寒いのに手袋もはめずに頑張つてゐる。本隊も二時半に小屋へ着いた。この時の気温は零下二十度。少憩後三時より城大泉・服部兩君の案内で遭難現場（小屋より約五〇〇米）へ行き當時の状況を詳しく聞いたがまるで失蹤とでもいふやうな事件だ。全員たゞちに捜索に従事し五時ごろ小屋へ歸る（遭難については後述）。今日つれてきたボータイ九名のうち七名を下山させ、また京城へ歸る石附・横井兩君及び八日まで京城へ歸らねばならない高橋、それに連絡のため觀音寺へ下る伊藤君及び小川と五名の隊員が下つた。小屋は隊員七名、救援の人々三名、人夫七名の十七名で牧畜力のマキシマムである。

この蟻頂小屋は昨秋出来たものではあるが雪崩の知識のない島民が建てたのであるから位置は非常に悪く蟻頂尾根の雪庇が落ちれば一たまりもなく押しつぶされそうに思はれる。また換気が悪く煙が内部に充満して外へ抜けないといふやうな相當ヒドイ小屋だ。然しこの時の状況としてテントよりも樂だつたので小屋を用ひた次第である。

この夜の隊員の配置。蟻頂小屋Ⅰ（京城隊）泉、服部、佐藤、飯山（關西隊）盛岡、吉田、今西、觀音寺Ⅱ（京城隊）伊藤（關西隊）小川

四、登 頂

漢拏山北面概念圖

冬の濟州島漢拏山 盛岡



六日 晴 大晦日以来の晴天だといふので一同勇躍して搜索を開始する。我々三名は上方森林地帯搜索を行ひ念のため前述根據地の跡まで登り、ついでに登頂といふことになり、十時半小屋出發、暫らく深傳ひに登りやがて左に廣がる快い斜面を登りつめ王冠尾根に出で森林地帯に入る。グロテスクな樹木の中を左に右にルートを見つけてはキャク・ターンをくり返してゆく、雪は北アルプスのそれよりは乾いてみてラッセルも苦しくない。搜索をつづけながら登り森林地帯を出てしまふ少し前即ち火口壁鞍部の下ところでテント支柱の折れたのを見てギクリとする。といふのは前川君が下山中遭難以前にストックをなくしたとのことなので一寸見たときは、てつきりストックと思つたのだつた。

森林限界をはづれたところをスキー・デボーとした。時に正午、晝食をすまして火口壁を歩きは

じめる、ところ／＼固くなつてゐるが大體はもぐつて歩き難い。一時四十五分頂上三角點へつく。出發前より待望してゐた登頂ではあるが前川君の搜索に心を惹かれてあはたしく記念撮影をして火口壁を歩きつゞける、前進根拠地の跡を見たが別にこれといふ變化は認められない。東側の第二高峰（一九三五米）を経てスキー・デポに歸る。太陽のために雪が悪くなつたので林間滑走——木が相當に密生してゐるので——は餘り面白くもなかつた。森林地帯を通過したあたり王冠岩の上部で、二匹の野犬が我々の姿に驚いてか、すごい勢でかけ下りて逃げて行くのを見たが、餘りゾットしなかつた。四時に小屋へ歸着して今日の搜索の様子を聞いたが、やはり駄目だつたとのこと。正午前に山麓から消防隊員等多数の應援もあり、天候にもめぐまれたので搜索は随分はかどつたが、依然として何の手がかりもなかつた。遭難の日より既に四日、ストック一本出てこぬ有様に一同も力を落した。夕食後相談した結果不本意ながら搜索を一應これにて打切り解雪期にあつたためて再搜索することゝし明朝下山することに決める。

つぎに頂上からながめた概念を基として漢拏山のルートについてのべて見よう。

これは唯一度行つただけの私がのべるのは僭越の沙汰であるが讀者諸賢に島の概略をつかんでいただく意味で御諒承願ふ譯である。

北面が最も複雑なる地形で観音寺から蟻頂を経て登頂するコースは一口に云へば内地の立山を思はすもので、唯異なるところは蟻頂より上が再び森林帯になることだらう。この北方からのルートは昨夏北鮮の山々を歩いてそののんびりした姿を眺めた私には相當内地臭のあるものとして受け取れた。このコースは蟻頂を登り蟻頂尾根の七一・一米の直下を小屋に向つて左へトラヴァースするところが悪いがその他は大したことはない。然しガス



済州島漢拏山 火口壁北側の鞍部より

今西 壽雄

がかゝれば蟻頂及び頂上近くの森林帯には慎重なる注意を要する。雪崩は前述のトラヴァースの箇所が危いだけだらうと思ふが唯一度の経験により云々するを避ける。

西方からのルートも結局南北の何れかからのものとなり最後に西壁を攀ちて登頂すればよいが天候の激変し易い島のことであるから十二分の注意が肝要だらう。尙西面は壁の下は實にのんびりした地勢であり、ガスでもまけばリング・ワンデルングをさゝれること請合ひとでもいふべきところだ。

南面は四歸浦よりして禪島又は小島稚平小屋を根據とするものだが、南壁以下はシンブルな地形で西面そつくりである。最後によつつかる壁は少し東よりにまけば楽に登れることだらう。東面は最も單純な地形で、壁もなければ森林もなく、澎湃としてゐて大陸的な感じであるが、南方よりしてのエスケープ・ルートであらうと思はれる。

アルカリ粗面岩より成る西壁は確かに面白いルートだらうが、玄武岩節理の南壁はヴァーティカルといふよりもオーバーハンダに思はれた。そしてこの南壁は餘程優秀なクラッグスマンでない限り手がつかないだらう。

即ち東・西両面は根據地がないので結局南北の二ルートになつてしまふ。——これは積雪期についてであり、夏期は済州シラベが繁茂してゐるので、路以外のところは通過困難だそうである。

なほこの島の解雪期は位置が南だけにさすがに早く三月の下旬だそうである。

また季節風が北西風なので島の北半部は雪が多くても南半部は遙かに少なく、今年の状態では南面は火口壁よりみたところではブッシュが相當出てゐたからスキーが使へたかどうか疑問である。

五、撤 收

七日 曇 昨夜は晴れてゐたが今朝は曇つてゐる。早朝起きたのだが準備のため遅くなりボーター達ををろし始めたのは十時近かつた。

京城・關西兩隊員一同、前川君の靈に黙禱して十時出發、荷物は肩にこたへてゐたが蟻頂ではスキーを享樂出來た。午後一時十分全員觀音寺着。こゝで前川君の父上などにお目にかゝつた。寺に頭張つてゐられた連絡の人々も一緒に午後七時半觀音寺發、雪路を三神壇まで歩き三神壇から四臺の自動車に分乗して九時濟州着。

八日 京城隊伊藤君と私と二人で烏廳・警察署へ挨拶に行く。鐵道局の飯山氏以外の京城隊員は後始末のため十日まで當地に滞在することとなり、我々は今日飯山氏と共に引きあげることになる。午前十一時、島の人々や前川君の御尊父及び京城隊員に見送られて後髪をひかれる思ひで出帆した。

六、携帶品その他

我々の計畫が具體化しつゝある十月ごろにはアークティック・テント、ストーヴ、オーヴァーシ・シューズ等とおよそ遠征に必要と考へられる道具を一通り考へて見たが資金の方がうまくはこばず、また寒氣もさほどでないから必ずしも新調を必要とするわけでもないで、結局裝備に關しては現在有るものを使用する以外何等の方法もなかつた。結局國大・浪高兩山岳部の備品それに隊員の私品をかり集めて行つたのであるから別に取り立てゝここに書くことはない。

また出發前のいろ／＼な手筈から船旅八日、滯島日數四日といふ結果になつてしまつたことはかへすがへすも残念なことで、科學的方面の研究も暇もなくまたその方面のエキスパートもなく何も出来なかつた。而も遭難といふ突發事件に遇つて我々は残念ながら他事を顧るの餘裕さへなかつた。

京城隊報告

泉 靖 一

一、日 程
二、遭 難

隊 員

京城帝大學生

隊長

泉 靖 一

〃

伊 藤 武 男

〃

前 川 智 春

〃

服 部 敏

〃

佐 藤 幸 哉

〃

瀬 戸 俊 夫

學外參加者

飯 山 達 雄

冬の濟州島漢山 泉

石附 健一
横井 春治

一、日 程

昭和十年十二月二十二日 泉、服部・濟州にをける打合せ並に準備及び荷物の輸送のため夜行で京城發。

十二月二十三日 朝、木浦着、増田府尹、能井技手の配慮により、ひとまづ荷物を船につみかへ二人は夜乗船。

十二月二十四日 微雨のち曇 濟州上陸、島廳・警察・産業出張所へ挨拶かたがた打ちあはせにおもむく。食

料の一部買入れ。人夫の豫約。伊藤・前川・佐藤・瀬戸・石附・横井は夜、京城發。

十二月二十五日 雨のち曇 泉・服部・石川（産業出張所から特に派遣された森林關係の人）及び人夫四名、

觀音寺へ第一次輸送。途中三義談岳でスキーの初滑り。伊藤外五名は夜木浦で乗船。

十二月二十六日 小雨 朝、伊藤等濟州入港。たゞちに島廳へ挨拶。人夫六名をととなつて觀音寺へ。隊員

泉・伊藤・前川・服部・佐藤・瀬戸・石附・横井・石川。

十二月二十七日 雨 荷物の整理を終へ、觀音寺でのびる。

十二月二十八日 曇時々青空を見る。泉・佐藤・石川先行、伊藤・前川・服部・瀬戸・石附・横井は人夫四名
とともに輸送。人夫及び泉・佐藤・石川・瀬戸は蟻頂小屋へ泊り、他は觀音寺へ引きかへす。

十二月二十九日 曇時々降水（觀音寺では寒、蟻頂附近は雪）泉・佐藤・石川は白鹿潭へ第一キャンプ偵察、（瀬戸は連絡のため蟻頂小屋に残る）のち人夫とともに觀音寺へ。伊藤・服部・石附は蟻頂小屋へ輸送。前川・横井

は観音寺に休養。

十二月三十日 曇時々晴 伊藤・服部・瀬戸・石附、蟻頂小屋より白鹿潭へC.I.材料輸送。泉・前川・佐藤・横井・石川及び人夫四名、觀音寺より蟻頂小屋へ最後の輸送。夜、飯山・林・人夫一名をとまってくる。

十二月三十一日 晴のち曇 泉・石附は大石澤右俣を登りC.IIの偵察を兼ねて西壁試登。蟻頂小屋へ歸還。林及び人夫二名は下山。他は人夫二名をとまひC.I建設。伊藤・佐藤・横井・飯山はC.I泊り。前川外二名は人夫とともに蟻頂小屋へ下る。

昭和十一年一月一日 曇のち暴風雪 泉・前川・服部・石附は大石澤右俣を廻行、C.II材料輸送後西壁より登頂。瀬戸・石川は人夫二名をとまひC.Iにおもむき伊藤等と合し登頂。C.Iで一同、新年を賀す。泉・前川・服部・瀬戸、C.I泊り。他は蟻頂小屋。

一月二日 暴風雪 豫定變更。泉・石附蟻頂小屋へ連絡のため下降、伊藤・佐藤・横井連絡と輸送のためC.Iへ、夕刻になつたが蟻頂小屋へ歸来しないので泉・石附・横井・石川、夜をついてC.Iに連絡におもむき伊藤等の無事を知り佐藤をとまつて蟻頂小屋へ引きかへす。

一月三日 暴風雪 蟻頂小屋にありし飯山・石附下山、泉・佐藤・石川は人夫三名とともに王冠尾根をC.Iへおもむき天幕の撤収を終へて下降の途中、小屋より約三〇〇米の地點で前川を見たがその後行方を断つ。たゞちに捜索。のち服部・佐藤・石川・前川へ救援隊を求めに下る。

一月四日 暴風雪 泉・瀬戸・石川、こと重大なるを知り早朝下山、途中次々と連絡を行ふ。格登里^{ゴトウリ}の人夫七名及び産業出張所の林・文雨氏、正午小屋着。たゞちに捜索。服部・飯山・石附夕刻小屋着。佐藤連絡のため観

普寺に泊る。泉・瀬戸の二名は濟州に下ると直ちに警察にことの委細をつけ電報を打ち、本朝上陸の關西隊と協議の結果關西隊の好意に甘へて協力を乞ひ泉・石川は關西隊とともに觀音寺へ引きかへす。瀬戸は濟州で京城との連絡にあたる。

一月五日 雪 觀音寺から關西隊・小原巡査部長・泉・佐藤・石川、蟻頂小屋へ。たゞちに搜索隊に加はる。京城隊の伊藤・石附・横井、關西隊の高橋・小川は都合のため連絡を兼ねて下山。伊藤・小川は觀音寺にをいて連絡の任にあたる。

一月六日 晴 關西隊は王冠尾根一帯の森林の搜索を兼ねて登頂。午前、濟州地元の官民合同の搜索隊來着。ふたたび徹底的な搜索。午後三時、地元搜索隊及び隊員佐藤・飯山連絡のため下山。

隊員の疲勞甚だしく雪崩の危険せまる。夕方に伊藤・後藤小屋にくる。

一月七日 小雪 「ヤッホー前川」を叫んで引きあげ。觀音寺にて小川・谷川に會ひ少憩中、前川の父上、伯父上及び佐藤・飯山くる。全員濟州。

一月八日 中村教授濟州着。

一月九日 荷物の整理、挨拶。

一月十日 濟州發、木浦泊り。

一月十一日 夜、京城着。

一日からの吹雪は二日、三日となほも続き季節風は火口湖に渦巻き秒速二七米をこえて（ロビンソン風力計による観測）一日夕刻から我々の携行した屋根型天幕の支柱は折れ、生地は支柱との接合部からさけはじめた。二日の夜間の連絡により三日の夜明けを待つて蟻頂小屋滞在の隊員及び人夫の應援によりひとまづ蟻頂小屋へ引きあげることゝなつた。この夜天幕に滞在してゐたのは伊藤・前川・服部・瀬戸・横井の五名。小屋にあつたのは泉・佐藤・飯山・石附・石川及び人夫三名。この引きあげについて私達は何等の懸念も持つてゐなかつた。いかに吹雪がその猛威を逞しうしても歩行困難なのは火口壁の稜線附近だけであり風は北西風、北の壁に吹き落される心配もなければ森林帯の降路には應援隊が導標をましてゆけば迷ふおそれもなし、王冠岩の鞍部から下は下り澤、澤にいれば風はなほ小屋はほとんど澤底に立つてゐる。

一月三日（新雪約一米——小屋附近）所用のため濟州に下山する飯山・石附と袂を別つた蟻頂小屋滞在の者等は豫定に従つて導標を増しながら吹雪の王冠尾根を登りC.I.着（十二時）、たゞちに天幕を撤收、王冠尾根を下りはじめた。二日夜より三日朝にかけて前川は炭火に中毒し、二度嘔吐したため、終夜シ・ラーフザックの中で寝て居た由。他の天幕滞在の者は全部多少の頭痛を訴へたが、特に伊藤・瀬戸の兩名は夜もすがら、倒れかかる天幕を支えて睡眠をとらなかつたために疲労の色がみえた。したがつて前川・瀬戸には一物も負はせず、伊藤は手廻りの物が入つて居る小ルックザックを携行しただけである。王冠尾根はびつとりつまつたサイシムウシラベの密林で、スキーをつけると行動が自由でないので、隊員をみだすをそれがあつたので全員徒歩。登りのシ・ブルが消えてゐたので、泉・石川がラッセルに當り、疲労せし者及び人夫を間に置いて佐藤が殿を引受け無事王冠鞍部に辿りついた。此の時吹雪はやゝ小康を見せて視界が大分廣くなつて來た。こゝから扇狀の斜面を下

ると鋭く切れ込んだ大石澤に入る——スキーには絶好のゲレンデで、時々小屋から遊びに来た所である。——鞍部からやや下つて、バーティは人夫をつれた泉・石川・瀬戸をのぞいては全部スキーをつけ、伊藤・横井が一隊となり次に前川・服部・佐藤が一隊となつて思ひ／＼にスキーをたのしみつゝ下りはじめた。前川は風に吹かれたため、前日の頭痛はなほ元氣に滑降をつづけた。スキーのすべりは非常に悪かつたやうである。

最初に小屋に着いたのは人夫を運れた一隊、ほとんど同時に伊藤及び横井の一隊。泉は他の者が小屋に入つて、火を燃してゐる間に、シャベルで小屋の外からの除雪を行ひつゝ、残部の歸着を待つ。しばらくして（正確な時間是不詳）服部が小屋前の大曲りにあらはれ、次に十分ばかりして佐藤が歸つてきて、小屋に入つて直ちに前川の不在を知り、皆に問ひ會せたところ、便所にでも行つてゐるのであらうと答へたので叫んだが返事なく、スキーをみると彼のものはない。彼と行をともししてゐた服部にたづねると、扇狀の斜面が澤に落ち込んでしまふ所（小屋から約三〇〇米——こゝに白樺の木があつて、我々は十四と番號を入れた赤と黄とに染め分けた旗を結んでゐた）から上方約一〇〇米の位置でスキーをつけ服部の後を滑つてくる彼の姿を見たと言ひ、佐藤はこの二名よりやや出すぎたので赤旗十四の三米程上方で待ちうけた。まづ服部が下つてきて、しばらく（時間の記憶は不明）して前川があらはれ、次のやうな會話を行つたむねをつたへた。

前川「ストック（杖）を落してすまなかつた。」

佐藤「杖なんかいい。」

そばにつき立てゝあつたスキーを指さして、

「滑りにくかつたら、此のスキー（杖）を杖の代りにしろ」

前川「小屋はどこ？」

佐藤「すぐそこだ―谷の下手を指さして―山側をつたつて行け」

前川はそのスキーに觸れたが、これを持たずに滑つて行つた。

註一 前川は三十一日、輸送のためスキーをばいて王冠尾根より火口湖に行き、歸路は雪のコンディションからスキーをC.I.に置いて、杖だけ持つて小屋に歸り、一日はビッケルのみを携行して西壁を登攀、そのまゝC.I.を置いて氣象観測に従事してゐたので、此の日スキーのみあつて杖がなかつたところを、佐藤から兩杖の一本を借用し途中木に引かけて紛失したのである。

註二 佐藤はこの日、疲労の色が見えた瀬戸のスキーを持つて居た。これを赤旗十四のところに突き立て、待つてゐたのである。

佐藤は其の後、ふと吹雪に隠見するサイシユウシラベを人と間違へて、同地點に立つてゐたので歸りが遅れたのである。

此の話を聞いて直ちに、その兩名に同地點まで急行をたのむ（二時四十分）。

二人はヤッホーを連呼しつゝ、同地點に赴く。下りのシ・ブールは歴然として残つてゐたが、別にそれた跡も見あたらなかつたので、一人はさらに降路をかへて小屋に歸着。そのむねをつげたので、全員吹雪の中にとび出し、捜索にうつる。服部・佐藤はそのまゝ小屋から下に大石澤を下れるところまで下り、他は右俣の出合ひ、その他小屋より上方へヤッホーを連呼しつゝ縦横に登り、赤旗十四に集合、さらに伊藤・横井は王冠鞍部へと捜索にうつる。

隊員の疲労は目に見えて、空しく時は過ぎ行く。吹雪は再びその勢を加へた。つひに四時半意を決して、服部・

佐藤・石川の三名を濟州に派し、この目下山した飯山・石附に急を知らせると同時に救援隊を依頼する。五時、三名はたそがれと吹雪をついて下山——王冠鞍部まで行つた伊藤等はしばらくして空しく引きあげてきた。吹雪はますます濃密なガスをまじへて猛り狂ひ夜の搜索は断念の止むなきにいたつた。

小屋の扉はあけはなたれて火は赤々とたかれ疲れきつた私達は風の叫びを人の叫びとまがひつゝ空しく吹雪にこたへて山友を持ちながら夜をあかす。一方下山の一行は蟻頂の平をすぎて森林にはいるところから照りはじめたとぎれとぎれの月光をたよりに十一時濟州着。飯山・石附に會ひ同時に産業出張所の田中氏に相談、佐藤は午前一時、同出張所の文・林兩氏とともに漢山北麓の格登里に向ひ三時着。たゞちに人夫を募集。

一月四日 小屋に滞在した伊藤・横井及び人夫一名は午前中再び赤旗十四附近を搜索、午後も附近を搜索したが不明。

一月五日 吹雪の勢がやゝ衰へはじめる。此の日の搜索は、小屋より上方の任にあたつた者は人夫を使つて木といふ木の根の空洞を掘り、下に向つた者は鋭く兩岸のせまつたV字谷を二列横隊となつて氣をくばりつゝ下り、約二軒の地點で水流と断崖に行く手をはゞまれて引き返す。正午觀音寺よりのバーナーが前夜京城から受けたメッセージを持つて小屋着。一部の者は都合により下山し残りの者はふたゝび、赤旗十四以降及び右俣の搜索。

一月六日 吹雪は晴れて日の輝く朝が訪れた。關西隊は王冠尾根一帯の搜索を兼ねて登頂。小原巡查部長の率ゐる格登里の人夫は王冠岩下斜面を、朝、現場着の濟州官民合同の搜索隊二十六名は隊員の一部とともに赤旗十四から小屋間を、雪中に棒をさしつゝ徹底的に搜索。残りの隊員は小屋より下の澤、蟻頂尾根、王冠岩附近に全力をあげた。激しい日射と疲勞のために晝食をとりて小屋へ歸つた時などはスキーをぬいでから雪中にばた／＼

たはれるやうな始末、夕刻、濟州捜査隊及び佐藤・飯山、下山。

其の後、右俣の再度の搜索。下山の決意をする。

註一 十二月二十六、七日に降雪があつて一度凍結した雪面に、其の後の積雪があつたので前川は上の層にのみなければならぬと云ふ考へのもとに、棒の先が凍雪面にとどくまでつきさした。

一月七日

引きあげ……間につままれて濟州着。

二月に入つて、後藤・泉・伊藤・服部・石川の五名、再び蟻頂小屋に赴く。積雪はさらにその量を増して、のつべりした谷間に雪崩は間断なく落ち、相變らずの吹雪つゞきで、唯小屋から下方へ、一月には下れなかつた大石澤を下つただけで、思ひ出のみをあらたにして歸つてきた。

「附」

私達は搜索の實施上次のやうな遭難過程を現場にてらして豫想したのであるが、搜索は全く無効に終つた。

一、スキー杖なしで滑降中轉倒し、失神して雪に埋れたのではないか。

二、滑降中急激な病的變化のもとに斃れたのではないか。

三、眼鏡なしのため、小屋の直前を通りすぎたのではないか。

四、紛失した佐藤の杖を氣に病み急斜面を登つたのではないか。

五、下降中距離を錯覚し下りすぎたと思ひ右俣に迷ひ込んだのではないか。

六、佐藤の山をつたつて行けと云ふのを誤解し、また杖がないので滑るのを止めて、玉冠岩よりの斜面を水平に進み小屋の對岸の上方斜面をとほつて大石澤の斷崖に墜落したのではないか。

追記

一月三日遭難した前川智春君は五月一日遭難地附近にて発見され同十日京城にて告別式が営まれた。私が聞き得た詳細をここにお傳へしよう。

屍體発見の現場は蟻頂小屋から大石澤を登ること一〇六米、即ち一月五日に私達がスキーでいろ／＼と滑つて捜査してゐた場所から道からぬところであり、當時のシェブールから二米と離れてゐなかつたさうである。

前川君は山側に向つて倒れ上半身を斜にうつ伏せにし、右の手の甲は額のところ、左手は軽く曲げて口のあたり置き、スキーは足についたまゝ平行して斜面に直角の方向を向き、身體は殆んど伸びきつてどこにも苦痛の跡は見られなかつた。服装その他にも異状は見受けられず、デット四ヶ月間雪の中に眠つてゐたものらしい。

原因については病理的にいろ／＼検討の必要があるらしいが、こゝから二〇〇米ほど上方の位置で佐藤君と元氣に會話してゐることから思ひ合はせると餘程突然的な死が豫想される。

前川君が倒れてから五分を出ずして佐藤君がほぼ同位置を通過し、更に約十五分後には捜査を開始、その後何回とストツクをさしたりなどして捜査したのに何故発見されなかつたかといふことは一應考へざるを得ない。(盛岡)

文 獻

盛岡英治郎

Hermann Lautenschach: *Quelpart und Dagart Wissenschaftliche Veröffentlichungen des Museums für Länderkunde zu Leipzig* N. F. 3, 1935.

小藤文次郎 *An Organic Sketch of Korea*, Jour. Coll. Imp. Univ. Tokyo.

中村新太郎 *濟州島火山雜記* 地球第四卷

原口 九萬 *濟州島の地質* 朝鮮地質調査要報第十卷

原口 九萬 *濟州島遊記* 地球第十二卷

横田 一二 *濟州島の地理的特性に就て* 地理學評論第九卷第一號

川崎繁太郎 *濟州島の地質學的觀察* 文藝の朝鮮 昭和三年十月

小林房太郎 *火山*

日本地理大系 朝鮮編

日本地理風俗大系 朝鮮編下卷

鶴田 吾郎 *濟州島とはどんなところ* 旅 昭和十年七月

盛岡英治郎 *濟州島漢拏山の冬* ケルン 昭和十一年三月

盛岡英治郎 *濟州島の遺蹟* 文藝春秋 昭和十一年三月

京城帝大山岳部委員 醫學部同窓會誌第九號

古田 孝雄 濟州島漢拏山 オール・スポーツ 昭和十一年二月

盛岡英治郎 濟州島 山 昭和十一年三月

泉 靖一 雪の漢拏山 山と溪谷 昭和十一年五月

盛岡英治郎 濟州島漢拏山 大飯學士會俱樂部會報13號

今西 壽雄 濟州島漢拏山 漢城高松山岳スキー部々報第四號

小川 房雄 濟州島漢拏山 關西學生山岳聯盟報告第七號

京城帝大漢拏山登山隊 積雪期漢拏山登山記



「山の神とコダマ鼠の話」解説

高橋 文太郎

今から五、六年前になるが、佐々木喜善氏の「東奥異聞」といふ傳説書話集に掲載された「嫁子鼠の話」を讀んで面白いと思つてゐた。これは秋田縣北秋田郡荒

「山の神とコダマ鼠の話」解説

瀬村のマタギ（獵師）から聴取つたそのマタギの間に傳へられてゐる山の神とコダマ鼠に關する話で、結末は山の神の化身であつた山中をさまよへる女に一夜の宿を、その山小屋に貸した獵師の組が靈驗に預かり、山の幸を獲たといふ事になつてゐる。佐々木氏は之を鼠の起源の話として記されてゐる。

こゝで説明の緒口をつけるために、この書物から話の要點を摘出して見ると、

一、スギのレッチウと呼ぶ六人組のマタギとコダマのレッチウといふ七人組のマタギが各々同地の狩山に小屋掛けをしてゐる。

二、或夜のこと、七人組の小屋へ若い女が現はれ、お産の紐を解きたいから一夜の宿りを許して呉れと頼む。併しマタギは山小屋では女と言ふ語を嫌ふ上に、まして産火であるからといつて申出を斷る。

三、その女は次に六人組の小屋に到つて一夜の世話を頼み入れると、このマタギ達はさぞ御難儀だらうと云つて小屋に入れ女にお産の紐を解かせる。

四、この體として女は六人組の者たちに明朝三つの熊を捕らせると述べ、此下の大きなタカス（樹木の洞にある熊穴）の内を尋ねて見よと教へる。又彼の七人組の小屋を訪ねて、私の怒りが如何に現はれてゐるかを見届けて貰ひたいと云ひ姿を消す。

五、スギのレッチャウである六人組は女人の告げた通りそのタカスに行つて大熊三匹を獲る。次に山一つを超えてコダマのレッチャウである七人組の小屋を訪ねて見ると、果して山神の化身であつた女人の怒りは現はれ、鐵砲諸道具許り残つて居て人間が一人も見えない。小屋の梁の上に小鼠が七匹走つてゐるのを目撃し得た。

六、要するに、七人組は小屋を貸さず然も女人（山神）を介抱しなかつた祟りで鼠と化した。その爲め、今でも七人組のレッチャウは忌み嫌ひ、無いことになつてゐる。

これが話の大體の筋で、尙その書には幾分裝飾と思はれる部分が附け加へられてあるが茲では省いた。之

と比較して頂く爲めに此の春（昭和十一年三月）秋田の山間を歩きその際に仙北郡檜木内村上檜木内宇寺村のマダギから聴取つた同じ類の話を書いて見たい。

一、山で木を伐る者たちが六人組と七人組で各々山小屋に泊つてゐた。

二、或日、女が子供を連れて夜遅く小屋を訪ね泊めて呉れと頼んだ。七人組の方では女のやうな者は山小屋へ入れることは出来ぬと云つて拒絶した。

三、處が、次に女は六人組の方を訪ね同様な申出を傳へると、この組では山であれ何處であれ今潮死の狀態にある者の命を救ふのは差支へないと云つて泊めた。が、翌朝は皆の者の氣が付く前に女人は姿を消してしまつてゐた。

四、女を介抱したために、六人組はそれから後には余も多く入り又山で怪我をする者も無かつた。

五、七人組は女を拒絶したために、全部がコダマ鼠に化してゐた。

六、要するに、その女人は山の神であつたのだ。

これが話の要諦で、同地のマタギである赤上政治郎が同村上檜木内字中泊の炭焼、鈴木五三郎より聞いて覚えてゐたものである。この話の直接の傳承者は獵師でなく此の附近の山中で生活する炭焼であるが、前掲の荒瀬村獵師の傳へてゐたといふ話と比較して全くその要素に於ては共通であることが注意される。同時に此の地方の山村では獵師と云はず炭焼と云はず同じく山中にあつて生活の資を得る者たちの間にこの類話が傳承されてゐることも面白いと思ふ。

二

そこで話の内容とこれが傳へられてゐる山村の人々の生活的な部分について、説明乃至は從來の記述との比較を述べて見たい。

言ふ迄もなく秋田の山間部にはマタギと呼んで山の狩獵を生業としてゐる部落の人々が住んでゐる。當地檜木内がその一つで、冬から春にかけて古式の獵法習俗並にそれに關する信仰禁忌に従ひ山間に獵し、夏期には溪流で川漁に従つてゐるのである。この種の人

人は福井・岐阜・兩縣の界ひにも亦四國の一部などにもあるのを聞いてゐる。そして全國から見るとこの狩獵民とも云ふべき人々の系統が二つに大體分れ、他にも既にこの事は記したが、日光と高野のそれである。これは代々傳へてゐる巻物によつて判るのである。系統は之によつて大體判つて來るが荒瀬村模子で聴くと、マタギにはそれぞれ流儀といふものがあるさうで、當村のはシダノ流だと云つてゐる。狩の際や獲物を捕つた時に唱へる言葉即ち呪文や狩に關する作法行事はこの流儀によつて各々特色があり、この他に、アブバ流、コダマ流がある。マタギ自身としては手槍とか銃を用ひて獸に向ふ關係から、この槍などの使ひ方、身の構へ方などにも各々その土地の傳統があるらしく、且つこの種の人々の系圖を高く保つために武士的な血の流れのあることに誇りをもつてゐるのが窺はれる。

こゝで前掲のコダマ鼠の話に戻るのであるが、その話に出てくる組のマタギが異なり、一方はスギのレッチウ、他方はコダマのレッチウとなつてゐるのは或は

この流儀の対立を物語るものではないかと思ふ。私としては以前にこれらの組の名前は何か神話的な稱呼のやうにも思つたが、此の度秋田のマタギ村を探訪してから、どうも此の話は斯ういふ流儀の対立をその下地として発生しお互ひが自分の所屬する流儀を重んじ良いとする考へから、そんな風に話の中に組み込まれてゐるのではないかと云ふ氣がして來た。勿論マタギの連中は山の神がその山やそこを棲む獸類を主宰するといふ信仰から、山の神に對する祭祀とか山中狩獵の際の山の神に對する信奉には今でも驚く程の嚴格さが保たれてゐる。そして山の神の機嫌を損ねては獲物がなると考へてゐるから、前記のやうな昔話形式をとつた民話の發生傳承も無理ではないことが同時に察せられる。併し茲ではその話の要素のうち、二組の異なるマタギが一方は山の神の意に反したためコダマ鼠と化し、他はその意に従つたから山の幸に預つたこと、言ひ換へれば、この組の二つが對立的な立場から一方を悪い結果に陥れてゐることについて特に注意して見た

い。

今記した荒瀬又は檜木内の獵師何れもが日光派に屬しシゲノ流儀の繼承者である處から、六人組のシゲノ流の者たちがこの話では良い立場をとつてゐるのも當然だと思ふ。然も荒瀬村根子のマタギの間では今尚、流儀が違ふと仇敵同志であることを傳へ、山中でコダマ鼠のハネル（冬期にこの鼠の身體が裂ける）習をきくと直ちに山から戻らねばならぬ事が習慣となつて居り、コダマ流儀は既に廢れたのでその權化であるコダマ鼠が仇をすることに此の山から戻るといふ理由の一つを數へてゐる。もう一つ奥を云へば、この鼠のハネル時は山の神の氣が荒くなつてゐるから獵が無いのだと云はれ、この事は上檜木内のマタギからも聞いた。そしてこの組の數が六人と七人となつて居るが、全般の事物にマタギは元來奇數をよしとしてゐるから、この事實から見ると寧ろ七人組がよい譯であるが、この話では七人の方がコダマ流に屬してゐるので、之も亦當然といへるのであらう。

柳田國男先生の『山村語彙』續篇にはこの「東奥異聞」

から引かれレッチュウといふ見出しの語が讀める。

然もそこでは「スギの」は「杉の」コダマは「兒玉」といふ風に記され、レッチュウは狩獵の團體又はその

連中を意味する註解が附せられてゐる。尙その後には杉浦健一氏が「山」四月號に矢張りこの話を記され、茲

には「杉のリッキウ」「木魂のリッキウ」の二組として

ある。處で私は以上のやうに、その山村に於ける探訪

の實感とマタギの人々の山中狩獵の事情や流儀から、

シゲノ（土地の者はスギノと發音する）もコダマもそ

の流儀からの名稱で、且つレッチュウは連中即ちマタ

ギ仲間の意味であると解説しておきたいと思ふ。尙こ

こに特に荒瀬村根子のマタギが昔からその心に傳へて

ゐる流儀の對立觀念をはつきり物語る呪文が見出せた

から記しておきたい。

それは根子部落のマタギ達が山で狩獵中、コダマ鼠

の戯れのために獲物を取り逃がすことがあるので、こ

の鼠のハネル音を聞いた時には左の唱へ言葉をとなへ

るのである。

ソッチハ コダマノルキカ コッチハ シゲノルキ

ブンブキマ、ニクラス ナムアブランケン ソワカ
（三遍繰返す、當村佐藤正夫氏採集）

それからもう一つ附け加へて置きたいのは、「東奥異

聞」の記載では山神がお産前の女性になつてゐるが、

私の聽いた上檜木内の話では既に子持ちの女となつて

ゐる。後者は前にも記したやうに炭焼が知つてゐたも

のを同所のマタギが聽いて居つて話して呉れたもので

あるが、何れにしてもこの話は山民と云へる人たちと

縁が深く、上檜木内地方でも或は他のマタギに聽いた

なら、この炭焼のものと同じ話が直接に聽けるかも知

れない。

（昭和十一、五）

山岳會の成立する迄

武田 久吉

日本山岳會生立ちの記は、『山岳』第三十年第二號に掲載された黒田孝雄君の一文に、その委曲を盡して餘す處が無い。殊にこの記文は一に文獻に準據しそれを引用し乍ら筆を進めてあつて、間違ひ易い記憶を辿つたものでないから、正確さに於ては毫末も疑ふの餘地はないのだが、而も尙ほ會の誕生に奔走した吾らから見ると、未だ多少の蛇足を添へる必要が無いでもないやうに思はれる。

『山岳』第二十五年第三號に掲載された「二十五周年回想録」にも書いて置いたやうに、元來本會の歴史は梅澤親光君が執筆する筈であつたのだが、未だ着手もせず忽然として他界されてしまつたので、發起人としてその當時の事情を悉知してゐる誰かの思出話で

もよいから、少し詳しいものが欲しいと思ひ乍ら、誰も進んでそれを引受けるものが無い爲め、遂にマメな黒田孝雄君を煩すに至つたものと推測するのである。

山岳會の誕生について記すには、日本博物學同志會に關して、略記することがどうしても必要になつて来る。それについては、『回想録』にも高野君が書かれてあるから、注意深い讀者は見逃されないであらうが、これを考慮外に置くことは宜しくないのである。何故なら、山岳會はそれが明治四十二年に、日本山岳會と改稱して、一人立ちするに至る迄、日本博物學同志會の支會として存在してゐたが爲めである。

何故そんな形式にしたかといふに、山岳會設立の當時には、假令登山の氣運が幾分なりと興りかけて來はしたものの、一箇の獨立の會として、斯かるものが世の中に存立し得るかどうかは、疑問であつた程の狀態で世間があつたが爲めである。

然し乍ら、この明治三十八年といふ年程、私に取つて思出の深い年は無いのである。それは、この年は四

月一日から、十月二十七日迄の間に、十ヶ國の山地に旅することが出来た年であつたからである。今でこそ十ヶ國や十五ヶ國に跨る旅は何でもないが、三十年も前の交通状態と、登山に對する一般的恐怖や抑壓やりに抗し乍ら、日光、尾瀬、富士、八ヶ岳、白馬等に、數日乃至十數日づゝも費すことは、かなりの努力が必要なのであつた。わけでも、白馬山頂に十二泊して、あの山麓の地理や生物に關する知識を相當豊富に携歸つた私は、謂はゞ東都へ新知識の輸入者であるかの如く自惚れもし、又山岳熱も充進してゐたに相違ない。

それと同時に、私達のグループに属する人達も、各自にその夏の登山談に花を咲かせたり、知識の交換を行つたりしたから、この年の秋程、山談に賑つたことは、山岳會設立前としては實に空前であつたのである。

そこで、日本博物學同志會では、機關雜誌の『博物之友』に登山記を掲げるとなると、到底それを悉皆登載する丈の紙數を持たないから、山岳特輯號でも發行しなければならぬといふ程の盛況を呈したのであ

る。そんなことが動機となつて、思切つて山岳會を設立しては？といふ案は、小島水君が提出したのではなかつたかと考へる。

私達が小島君と知合になつたのは、明治三十七年の初冬であつたかと推測する。文學雜誌に目を通したところのない私は、小島君が、盛に『文庫』に登山紀行を發表されたことは一向に知らなかつた程であるから、同君の文章に接したのは、明治三十七年に、『太陽』第十卷第三號に載せられた『甲斐の白峰』を以て最初とする。殊にこの一文は、一片の紀行とは言へ、同山の地理、地質から植物にも及び、加之携帶品中には磁石や寒暖計は中ず迄もなく、経緯儀があり、且又何を用ひて測定したものか明記してこそないが、『……やがて海拔五千二百二十尺の奈良田峠（これより以下、山の高さを擧げてあるのは、余が概測に過ぎないが、さしたる誤謬はないつもりである）』と前提して、盛に山地の高距を掲げてある處等から推して、一塵の科學者であるに相違ないと、少なからず敬意を表して、一度でもこの

山の先輩に拜顔するの光榮に浴し度いものと、大に渴仰してゐたのである。それが同志會の横濱支部委員であつた高野麗藏君によつて、山王山の一角に小島君が居を構へて居られるとの報を得た時には、全く跳上る程に驚喜したものである。それで早速相携へて訪問といふことになつたのだが、流石に小島先輩は、明治三十七年の七月と十月とに發行した「植物學雜誌」に、私がその前年に行つた東阿^{トウア}岳の紀行を掲載したのを、已に知つて居られた爲め、一見十年の知己の如く、山談ははづみ、室内は口角からの泡が散つて霧の如く漂つた程であつた。

小島君は高野君や私達と接觸して行かれる内、やがて日本博物學同志會の噂を耳にされ、遂に翌年早々にはそれに入會され、その年の四月十六日には、神奈川小學校の樓上で開かれた横濱支部第二回談話會の席上に於て、「高山の動物及び植物」なる題を提げて、講話された程の熱心な會員となられたのである。

こんな状態で、山岳熱は漸次に隆盛に赴いたが、い

よ／＼「山岳會」なる支會が設立される迄には、小島君を介して、明治三十八年の七月に、吾々と高頭君とが相識するに至り、茲に三つの分子が合流したのと、今一つの分子即ち城敷馬氏が、私の手引で發起人となつたことについては、茲にその経緯を記録して置く必要があると愚考する。

私が城氏の面識を得たのは、明治三十三年か遅くも三十四年の夏であつたやうに記憶する。その頃は、毎年暑中休暇を日光の別荘で過すことにしてゐたので、一ヶ月以上の日を遶る間に、稻荷川の左岸、萩垣面に五百城文^{イハヒロ}氏を訪ふ機會が生じた。この人は常陸の人で畫を能くし、若い頃には農商務省かに雇はれて、森林植物の圖等を描いたこともあるといふが、中年以後上記の所に遷栖して、寫眞印畫を基にして日光の東照宮とか大猷廟等の水彩畫を製作し、之を鉢石^{ハチイシ}町の主として外國人相手の所謂 Curio shop に販^{ばい}でゐた。畫風その他については、私は何等知る處は無いが、三十五六年頃には、小杉未醒^{ミセイ}（今の故庵）氏もこゝに寄寓

して師事(?)してゐた位であるから、相當の手腕を持つた人であつたかとも思はれる。この人が、どういふ勤機か、山草を培養してゐた。

一方、辯護士を本業としてゐた城敷馬氏は、何かの機会にこの道家を知り、多忙な體で且つは東京市中に山草を栽培することの困難な爲め、この五百城氏に自分の草を托してゐた。城氏は業務上の旅行で仙臺方面に赴くことが多く、その歸りとか、又は登山の歸りには日光に來て鉢石町の旅舎紙半に宿り、五百城氏を訪うては山草を眺めて楽しんでゐたやうである。

明治三十四年の八月、折から日光に來た城氏が女峯の登山を計畫したので、その頃高等商業(?)の英語教師をしてゐたスミス人ヘンリー・ファードル氏だの、故佐野常民氏の令息等と共に私も一行に加はつたが、その日は恐れ多くも大正天皇が七湯御遊覽の爲めに御登山遊ばされたので、吾々一行の者も七湯觀望地で至尊を拜する幸運を得たのであつた。

翌三十五年の夏には城氏は八ヶ岳に本澤湖泉から登

り大ダルミを経て横岳の北端迄達し、ウルップサウヤツクモダサを發見したので、その時の直話を基として、私は翌年の七月に同一経路によつて遂に赤岳の頂上に達することが出来たのであつた。

城、五百城兩氏の山草熱は益々高調に達し、明治三十五年の五月五、六の兩日、第一回の山草展覽會を、園子坂の薫風園で開く運びと迄なつたのであるが、それには城氏の友人で其の頃行政裁判所の評定官であつた木下友三郎氏も黒幕となつて参加し、私も城氏の懇意によつて、日光産のユキワリサウ一鉢を出品した記憶がある。

その翌年には第二回の展覽會が、黒鴨の加藤泰秋子爵の別業に於て、五月九、十の兩日に亘つて催された。その折にはこの山草會の主催者として、木下、城、五百城の三氏以外に、加藤泰秋、松平康民、久留島通簡、青木信光の四子爵が名を連ねて居られ、又日本橋の棲原に務めて居た田島巴氏もその一人であつた。私はその際等の方々の知を辱うし、その翌年頃から毎月本郷

龍岡町にあつた松平子爵邸で私的に催された山草會の例會にも招待せられて、山草會同人諸氏が諸方の山地から期出して來られた珍草奇花に接するを得て、大に貧弱な自分の見聞を廣めることが出来た。そして山草家の間に不明であつた名稱の質疑に應じなどしてゐたのであるが、何分文學通り淺學寡才といふ次第であるから、年と共に増加の一方を迫る種類の中には、未知のものも益々多くなる許りであつたので、後には牧野富太郎博士もこの例會に招致されて、名稱鑑定を擔任され、又新品奇種等は生品のまゝ又は乾脂品として、同博士の研究資料に提供されたものも少くない。

山草會の事に關しては、未だ／＼書く可き材料が多いが、枝葉に互る事柄であるから、この位で打ち切ることにする。唯上記の顛末文は從來正確な記録が無いから、何かの参考にもと、これ丈の事は誌して置く。

『實際園藝』第七卷二號（昭和四年七月）に牧野博士の書かれた山草會の思出話や、同誌第十二卷六號（昭和七年五月）に木下博士の書かれた回顧録中には、誤

謬や誤植（？）が少くなくて、當時の真相の全貌を傳へるものではないから、特にそれに注意して讀まれる必要がある。

一方小島君は横濱に於て數次ウ・ストン長老を訪問され、殊に三十八年の春ウ・ストン氏歸國前に同氏より直接アルバイン・クラブの設立を慫慂され、更に又歸國後の同氏からや英國山岳會やらの書柬を手に入れたので、山岳會設立について、人一倍の意氣込であつたこと申す迄もない。その爲め三十八年の夏以來秋にかけては、吾々の間に幾度か協議會が開かれたが、とに角そういう會を設立した處で會員が百人集るかどうか疑問であるし、會員が少なければ雑誌の刊行も費用倒れとなる等々の懸念が多かつた。然しその費用の點については比較的容易に解決がついた。といふのは、高頭君が、どうせ年に何千圓かの小遣を使ふ身分だから、年三四雜誌を印刷する費用位は、いざとなれば全額を負担しても知れたものだといふ申出があつたからである。然し會務を處理する上に、誰か相當の年輩者

が一枚加はつて呉れるとよいがと小島君が言はれるので、では城氏に一應意見を聞いて見ようと私が引受けて交渉を始めたのであつたが、同氏へはその年の春ウエストンに面會した事や、その折山岳會の設立を懸念されたことなど、已に山草會例會の席上で話しをしたこともあり、又同志會の事とか『博物之友』について以前からよく知つて居た爲めであらうか、城氏は大層乗氣になつて、私の宅へも幾度か來訪されるし、わざわざ越後の高頭君を訪問されたりすらした程であり、話は急テンポで進展して、三十八年の秋、十月か遅くも十一月には、日本博物學同志會の支會として「山岳會」が誕生したのであつた。されば同年十一月二十五日發行の『博物之友』第五年第二十九號三五二頁に、「山岳及び山岳ニ關係セル一切ノ事ヲ研究スル目的ヲ以テ本會内ニ『山岳會』ト稱スル一支部設立サレタリ」と明かに掲載してある。然しその當時の事でもあり、又誇大的に騒ぎ立てることの好きでない同人は、大袈裟な創立總會を開いたり、新聞記者を招待したりなど

して廣告をしなかつたから、『山岳』が明治三十九年四月五日に世に出る迄は、山岳會の存在は極く少數の知人とかよく／＼の同好者の間のみにしか知られて居なかつた。それと共に、『山岳』第一年第一號に明治三十九年四月五日の日附で、主旨書が掲載してあるから、それを以て「公に設立された日と見るべきである」と黒田君が書かれたのも一理ないとは言へない。けれども、同一文の主旨書は、四六版の小冊子として『日本山嶽誌』にも挿入されてゐて、それには明治三十九年二月の日附になつてゐる筈だと思ふ。更にまた、會員名簿を經つて見れば、明治三十九年四月以前に入會してゐる人が少數あることに氣附くであらう。會が成立しない前に正式に入會される筈はないのだから、設立を三十八年としなければ事實に反する譯である。この點が發起人の某々氏にさへ判然としてゐないことは、チトどうかと思はざるを得ない。尤もそういう事をとにかく言ふのは恐らく私位なもので、大多數の方々は八年であらうと九年であらうと大局には影響はないと

でもいふ考を抱いて居られるかも知れないが、事實は事實として傳へて置く必要があると考へ、この一文を草した次第である。

(本稿は『山岳』第三十年第二號發兌直後に起稿したのであるが、私の病氣その他種々の事情で昭和十一年九月八日に脱稿したものである)。



遭難報告

白馬岳に於ける京大生遭難報告

伊藤 新一

京大旅行部々員磯村克次及び東大スキー山岳部々員
柱多助の兩君（共に武蔵高校出身）は、本年三月、猿
倉より白馬頂上小屋に向ふ途中吹雪の爲遭難し、磯村
君の死體は捜索隊によつて発見されたが、柱君は未だ
に発見されない。

以下簡単に遭難の顛末及び捜査経過について記す。

1. 捜査経過

兩君は、白馬より唐松へ縦走する計畫をたて、三
月廿三日夜新宿を發す、四谷に向ひ、翌廿四日猿倉
小屋宿泊、廿五日早朝同小屋を出發、白馬頂上小屋に
向つたまゝ、消息を絶つた。兩君は、廿五日は頂上小
屋にとまり、廿六日唐松へ縦走、廿七日に下山して、

笹峰及び池の平に寄り四月一日に歸京する豫定であつ
たが、二日を過ぎるも歸宅しないので、六日朝東京よ
り四ッ谷に來着した家族の手によつて捜査が開始され
た。

捜査の経過の概要は次の通りである。

六日晴 唐松―白馬間、及び猿倉―白馬頂上附近を
捜査範圍とし、唐松小屋及び猿倉小屋へそれ〴〵人夫
五名づゝ派遣した。なほ念の爲、早大ヒューテ（細田
圃）へも人夫を派した。夕刻、廿四と廿五日の兩日に
頂上小屋に泊つたといふ人夫の談によつて、廿五日以
後同小屋に人の泊りたる形跡なきことが判り、其の爲、
捜査範圍は頂上附近より猿倉小屋の間に限定され、専
ら此の方面の捜査に集中することになった。

七日曇 朝少雨あり。東大山岳部員（小林・伊藤）
京大旅行部員（加藤）武蔵高橋先輩等、來着、今後、
京大旅行部員加藤が捜査の總指揮に當ることになつ
た。

猿倉の人夫は白馬尻附近一帯を捜査したが得る所はな

かつた。

八日曇 午後雨。猿倉の人夫は大雪溪を捜査しつゝ、頂上小屋に入り、前記山岳部員以下は、人夫一名を伴ひ猿倉小屋へ入り、長走澤附近を捜査した。之は、廿五日兩君と偶然猿倉小屋に泊り合つた東大山岳部員三宅（當時二高生）の言によつて、兩君が長走澤を誤つて可成り登つてから、大雪溪へトラバースしたことが判明した爲である。夕刻、京大旅行部員竹内來援。

九日雨 捜査中止。京大先輩西堀氏、及び前記帝大スキー山岳部員三宅來援。

十日晴 二千米附近以下濃霧。猿倉捜査隊は二班に分れ、東大スキー山岳部員及び人夫一名は大雪溪より頂上に向ひ、西堀氏、京大旅行部員以下は三宅の案内にて、長走澤附近を捜査した。白馬頂上小屋の人夫は頂上小屋附近及び杓子岳附近を捜査した後下降の途中、通稱「二合の雪溪」（三合の雪溪の一つ上の支谷）の下にて前記山岳部員等に合ひ、三班に分れて捜査を開始したが、間もなく「二合の雪溪」上方（高度約二

二—三〇〇米）にて磯村君の凍死體を發見した。

同所は、谷の中心より左岸よりの岩蔭であつて、附近は三〇度以上の傾斜をなしてゐた。磯村君はシュー・フサックを體の下に敷いて、うつぶせになり、その横に同君のルックサック、ビッケル二本、コッヘル、懐中電燈等が發見され、折れた片方のスキーが、すぐ横につきさまつてゐた。恐らくビヅ・アクをせんとするうちに凍死したものと考へられた。死體の約五十米下方に林君のルックサックが落ちてゐた。九日の雨の爲かと思はれる。蓋がしてなかつたらしく中のものが散らばつてゐた。林君及びスキー（林君のスキー及び磯村君の片方のスキー）、スキー杖二對は、附近には全く見當らなかつた。

唐松より人夫四名、四ヶ谷より五名來援。

十一日晴 早朝、十六名の人夫、山岳部員等現場へ赴き、人夫十一名にて死體搬下、残りにて現場附近を發掘。死體を下した人夫は猿倉にて、四ヶ谷より派遣された人夫に之を引き渡し、四ヶ谷へ下らさしめ、現

場に引きかへして發掘に應援。何物も發見し得ず。

十二日曇 全員現場へ出勤捜査をつづけ、なほ、大雪溪一帯、長走澤一帯、中山澤まで手分けして捜査したが、何等の手がかりもなく、且つ大雪溪一帯、及び二合の谷も、九日の雨で出た底雪崩のデブリに厚く覆はれ、それ以上の發掘は不可能なので、止むなく捜査を一旦うち切り、全員此の日の午後、四ッ谷に引き上げた。

尙、念の爲、十五日より十九日に至る五日間にわたり、人夫六―八名及び獵犬を動員して再び捜索を行ったが、全く無結果に終つた。

II. 遭難經過

以上捜査の結果、其の他によつて兩君の遭難するに至る經過を推定したいと思ふ。

兩君は、二十四日猿倉小屋に入り、翌二十五日午前五時半小屋を出て、頂上小屋に向つた。荷は四―五貫であつた。天候は朝のうちは曇天であつて、山に登れる天候であつた。頂上へ行くには、小屋の上の通稱「雪崩

跡」の平より大雪溪へトラバースするのが普通のルートであるが、兩君は之をとらずに、そのまま長走澤を登つて行つた。之は、長走澤を大雪溪と誤つたためか、長走澤を可成り登つてから大雪溪へ出た方が得だと考へたためか、判らないが、恐らく前者でないかと思はれる。此の日、兩君と共に猿倉に泊つた前記三宅君達は、杓子尾根を登るつもりで兩君より約一時間おくれて小屋を出て、同じく長走澤を登つていったが、一七〇〇米あたりで兩君に追ひ付き大雪溪へトラバースするやうに注意した（八時過ぎ）。兩君は、三宅君達と別れ、なほしばらく登つて杓子尾根より派生せるザイテンダラートを越へて（五時過ぎ）、直ちに大雪溪へ下り、白馬尾附近についた。既に十時を過ぎてゐただらうと思はれる。此の頃より天候がくづれはじめた。兩君は更に前進をつづけ大雪溪を登つて行つたが、十二時頃より遂に猛烈なる吹雪となつた。併し兩君はあくまで頂上小屋へ行く意志を捨てず登行をつづけたが、吹雪の爲見通しは全く利かず、そのため遂に二合の谷へ入り込

み、之に氣づかず登行をつづける。此の谷は、入口はきはめて廣く傾斜も始めは大雪溪とあまり違はないので、非常に迷ひ込みやすい谷である。登るにつれて傾斜は次第に増し吹雪の中をジャクザクを切りつゝ苦しい登行を續けて行つたが、二四一五〇〇米附近に到れば傾斜は俄然急峻となりスキー登行も困難となるに到つたので、遂にルートを誤てるを懼り、引き返す決心をして、直ちに下降に向つた。時すでに五時に近い頃であつたらう。下降幾何もなくして不幸磯村君は何らかの原因によりスキーの先端を折り進退こゝに谷まつたので、ビヅァークをすることにし、前記岩蔭を見つけて、こゝに止ることになつた。吹雪は益々つり、防風防雪の用意充分になく、ビヅァークには極めて悪いコンディションにあつたが、夕闇は刻々と迫り、朝來のアルパイトに疲労もはげしく、もはや之以外には方法はなかつた。スキーの修繕具はもつてゐたが、折れた先端は何處かへ飛んでしまひ、修繕など思ひも及ばなかつた。此處で相談の結果、林君が救援を求めに

下ることになり、リックをこゝに置き空身で下り、残つた磯村君は、ツェルトもなく、はげしい寒氣と疲労のため、その夜の内に不幸凍死し、林君も亦下山の途中力盡き矢張り凍死するに至つたのであらうと思はれる。(或は、兩君共にビヅァークをして、林君のみは死後ビヅァーク地點よりすり落ちて埋没したとも考へられぬこともないが、現場附近を發掘して何も出てこないので、右の如く推定するのが妥當であらう。)

遭難の推定は大體右の通りである。

殆ど最後に、此の計畫は全くブライヴ・イトなもので兩帝大の旅行部、スキー山岳部は全く之に興らなかつたことをつけ加へるべきかと思ふ。之は遭難には直接關係のあることではないか、全然無關係でもないからである。

圖書紹介

『山岳講座』 全八巻

本郷理太郎監修

黒田正夫・高橋健治・角田吉夫編輯

昭和十年十一月—十一年七月

東京・共立社發行 恒各二圓

發行以來約十ヶ月にして全八巻の完結を見るに至つた山岳講座の主要項目とその執筆者の顔顔は次の如くである。

登山總論——本郷理太郎

技術關係——高橋健治、冠松次郎、桑田英次

裝備及び食糧——黒田正夫、西岡一雄

地質地形——益村太郎、今村勝郎、佐々保雄、岡山俊雄、岡田修

動植物——川島和雄、飯澤誠義、中西悟堂

氣象及び天文——三浦愛五郎、關戸彌太郎、黒田正夫、山

本一哉

附 學——藤井金吾

圖書紹介

山小屋——角田吉夫

寫眞及び寫生——高野太郎、藤本國治、足立源一郎

文學、哲學、音樂、民俗學、文獻——河部重治、深田久彌、

辻莊一、辻二郎、大田忠元雄、藤本九三、松方三郎、高

水忠雄、根戸勝己、高橋文太郎

遺蹟史——關本三郎

業 内——町田立程（新潟・日光・尾瀬）、角田吉夫（上

信・上越）、冠松次郎（北アルプス・須城戸隠）、北川淳

一郎（西國）、竹内定（九州）、竹中泰（朝鮮）、沼井雄太

郎（臺灣）、高山三郎（近畿・中國）、深田久彌（白山・ハッ

島等）、藤金敏（秩父）、中村貞治（東京附近）、黒田正

夫（中央アルプス）、山下一夫（南アルプス）、安齋徹

（東北）、佐々保雄（千島・北海道）

外國山岳——本郷理太郎（ヒマラヤ及び中央アジア）、小島

島水（アモイカ）、松方三郎（歐洲）、加納一郎（極地）

山岳踏險——角田吉夫

かくる項目について、其道のエキスパートの識見をこれだけに動員し得たことは、編輯部に執筆の關係者が大部分日本山岳會員であつたにしても、編輯者の努力は勿論のこととして、そ

の骨折りは其大抵の事ではなかつたらうし、この點編輯者に深く感謝すると同時に、我登山界の現代水準に於て、ともかく、かくも整頓した山岳のエンサイクロペディアを得たることを我山岳界のために祝福する次第である。

× × ×

今茲に、本書の各項目を拾ひ出して大々詳細に紹介することは到底一人や二人の能くするところではない。従つて此處には本書のうちに於て殊に興味深く讀み下つた二三篇を拾ひ出して、余悉紹介の代りとしよう。

先づ第一に挙げたいのは木暮理太郎氏の「總論及び登山の變遷」の一編である。これは本書の言はず精論であり、我國登山の起源と變遷とを概説した重要項目である。全體が二章に分たれ、第一章に於て總論、即ち登山の起源が取扱はれてゐる。一節に於て「山と山人」を取上げ、我國に於ける最初の登山者が狩獵民族であつたらう、といふことから論じ、そして彼等の傳統は後世の獵師に傳へられ、獵師は「原始時代の昔から現代に至るまで世は移り人は替つても、長い傳統と生活の下に狩獵によつて得たる山の知識を繼承して絶えず磨かれたる功績を登山界に寄與してゐた」と結ばれてゐる。二節に於て「山の信仰」が取扱はれ、我國の山岳崇拜思想の特殊性を説き、山を神聖視

すること、山其物を神として崇めたことの二つが後に混同するに至つた經過についての考證が施されてゐる。三節は「宗教登山の發端」で、かくして信仰による登山が、既に古代人の間に行はれてゐたことを指摘し、佛教傳來以後次第に盛になつた僧侶・修驗道を開祖とする宗教登山の先驅者であつたこと、そして、後年の宗教登山も、この先驅者の信仰を土壌とし、根據として發展したと斷ぜられてゐる。四節を「登山の普及」と題し、僧侶・修驗者による宗教登山としての登山の普及が歴史的に取扱はれてゐる。

第二章は、我國に於ける「登山の變遷」を概説し、第一節には明治維新前に於ける、宗教登山を元として徳川時代について敘じ、登山は處であつても、形式は固定化し内容には發展性のなかつたことを論じてゐる。第二節では、前者と全く出發點を異にせる、「維新後」に於ける近代文化的登山に筆を移し、殊に志賀重昂氏、ウェストン氏等の功績から日本山岳會の成立、更に其の後に於ける岩登り、縦走登山、或は山岳遊興への發展分化を簡單に敘して、稿を結んで居る。

頁數の制限を要けてか、近代的登山の經過が詳説されてゐないことは如何にも残念であるが、僧侶を開祖とする宗教登山の歴史、從來あまり顧みられなかつたこの重要な一編——著者の

日頃の積習を續けて讀んだこの一期は、救へらるゝ所實に多く、且つ興味深いものである。

X X X X

次に同じく木暮氏による「中央亞細山の山と人」(第七卷)の一篇は氏年來のヒマラヤ研究の一端を示したもので、之また深く興味を覚えるものであり、恐らく前篇と共に本講座の基礎をなすべきものである。

松方三郎氏による「歐洲の山と登山界」(第六卷)は主としてアルプスの概論、「山岳に關する外國文獻」(第八卷)は外に山岳文獻から採いた外國の登山の變遷でもあり、共に私として面白く讀んだ二篇である。

専門道びであるが、佐々保雄氏の「地質學」、針村太郎氏等の「山岳地形、溪谷地形」、今村學郎氏の「氷河」なども、何れも素人向きに書かれた、地形地質論であるが、之が批評は然るべき専門家に譲らねばなるまい。

X X X X

最後に、全巻の編輯に關して私の氣づいた二三の點を述べて見やう。

最も問題になるのは項目の選擇と講座の並び所とである。項目は周到すぎる程周到に摘録されたと考へる。しかし、その半

面、項目の分類が粗かすぎるのではないかと考へられる。スキーやハイキング等の項目は別に獨立な一部門とせず、或は積雪期登山の一部門、或は夏山の一部門として取扱ふか、或は全然省略すべきではなかつたか。食糧や婦人登山の如きも、殊更に夏冬に分ける必要もないし、アルプス輿感の如き、なくもがなで、かく不必要な項目も數當發見せられる。また、各方面の學者がよつてたかつて同じ項目を取扱つてゐる山岳文學の如きも、どうにかならなかつたものか。

執筆者の大部分が紙面の不足を嘆いてゐることも輕々に看過することは出来ない。この問題は本講座の永年の問題とも關係する。執筆者は組んで三十頁といふ制限を受けたといふことである。項目中、のびちりみ持手なものは樂に譯すが、少し専門的な論議知識を必要とする項目などでは、殊に窮乏な譯で、かゝる項目は、とかく本講座に入る前に尻切れとんぼに終つて了ふものが多い。それがため、讀者は實の山に入り乍らこれを振り出し得ない憾みを抱かせられるのである。執筆者の擔當範圍と、項目の分類と讀者層の測定、この三つにとかくちがひができたこと、これは本講座の最も大きな弱點であるが、之は、謂はゞ講座ものの一般的の通弊であると考へた方がよいかも知れない。併し、若し項目の分類をもつと大まかにし、執

筆者の数を減じ、各項を分冊にして編輯發行したならば、此の弊を除き得ることは明かである。

全篇に載せられた寫眞は一般に蒐集されたものもあるが、極めて美しいもので、成功であつた。但し、第八巻にのせられたナンガバルベットの寫眞はどういふ意味であるか、或はヒマラヤの寫眞の一例としてであるか、わざわざベヒトルドの平紙をはさんで載せた處など何としても變態なものだ。

各巻末の索引は各巻限りのもので全體としてのインデックスのないのも意味のないことであるし、言葉の選擇も義理一巡の感が多い。

大體について謂へば本講座がともあれ、現在の水準に於て、充分科學的意味を持つことは何人も否定出来ない。そしてその點では立派に成功であつたと云へる。それまでに築き上げられた、しかも空に思惑に陥つた編輯ぶりは我々としては、言葉をさへ感ぜられる。恐らく將來第三、かゝる試みはあらうが、それはそれとして、一九三〇年代の我國登山界の一水準を記録したことに於て、本講座の持つ歴史的使命はまた大きいものがある。

(黒川善雄)

『山の危険と遭難の防止』

松方三郎

『防災科學』第六編諸災四九—九〇頁

昭和十一年十月、岩波書店刊行

災害は人間生活の大きな不幸事である。人間の歴史は或る意味では如何にしてこの災害を未然に防ぎ又之に打撃つかの努力のクロノロジーでさへある、しかし、幾ら人間が自然を手にづけ得たとしても、それは全體の災害の何分の一にもならないし、すでに手なづけ得た日頃榮耀な自然も時折人間を裏切つて、災害を惹起することさへある。恐らく人間の生くる限り災害は全く取除くことはできないものであらう。

これらの自然的災害を一層深く世人に認識せしめ、その發生を未然に防ぎ、或はその対策を日頃廣く講ぜしめて、人間生活を一層快適なものたらしめやうといふ一つの試案が『防災科學』として生れた。全六巻のうち「四作」の一巻は未刊で、近々刊行される決定らしいが、「風災」「震災」「水災」「雪災」「火災」「諸災」の五巻に互り凡そ人生にいまはしき災害と、その防止の対策とが各々夫々の専門家によつて取扱はれてゐる。

山の生活も人間の生活の一部にすぎない、殊に自然との關係に於て、最も深い生活階層であることを考へれば、山が自然によつて、殊更に大きく、殊更に支配される事も自ら明瞭である。かく考へると、我々登山者が「防災科」から教へられる所は、業外に探く、大きいやうに思はれる。例へば

(1) 嵐・嵐風 (朝日山誌)、暴風情報、旋風 (藤原虎平)、落雷 (寺田一彦)

(2) 震災—山崩其他 (宮部直己)

(3) 水災と震災—大雨 (内村修三)、洪水 (宮永正義)、雪崩

(4) 山火災—山火事 (同中八百八)

の如き項目は、登山者として必ず精讀を要する諸篇であらう。各篇の著者は専門家に成るものだけに、各篇の記述は相當にレベルが高いことは、『防災』の徹底化のため、或は惜しむべきことではあらうが、読者の立場から見ても、またこの種の講座もの性質から見ても、止むを得ないことであるかも知れない。我々は之らの諸篇の精讀を登山者で讀したものはこの意味であるが、一面、それによつてそれらの知識が完全に自分の物となり災害を現実に未然に防ぎ得れば、この読書の目的は充分に達し行かれたものとならう。

これらの諸篇の内「雪崩」はすでに紹介批評されたが、『登山』第三十卷第二號、並に增報第五十三號参照。今又我々に最も深い關係を有つてゐる、一篇「山の危険と避難の防止」(松方三郎)をその第六卷から取り出して、防災科叢書の紹介に代へようと思ふ。

× × ×

「山の危険と避難の防止」の一編は他面から見れば、「登山の注意」でもある。「山の危険」と「避難の防止」との二部に分たれてゐる。

第一部「山の危険」に於て、著者は先づ筆でも入り易い登山といふスポーツの一般化、普及化の度に、一層その危険の大きな所以、そして親しみ易い、近づき易い山を有する我國に於て殊に然る所以を説き、近來に於ける交通網の發展により、茲々山の不尋事は徹底的の傾向にある現状を述べ「山の危険」なる概念を與へる。

然る後先づ氣象に基く危険を取上げ、殊にそれの激變し易い我國に於て、それに因る危険の多く、それに基く避難事件の殊に多きことに一言し、これに關聯して、氣象中、山に於て最も恐るべき、颱風、不速雨、低氣壓を簡単に説明し、更に雨、雷、濃霧を取出して詳かに説明を與へてゐる。

圖書紹介

次に「山國有の危険」にうつり、山なる地線に固有なる危険のうちから、岩、落石、雪渓、草つきを取り上げてその危険を列挙し、併せてその防止をも説いてある。

茲で、夏山の危険を終り「冬山の危険」に一轉する。本物のアルプスよりも、却つて變化の激しい我山岳の夏冬の變化を強調し、天候の不安定なる晩秋、初春の山に注意を向け、更に冬期の裏日本に特有なる氣象に關して特に注意を喚起し、冬期の日本アルプス登山の危険性を論じ、更に冬山に固有なる危険、寒氣、雪庇、雪崩を詳述して、第一部を終る。

第二部は「遭難の防止」に移り、先づ遭難の防衛手段として、危険の意識、準備と訓練、精神的平衡、經驗と修業、協力と團結の五項に分つて、登山者の個人並にパーティとしての精神的防衛手段を、詳細に且つ懇切に説き、次に遭難の實際問題に一轉して、遭難時に於ける各人の心得、應急處置を簡潔に説明し、遭難信號にも言及し、最後に防止、並に救助の實際に移つて、各登山團體自らによる登山者の統制、現地に於ける人山者の統制、山岳氣象の調査、研究とその知識の普及、救助機關の設備を要求し、その一例としてさきに會から募集した救助機關の趣旨を要約して本編を終つてゐる。

三編

今迄に山岳案内と銘打つた案内書は、堂々たるものから、片々たる小冊子に至るまで、全部で幾種、幾冊に及ぶか数知られない。そうした案内書には、精粗、長短の差はあらうが、必ず登山の心得とか、登山の注意とかといふ一章が設けられてゐる。かうした登山の注意は、従つて今迄に何冊書かれ、また何冊讀まされてゐるか知れない。「またか」といふ譯で讀まずに居る場合が多く、我々の耳にももうたことが出来てゐるやうである。しかし、さうした注意書のうちでも、我々の印象に深く残つてゐるものは、大正六年七月、日本山岳會から刊行頒布せられた「登山の注意」である。これは會員大迫武彦の好意によるものであるが、目的は「青年子弟の爲め、登山の注意と準備とを教へ、災害を未然に防ぎ、登山の氣風の健全なる發達に資するものであつた。登山の趣味が漸く學生層を通じて大衆化されやうとしてゐた頃のこととて、我々もこれを虎の巻の如くにして山に出かけたものであつたが、我々と同じやうにこの小冊子から山の危険を教へられ、山へ歩み入つた者は、恐らく幾分か多かつたに相違ない。ともあれ、この『登山の注意』が當時の山岳界に興へた意義は實に深く大かつた。

『山日記』の出来るやうになつてから『登山の注意』も當然その重要な一項目として、藤島、木暮、松方等の諸氏によつて、殆

んど毎年書き改められ來つて、昨年に於つてこの『山の危險』が別個のものとして松方氏の手によつて物された譯である。かの『登山の注意』とこの『山の危險』とは自ら行き方を異にするものゝ、ともあれ、かの『注意』とこの『危險』とを並べて見る時、我々はこれが最近二十數年間に於ける時代の變遷であるか、登山世界の發展の跡かと、今更に、今昔の感を深くし、新しい興味を以つてかの『登山の注意』をも再び読みかへして見る氣にもなるのである。

山登りは、現象の問題といふより實地に屬する問題と云はれ、またその時代に行はれてゐる最も優れた山登りの傳統と實際と慣例とを要約したものが、山登りの原則だと云はれる。従つてその傳統、慣例、實際が時代と共に變化するにつれて、山登りの原則も變化し、それに適應した登山の注意も變化し、書き改められるのは當然である。『登山の注意』に影も見せなかつた各山の事項が『山の危險』に取入れられ、また山岳氣象に關して新しく強調されてゐることも時代の趨勢である。今の『山の危險』も十年二十年したら恐らく古くさいものになつて、新しく書き直されるであらうが、ともかく、現代の段階に於て、著者自らの研究と觀察なる體驗に基いて『山の危險』が叫ばれたことは、また我々の新しい喜びである。殊に應援救助

機關の問題が一般に重要視される今日、この方面に於ても、この小篇の出現したことに、大きな意義を認めてよいと思ふ。著者がその目録に於てゐるやうに、本篇は、本執筆の性質上、已むを得ず、テクニクに關する部分は明られて居り、山慣れない一般人を標準として記されたものである。従つて、茲に述べた事情に新しいものを發見しやうといふ、山慣れた通人にとつては、本篇は或は物足りない感を抱かせるであらうが、新しい見方によつて、さきに出た『登山の注意』を現代の標準に引伸ばしたものと思へば、種々の點に於て、深い暗示とよき示唆を與へるものとして、既に山に親しんだ人達にとつても有益なる一讀たるに違ひないと思はれる。

「之だけは心得置くべき」登山の注意を與へられた本篇は、よい登山の教科書とも見てよいと思ふ。たゞこの一編が『防災科學』の一編として、比較的世に知られずして徒らに葬り去られることは物に惜しいものである。

昨年出たこの一編は、新刊紹介といふには當らないかも知れない。第四卷の刊行され、讀者定額の日を待つてとも考へたのであるが、然り時日も経過するので茲に敢て新刊紹介の筆をとつた次第である。

(黒川孝雄)

Nanda Devi.

E. E. Shipton.

pp. 310. London, Hodder &

Stoughton 1936.

本書は一九三四年に行はれたナンダ・デヴィ内陣探検記である。著者は始め、バドリナート、ケダルナート、ガンゴトリの間の山脈を目指したが、ロンダスタフのすゝめに従つてナンダ・デヴィの内陣を探検することになった。この内陣が問題になったのは、ヒマラヤ探検の歴史では比較的新しく、一九〇五年に始まる。この年ロンダスタフはミラム谷よりパンテュー河を登りナンダ・デヴィの東、約一七七〇呎のヨルによつてハランル米河に下り、ナンダ・デヴィの南に連なるクマオン・ガルワール分水嶺の一つのヨル（一九一〇〇呎）に達し、こゝから始めて、ナンダ・デヴィ盆地を見下すことが出来た。歸りはルワンルをミラム谷に下つた。

次いで一九〇七年ロンダスタフ、ブルース、マムのパーティが再び之を窺ひ、リシ谷を詰める筈であつたが雪のため變更し、バギニ米河へ迂回し、リ・バギニ峠に登り始め、それを随

ればナンダ・デヴィ盆地に迷ひ込む一つの米河に達するものと考へたが、降つて見ればそこはリシガンガの谷であつた。ロンダスタフのトリスルの登攀はその直ぐ後の事であつた。とまれ、それからリシガンガの谷を渡つたが、すでに暇も食料も乏しく、そのはんの口元にしからず得なかつた。その後、一九二七年、ラトレッド、ソマヴェル、ウィルソンのパーティが東より入らんとし、また、一九三二年にはラトレッドがマイタトリより入り南のギャップをこへて入らんとし何れも失敗してゐる。

次が一九三四年の探検であるが、順序としてこの大略を記せば、パーティはエリッタ・シブトンにチアルマンの二人と、三人のシェルバといふ要つて少数人であつた。といふのは、氣の知れない多数人よりも、氣のよく分つた少数人を望んでゐたし、ポーターも、全行程の各段階に於て修む直すことによつて、費用を節約した。ラウケートを経て根拠地ジョシマツに着いたのは五月下旬、それよりダオリ河沿ひにスクイーターヘブラスへ、これよりリシガンガの北側を前進、二十八日にはラマ・米河との合流點に到達し、こゝを前進根拠地と定めた。リシガンガ北側の偵察によつて、河沿ひの通行は不可能なことが判り、いよいよその南側の山嶺を苦心して修む、六月六日つひ

に内陣の一隅に出で、そこを根據地とした。

これから内陣の北部の探險が行はれ、その間天気も概してよく、仕事も捗り二萬呎のヨール三つ、二萬一千呎のと二萬二千九百呎の頂を試登することを待た。しかし六月下旬にはとうとうモン・スーレンが来て了つて、残雪も目に見えて減り、リシガングの情況も悪くなるやうであつたので、急に引上げ七月二日ジョシマツに退いた。内陣の根據地生活は極めて快適であつたことだ。

それ以後八月末までの雨季を、パーティは、最初の目的であるバドリナート、ケダルナート、ガンゴトリ間の山地の探險に費し、この分水嶺をバドリナートからガウムフへ、更にバドリナートからケダルナートへ越えてこの方面の探險を終つた。かくして八月末ジョシマツに歸り第二回の内陣探險に進み、その南部を偵察した。九月八日、内陣の一隅に根據地を設けた。九月のヒマラヤだけに天気はよく、仕事もよく捗つた。ともかく、道路はリシガングを三度通りたくないもので、一九〇五年ロンドスタフが通した鞍馬か、一九三二年クトレツデの通した鞍馬かを越えることにし、結局後者の道をとつて歸ることになつたが、その間九月十一日には南座の二萬二千三百六十呎の高峰（シブトンの所謂マイタトリ）に登り、またナンダ・デヴィ

の南からの登路の偵察もしてゐる。かくして九月中旬内陣の南部の探險を終り前述のヨールを越えてこの據地を終つたのである。

以上が本遠征の概要である。今これを本書について見ると、第一編はインドへの旅行記で、第二編第七章から漸くナンダ・デヴィの探險が始まり、この篇はその第一回に終る。第三・四編は雨季に於けるバドリナート、ケダルナート、ガンゴトリの分水嶺越、第五編は第二回の探險に費されてゐる。

即ちナンダ・デヴィといふ標題から見れば、これに関する部分は即ち本書の約半分しかないし、殊にその最高潮と思はれるマイタトリやナンダ・デヴィ南面の登攀が意外アツタリと取扱はれてゐるのは何にしても物足りない。

登山の立場から見ても、かく本書が嘆息足りないのは、所謂探險が主で登山は従であり、一行の富貴組みもさうであつたからには違ひない。しかし、これをヒマラヤの山旅といふ見地から見れば、また種々の意味と多くの示唆を與へるものである。特にかうした少数者での気軽な山旅は、費用もかゝらないし、我々日本人がヒマラヤへ入る一つの方法として可能性も多い筈であるから、この意味に於て本書の我々日本人に對する意義は大きいものがあろうと考へる。

（黒田孝雄）

會 報

昭和十年度年次大會

昭和十年十二月十二日午後六時より赤坂三寶堂に於て年次會員大會開催。事務報告、遠征救助機關獎状頒布報告、會計報告あり、ついで午後七時より左の講演にうつつた。

一、山風と氣壓

藤原 実平氏

「山岳」本誌所載

一、山の地理

辻村 太郎氏

世界の山の地形、山の風俗について述べられたが、惜しくも時間の制限で、決定の三分の一のお話を伺ひ得なかつたのは残念であつた。

新理事選任報告

昭和十年度を以て任期満了となつた黒田孝雄、額田敏、福島昌夫、高橋健彦の四理事後任として茨木精之實、角田吉夫、中尾健次、島田博、今内昌司の五氏が、昭和十一年一月以降新に理事として就任した。

新評議員

前理事島田敏成、黒田孝雄兩氏は會則第九條により昭和十一

年二月評議員に推薦せられ、常任評議員として就任した。

一月定例理事會

一月十五日午後七時同俱樂部に開催

議事

一、「山岳」三十一年一號編輯の件

一、本年度理事指定事務割當の件

一、二月小集會開催の件

二月定例理事會

二月二十日午後六時同俱樂部に開催

議事

一、「山岳」編輯に關する件

一、「山日記」編輯に關する件

一、圖書整理に關する件

一、第三回山岳懇談會報告

一、山岳遠征救助機關獎状頒布報告

一、案内人手帳に關する件

三月定例理事會

三月例会は時節柄不開催の事とし、警面を以て左の如く事務報告及會員会考を行つた。

一、「山岳」編輯報告

一、山岳連救済機關案報告

一、「山日記」編輯報告

四月定例理事會

四月十六日午後六時半本會事務所に開催

議事

一、山岳連救済機關本會案の件

一、「山日記」編輯報告

一、「山岳」三十二年一號編輯報告

一、會員有志晩餐會の件

一、小集會（六月四日）開催の件

五月定例理事會

五月二十八日午後六時半本會事務所に開催

議事

一、「山岳」三十二年一號編輯報告

一、「山日記」編輯報告

一、山岳連救済機關案報告。（去る五月六日豊科町主催の

山岳連救済機關案に當り松本在住會員河野勲蔵氏は本會を代表して出席した）

一、立大山村部ヒマラヤ遠征後援に關する報告。（費用の一端に於ける意味に於いて本會より金二〇〇圓を贈呈するに

決定）

一、富士山ケーブル問題に關し總連、内務兩省の意向報告。

六月定例理事會

六月二十五日午後六時半本會事務所に開催

議事

一、「山日記」販賣狀況報告。（會員に對する買上げ六月二十一日現在七百八十九冊、賣行は頗る好成績。購買者の分布は購買者カードによる調査に従へば東京四割五分、京阪神二割、その他各地合計三割五分）

一、「會報」擴充の件（會員の要望により、且又 諸般の狀勢を考慮し、九月號から擴大する旨決定）

一、「山岳」三十二年第一號編輯報告

一、富士山ケーブル問題その後の狀勢についての報告

一、立大遠征後援報告

山岳遭難救助機關案懸賞募集報告

山岳遭難救助機關案の懸賞募集は十一月末日募集締切當時
懸賞文は四十六、參考論文一の多きに達した。

懸賞文は理事全部並に審査委員會の手で審査を遂げ、左記の
如く一等乃至三等の順位を決定した。

一等二等の順位は懸賞文中での順位であり、一等當選の案文
を以て有り得べき最上案と認定した譯ではない。又一つの理想
案としては假令よく構成され、形の整備したものであつても懸
賞募集當時の本會としての希望、即ち直ちに實行に移し得ると
いふ點で、他案に地位を譲つたものもあつた。

懸賞原文全部はその儘製本して本會事務所保存し、希望者
の閲覧に供へてゐる。

左に當選者並に懸賞者の氏名を掲げる。氏名の頭に★印を
附したものは選外佳作として指定されたものである。

當選者氏名

一等 (賞金壹百圓也)

平林 虎夫氏

二等 (賞金各金五十圓也)

飯神 山岳會

朝戸 友秀氏

三等 (賞金各金拾圓也)

藤川 高氏

齋藤 元正氏

山本 義雄氏

應募者氏名

田中 光男氏

熊本市本莊町

松田 與三郎氏

北見國富田郡オンネコ

星野 近氏

東京市豊島區高田本町

尾田 不町三氏

石川縣龍美郡島越村

神宮 寅氏

熊本縣八代郡

工藤 豪彦氏

東京市杉並區大宮南

菊田 虎治郎氏

東京市芝區西久保

牛山 佳三氏

長野縣諏訪郡原村

松井 正廣氏

岐阜縣北八ツ寺町

足立 岳納氏

岐阜市西川崎町

谷川 道太郎氏

東京市杉並區高圓寺

朝戸友秀氏

岐阜縣高山町

★稻田登八氏

新潟縣羽尾町

若尾荷氏

岐阜縣多治見町

中部山岳地協會

東京市杉並區神戶町

柳伴治氏

大分縣中津市小藏港

齋藤義雄氏

東京市豊島區長崎町

千田幸治郎氏

東京市芝區三田

島村壽一氏

東京市王子區上十條

平林武夫氏

長野縣北安曇郡大町

齋藤清太郎氏

東京市澁谷

木村信氏

東京市國野川區田端

小河敏郎氏

神戸市三川口町

平塚武郎氏

岩手縣江刺郡米里村

★中野正人氏

東京市四谷區左門町

福田建次氏

宇都宮市湯町

高柳登良氏

東京市四谷區大番町

山本善作氏

富山縣三日市外愛本

★奥原英男氏

長野縣南安曇郡島々

齋藤元正氏

長野縣南安曇郡島々

會報

藤井大九三氏

東京市本所區江東橋

山本重夫氏

神戸市拳緒町

丹野兵三郎氏

山形縣宮内町

菊地探琳氏

栃木縣芳賀郡中村

茅野貫一氏

松本市徳士町

藤本辰一氏

廣島縣安佐郡原村

藤川高氏

東京市淀橋區下落合

品田貞雄氏

新潟縣刈羽郡荒瀬村

原野建氏

佐賀縣三養基郡膳村

稻宮英治郎氏

横濱市中區福富町

阪神山岳會

大阪市北區東梅田町

森谷俊氏

甲府市深町

★渡邊幸二氏

大阪府港區二條通

★坂本茂氏

大阪府豊中町

龍山珍真氏

京都市今熊野

第三回山岳懇談會

今冬行はれた奥安曇、樺太國境山脈、千島等の遠征の経験を
中心として、且又最近内地山岳に於ける登山の經驗をも之に加
へて、我々の現在の持ち合せてある色々の知識を綜合交換しや
うと云ふ目的で第三回懇談會を開いた。

會の議事は特に登山に於ける裝備に重點を置き、豫め討議事項を左の如く決定し、討議の輪廓を明かにした。

一、裝備（天幕、寝具、暖房及炊事、服裝特にウインドジャケット、

毛皮、靴、オーヴァーシューズ、燈火及燃料、登山具、觀

測器具）

二、食糧（主食物、乾燥食糧、土人及人夫の食糧、嗜好品）

三、輸送（包裝及區分、其他）

四、通信及相互聯絡（通信方法及器具、各天幕間の相互聯絡）

五、所謂「遠征」について（登山の形式特に「補地法」、隊長及

隊員の問題、人夫、費用、外部との關係）

會は先づ統籌會から始り、京都から進へた京大遠征隊々長加藤泰安氏同じく同大遠征隊々長入江保太氏を中心に午後六時半から懇談會に入つた。先づ加藤氏から京大遠征に關し、次いで入江氏から同大の遠征に關し簡易に報告あり續いて議事に入りアジェンダに従つて順を追つて各自の経験と批評しつゝ批判を交換した。當日の出席者四十九名。

立大ヒマラヤ隊歡迎會

立教大學山岳部ヒマラヤ隊の行を旺んにする目的を以て六月十九日京橋中央亭で歓迎晚餐會を開いた。

出發前の諸事多端の折柄にも拘らず辻山岳部長を首めとし

て堀田氏以下遠征隊員諸氏の出席を得たことは非常な喜びであつた。會員にして来り會するもの四十名に亘るとし、主領者側を代表しての三田幹事の挨拶に次いで、主賓側の辻教授の挨拶あり、次いで小島、松方、模範次々立つて門出を祝ふの辭を述べ、食後一同居残り、ヒマラヤの地圖を擧げて一行の行程の説明を聴いたり、会く時の移るのを忘れた形であつた。

日本山岳會々則（昭和十年七月改正）

第一條 本會ヲ日本山岳會 (Japanese Alpine Club) ト名

ツク

第二條 本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ

研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會

員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條 本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルため左ノ事業

ヲ爲ス

(1) 機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時

又ハ定時ノ出版物刊行

(2) 其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條 本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理

事十五名、監事二名以内

第六條 會長ハ本會ヲ代表ス 但シ會長ニ事故アル場合ハ

副會長之ニ代ル

第七條 會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ

推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ヶ年トス 但シ

役員トシテ任期満了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期満了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條 評議員ハ本會ノ重要事務ヲ審議ス

第九條 評議員ハ先役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス 但シ必要ニ應ジ本會々員ニシテ前項ニ該當セサル者ト雖モ評議員會特ニ之ヲ推薦スル時ハ評議員タルコトヲ得

評議員ノ任期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨ケス

第十條 評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若キモ選任ス

第十一條 常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條 理事ハ別ニ定ムル規則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス 但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條 監事ハ評議員會ハ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨ケス

第十四條 役員會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條 役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル 但シ會長ハ是支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條 役員ハ任期満了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス 補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス 前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條 役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ推薦ス

第十八條 役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非サレハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條 役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條 役員ハ總テ報酬無トス 但シ其職務ノタメ必要ナル賞資及旅費ヲ給與スルコトアルヘシ

第二十一條 本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通會會員 會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員 一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員 役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ副後會員稱ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條

本會々員ヲラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ

申込ムモノトシ、入會許可ノ通知アリタルトキハ

入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ納込ムモノトシ 入會許

可ノ通知アリタル後一ヶ月以内ニ右ノ手續ヲテ

ナル者ハ入會ノ許可ヲ取消サルヘシ

第二十三條

入會ノ許可ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條

本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條

前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ且出席者三

分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條

本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設タルコトヲ得

支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細 則

一、會費其他ニ關スルモノ

(イ) 會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

(ロ) 毎年一月一日ヨリ八月三十一日までノ入會者ハ限リ其年

度ノ會費ヲ二ヶ月間延納スルコトヲ得 但シ此適用ヲ受

ケントスル者ハ其日入會申込ト同時ニ申出スヘシ

(ハ) 毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ

免除ス

(ニ) 本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ賞費ヲ以テ再交付ヲ受タルコトヲ得

(ホ) 本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ每號一部ヲ本會

會員ニ頒布ス 且シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布

セス

(ヘ) 毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ

頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ヶ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコ

トヲ要ス

(ト) 本會會員ハ期ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覧

スルコトヲ得

(チ) 會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨形事務所ニ必ス書面

ヲ以テ申出ツヘシ

(リ) 會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ

怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

(ヌ) 本會ハ低納ノ金品ヲ一切没收セス

(ル) 團體加入者ノ代表者交代シタル場合ニハ親善兩代表者

ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

(ヲ) 本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區學平町一番地不二屋

ビル三階三〇七號室ニ置ク

(テ) 海外旅行其數ノ理由ニヨリ十二月以上、三十六ヶ月

以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間

等ヲ詳記シ、取扱手数料金或開ツ添ヘ事務所ニ届出ツル

事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受タル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受タル事ヲ得ス

二、理事選舉ニ關スルモノ

(イ) 理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

(ロ) 役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

(ハ) 會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ舉タルコトヲ得 但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

(ニ) 理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三年ヲ經タルコトヲ要ス

(ホ) 團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

(ヘ) 候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

(ト) 候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

(チ) 改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

(ヲ) 投票ハ記名連記投票トス

關西支部規則 (昭和十年七月)

第一條 日本山岳會關西支部ハ日本山岳會々則第二十六條ノ規定ニヨリ左ノ區域内ニ在住スル會員ヲ以テ構成ス

大阪府、京都府、兵庫縣、滋賀縣、三重縣、奈良縣、和歌山縣

第二條 支部ニ委員拾名以内ヲ置ク

第三條 委員ハ支部區域在住會員中ヨリ會長之ヲ依擬シ其任期ハ貳ケ年トス 但シ兼任ヲ妨ケス

第四條 支部事務ハ本會關西在住理事之ヲ擔任シ委員之ヲ輔佐ス

第五條 支部經費ハ本會一般會計ノ一部ヲ以テ之ニ充ツ、尙支部ハ必要ニ應ジ有志ノ寄附ヲ仰クコトヲ得

第六條 支部ハ毎年一回支部總會ヲ開キ臨時小集會ヲ催ス

第七條 支部規則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるを問はず。
 - 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
 - 一、原稿は返却せざるものとす。
 - 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
 - 一、原稿にはその梗概を付せられたし。
 - 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
 - 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或は別紙に説明記入を乞ふ。
 - 一、校正は編輯者に一任せられたし。
 - 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には假名を附せられ度し。
- 原稿寛限所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所
原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

著者權所有

昭和十一年十一月十五日印刷
昭和十一年十一月二十日發行

〔定價金參圓〕

發行所 日本山岳會

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内

電話 芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯兼發行者 松方三郎
東京市品川區北品川六ノ五二

印刷者 高田壬午郎
東京市神田區神保町一ノ三四

發賣所 東京堂
東京市牛込區富久町一四

廣告取扱所 進恒社
東京市牛込區富久町一四

株式會社關東東京支店印刷

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXXI.

1936

No. 1.